

那 珂 56

—那珂遺跡群第 114 次調査報告—

2010

福岡市教育委員会

那珂 56

—那珂遺跡群第 114 次調査報告—



遺跡略号 NAK-97・114
遺跡調査番号 0414・0627

2010

福岡市教育委員会



那珂遺跡群第 114 次調査区全景 デジタル合成（上方が北）



1. 青銅器鋳型



2. 前方後方形周溝墓 SX-1100 (南から)



1. 古墳時代前期の道路と円形周溝墓（北から）



2. 古墳時代後期の方形区画溝（北東から）

序

中国の史書にみえる「奴国」がかつて栄えた福岡平野において、福岡市博多区の博多駅南から東光寺・那珂・竹下地区に広がる那珂・比恵遺跡群は「奴国」の中核をなす地域であったと考えられており、発掘調査によって「奴国」の繁栄を物語る重要な遺構・遺物が次々に発見されています。しかし、開発とともになう事前調査による発見が大半を占めることから、遺跡の保護は困難な状況にあります。

福岡市教育委員会では、この那珂遺跡群を保護とともに、開発によってやむなく破壊される場合には事前に発掘調査を行って、記録の保存に努めています。本書は博多区那珂2丁目・竹下5丁目の「那珂中央公園」建設にともない実施した第114次調査の記録をおさめたものです。調査では、弥生時代の集落・墓地や大溝、古墳時代前期の道路や古墳群、7世紀頃の官衙とみられる溝や建物など、数々の重要な遺構を確認し、青銅器鋳型や古代瓦が出土するなど、奴国の歴史を復元するために重要な新資料を得ることができました。

発掘調査に際しては、原局である住宅都市局公園緑地部公園建設課にご協力を頂きました。また、騒音や重機の振動等により地域の方々にご迷惑をおかけしましたが、文化財保護についての快いご理解をいただくことができ、調査を円滑に進めることができました。お礼申し上げます。

調査に関わられた全ての方々に対し、深く感謝申し上げますとともに、この報告書が広く活用され、文化財保護の理解を深める一助とならんことを願います。

平成22年3月23日

福岡市教育委員会

教育長 山田裕嗣

例　　言

- 本書は平成 18 年度に福岡市教育委員会が行った、福岡市博多区竹下 5 丁目・那珂 2 丁目地内所在の那珂遺跡群第 114 次発掘調査の報告書である。また、事前の確認調査として実施した那珂遺跡群第 97 次調査の報告を含む。
- 発掘調査及び整理報告書作成は、「那珂中央公園」建設に伴う都市整備局（現、住宅都市局）の令達事業として実施した。
- 発掘調査は、事前の確認調査として実施した第 97 次調査を長屋 伸が担当し、第 114 次調査を吉武 学・森本幹彦が担当したほか、屋山 洋、久住猛雄、赤坂 亨の協力を得た。
- 調査区は 5 区に分け、検出遺構は区ごとに 4 枝の連番号を付した。第 1 区は 1001 ~、第 2 区は 2001 ~、第 3 区は 3001 ~、第 4 区は 4001 ~、第 5 区は 5001 ~ である。
- 遺構番号の頭には、遺構の性格を表す記号を付した。SA (柱列)、SB (掘立柱建物)、SC (竪穴住居)、SD (溝)、SE (井戸)、SF (道路)、SK (土坑・土壤墓)、SO (木棺墓)、SP (柱穴・ピット)、ST (甕棺墓)、SU (貯蔵穴)、SX (周溝墓・性格不明遺構) である。
- 本書に使用した遺構実測図の作成は、長家、吉武、屋山、久住、森本、藤野雅基、坂口弘毅が行った。
- 本書に使用した遺物実測図の作成は、山口謙治、常松幹雄、吉武、森本、松尾奈緒子、田中克子が行ったが、整理期間に比して遺物量が膨大で、特に 2 区出土遺物についての図化が不充分である。
- 本書に使用した図の製図は、吉武、長屋、森本、田中、石田晴美、熊野御堂和香子が行った。
- 本書に使用した写真の撮影は、常松、長屋、吉武、森本が行った。
- 本書の執筆は、長家、吉武、森本が行った。
- 本書に使用した方位は全て磁北で、真北より 6° 20' 西偏する。
- 本書の編集は吉武が行った。
- 本報告書に関する記録と遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、ここで管理する。

那珂遺跡群第 97 次調査

遺跡調査番号	0414	遺跡略号	NAK - 97
所在地	博多区那珂 2 丁目 182-1 外	分布地図番号	38-0085
開発面積	13466.44m ²	調査対象面積	13466.44m ²
調査期間	平成 16 年 4 月 20 日～平成 16 年 5 月 31 日	事前審査番号	17-1-99

那珂遺跡群第 114 次調査

遺跡調査番号	0627	遺跡略号	NAK - 114
所在地	博多区竹下 5 丁目・那珂 2 丁目地内	分布地図番号	38-0085
開発面積	13466.44m ²	調査対象面積	7,800m ²
調査期間	平成 18 年 6 月 29 日～平成 19 年 3 月 31 日	事前審査番号	17-1-99

本文目次

第一章　はじめに.....	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
第二章　那珂遺跡群の地理的位置と歴史的環境	2
1. 那珂遺跡群の位置と周辺遺跡	2
2. 那珂遺跡群のこれまでの調査	2
3. 第 114 次調査区の位置と周辺調査	4
第三章　試掘調査（第 97 次調査）の記録（長家　伸）	6
第四章　第 114 次調査の記録	16
1. 発掘調査の方法と経過	16
2. 発掘調査の概要	16
3. 検出遺構と出土遺物	19
(1) 柱列・掘立柱建物 (SA・SB)	19
(2) 穫穴住居 (SC)	26
(3) 溝 (SD)	48
(4) 井戸 (SE)	73
(5) 古墳時代前期の道路（並列溝）(SF)	108
(6) 土坑 (SK)	115
(7) 弥生時代の木棺墓 (SO)	134
(8) 弥生時代の壺棺墓 (ST)	135
(9) 弥生時代の祭祀土坑 (SX)	161
(10) 立柱遺構 (SX)	174
(11) 周溝墓 (SX)	175
(12) 性格不明遺構 (SX)	189
(13) 地下式壙 (SX)	192
(14) その他の出土遺物	193
第五章　おわりに.....	194
付.1　那珂遺跡群第 114 次調査出土の青銅器铸造関連遺物 （福岡市教育委員会文化財管理課 常松幹雄）	199
付.2　那珂遺跡群第 114 次調査出土鋳型の保存科学的調査 （福岡市教育委員会文化財整備課 比佐陽一郎）	203
付.3　那珂遺跡群第 114 次調査井戸出土の動物遺存体について （福岡市教育委員会埋蔵文化財第 1 課 屋山　洋）	209
付.4　福岡市那珂遺跡群第 114 次調査出土の近世人骨調査報告 （高橋浩史・米元史織・中橋孝博 九州大学大学院比較社会文化学府）	210
付.5　福岡市那珂遺跡群第 114 次調査における自然科学分析（株式会社 古環境研究所）	215

挿図目次

Fig.1	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	3
Fig.2	那珂遺跡群の調査地点の位置 (1/8,000)	5
Fig.3	那珂遺跡群第97次調査区位置図 (1/4,000)	7
Fig.4	那珂遺跡群第97次調査区配置図 (1/1,000)	8
Fig.5	第97次調査トレンチ全体図及び土層図1 (1/300、1/100)	11
Fig.6	第97次調査トレンチ全体図及び土層図2 (1/300、1/100)	13
Fig.7	那珂遺跡群第114次調査区の近隣の調査地点 (1/2,000)	17
Fig.8	第114次調査 近世以降の削平・攪乱と遺構面の標高 (1/1,000)	18
Fig.9	那珂遺跡群第114次調査 調査区と主要遺構の配置 (1/500)	(折り込み)
Fig.10	掘立柱建物SB-1032・1090実測図 (1/60)	19
Fig.11	SB-1032・1090出土遺物実測図 (1/3)	19
Fig.12	掘立柱建物SB-2070実測図 (1/80)	20
Fig.13	SB-2070出土遺物実測図 (1/3)	20
Fig.14	掘立柱建物SB-3030・3031実測図 (1/60)	21
Fig.15	SB-3030・3031出土遺物実測図 (1/3)	21
Fig.16	掘立柱建物SB-3032・3033実測図 (1/60)	22
Fig.17	掘立柱建物SB-3034実測図 (1/40)	23
Fig.18	SB-3034出土遺物実測図 (1/3)	23
Fig.19	掘立柱建物SB-3035・3036実測図 (1/60)	24
Fig.20	SB-3035・3036出土遺物実測図 (1/3)	25
Fig.21	掘立柱建物SB-5050実測図 (1/60)	25
Fig.22	竪穴住居SC-1026実測図 (1/40)	26
Fig.23	SC-1026出土遺物実測図 (1/3)	27
Fig.24	竪穴住居SC-1056実測図 (1/40)	27
Fig.25	SC-1056出土遺物実測図 (1/3)	28
Fig.26	竪穴住居SC-1073実測図 (1/40)	29
Fig.27	SC-1073出土遺物実測図 (1/3)	30
Fig.28	竪穴住居SC-1079実測図 (1/40)	30
Fig.29	SC-1079出土遺物実測図 (1/3)	30
Fig.30	竪穴住居SC-1101実測図 (1/40)	31
Fig.31	SC-1101出土遺物実測図 (1/3)	32
Fig.32	竪穴住居SC-2051実測図 (1/40)	32
Fig.33	竪穴住居SC-3001実測図 (1/40)	33
Fig.34	竪穴住居SC-3001貼床除去後の実測図 (1/40)	34
Fig.35	SC-3001出土遺物実測図 (1/3)	34
Fig.36	竪穴住居SC-3002実測図 (1/40)	36
Fig.37	SC-3002出土遺物 (1/3)	36
Fig.38	竪穴住居SC-3002貼床除去後の実測図 (1/40)	37

Fig.39	竪穴住居 SC-3003 実測図 (1/40)	38
Fig.40	SC-3003 出土遺物実測図 (1/3)	39
Fig.41	竪穴住居 SC-3004・3006・3007 実測図 (1/40)	40
Fig.42	SC-3004・3007 出土遺物実測図 (1/3)	40
Fig.43	竪穴住居 SC-3005 実測図 (1/40)	41
Fig.44	SC-3005 出土遺物実測図 I (1/3)	42
Fig.45	SC-3005 出土遺物実測図 II (1/3)	43
Fig.46	竪穴住居 SC-3008 実測図 (1/40)	44
Fig.47	竪穴住居 SC-3014 (3015・5009) 実測図 (1/40)	45
Fig.48	SC-3008・3014・5009 出土遺物実測図 (1/3)	45
Fig.49	竪穴住居 SC-3050 実測図 (1/40)	46
Fig.50	SC-3050・SK-3068 出土遺物実測図 (1/3)	46
Fig.51	竪穴住居 SC-4011 実測図 (1/40)	47
Fig.52	竪穴住居 SC-4012 実測図 (1/40)	47
Fig.53	竪穴住居 SC-5001 実測図 (1/40)	48
Fig.54	SC-4011・4012・5001 出土遺物実測図 (1/3)	48
Fig.55	溝 SD-1040 平面図 (1/300)	49
Fig.56	溝 SD-1040 土層断面実測図 (1/40)	49
Fig.57	SD-1040 出土遺物実測図 I (1/3)	50
Fig.58	SD-1040 出土遺物実測図 II (1/3)	51
Fig.59	溝 SD-1060 実測図 (1/60)	52
Fig.60	SD-1060 出土遺物実測図 (1/3)	53
Fig.61	SD-1070 出土遺物実測図 (1/3)	54
Fig.62	SD-2010 出土遺物実測図 (1/3)	54
Fig.63	溝 SD-2020・2040 と関連遺構の平面図 (1/300)	55
Fig.64	溝 SD-2020・2020・2040・4040 土層断面図 (1/40)	56
Fig.65	SD-2020 出土遺物実測図 I (1/3)	57
Fig.66	SD-2020 出土遺物実測図 II (1/3)	58
Fig.67	SD-2020・2040 出土遺物実測図 (247 は 1/6、他は 1/3)	60
Fig.68	SD-2040・4040 出土遺物実測図 (267 は 1/6、268 は 1/8、269 は 1/4、他は 1/3)	61
Fig.69	溝 SD-2030 平面図 (1/500)	62
Fig.70	溝 SD-2030 土層断面図 (1/40)	62
Fig.71	SD-2030 出土遺物実測図 I (1/3)	63
Fig.72	SD-2030 出土遺物実測図 II (1/3)	64
Fig.73	SD-2030 出土遺物実測図 III (1/3)	65
Fig.74	SD-2030 出土遺物実測図 IV (1/3)	66
Fig.75	溝 SD-2060 実測図 (1/40)	67
Fig.76	SD-2060 出土遺物実測図 (1/3)	67
Fig.77	溝 SD-3009・3010 平面図 (1/200)	68
Fig.78	溝 SD-3009・3010 土層断面図 (1/40)	68

Fig.79	SD-3009・3010 出土遺物実測図 (1/3)	68
Fig.80	溝 SD-3019 土層断面実測図 (1/40)	69
Fig.81	溝 SD-3051 実測図 (1/40)	69
Fig.82	SD-3051 出土遺物実測図 (1/3)	69
Fig.83	溝 SD-3074・4003 実測図 (1/80)	70
Fig.84	SD-3074・4003 出土遺物実測図 (1/3)	70
Fig.85	溝 SD-5020・5023 実測図 (1/60)	71
Fig.86	SD-5020・5023 出土遺物実測図 (1/3)	71
Fig.87	溝 SD-5024 実測図 (1/60)	72
Fig.88	SD-5024 出土遺物実測図 (1/3)	72
Fig.89	井戸 SE-1074・1075 実測図 (1/40)	73
Fig.90	SE-1074 出土遺物実測図 I (1/3)	74
Fig.91	SE-1074 出土遺物実測図 II (1/3)	75
Fig.92	SE-1074 出土遺物実測図 III (1/3)	76
Fig.93	SE-1075 出土遺物実測図 (1/3)	77
Fig.94	井戸 SE-1080 実測図 (1/40)	79
Fig.95	SE-1080 出土遺物実測図 I (1/3)	80
Fig.96	SE-1080 出土遺物実測図 II (1/3)	81
Fig.97	井戸 SE-2011 実測図 (1/40)	82
Fig.98	SE-2011 出土遺物実測図 (1/3)	83
Fig.99	井戸 SE-2043 実測図 (1/40)	84
Fig.100	SE-2043 出土遺物実測図 (1/3)	84
Fig.101	井戸 SE-2044 実測図 (1/40)	85
Fig.102	SE-2044 出土遺物実測図 (1/3)	85
Fig.103	井戸 SE-2046 実測図 (1/40)	85
Fig.104	SE-2046 出土遺物実測図 (1/3)	85
Fig.105	井戸 SE-2050 実測図 (1/40)	86
Fig.106	SE-2050 出土遺物実測図 (1/3)	87
Fig.107	井戸 SE-2053 実測図 (1/40)	88
Fig.108	SE-2053 出土遺物実測図 (1/3)	88
Fig.109	井戸 SE-2056 実測図 (1/40)	88
Fig.110	SE-2056 出土遺物実測図 I (1/3)	89
Fig.111	SE-2056 出土遺物実測図 II (1/3)	90
Fig.112	井戸 SE-3020 実測図 (1/40)	91
Fig.113	SE-3020 出土遺物実測図 (1/3)	91
Fig.114	井戸 SE-3025 実測図 (1/40)	92
Fig.115	SE-3025 出土遺物実測図 I (1/3)	93
Fig.116	SE-3025 出土遺物実測図 II (1/3)	94
Fig.117	SE-3025 出土遺物実測図 III (1/3)	95
Fig.118	井戸 SE-3052 実測図 (1/40)	96

Fig.119	SE-3052 出土遺物実測図 (1/3)	96
Fig.120	井戸 SE-3053 実測図 (1/40)	97
Fig.121	SE-3053 出土遺物実測図 (1/3)	98
Fig.122	井戸 SE-3054 実測図 (1/40)	99
Fig.123	SE-3054 出土遺物実測図 (1/3)	99
Fig.124	井戸 SE-3058 実測図 (1/40)	100
Fig.125	SE-3058 出土遺物実測図 (1/3)	100
Fig.126	井戸 SE-3070 実測図 (1/40)	101
Fig.127	SE-3070 出土遺物実測図 (1/3)	101
Fig.128	井戸 SE-3071 実測図 (1/40)	102
Fig.129	SE-3071 出土遺物実測図 (1/3)	102
Fig.130	井戸 SE-4019 実測図 (1/40)	103
Fig.131	SE-4019 出土遺物実測図 (1/3)	103
Fig.132	井戸 SE-4020 実測図 (1/40)	104
Fig.133	SE-4020 出土遺物実測図 (1/3)	105
Fig.134	井戸 SE-5005 実測図 (1/40)	106
Fig.135	SE-5005 出土遺物実測図 (561 は 1/3、 562 は 1/8)	106
Fig.136	井戸 SE-5039 実測図 (1/40)	107
Fig.137	SE-5039 出土遺物実測図 (1/3)	107
Fig.138	道路遺構平面図 (1/500)	108
Fig.139	溝 SD-1081 実測図 (1/40)	109
Fig.140	SD-1081 出土遺物実測図 (1/3)	109
Fig.141	溝 SD-4001・4002 実測図 (全体図は 1/150、 他 1/40)	110
Fig.142	SD-4001 出土遺物実測図 (591 は 1/8、 他は 1/3)	112
Fig.143	SD-4001・4002 出土遺物実測図 (1/3)	113
Fig.144	溝 SD-5004・5010 実測図 (土層断面図は 1/40、 他は 1/80)	114
Fig.145	土坑 SK-1021・1028・1030・1031・1051・1052・1053・1054 実測図 (1/40)	116
Fig.146	土坑 SK-1050 実測図 (1/40)	117
Fig.147	SK-1028・1030・1050 出土遺物実測図 (1/3)	118
Fig.148	SK-1050 出土遺物実測図 (1/3)	119
Fig.149	土坑 SK-1055・1059・1061・1062・1064・1065・1068・1069・1071・1076 実測図 (1/40)	121
Fig.150	SK-1055・1059・1061・1064・1065・1068 出土遺物実測図 (1/3)	123
Fig.151	土坑 SK-2012～2015・2017～2019・2021・2022 実測図 (1/40)	125
Fig.152	SK-2017 出土遺物実測図 (1/3)	126
Fig.153	土坑 SK-2023・2033・2038・2045・2057・2061 実測図 (1/40)	127
Fig.154	土坑 SK-3024・3026・3064・3065・3067 実測図 (1/40)	129
Fig.155	SK-3026・3067 出土遺物実測図 (1/3)	129
Fig.156	土坑 SK-4008・4013・4014・4018・4021 実測図 (1/40)	130
Fig.157	SK-4013・4014 出土遺物実測図 (1/3)	131
Fig.158	土坑 SK-5013～5016・5032・5034・5040・5041 実測図 (1/40)	132

Fig.159	SK-5013・5016・5032 出土遺物実測図 (1/3)	133
Fig.160	木棺墓 SO-1058 実測図 (1/20)	134
Fig.161	SO-1058 出土遺物実測図 (1/3)	134
Fig.162	木棺墓 SO-2059 実測図 (1/20)	134
Fig.163	1 区の甕棺墓の配置 (1/150)	135
Fig.164	2 区の甕棺墓の配置 (1/150)	136
Fig.165	甕棺墓 ST-1011 実測図 (1/20)	137
Fig.166	ST-1011 甕棺実測図 (1/8)	137
Fig.167	甕棺墓 ST-1012 実測図 (1/20)	138
Fig.168	ST-1012 甕棺実測図 (1/8)	139
Fig.169	甕棺墓 ST-1013 実測図 (1/20)	140
Fig.170	甕棺墓 ST-1014 実測図 (1/20)	140
Fig.171	ST-1014 甕棺実測図 (1/8)	141
Fig.172	甕棺墓 ST-1015 実測図 (1/20)	142
Fig.173	ST-1015 甕棺実測図 (1/8)	143
Fig.174	甕棺墓 ST-1016 実測図 (1/20)	144
Fig.175	ST-1016 甕棺実測図 (1/8)	145
Fig.176	甕棺墓 ST-1017 実測図 (1/20)	146
Fig.177	ST-1017 甕棺実測図 (1/8)	146
Fig.178	甕棺墓 ST-1018 実測図 (1/20)	147
Fig.179	ST-1018 甕棺実測図 (1/8)	148
Fig.180	甕棺墓 ST-1019 実測図 (1/20)	149
Fig.181	ST-1019 甕棺実測図 (1/8)	149
Fig.182	甕棺墓 ST-1020 実測図 (1/20)	150
Fig.183	ST-1020 甕棺実測図 (1/8)	151
Fig.184	甕棺墓 ST-1022 実測図 (1/20)	152
Fig.185	ST-1022 甕棺実測図 (1/8)	153
Fig.186	甕棺墓 ST-1024 実測図 (1/20)	154
Fig.187	ST-1024 甕棺実測図 (1/8)	154
Fig.188	甕棺墓 ST-1025 実測図 (1/20)	154
Fig.189	ST-1025 甕棺実測図 (1/8)	154
Fig.190	甕棺墓 ST-1046 実測図 (1/20)	155
Fig.191	ST-1046 甕棺実測図 (1/8)	155
Fig.192	甕棺墓 ST-1047 実測図 (1/20)	156
Fig.193	ST-1047 甕棺実測図 (1/8)	156
Fig.194	甕棺墓 ST-1048 実測図 (1/20)	157
Fig.195	ST-1048 甕棺実測図 (1/8)	157
Fig.196	甕棺墓 ST-2004 実測図 (1/20)	158
Fig.197	ST-2004 甕棺実測図 (1/8)	158
Fig.198	甕棺墓 ST-2005 実測図 (1/20)	159

Fig.199	ST-2005 銀棺実測図 (1/8)	159
Fig.200	銀棺墓 ST-2006 実測図 (1/20)	160
Fig.201	ST-2006 銀棺実測図 (1/8)	160
Fig.202	銀棺墓 ST-2041 実測図 (1/20)	160
Fig.203	ST-2041 銀棺実測図 (1/8)	160
Fig.204	祭祀土坑 SX-1045 遺物出土状況平面図 (1/20)	162
Fig.205	祭祀土坑 SX-1045 遺物出土状況断面図 (1/20)	163
Fig.206	祭祀土坑 SX-1045 実測図 (1/40)	164
Fig.207	SX-1045 出土遺物実測図 I (1/3)	165
Fig.208	SX-1045 出土遺物実測図 II (1/3)	166
Fig.209	SX-1045 出土遺物実測図 III (1/3)	167
Fig.210	SX-1045 出土遺物実測図 IV (1/3)	168
Fig.211	SX-1045 出土遺物実測図 V (1/3)	169
Fig.212	SX-1045 出土遺物実測図 VI (1/3)	170
Fig.213	SX-1045 出土遺物実測図 VII (1/3)	171
Fig.214	SX-1045 出土遺物実測図 VIII (1/3)	172
Fig.215	祭祀土坑 SX-1082 実測図 (1/40)	173
Fig.216	SX-1082 出土遺物実測図 (1/3)	173
Fig.217	立柱造構 SX-1049 実測図 (1/40)	174
Fig.218	SX-1049 出土遺物実測図 (1/3)	174
Fig.219	周溝 SD-1100 土層断面図 (1/40)	176
Fig.220	周溝墓 SX-1100 平面・断面実測図 (1/100)	(折り込み)
Fig.221	SD-1100 出土遺物実測図 I (787 は 1/8、他は 1/3)	177
Fig.222	SD-1100 出土遺物実測図 II (1/3)	178
Fig.223	周溝墓 SX-4010 実測図 (1/100)	180
Fig.224	周溝 SD-4010 土層断面図 (1/40)	181
Fig.225	SD-2049・4010 出土遺物実測図 (1/3)	181
Fig.226	周溝 SD-4050 土器出土状況 (1/40)	182
Fig.227	周溝墓 SX-4050 実測図 (土層図は 1/40、他は 1/100)	(折り込み)
Fig.228	SD-2055・4050 出土遺物実測図 I (1/3)	183
Fig.229	SD-4050 出土遺物実測図 II (1/3)	184
Fig.230	SD-4050 出土遺物実測図 III (1/3)	185
Fig.231	性格不明の周溝状造構 SX-3059・3060・4005 実測図 (土層図は 1/40、他は 1/100)	187
Fig.232	SX-3059・3060・4005 出土遺物実測図 (862 は 1/1、他は 1/3)	188
Fig.233	性格不明造構 SX-2080 実測図 (1/60)	190
Fig.234	性格不明造構 SX-2080 断面図 (1/60)	191
Fig.235	SX-2080 (SK-2031) 出土遺物実測図 (1/3)	191
Fig.236	地下式坑 SX-1042・3057・5028・5030・5035 実測図 (1/60)	192
Fig.237	SX-5030・5035 出土遺物実測図 (1/3)	192
Fig.238	その他の出土遺物	193

Fig.239 第 114 次調査 弥生時代の遺構（中期後半～後期 1/1,000）
Fig.240 周辺の弥生時代の遺構（1/2,000）
Fig.241 第 114 次調査 古墳時代前期の遺構（主に前期前半 1/1,000）
Fig.242 周辺の前期古墳と並列溝（1/2,000）
Fig.243 第 114 次調査 古墳時代後期～古代の遺構（1/1,000）
Fig.244 周辺の古墳時代後期～古代の遺構（1/2,000）

付図 1 1 区西・1 区東遺構配置図（1/200）

付図 2 2 区・4 区遺構配置図（1/200）

付図 3 3 区遺構配置図（1/200）

付図 4 5 区遺構配置図（1/200）

図版目次

巻頭図版

- 1 那珂遺跡群第114次調査区全景 デジタル合成（上方が北）
- 2.1 青銅器鋳型
- 3.1 古墳時代前期の道路と円形周溝墓（北から）
2. 前方後方形周溝墓 SX-1100（南から）
2. 古墳時代後期の方形区画溝（北東から）

本文中図版

- PH.1 対象地東側調査前状況（西から）
PH.2 T1（北から）
PH.3 T13（北から）
PH.4 T13 SD022 トレンチ東壁土層
PH.5 T3（西から）
PH.6 T4（西から）
PH.7 T5（北から）
PH.8 T6（西から）
PH.9 T7（南から）
PH.10 T8（西から）
PH.11 T9（南から）
PH.12 T10（西から）
PH.13 T11（南から）
PH.14 T12 K015（西から）
PH.15 T12（東から）

巻末図版

- PL.1 1. 調査区遠景（南から）
PL.2 1. 1区西全景（上が西、左手は2区）
PL.3 1. 2区全景（上が南、手前は1区）
PL.4 1. 4区全景（上が南、右手排土山は2区）
PL.5 1. 掘立柱建物 SB-1032（北から）
3. 掘立柱建物 SB-3034（南から）
5. 竪穴住居 SC-1073（西から）
PL.6 1. 3区竪穴住居群（上が東）
3. SC-3001 カマド検出状況（東から）
5. SC-3001 カマド対面粘土（西から）
PL.7 1. 竪穴住居 SC-3002（南から）
3. 竪穴住居 SC-3003（南東から）
5. 竪穴住居 SC-3005（南から）
2. 調査区全景（上が北）
2. 1区東全景（上が西）
2. 3区全景（上が東、右手は4区）
2. 5区全景（上が北）
2. 掘立柱建物 SB-1090（東から）
4. 掘立柱建物 SB-5050（西から）
6. 竪穴住居 SC-1101（西から）
2. 竪穴住居 SC-3001（南から）
4. SC-3001 カマド（東から）
6. SC-3001 贼床除去後（南から）
2. SC-3002 贊床除去後（南から）
4. 竪穴住居 SC-3004～3007（南から）
6. SC-3005 遺物出土状況（西から）

- PL.8 1. 竪穴住居 SC-3050 (北から)
 3. 溝 SD-1040 (南から)
 5. SD-1040 E-F 土層断面 (北から)
- PL.9 1. 区画溝 SD-2020・2040・4040 全景 (北から)
 3. SD-2020 全景 (東から)
 5. SD-2040 全景 (南から)
- PL.10 1. SD-2020 土層断面 A-B (西から)
 3. SD-2040 土層断面 E-F (南から)
 5. SD-2040 南端土層断面 (北から)
- PL.11 1. 2 区弥生大溝 SD-2030 (東から)
 3. 4 区弥生大溝 SD-2030 (西から)
 5. 4 区 SD-2030・4010 G-H 土層断面 (西から)
- PL.12 1. 井戸 SE-1074・1075 上部 (東から)
 3. SE-1075 底遺物出土状況 (北東から)
 5. 井戸 SE-1080 上部 (東から)
 7. SE-1080 底遺物出土状況 (東から)
- PL.13 1. 井戸 SE-2011 (南から)
 3. 井戸 SE-2044 (東から)
 5. SE-2046 立ち割り (北から)
- PL.14 1. SE-2050 断ち割り (北から)
 3. 井戸 SE-2053 上部 (西から)
 5. 井戸 SE-2056 上層 (東から)
- PL.15 1. SE-2056 断ち割り (西から)
 3. 井戸 SE-3020 完掘状況 (東から)
 5. SE-3025 底遺物出土状況 (南から)
- PL.16 1. 井戸 SE-3054 完掘状況 (東から)
 3. 井戸 SE-3071 半截状況 (東から)
 5. 井戸 SE-4020 完掘状況 (東から)
- PL.17 1. 井戸 SE-5005 完掘状況 (西から)
 3. 道路西溝 SD-1081 (南東から)
 5. 道路側溝 SD-4001・4002 (北から)
- PL.18 1. SD-4001 土層断面 E-E' (南から)
 3. SD-4002 土層断面 A-A' (南から)
 5. SD-4002 土層断面 C-C' (南から)
- PL.19 1. 道路西溝 SD-5010 (南から)
 3. 土坑 SK-1050 (北から)
 5. 土壙墓 SK-1068 (北から)
- PL.20 1. 1 区西の甕棺墓群 (南西から)
 3. 甕棺墓 ST-1012 (右)・1013 (北から)
 5. ST-1014 断ち割り (北から)
2. 竪穴住居 SC-4011・4012 (北から)
 4. SD-1040 A-B 土層断面 (南から)
 6. SD-1040 G-H 土層断面 (北から)
2. SD-2020・2040 コーナー部 (北から)
 4. SD-2020 全景 (西から)
 6. SD-2040 上層甕棺片出土状況 (北から)
2. SD-2020 土層断面 C-D (西から)
 4. SD-2040 土層断面 G-H (南から)
 6. SD-4040 土層断面 (南から)
2. SD-2030 西端 (西から)
 4. 2 区 SD-2030 土層断面 A-B (東から)
 6. 4 区 SD-2030 土層断面 I-J (西から)
2. SE-1074・1075 断ち割り (東から)
 4. SE-1074 底遺物出土状況 (南東から)
 6. SE-1080 断ち割り (東から)
2. 井戸 SE-2043 (東から)
 4. 井戸 SE-2046 上部 (東から)
 6. 井戸 SE-2050 上部 (北から)
2. SE-2050 底遺物出土状況 (南から)
 4. SE-2053 断ち割り (北から)
 6. SE-2056 上層出土遺物 (東から)
2. SE-2056 下層出土遺物 (西から)
 4. 井戸 SE-3025 完掘状況 (南から)
 6. 井戸 SE-3052 (手前)・3053 (東から)
2. 井戸 SE-3070 完掘状況 (北東から)
 4. 井戸 SE-4019 完掘状況 (北西から)
 6. SE-4020 底遺物出土状況 (東から)
2. 井戸 SE-5039 完掘状況 (北東から)
 4. 道路側溝 SD-4001・4002 (南から)
 6. SD-4001 遺物出土状況 (南から)
2. SD-4001 土層断面 H-H' (南から)
 4. SD-4002 土層断面 B-B' (南から)
 6. SD-4002 土層断面 D-D' (北から)
2. SD-5010 土層断面 (北から)
 4. 土坑 SK-1061 (南から)
 6. 1 区西の甕棺墓群 (上が西)
2. 甕棺墓 ST-1011 (南から)
 4. 甕棺墓 ST-1014 (西から)
 6. 甕棺墓 ST-1015 (北西から)

- PL.21 1. 銀棺墓 ST-1016 (南から)
2. 銀棺墓 ST-1017 (南から)
3. 銀棺墓 ST-1018 (南東から)
4. 銀棺墓 ST-1018 (北東から)
5. 銀棺墓 ST-1019 (左)・1020 (南から)
6. 銀棺墓 ST-1022 (北から)
- PL.22 1. 銀棺墓 ST-1024 (右)・1025 (東から)
2. 銀棺墓 ST-1046・祭祀土坑 SX-1082 (南東から)
3. 銀棺墓 ST-1047 (北東から)
4. 銀棺墓 ST-1048 (南西から)
5. 2区の銀棺墓群 ST-2004～2006 (南西から)
6. 銀棺墓 ST-2041 (南から)
- PL.23 1. 祭祀土坑 SX-1045 遺物出土状況 (西から)
2. 祭祀土坑 SX-1045 遺物出土状況 (東から)
3. 祭祀土坑 SX-1045 遺物出土状況 (北から)
4. 祭祀土坑 SX-1045 土層断面 (北から)
5. 祭祀土坑 SX-1082 土層断面 (南から)
6. 立柱遺構 SX-1049 (南東から)
- PL.24 1. 前方後方形周溝墓 SX-1100 (南から)
2. 前方後方形周溝墓 SX-1100 (西から)
3. SX-1100 前方部周溝 (東から)
4. SX-1100 後方部周溝南西隅 (南西から)
5. SX-1100 後方部周溝北辺 (西から)
6. SX-1100 後方部周溝北東隅須恵器出土状況北東から)
- PL.25 1. SX-1100 周溝土層断面 B-B' (北東から)
2. SX-1100 周溝土層断面 C-C' (北東から)
3. SX-1100 周溝土層断面 D-D' (北から)
4. SX-1100 周溝土層断面 E-E' (北西から)
5. SX-1100 周溝土層断面 F-F' (北西から)
6. SX-1100 周溝土層断面 G-G' (北から)
- PL.26 1. 道路遺構と円形周溝墓群 (西から)
2. 円形周溝墓 SX-4010 (北東から)
3. 円形周溝墓 SX-4050 (東から)
4. SX-4050 遺物 P1 出土状況 (南西から)
5. SX-4050 遺物 P2 出土状況 (北西から)
6. SX-4050 土層断面 E-E' (北から)
- PL.27 1. SX-4050 遺物 P3 出土状況 (西から)
2. SX-4050 土層断面 D-D' (北西から)
3. 性格不明の周溝状遺構 SX-3059 他 (西から)
4. SX-3059 土層断面 (北から)
5. 伝掘り状遺構 SX-2080 (北から)
6. 2区調査作業風景 (南東から)
- PL.28 出土遺物 (1)
- PL.29 出土遺物 (2)
- PL.30 出土遺物 (3)

付偏の図・写真図版・表目次

付. 1 那珂遺跡群第 114 次調査出土の青銅器鋳造関連遺物 (図)	
青銅器鋳造関連遺物実測図 (1/2)	202
付. 2 那珂遺跡群第 114 次調査出土鋳型の保存科学的調査 (写真図版)	
資料の外観 (原寸大) と調査箇所.....	207
剥離した黒色物質の電子顕微鏡による元素分布分析結果.....	208
付. 3 那珂遺跡群第 114 次調査井戸出土の動物遺存体について (表)	
那珂遺跡群第 114 次調査出土動物遺存体一覧	209
付. 4 福岡市那珂遺跡群第 114 次調査出土の近世人骨調査報告 (図)	
図 1 人骨の保存状態.....	210
(写真図版)	
1 ~ 5 SK-3075 号人骨・頭蓋および四肢骨	214
6 左桡骨・手根骨の癒合 (SK-3075 号人骨)	214
7 仙腸関節癒合 (SK-3075 号人骨)	214
8 SK-4017 号人骨・上肢	214
(表)	
表 1 分析資料一覧	210
表 2 上肢骨計測値 (男性)	213
表 3 下肢骨計測値 (男性)	213
付. 5 福岡市那珂遺跡群第 114 次調査における自然科学的分析 (図)	
図 1 那珂遺跡群第 114 次調査における花粉ダイアグラム	219
図 2 那珂遺跡群第 114 次調査における主要珪藻ダイアグラム	223
図 3 那珂遺跡群第 114 次調査における種実ダイアグラム	227
(写真図版)	
那珂遺跡群第 114 次調査の花粉・胞子・寄生虫卵	228
那珂遺跡群第 114 次調査の珪藻	229
那珂遺跡群第 114 次調査の種実	230
(表)	
表 1 那珂遺跡群第 114 次調査における花粉分析結果	218
表 2 那珂遺跡群第 114 次調査における珪藻分析結果	222
表 3 那珂遺跡群第 114 次調査における種実同定結果	226

第一章 はじめに

1. 調査に至る経過

第三章の試掘調査に至る経過で述べているように、今回の調査対象地となった福岡市博多区竹下5丁目及び那珂2丁目地内の旧ミネシケ練炭工場跡地については、平成16年に都市整備局（現在は住宅都市局）公園緑地部公園建設課より福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課に対して公園建設にかかる協議が行われ、遺構の遺存状況・分布範囲について確認するための調査を、那珂遺跡群第97次調査として平成16年4月20日～平成16年5月31日に実施した。公園用地13466.44m²を対象にした確認調査では、計13本のトレンチにより壇形墓や溝などの遺構を検出し、工事計画対象地内に遺跡が存在することを確認した。この調査成果を参考に公園建設課において公園の設計を行った結果、平成18年3月7日付け都整第2632号により埋蔵文化財課長にて「那珂中央公園整備工事」にかかる事前審査依頼が提出された（事前審査番号17-1-99）。埋蔵文化財課では平成18年3月10日付け教理第1-99号をもって、申請地において構造物等により遺構が破壊を受ける部分に對しては発掘調査が必要旨を回答した。

発掘調査は平成18年（2006）6月29日から平成19年（2997）3月31日に那珂遺跡群第114次調査として埋蔵文化財第1課が実施し、整理報告書作成は業務多忙のためやや遅れて平成21年度に、ともに令達事業として行った。

2. 調査の組織

調査にあたり、原局である福岡市都市整備局（現、住宅都市局）公園緑地部公園建設課にご理解とご協力を頂いた。調査は以下の組織で行った。なお、調査中、小田富士雄福岡大学名誉教授にご指導を頂いた。

調査委託 福岡市都市整備局（現、住宅都市局）公園緑地部公園建設課

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 山田裕嗣

調査総括 埋蔵文化財第1課長 山口讓治（調査時）、濱石哲也

埋蔵文化財第1課調査係長 山崎龍雄（調査時）、米倉秀紀

調査庶務 文化財管理課管理係 鈴木由喜（調査時）、山本朋子

調査担当 埋蔵文化財課事前審査係 星野 恵美、阿部泰之

埋蔵文化財第1課調査係 長家 伸（試掘調査担当=第97次調査）

吉武 学、森本幹彦（専任担当者）屋山 洋、久住猛雄、

赤坂 亨

調査協力 坂口剛毅（調査員）阿部孝行、石川幸子、今村由利、今村良輔、岩田幸子、岩田淳二、浦崎てい子、大浦香代子、大庭智子、大庭義久、片岡博子、加藤常信、辛川容子、

唐島栄子、川庄朋子、河原明子、北野宏行、小池邦治、近藤未孝、坂下達男、清水 明、

閔 哲也、田口恵子、田坂 恵、津田照子、遠山 獅、中村ハツ子、永田とみ子、

永田豊彦、中村尚美、西 輝光、布江孝子、花田直文、原 勝輝、原田 浩、日高芳子、

広渡隆子、藤川由希子、藤野雅基、藤野幸雄、藤村正勝、増田ヒロ子、御手洗史子、

牟田邦博、米良恵美、安高邦晴、山下智子、山中行生、結城フヂコ、渡部律子、

渡 正子、他（五十音順、敬省略）

整理協力 田中克子（調査員）、青木悦子、下山慎子、萩尾朱美、森 寿恵、八木一成（五十音順、敬省略）

第二章 那珂遺跡群の地理的位置と歴史的環境

1. 那珂遺跡群の位置と周辺遺跡 Fig.1

那珂遺跡群は、福岡平野を北流する御笠川・那珂川等の中小河川により形成された低平な台地上に立地する。この台地は福岡市博多区博多駅南から那珂、南区五十川・井尻、春日市須玖を経て那珂川町安徳へと断続的に連なる洪積中段丘面のひとつであるが¹、これらは主に阿蘇山起源の広域テフラである Aso-4 火碎流堆積物によって構成され、沖積低地から 3 ~ 20 m の比高差を有するローム台地となっており、台地の末端部は河川等の浸食により細かく枝分かれし、あるものは八つ手状に、またあるものは低平な独立丘となっている。下流域の博多駅南から那珂方面の台地には浸食が特に顕著であるが、1930 年代の耕地整理と以後の都市開発により平坦に変更され、現在ではそのような地形を地表に見ることはできない。那珂遺跡群の立地する独立台地は、北西 - 南東方向に細長く、南北約 2.4 km、東西最大幅約 0.8 km の広大な面積を有しており、北半を比恵遺跡群と呼んで二分しているが² 本來的には一連の遺跡である。海拔標高は台地南端の最高所で 10.4 m、北端で 5 m 前後を測り、途中波打ながら北へ緩く傾斜している。西側は那珂川により鋭く削られて段丘崖となり、西方の高宮丘陵のあたりまで沼澤原となつて広く遺跡の空白地域となっている。東側は御笠川の蛇行により削られているが、御笠川のすぐ脇で遺構が確認されることから、本來は台地がもう少し東へ広がっていたと考えられる。北側は低湿地を挟んで海岸沿いに砂丘が発達し、弥生時代中期に始まる博多遺跡群が砂丘上に立地している。南側は浅い鞍部を介して更に細長い台地が続いており、弥生時代前期に始まる五十川遺跡が位置している。

これらの更に周囲の台地上には、南から麦野遺跡群、井尻 B 遺跡、諸岡 A・B 遺跡、高畠遺跡、板付遺跡があり、弥生時代前期から断続的に集落や墓地が展開する状況を示している。一方、台地周辺の低地では弥生時代から水田が営まれたと考えられるが、水田の継続經營と後世の地形改変のため水田遺構の検出は困難で、板付遺跡、那珂君体遺跡、東比恵 3 丁目遺跡など数例の発見に留まっている。

2. 那珂遺跡群のこれまでの調査 Fig.2

那珂遺跡群の台地は生活適地として一部が旧石器時代から利用を受けているが、縄文時代には集落は認められず、低丘陵上に繁茂した樹木がなす森林は、むしろ狩猟・採集の対象としての利用を受けていると考えられ、沖積低地を利用した水田耕作を基盤とする農耕集落が弥生時代早期に台地縁辺部に成立すると、以後は森林が切り開かれて次第に内部まで利用を受けるようになったと思われる。やがて、奴国あるいは那珂郡の中心的な役割を担う地域のひとつに成長したとみられ、各時代の重要な遺構や遺物が數多く認められる。これらについては既刊の報告書に詳しいが、那珂遺跡群を特徴付ける遺構を以下にあげておく。

まず丘陵縁辺部に初期農耕集落が取り付く。37 次で弥生時代早期の二重環濠を確認しており、次いで 10・14 次でも集落が成立したとみられる。弥生時代前期～中期前半には集落が分散拡大したとみられ、環濠を 67 次で確認し、他にも貯蔵穴を中心とする遺構を各調査で検出している。また比恵遺跡群・五十川遺跡でもこの時期の貯蔵穴が多数確認される。弥生時代中期後半には台地全域で集落・墓地が営まれ、全体的には巨大集落の觀をなす。また、20・22・114 次で台地を東西に横断する溝、22 次では大型建物、21 次では墳丘墓などの特殊遺構を確認している。

那珂八幡古墳の造営と前後して弥生時代末から古墳時代初頭に並走する 2 条溝（道路）が 1.5 km 以上にわたって通され、これを軸として計画的に集落や墓地が配置された状況を示す。特に那珂八幡古



1. 那珂遺跡群 (●は調査地点)、2. 上白井遺跡、3. 庫田青木遺跡、4. 久保園遺跡、5. 席田大谷遺跡、6. 吉塚遺跡、
 7. 博多遺跡群、8. 東比恵三丁目遺跡、9. 鶴居遺跡、10. 東那珂遺跡、11. 那珂君体遺跡、12. 板付遺跡、13. 高烟遺跡、
 14. 山王遺跡、15. 比恵遺跡群、16. 五十川遺跡、17. 諸岡B遺跡、18. 諸岡A遺跡、19. 井尻A遺跡、20. 三筑遺跡、
 21. 笹原遺跡、22. 井尻C遺跡、23. 井尻B遺跡、24. 横手遺跡、25. 三宅C遺跡、26. 大橋E遺跡、27. 三宅B遺跡、
 28. 野間B遺跡、29. 野間A遺跡、30. 中村町遺跡、31. 大橋A遺跡、32. 大橋D遺跡、33. 大橋C遺跡、34. 三宅A遺跡、
 35. 大橋B遺跡、36. 和田田藏池遺跡、37. 若久B遺跡、38. 若久A遺跡
 ※アミは台地・丘陵上の遺跡

Fig.1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

墳の南側では道路沿いに古墳群が配され「那珂古墳群」とも呼ぶべき景観をなしていたとみられる。5～6世紀には集落が減少するが、6世紀中葉に東光寺剣塚古墳が営なまれたのち、後半～末にかけて竪穴住居や掘立柱建物からなる集落が再び拡大する。更に7世紀にかけて一部でこれらの集落が廃されて倉庫群等に変わる現象が認められ、瓦等の出土から古代官衙施設の造営に伴って集落の強制撤去が行われたと推定されている。那珂遺跡群は7世紀から古代にかけて、対外軍事拠点や評衡のち都術などの官衙が置かれた有力候補地とみられており、これらに関連する遺構である可能性がある。

中世後期の室町時代から戦国時代には各所に堀状の大きな溝が掘り巡らされており、大内氏や大友氏家臣団の知行地との関連が指摘される。同様の現象は五十川遺跡などでも見受けられ、この方面的実態解明は今後の課題といえよう。

3. 第114次調査区の位置と周辺調査 Fig.7

第114次調査地点は、那珂遺跡群の南部に位置し、北側150mに那珂八幡古墳を望む。現況平面図(Fig.2・7)を見ると、周辺では南方の70次のあたりに海拔標高10.4mと丘陵が最も高くなる部分があり、110次を経て尾根が当調査地点へ伸びていることが分かる。尾根筋は本調査区の中央を北へ抜けで、那珂八幡古墳に向かって伸びていく。

周辺には既調査地点が多いが¹、今回の114次調査では弥生時代の大溝、古墳時代前期の道路遺構と周溝墓(古墳)、7世紀代の方形区画溝という特記すべき重要遺構を確認しており、この三時期に重点をおいて周辺の調査遺構を概観してみたい。

弥生時代中期後半～後期初頭の大溝は20次・22次で検出しており、250m以上に渡って伸び、おそらく那珂台地を東西に横断するものと考えられる。周辺調査の所見によると、大溝の北側に中期の遺構が多く、後期には大溝を超えて南へ遺構が広がる傾向があるという。中期末からは南側の41次などで環濠状の溝が散見され、祭祀行為が行われた後期の井戸が多いのも特徴である。

庄内式併行策道と考えられる那珂八幡古墳に始まる那珂遺跡群の前期墳墓群は、32・62・63・83・84次で検出した那珂八幡古墳南西側の方形周溝墓3基及び前方後方形周溝墓1基からなる一群と、南に約230m離れた9・41・70・110次で確認した台地最高所に群集する方形周溝墓8基からなる一群の二つの墓域が存在することが知られていた。これらは那珂八幡古墳と前後して掘削された溝間7m前後で並行して伸びる2条の溝の東西に規則的に配置されており、2条の溝は道路側溝であったと考えられている。しかし、この二群の中間地域で行った今回の114次調査により、前方後方形周溝墓1基、円形周溝墓2基が南北に並ぶ状況が確認でき、那珂八幡古墳の南側に長さ400m弱に渡って墳墓群が整然と並ぶ状況であったことが明らかとなった。現在までに確認した墳形は、那珂八幡前方後円墳を除くと、前方後方形2、方形11、円形2である。ただし、前方後方形をなすものは2基とも後方部に比べて前方部の周溝が極めて浅くなる特徴があり、これまで方形周溝墓としていた遺構についても前方部周溝が削平消失している可能性がある。また、周溝墓の溝内から古墳時代後期の須恵器片が多数出土することから、少なくとも7世紀頃までは周溝が残っており、古墳群としての景観を留めていたようである。

7世紀代の遺構は23次で竪穴住居を廃して造成された大型掘立柱建物群と大溝を確認している。N-78°Eに方向を揃える梁行3間、桁行4間の總柱掘立柱建物が3棟並び、桁を繋げた一つの倉庫と考えられ、出土須恵器からⅣa期～Ⅳb期(6世紀末～7世紀初め)とみられる。大溝は幅2.1mで磁北から6°西偏し、中～下層から7世紀初め、上層から同後半の須恵器や古瓦が出土し、これに直交又は並行する幅0.5mの同時期の小溝もある。この大溝が今回調査の区画溝と連続する可能性がある。

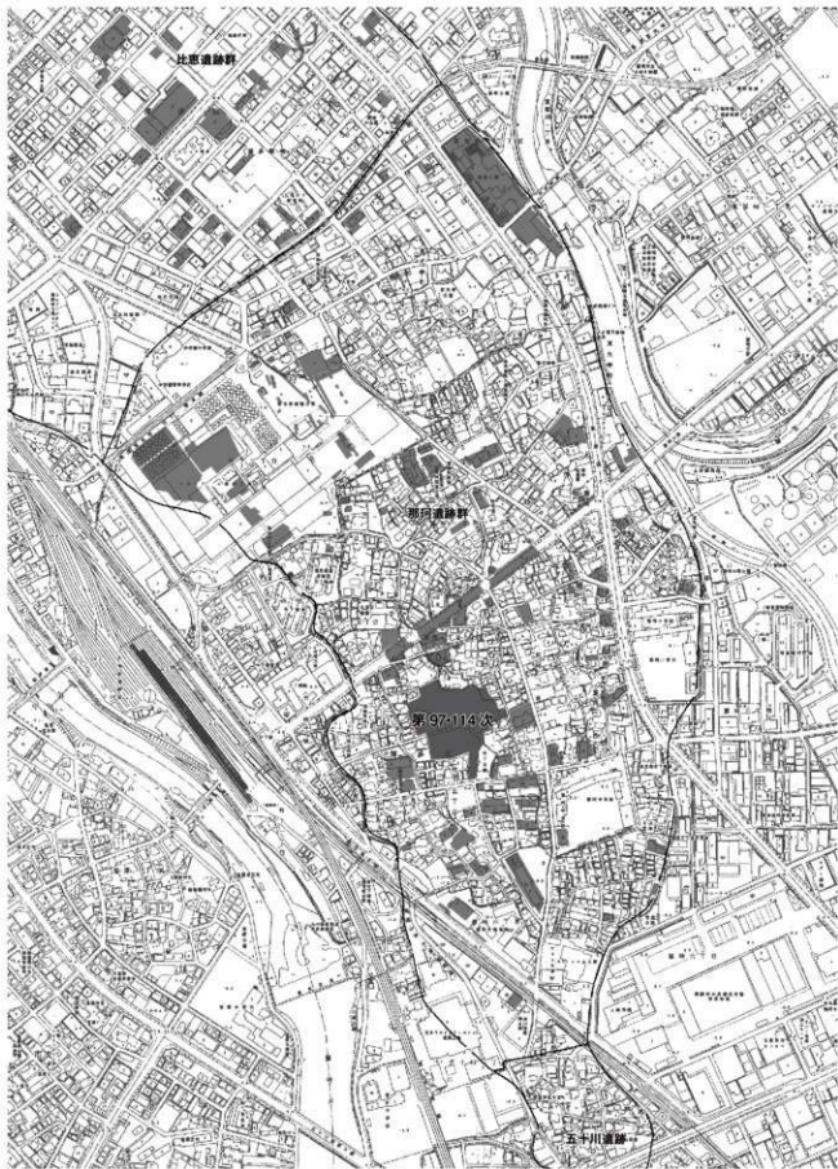


Fig.2 那珂遺跡群の調査地点の位置 (1/8,000)

第三章 試掘調査（第97次調査）の記録

1 調査経過

(1) 調査の経緯

平成16年4月に都市整備局公園緑地部公園建設課より埋蔵文化財課に対して、博多区那珂2丁目182-1外における、公園建設の協議がなされた。同地域は周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群に含まれており、周辺においてもすでに数次の発掘調査が行なわれ、計画地内においても遺構の存在は容易に想定された。ただ、計画地には近年まで全面に練炭工場・倉庫が建設されており、遺構の遺存状況・分布範囲については確認の必要があったため、10,000m²を越える対象地全面について確認調査を行なう必要があるとの協議が成立した。

この協議をうけて、埋蔵文化財課において、公園用地全体（対象面積13466.44m²）を対象にして遺構の分布状況を確認する目的で確認調査を行なった。調査はT1～T13までの計13本のトレーンチを設定し、重機による表土除去を行なった後、人力による遺構検出を行なった。なお、基本的に遺構は上面確認にとどめており一部トレーンチを設定したほかは、掘り下げを行なっていない。

調査期間は平成16年4月20日～平成16年5月31日、調査面積は965.6m²、出土遺物は8箱である。なお、出土遺物については確認調査後に行なわれた本調査である那珂遺跡群第114次調査（NAK114：本書所収）の出土遺物として埋蔵文化財センターに収蔵予定である。

なお、今回の確認調査成果を参考にしたうえで、都市整備局において公園の設計を行い、平成18年3月7日付け都整第2632号により、埋蔵文化財課長あてに事前審査依頼が提出された（事前審査番号17-1-99）。埋蔵文化財課では平成18年3月10日付け教理第1-99号で回答を行い、設計協議を行なって、遺構が破壊される部分については発掘調査が必要であるとの回答を行なった。協議の結果、設計上遺構の破壊が避けられない部分について発掘調査を行うことで協議が成立し、那珂遺跡群第114次調査が行なわれることとなった。

遺跡調査番号	0414	遺跡略号	NAK-97		
所在地	博多区那珂2丁目182-1外			分布地図番号	38-0085
開発面積	13466.44m ²	調査対象面積	13466.44m ²	調査面積	965.6m ²
調査期間	平成16年4月20日～平成16年5月31日			事前審査番号	17-1-99

(2) 調査体制

調査原因 重要遺跡確認調査

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査總括 埋蔵文化財課長 山口譲治 調査第2係長 池崎譲二

調査庶務 文化財整備課 御手洗清

調査担当 埋蔵文化財課 調査第2係 長家伸

調査作業 清川アキヨ 中村フミ子 岩本三重子 越智信孝 藤野トシ子 中村サツエ

藤野幾志 西川シズ子 宮崎幸子 萩野孝子 中島道夫

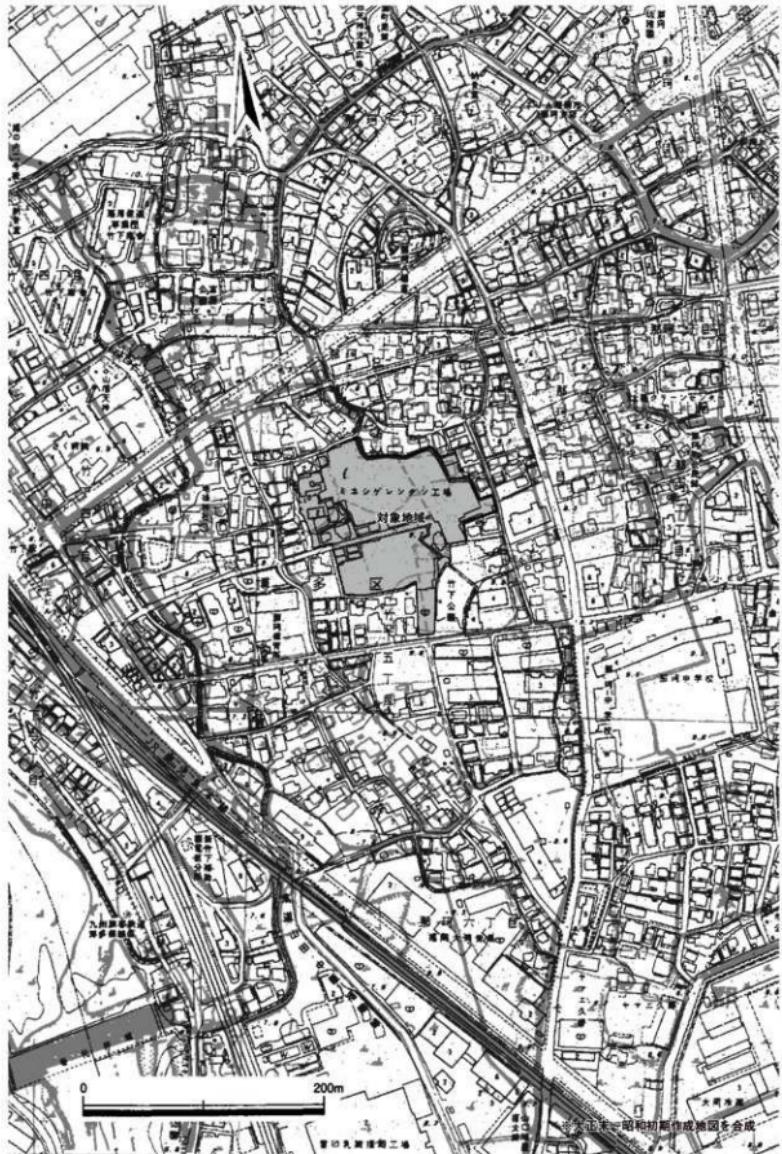


Fig.3 那珂遺跡群第97次調査区位置図 (1/4,000)

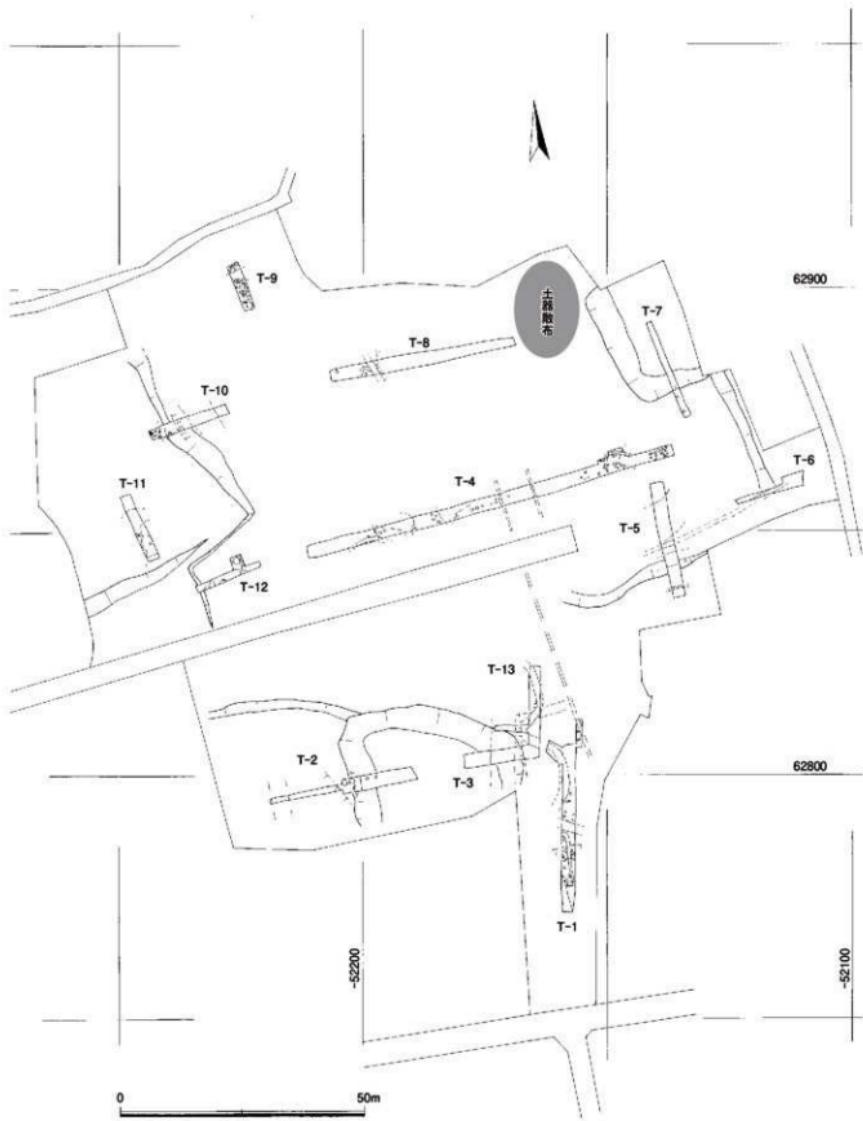


Fig.4 那珂遺跡群第97次調査区配置図 (1/1,000)

2 調査報告

(1) 調査前状況

申請地は那珂遺跡群のほぼ中央部分に当たり、周辺の調査結果・昭和初期の地図・現地形等から、南北に伸びる本来の丘陵尾根線上に位置するものと考えられる。昭和初期作成地図等によれば、対象地内はほぼ全体が空き地で、南側に 10 m コンタ、北端部分に 8 m コンタが巡り、全体に南側から北側に緩やかに傾斜する地形として表現され、北西隅には 60 m × 40 m 範囲の 10 m コンタによる高位部分が示されている。なお、この北西隅の高位部分は現状では住宅を解体した部分にあたり、現状でもほぼ同一の形状・同レベルの高所として残っている。また、敷地は調査以前には全面に練炭工場・倉庫が建築されており、聞き取りによると工場建設以前は全面が桑畠であったようである。

(2) 各トレンチの概要

T 1

南端部に南北方向に設定した。当初幅 2.5 m、長さ 33 m を掘削した後、北側に 10 m ほど拡張している。掘削面積は 105.5 m² である。表土・褐色土除去後の鳥栖ローム上面が遺構面である。遺構面北端の標高 9.6 m で、トレンチ中央より遺構面が南側に緩やかに傾斜し、南端では標高 9.1 m となる。30 m 南側で行われた 96 次調査地点では遺構面のローム層上面標高 8.8 m であり、このまま南方向に緩傾斜が続くものと考えられる。なお、表土下の褐色土は工場建設以前の耕作土壌と考えられ、対象地全面に広がっている。形成時期については明らかでないが、少なくともこの上面から掘り込む遺構は認められず、出土遺物からは中世後半以降の形成と考えられる。

検出遺構には堅穴住居跡？(008・009)、溝(012・013)、土坑(011)がある。013 は T 13 検出の SD 021 の延長部と考えられる。遺構埋土は暗褐色土が主体で、わずかに黒褐色土・褐色土のものが見られる。SD 012 を幅 40cm、深さ 30cm ほど掘削し、弥生土器片が出土している。

T 2

南半南側に東西方向に設定した。幅 3 m、長さ 35.4 m、掘削面積 106.2 m² である。西側中央部分に段落ちが認められ、この傾斜部分に褐色土が堆積している。段落ちは工場建設以前のものと考えられ、工場建設時には盛土を行っている。遺構面は東側が鳥栖ローム上面（標高 8.6 m）であるが、西端では下位の八女粘土が露出する（標高 8 m）。西半には溝状遺構のほかは見られない。002 は段落ちの法尻に掘削された新しい時期の溝である。また SD 001 は磁北より西側にふれ、埋土は灰色土を主体とし粘性が高い。001 については一部掘り下げを行ったが、時期は不明である。トレンチ中央部分では削平の結果できあがつたわずかな高まり（標高 9 m）が残り、ここでは土坑・ピットを確認した。003 は 1.4 m × 1 m の平面隅丸方形を呈し、深さは 30cm で床面は平坦である。埋土は暗褐色土と黄褐色土のブロック状混合土で、西側 1/3 を掘削したが出土遺物はなく時期不明である。なお、004 も同様の埋土である。東半分は現状で 35 m × 20 m の窪地内にかかる。ここでは工場ガラ直下で鳥栖ロームが露出している。遺構面は重機の爪跡で大きく傷んでいるが、解体時の掘り込みはなかった。遺構はピットが少數確認できるのみである。

T 3

T 2 の東側延長に東西方向に設定した。幅 3.3 m、長さ 15 m、掘削面積 49.5 m² である。東端部では表土・耕作土直下の標高 9.6 m で遺構面の鳥栖ロームが露出するが、遺構は確認していない。T 2 で述べた窪地にあわせて、1.2 m ほど遺構面が切り落とされている。トレンチ北壁では段落ちに沿って褐色土が堆積しており、この窪地も工場建設以前に形成されたものと考えられる。段落ちより西側（窪地内）では表土直下で鳥栖ロームが露出し、標高は 8.4 ~ 8.6 m を測る。遺構は段落ちの法

尻からほぼ真北に向く溝 S D 005・006・007 を検出し、幅 1 m ほど掘り下げる。中世前半代の青磁等が出土している。

T 4

対象地北半部、市道沿いに東西方向に設定した。西端には工場の基礎による搅乱が多く認められる。全体に表土直下（標高 9.5 m 前後）で遺構面の鳥栖ローム層となるが、東端では現況すでにローム層が露出している。幅 3 m、長さ 77.5 m、掘削面積 242 m²である。検出遺構は溝・土坑・堅穴住居跡・ビットで、埋土は黒色・暗褐色が主体となる。S D 027・028 は幅 6 m 程で二列並行する溝であり、道路状遺構の指摘がなされている。また、S D 027 の延長部分は T 1 でも確認されている。全体に削平により遺構の残存状態は不良であるが、東端部分ではビットが密集しており、密度は濃い。

T 5

対象地東側に設定した南北トレーナーである。幅 3 m、長さ 24 m、掘削面積 72 m²である。表土直下（南端標高 9.7 m、中央部標高 8.8 m）で鳥栖ローム層を確認している。南側の高位部分では遺構は検出していない。北側では 025・026 の 2 条の溝を確認した。025 からは唐津焼が出土し、北側に蛇行するようである。また 026 は 025 に切られ、T 6 検出の溝 014 につながるものと考えられる。現代の用排水路には重なっている。

T 6

北半の東端高位部に設定した東西トレーナーである。幅 2 m、長さ 16 m、掘削面積 40 m²を測る。旧耕作土状の灰褐色土上層に練炭ガラまじりの盛土が行われている。現状では周囲から高くなっているが、これはすべて練炭工場に伴う盛土によるものである。遺構面は現地表から 70 cm ほど下位の鳥栖ローム上面で、標高 8.7 m 前後ではほぼ平坦となる。このあたりは全体に工場解体時の搅乱が多く認められる。遺構は T 5 026 の延長と考えられる溝 014（埋土は八女粘土ブロックまじりにふい赤褐色土：近世以降）を検出するのみである。

T 7

北半部北東隅の一段下がった部分に設定する。幅 1.2 m、長さ 21 m、掘削面積 25.2 m²を測る。表土直下の標高 8.95 m（南側）～8.6 m（北側）で遺構面の鳥栖ロームを検出する。旧表土は失われており、削平が進んでいるものと考えられる。検出遺構はビット 2 基である。また T 7 西側の高位部分（T 8 の東側）の地表面には多くの上器片が散布しており、表土直下で遺構が検出できるものと考えられる。

T 8

北側に設定した東西トレーナーである。幅 2.7 m、長さ 40 m、掘削面積 108 m²を測る。東側 2/3 は全体が大きな搅乱となっている。周辺は工場内の大型機材が設置されていた場所と考えられ、解体時に大きく掘り下げるが行われている。西側には褐色土（旧耕作土）が残り、現地表下 60 cm ほどの標高 9 m で、鳥栖ローム層を確認する。西側は一段下がった標高 8.6 m ほどとなり、この直上には旧水田土状の灰色耕作土が堆積しており、工場建設以前の造成であることがわかる。溝・ビット等を確認している。

T 9

北端部分に南北方向に設定したトレーナーである。幅 3 m、長さ 12.5 m、掘削面積 37.5 m²である。現地表面から 90 cm の褐色土下で鳥栖ローム上面にいたる。標高は北端 8.2 m、南端 8.4 m で、北側にわずかに傾斜している。溝・ビットを検出するが、多くは中世と考えられる褐色埋土のものである。遺存状態は良好で、密度は濃い。

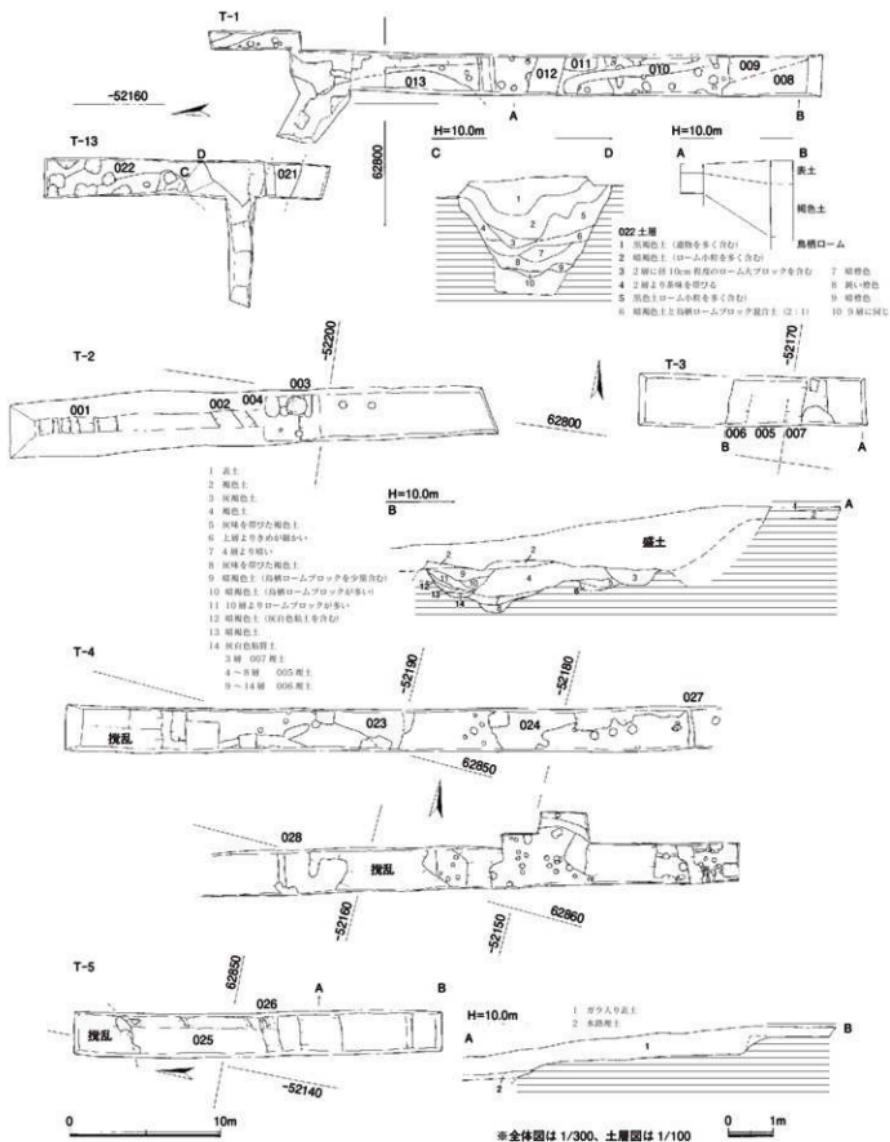


Fig.5 第97次調査トレンチ全体図及び土層図1 (1/300、1/100)

T 10

北端西側の高所から東西方向に設定したトレンチである。幅3m、長さ19.5m、掘削面積58.5m²である。高位部は灰褐色土（ロームブロックを含む）、暗褐色土除去後の標高9.4m（現地表下60～80cm）で遺構面の鳥栖ロームを検出し、ピットを確認している。東側の段落ち下では遺構面標高は8.4m（表土下90cm）で、016～018の3条の溝を検出した。埋土より中世以降の掘削・埋没と考えられる。なお、埋土には流水を示す堆積は認められない。

T 11

T 10の西側、高所部分に設定した南北トレンチである。幅3m、長さ15m、掘削面積45m²である。旧家屋に伴う搅乱部分については掘り下げを行っていない。厚さ60cmの褐色土を除去した標高9.6mで鳥栖ロームの遺構面を確認する。暗褐色土～黒褐色土の広がり（019・020）を確認するが、ともに平面的な境界が不明瞭で、くぼみに堆積したものと考えられる。出土遺物には弥生時代～古代までのものが含まれており、比較的多くの遺物を包含している。またこの上面から褐色土埋土のピット（中世）が掘り込まれている。

T 12

T 11の南側に設定し、幅1.3m、長さ14m、掘削面積25.7m²を測る。調査以前にこの周辺で弥生時代に属する甕棺の破片が採集されており、当初から甕棺墓群の存在が想定されていた。表土直下30cmの標高9.4mで遺構面の鳥栖ローム層を確認する。検出遺構は群集する甕棺墓群と考えられ、そのうちの1基を部分的に掘り下げたところ、中期後半の甕棺（015）を確認した。墓坑埋土はロームブロック混じりの暗褐色土で、トレンチ内で10基程度を確認している。

T 13

T 1の西側に設定したT字状のトレンチである。掘削面積は50.5m²である。表土直下15cmの標高9.7mで鳥栖ロームを確認する。南北両側で溝状遺構を確認した。部分的な掘り下げを行った結果とともに弥生時代中期後半に位置付けられる遺物が出土した。調査時にはそれぞれの溝の関連が不明なままであったが、第114次調査の結果古墳の周溝と弥生時代の溝が切りあっていたことが判明した。

（3）小結

今回の対象地においては、全面に練炭工場・倉庫が建設されていたことから、大きな削平・搅乱が想定されていたが、確認調査の結果、部分的には搅乱が認められるものの、工場以前の耕作土層と考えられる褐色土層が広い範囲で残っており、昭和初期作成地図との比較からも、工場建設に伴う地形変化は最小限にとどまったものと考えられ、地下げの多くは昭和初期の段階には既に行われていたものと考えられる。とはいえた直下で遺構面である鳥栖ロームが露出する部分では、特に工場建設・解体に伴う遺構面の傷みが進行しており、今回の調査のみでは遺構分布等に不明瞭な点も多い。

遺構は弥生時代～近世に位置付けられるものが確認されている。削平が進んでいるためであろうか、掘削が深い溝状遺構が目立ち、竪穴住居跡・ピットなどは失われているものも多いと考えられる。現状ではT 12周辺の甕棺墓群、T 1・13周辺の溝状遺構・ピット群、T 9のピット群、T 4周辺の遺構群、T 7西側の土器片散布部分、T 11及び北側の高所部分等が比較的遺存状態の良好な地点と考えられる。

なお、今回の確認調査結果と公園の設計計画をすり合わせることによって、第114次調査が行われているが、確認調査結果と本調査の成果において齟齬をきたす点については、本調査である第114次調査の結果を正とされたい。

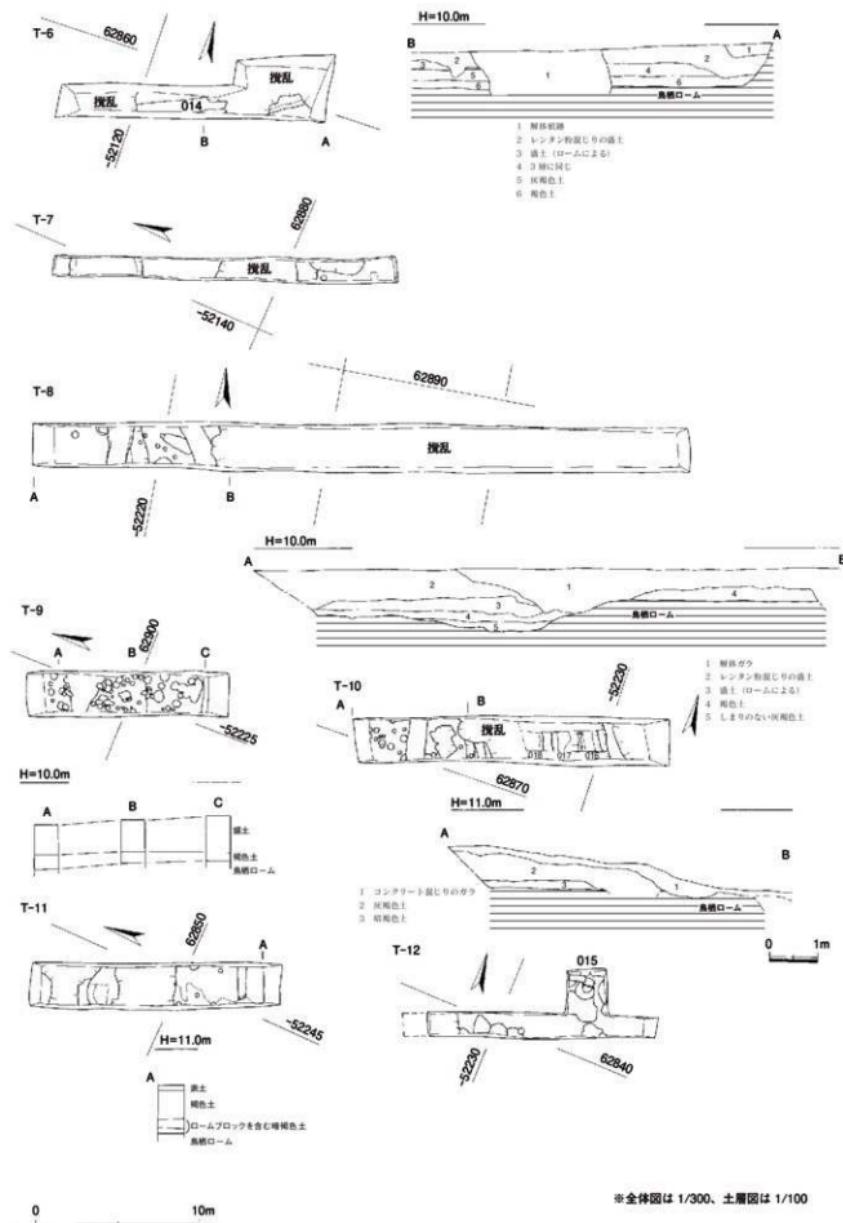


Fig.6 第97次調査トレンチ全体図及び土層図2 (1/300、1/100)



PH.1 対象地東側調査前状況（西から）



PH.2 T1（北から）



PH.3 T13（北から）



PH.4 T13 SD022 トレンチ東壁土層



PH.5 T3（西から）



PH.6 T4（西から）



PH.7 T5（北から）



PH.8 T6（西から）



PH.9 T7 (南から)



PH.10 T8 (西から)



PH.11 T9 (南から)



PH.12 T10 (西から)



PH.13 T11 (南から)



PH.14 T12 K015 (西から)



PH.15 T12 (東から)

第四章 第 114 次調査の記録

1. 発掘調査の方法と経過

試掘調査の結果、申請地のほぼ全域で遺構が確認されたが、公園をバリアフリー構造にするため盛土がありできず、結局、対象地の 1/2 強が調査対象となった。ただし、調査の結果、新聞報道されるような重要遺構が多数確認されたため、極力遺構を破壊しないよう工事が実施され、調査した遺構の多くが地下に保存されることになった。

発掘調査は平成 18 (2006) 年 6 月 29 日に重機による 1 区の表土剥ぎと条件整備に着手し、7 月 10 日より作業員を投入して遺構検出を開始した。諸般の事情から発掘作業員の数が不足したため新規採用により補充を図ったが、折からの悪天候もあって開始から調査が大きく遅延した。このため、手の空いた埋蔵文化財課職員が作業員を伴って応援に加わり、また 12 月からは新規採用の職員 1 名が担当として加わり、複数体制で現場にあつた。

調査期間中には、中学生を対象とする職場体験学習（キャリア・スタート・ウィーク）として、10 月 27 日～31 日の 3 日間に福岡市立友泉中学校 2 年生 4 名、平成 19 年 1 月 30 日～2 月 1 日の 3 日間に同平尾中学校 2 年生 2 名を受け入れた。調査終盤の 3 月 7 日には古墳時代前期道路遺構をメインとする記者発表（投げ込み）を行い、合わせて 3 月 10 日に現地説明会を実施、約 200 名の参加があった。3 月 31 日に埋め戻しを含めた全ての作業を終了した。

遺構実測の基準線は公園建設課が設定した 10 m 方眼杭を用い、後に『博多区・南区内（那珂～井戸地区）遺跡基準点測量委託 四級基準点測量成果簿（平成 6 年 2 月）』の成果を利用して国土座標（第 II 系）上に位置付けた。標高は公園建設課が設定した B. M. を使用した。

2. 発掘調査の概要 Fig.8・9

発掘調査前の現況は練炭工場が撤去された荒無地である。一部には工場のコンクリート壠が残っており、上下水道やガス管とともに調査中の 10 月に撤去工事が行われた。敷地面積は 13,466.44m²で、公園建設により破壊を受ける部分のみを対象として 7,752m²を調査した。コンクリート壠や道路、あるいは排土の関係から調査区を 6 区画に分けて調査した。1 区は中央にコンクリート壠が残っており、この撤去が調査期間中にずれ込んだため東西に分けた。2 区は 1 区と道路を挟んだ南側で、排土処理の関係から 4 区と東西に二分した。南西に対象外区域があり、不整な形状をなす。3 区は敷地東辺の南北に長い区画で、南北端で 4・5 区と一部が重複する。4 区は敷地南東の一角で、平面形状は南へ突出する凸状をなす。5 区は擁壁建設にかかる申請地北端を帯状に東西に長く調査した。

遺構面の標高は高いところで 10 m 程度。調査区の中央部では遺構面が地表に露出し、東西は深く表土が 1 m を超えるところもある。調査区内には近世水路が縱横～斜めに走り、東西両端は大きく削られて 1 m 程の段となって落ちており、段下には遺構がほとんど残らない。2 m を超えるような深くて大きな攪乱（工場地下室か）が多数あって、破壊を免れた部分でも遺構面の削平が顕著である。また、井戸には 4 m を超えるような深いものが多く、一部は壁面崩落による危険回避のため重機による断ち割りを行った。調査期間の不足から中世溝の一部は重機により掘削した。

1 区は対象地中央を境にして西半と東半に分かれる。前者を先行して調査した。1 区内には近世水路が斜めに走り、大きな攪乱が多数あって遺構の残りが悪い。検出遺構は、弥生時代の竪穴住居 2・井戸 3・木棺墓 1・覆棺墓 15（中期後半）・祭祀土坑 2・古墳時代前期の前方後方形周溝墓 1・道路遺構（溝）1・古墳時代後期の掘立柱建物 2・溝 1・奈良時代の溝 1 の他、時期不詳の立柱遺構 1・

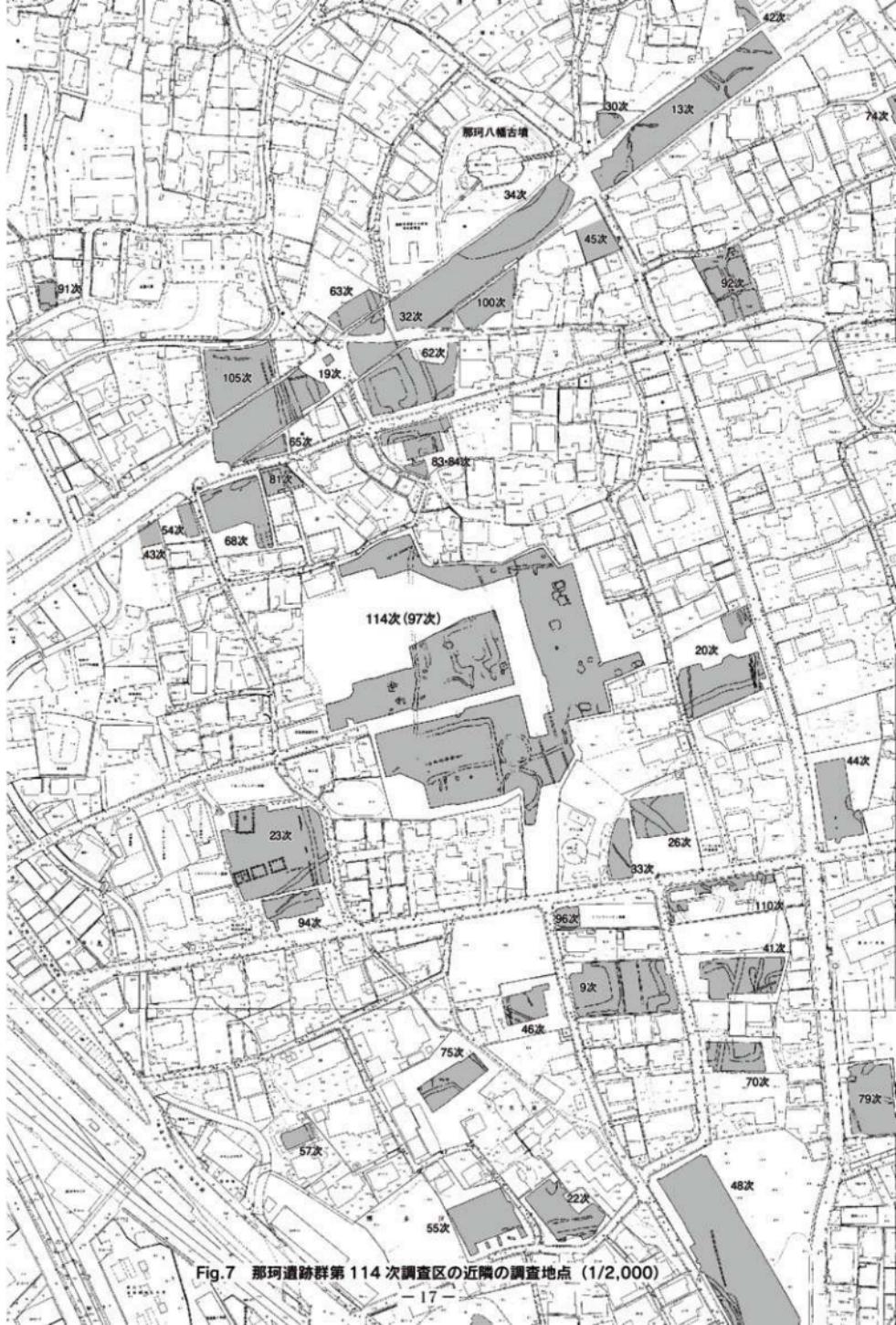


Fig.7 那珂遺跡群第114次調査区の近隣の調査地点 (1/2,000)

土坑多数である。近世水路から甕棺片が多数出土しており、破壊された甕棺墓が多いと推定される。

2区は西側が近世の開田により削平され1mほど落ちる。中央部には工場による巨大な搅乱坑があり、その南側一帯は激しく削平され遺構がほとんどない。検出遺構は弥生時代の甕棺墓4・大溝1(SD-2030)・井戸1・木棺墓1・古墳時代後期の区画溝(SD-2020・2040)・柱列1(SB-2070)・布掘り状の不明遺構1(SX-2080)・井戸1・奈良時代の溝2・井戸1、中世の井戸4の他、時期不詳の土坑・柱穴多数がある。SD-2030は中央部では底まで削平されている。

3区は工場による大きな搅乱があり、南半は近世水路が東西に走る。北東側は開田により段落ちし、北端は地形が自然に落ちる。弥生時代の掘立柱建物3・竪穴住居3・井戸2、古墳時代前期の竪穴住居1、同後期の掘立柱建物3・竪穴住居7・溝2、古代の溝1・井戸1、中世の井戸5、多数の柱穴の他、時期不明だが古墳周溝の可能性のある遺構1(SX-3059・3060)がある。

4区は西半に近世水路が南北に走り、遺構は主に東半で検出した。弥生時代の大溝1(2区からの続き)、古墳時代前期の並列溝2、円形周溝墓2、古墳時代後期の区画溝(2区からの続き)、古代の竪穴遺構2、土坑・柱穴多数のほか、近世墓地が営まれていた。

5区は地形が北に下って遺構面レベルが他より低く、表土が厚いため搅乱が少ない。古墳時代前期の並列溝2、古代～中世の掘立柱建物1・溝2・井戸1を検出したが、遺構の大半は柱穴である。

出土した遺物は、調査終了時点でコンテナ382箱に達した。特筆すべきものに青銅器鋳型がある。

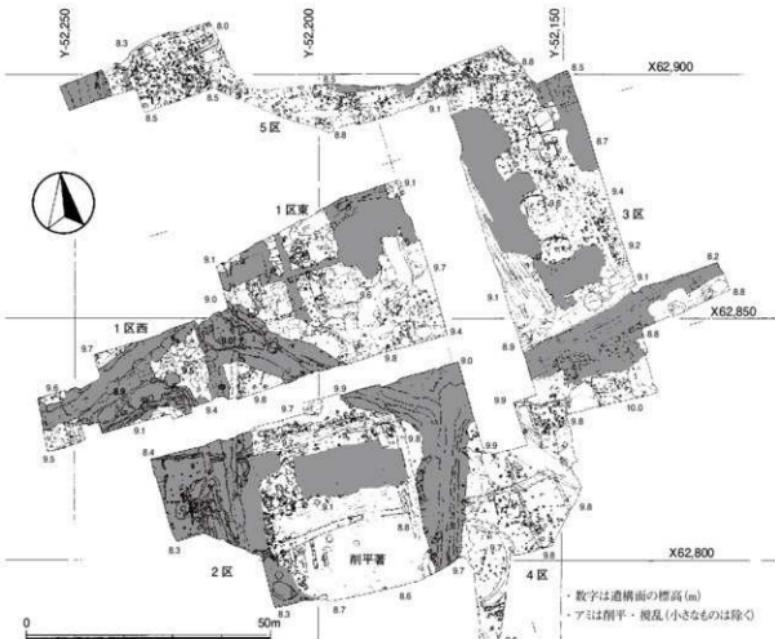


Fig.8 第114次調査 近世以降の削平・搅乱と遺構面の標高(1/1,000)



Fig. 9 那珂遺跡群第114次調査 調査区と主な遺構の配置 (1/500)

3. 検出遺構と出土遺物

(1) 柱列・掘立柱建物 (SA・SB)

掘立柱建物 SB-1032 Fig.10, PL.5

1区西端部に検出した1間×1間の南北に長い建物で、主軸方位は磁北にはば等しく、南北長365cm、東西長205cmを測る。柱穴は円～楕円形プランで径50～80cm、深さ30～75cmである。柱痕跡は認められない。柱穴覆土は黒色粘質土である。

SB-1032 出土遺物 Fig.11

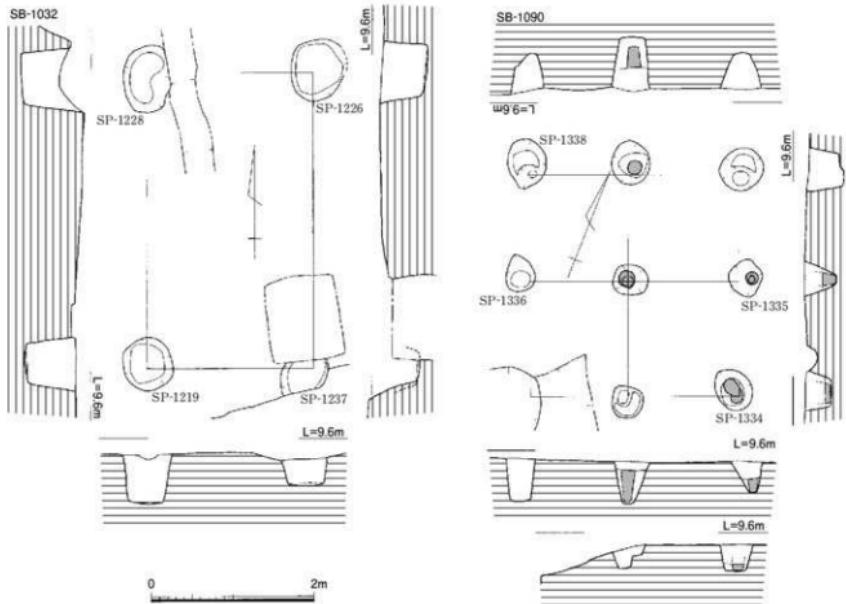


Fig.10 掘立柱建物 SB-1032・1090 実測図 (1/60)

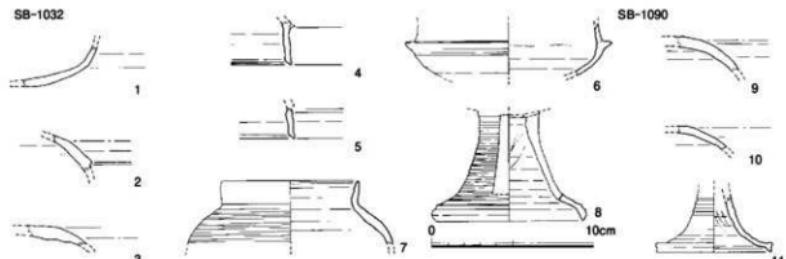


Fig.11 SB-1032・1090 出土遺物実測図 (1/3)

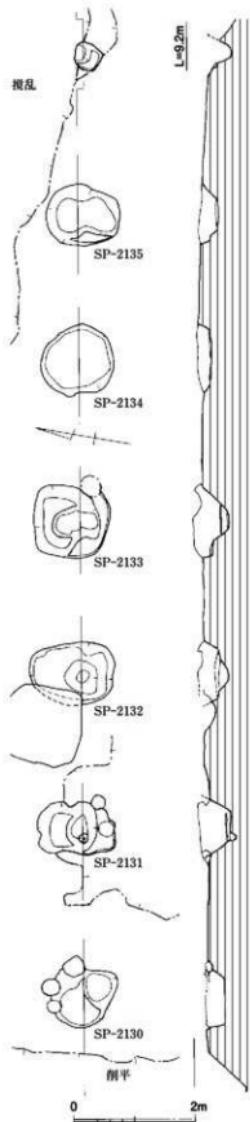


Fig.12 掘立柱建物 SB-2070 実測図 (1/80)

1は土師器の坏か。磨滅した小片のため図の傾きは不確実。2は須恵器蓋で、天井部と口縁の境に段を持つ。3は須恵器蓋坏の小片で蓋か身か不明。4・5は須恵器蓋で、小片のため図の傾きは不確実。天井部と口縁の境に段を有し、口縁端部には段が付く。6は須恵器坏身で、口縁端部を欠く。蓋受け立ち上がりの内傾は少ない。7は須恵器小並で、肩部にカキ目を施す。8は須恵器高坏の脚で、長台形透孔が四方に入る。外面カキ目調整である。

九州須恵器編年のⅡ期に相当し、6世紀前半頃の建物か。

掘立柱建物 SB-1090 Fig.10, PL.5

1区南東隅に検出した2間×2間の総柱建物で、主軸方位は磁北から21°西偏し、南北にやや長い。南北隅の柱穴は擾乱坑により失う。南北柱間は北から129cm、145cmで、全長274cm。東西柱間は東から137cm、119cmで、全長256cm。柱穴は円～楕円形プランで径40～60cm、深さ30～70cm。4本の柱穴に柱痕跡が認められる。柱穴覆土は黒色粘質土である。

SB-1090 出土遺物 Fig.11

9・10は須恵器蓋坏の小片で、蓋として図示したが不確実。共にSP-1334出土。11は須恵器小型高坏の脚部である。外面に沈線4条を回し、内外にシボリ痕が残る。

古墳時代後期の遺構であろう。

掘立柱建物 SB-2070 Fig.12

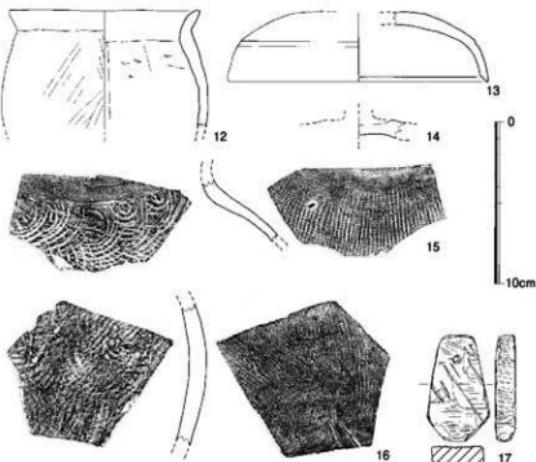


Fig.13 SB-2070 出土遺物実測図 (1/3)

2区中央部に検出した。東西方向に同じ規模の柱穴が6つ並び、東端に小規模の柱穴ひとつが軸線上に乗る。東西の延長部分は削平や攪乱坑により失われており、全長は不明。北側に相対する柱列が存在した可能性があるが、工場地下施設のもとみられる攪乱坑のために遺構面が大きく損なわれており確認できない。主軸方位は磁北から 80° 東偏する。柱間は東から268cm、237cm、269cm、254cm、252cm、260cm、全長1,540cmで、平均約257cm。柱穴は円ないし隅丸方形プランで、東端の柱穴を除き長径120~140cm、短径90~110cm。深さは20~60cmで削平により残りが悪い。柱穴断面形は逆台形をなし、5つの柱穴が二段掘りとなる。柱痕跡は認められない。覆土は黒色粘質土である。

SB-2070 出土遺物 Fig.13

12は小型の土師器甕で、内面ヘラ削り。13は須恵器蓋で、外面沈線で口縁を区分し、口縁内端に段の痕跡がある。Ⅲ a期。14は鉢が取れた須恵器蓋として図化したが、小片のため確証がない。15・16は須恵器甕で外面擬格子タタキ。16は内外にスリ消しを一部加える。17は滑石製の垂飾か。蛇紋岩の成分が混じる。

古墳時代後期だが詳細時期不明。

掘立柱建物 SB-3030 Fig.14

SB-3030

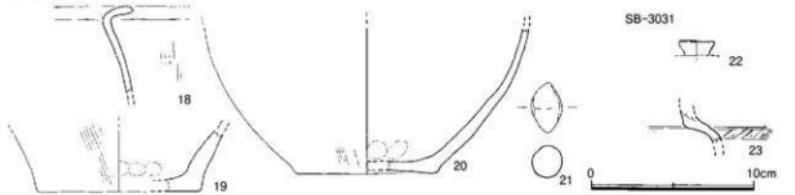


Fig.14 掘立柱建物 SB-3030・3031 実測図 (1/60)

Fig.15 SB-3030・3031 出土遺物実測図 (1/3)

3区北端部に検出した。基盤土が北へ傾斜する斜面に位置するが、柱穴基底のレベルは揃っている。1間×2間の南北棟に復元したが、周囲には柱穴が密集しており、特に建物北西部には同規模・同土質の柱穴2個があり、東西棟に復元される可能性を残す。主軸方位は磁北から37°東偏し、柱間は北から263cm、195cmで南北長458cm。東西長255cm。柱穴は円～楕円形プランで径40～70cm、深さ50～60cm。柱痕跡は認められない。柱穴覆土は黒色粘質土である。

SB-3030出土遺物 Fig.15

18は弥生土器甌の口縁部小片で、丸く屈曲して開く。外面刷毛目調整。19は弥生土器甌の底部片で平底。外面継刷毛目で内底に指押さえ痕が残る。20は壺で、底部外面を継刷毛目、内面を指押さえ後ナテ調整か。21は土製投弾である。

弥生時代中期末頃の建物か。

据立柱建物 SB-3031 Fig.14

3区SB-3030の南東に7m離れる。柱穴規模・土質とも周囲の柱穴と差異が大きく、容易に建物を復元しうる。1×2間の東西棟で、主軸方位は磁北から70°東偏し、柱間は東から241cm、238cmではほぼ等間。東西全長479cm、南北長290cm。柱穴プランは楕円～隅丸方形で径45～70cm、深さ20～50cm。4つの柱穴で柱痕跡が確認でき、径15～18cm。柱穴覆土は黒色粘質土である。

SB-3031出土遺物 Fig.15

22は土師器蓋の宝珠状鉢のみが残ったもの。23は須恵器甌で、肩部外面に沈線1条と列点文が巡る。とともにSP-3103出土。

古代の建物であろう。

据立柱建物 SB-3032 Fig.16

3区SB-3031の南西に接し、これに切られる。柱穴規模が周囲の柱穴より一回り大きく、1×1間の建物に復元した。東西にやや長く、主軸方位は磁北から78°西偏する。東西長249cm、南北長224cm。柱穴プランは円、楕円、隅丸方形で径40～50cm、深さ

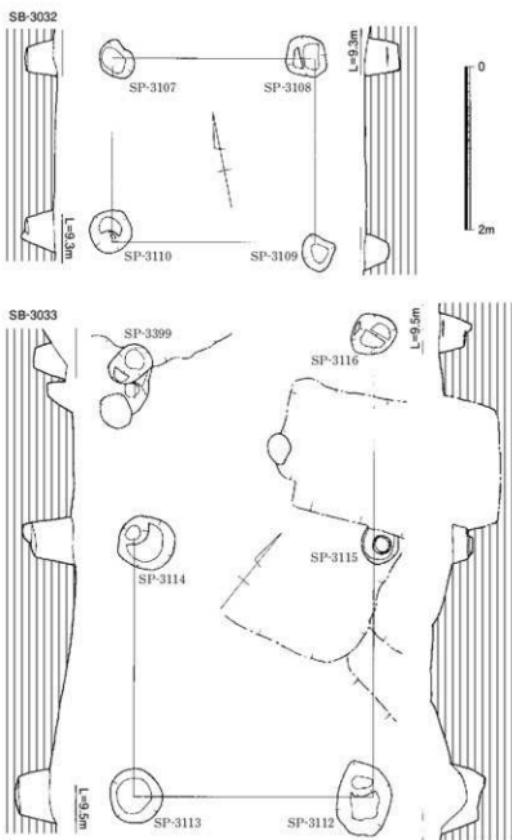


Fig.16 据立柱建物 SB-3032・3033 実測図 (1/60)

30~45cm。柱痕跡はない。柱穴覆土は黒色粘質土である。

柱穴からは土器小片が出土したが、図化できるものはない。須恵器が含まれないので古墳時代前期以前の建物と考えておきたい。

掘立柱建物 SB-3033 Fig.16

3区SB-3032の南に3m離れる。柱穴規模が周囲の柱穴より一回り以上大きい。1間×2間の建物で、今回検出した建物では大型の部類に入ろう。南北方向に長く、主軸方位は磁北から39°西偏する。柱間は北から238cm、310cmで、南北全長548cm。東西長は294cm。柱穴プランは円~楕円形で、径40~90cm。削平や攪乱のため柱穴の深さにばらつきがあるが、基底のレベルはほぼ揃っており、50~70cm程度の深さとみて大過ない。柱痕跡は確認できない。柱穴覆土は黒色粘質土である。

図化できないが須恵器窓の小片1点が出土しており、古墳時代後期以降の建物であろう。

掘立柱建物 SB-3034 Fig.17、PL.5

3区SB-3033の東に5m離れる。等規模の柱穴が南北に3つ並び、東側が大きく削平されている。柱列の東側に展開する1×2間の建物と考えられる。主軸方位は磁北から20°西偏し、柱間は北から190cm、182cmでほぼ等間である。南北全長372cm。柱穴プランは隅丸方形で径55~73cm、深さ50~60cm。中央の柱穴で柱痕跡を確認でき、柱径20cm。柱穴覆土は土層図に示した通りである。

SB-3034 出土遺物

Fig.18

24は弥生土器窓か。磨滅した小片で、口縁が外反して開き、端部が肥厚する。25は弥生土器窓の底部小片で平底。磨滅が著しい。26は器台と思われるが、小片で天地不明。指押さえ痕が残る。

おそらく弥生時代後期頃の建物と考えられるが、詳細時期は不明である。

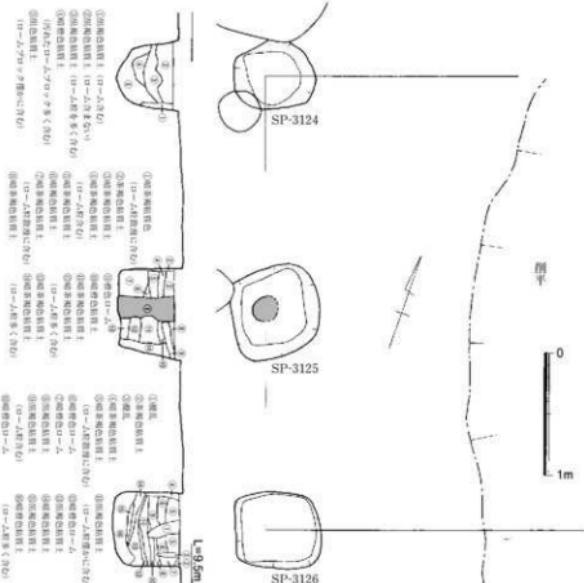


Fig.17 掘立柱建物 SB-3034 実測図 (1/40)



Fig.18 SB-3034 出土遺物実測図 (1/3)

掘立柱建物 SB-3035 Fig.19

3区北半中央のやや北よりに位置する。東西に長い 2×3 間の建物に復元したが、柱穴配置はややいびつである。東西に擾乱坑があり、西の妻柱は飛んでいると考えられる。主軸方位は磁北から 78° 東偏する。桁行の柱間は東から186cm、185cm、156cmで、全長は527cm。梁行の柱間は北から121cm、127cmで、全長は248cmである。柱穴プランは円、梢円、隅丸方形で径25～48cm、深さ10～50cm。柱痕跡は確認できない。柱穴覆土は黒色粘質土である。

SB-3035出土遺物 Fig.20

27は上師器甕の小片で、口縁部が緩く屈曲して開く。器面が磨滅するが外面綫の刷毛目調整、内面ヘラ削りと思われる。

古代の造構であろう。

掘立柱建物 SB-3036

Fig.19

3区中央部の東壁際に検出した。2間×2間の総柱建物と考えられる。北側は擾乱坑により妻柱が失われている。主軸方位は磁北から 4° 東偏しており、真北に近い。柱間は北から202cm、197cmで、南北全長399cm。東から191cm、171cmで、東西全長362cm。柱穴プランは円ないし梢円形で径35～60cm、深さ25～70cmで東側の柱列の残りが悪い。

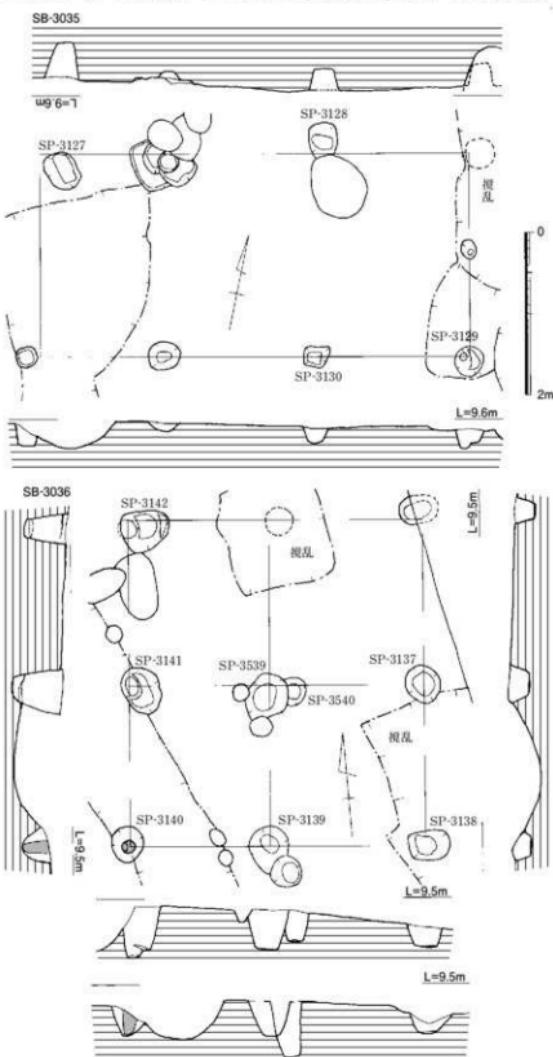


Fig.19 掘立柱建物 SB-3035・3036 実測図 (1/60)

南西隅の柱穴で径 15cm の柱痕跡を確認した。柱穴覆土は暗褐色粘質土である。

SB-3036 出土遺物 Fig.20

28・29 は須恵器蓋の小片で、口縁端部は丸い。30 は土師器高杯あるいは小型器台の脚であろうか。磨滅が著しく調整痕は残らない。31 は土師質の板状の土製品で、上面は刷毛目後ナデか。下面是磨滅が著しい。平瓦に似るが、大型の器の一部と思われる。

古墳時代後期～古代の建物とみられるが、詳細時期は不明である。

掘立柱建物 SB-5050 Fig.21、PL.5

5 区の北端部に検出した。2 間×5 間以上の東西に長い建物で、東側は調査区外に伸びる。柱穴規模が周囲の柱穴より一回り大きく、覆土が均質であるため、建物復元が容易である。主軸方位は磁北から 72° 東偏する。桁行柱間は東から 169cm、162cm、145cm、166cm で、桁行全長 7m 以上となる。梁行柱間は北から 124cm、138cm で、梁行全長 262cm である。柱穴プランは円形をなすものが大半で、径 35～60cm、深さ 30～50cm である。柱痕跡は認められなかった。柱穴覆土は黒色粘質土で、南側に建物と並行して伸びる溝 SD-5024 も建物柱穴と同質の覆土であることから同時期の溝である可能性が考えられる。

須恵器小片などが出土したが國化できるものはない。同時期とみられる溝 SD-5024 は切り合い関係から古代以前の遺構と考えられる。

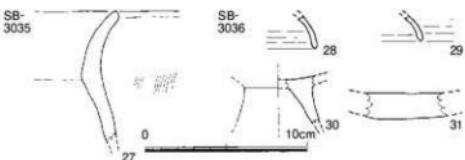


Fig.20 SB-3035・3036 出土遺物実測図 (1/3)

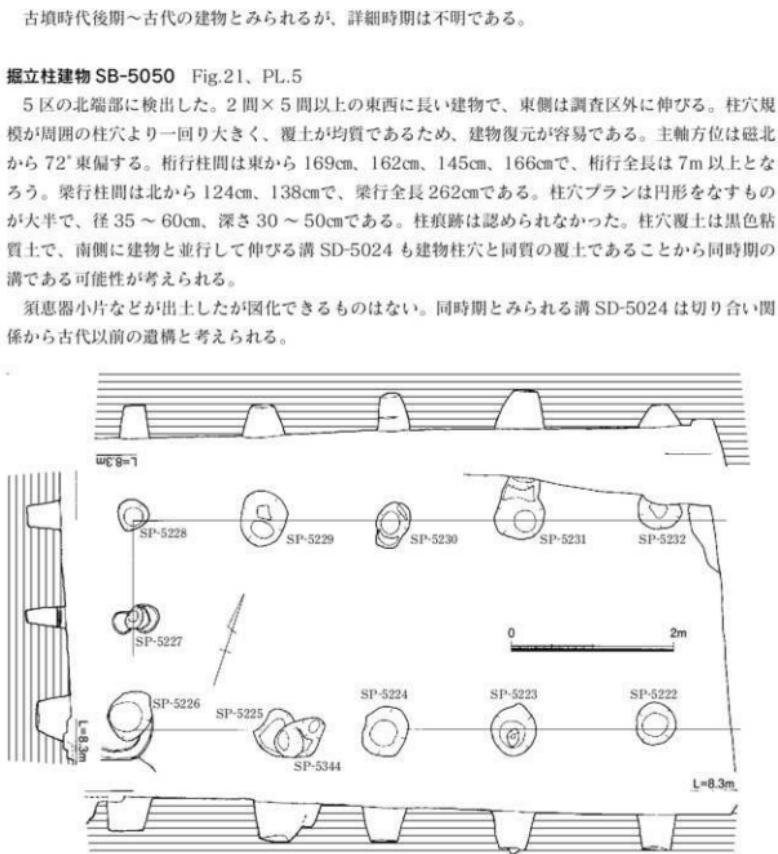


Fig.21 掘立柱建物 SB-5050 実測図 (1/60)

(2) 壁穴住居 (SC)

壁穴住居は20軒を確認したが、住居とするに疑問のある遺構も含んでいる。

壁穴住居 SC-1026 Fig.22

I区西半部の北隅に検出した。近世溝と調査区壁の間にあり、覆土の一部が残った壁穴住居と考えたが確証はない。深さは15~30cmほどで、床面は東へ緩く下り、主柱穴は認められない。東端の深い土坑は住居に先行する遺構である。覆土は黒色粘質土で、弥生土器がまとまって出土している。

SC-1026 出土遺物 Fig.23

弥生土器、須恵器、中国産陶磁器（龍泉窯系青磁）が出土した。

32~37は弥生土器甕で、口縁が「く」字形に外反するが、頸部内面の稜は丸みを持つか不明瞭である。胴部外面縦刷毛目、内面ナデ調整で、口縁横ナデ。38も弥生土器甕で頸部内面が明瞭な稜をなし、外面に三角形突帯を貼付する。39・40は弥生土器甕、41~43は壺の底部小片で、いずれも磨滅が著しい。44は弥生土器短頸壺の口縁部小片で、口縁上面から焼成前に穿孔する。磨滅が著しい。

45は須恵器环身の小片で、蓋受けの立ち上がりは低く内傾する。46は須恵器高环で、脚部に透孔が入る。ヘラ状の工具により、内外とも平滑に仕上げる。

須恵器2点は5cm角以内の小片で、龍泉窯系青磁とともに近世溝から混入したと考えられる。また、下層遺構であるSK-1028から遊離した土器が含まれている。弥生時代中期末頃の遺構であろう。

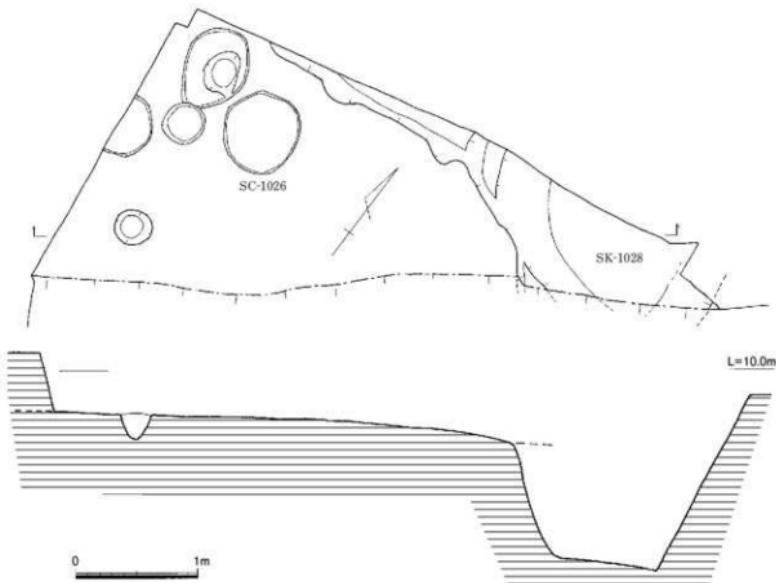


Fig.22 壁穴住居 SC-1026 実測図 (1/40)

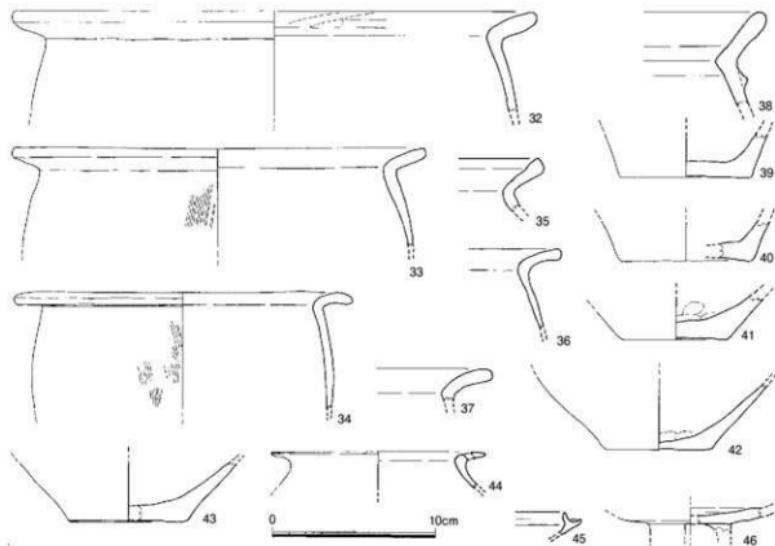


Fig. 23 SC-1026 出土遺物実測図 (1/3)

竪穴住居 SC-1056 Fig.24

1区中央部の北壁際に位置する。東側と西側を擾乱坑に破壊され帶状に残った遺構面に、住居南壁と北壁のそれぞれの立ち上がりと思われる直線的な掘り込みが東西に伸びている。南北壁の間は4.2~4.4 mを測る。底面の北側に幅1.5 m、高さ5cm弱の高まり、南側に幅1 m弱、高さ15 cmほどの高まりがあり、ベッド状遺構ないし住居の切り合いの可能性が考えられる。南東隅に深さ約20 cmのピットがひとつあるが、他に床面には何らの遺構も認められない。床面までの深さは30 cmほどで、覆土は暗褐色粘質土である。

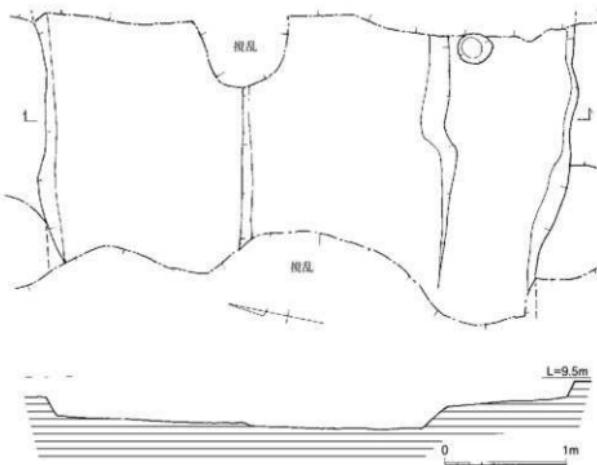


Fig. 24 竪穴住居 SC-1056 実測図 (1/40)

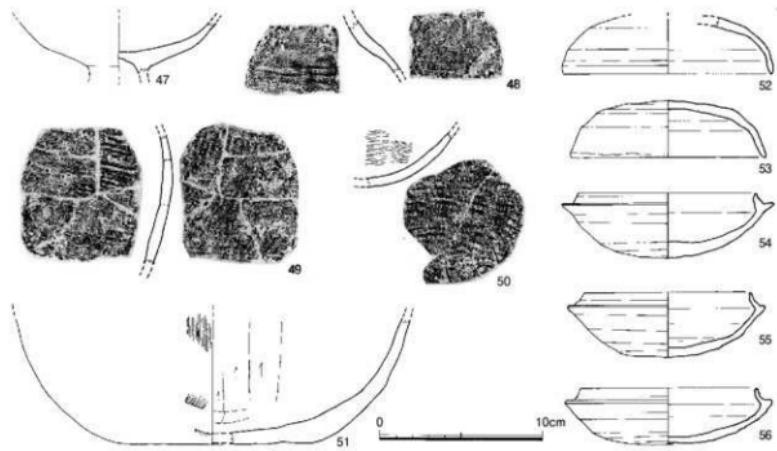


Fig. 25 SC-1056 出土遺物実測図 (1/3)

SC-1056 出土遺物 Fig. 25

弥生土器、土師器、須恵器がコンテナ 1/3 箱出土した。

47 は土師器高环で、磨滅が著しい。48～50 はいわゆる赤焼土器の甕で、外面に擬格子タタキ、内面に平行線の當て具痕がある。48・49 は同一個体か。50 は内面に刷毛目を加える。いずれも焼成不良。51 は土師器甕の底部片で、外面縦刷毛目、内面へラ削り調整だが磨滅が著しい。

52・53 は須恵器蓋である。天井部は丸く、口縁との境は不明瞭で、口縁端部は丸い。復元口径は 12.8cm、12.0cm。54～56 は須恵器環身で、蓋受けの立ち上がりは低く内傾する。いずれも外底にへラ記号がある。52～56 のロクロ回転はいずれも時計回りで、55 を除き外面に回転へラ削りを加える。

古墳時代後期、九州須恵器編年の中 b 期、7 世紀初頭頃の遺構であろう。

竪穴住居 SC-1073 Fig. 26, PL.5

1 区南東隅付近に検出した。円形プランの竪穴住居とみられるが、南西部分を除き、他は削平や攢乱、古墳周溝により破壊されている。南西部分は深さ 20cm ほど覆土が残り、弧を描くプランから径 6.4m 前後の円形住居と推定される。壁際には幅 60cm ほどのベッド状の段差が認められる。住居中央部に相当する位置に土坑 SK-1337 があり、その周囲を巡る柱穴のいくつかが主柱穴と見られる。SK-1337 は 70 × 80cm の楕円形プランで深さ 50cm、柱穴は楕円形プランで径 30～80cm、深さは削平等により明瞭でないが 60cm 前後とみられる。住居覆土は黒色粘質土である。

SC-1073 出土遺物 Fig. 27

弥生土器が少量出土した。

57 は弥生土器甕の底部小片で、器面が磨滅剥落する。二次加熱を受けたか。58 は弥生土器壺の肩部小片で、台形突帯を貼付する。胎土精良。小片のため図の傾きは不確実である。59 は弥生土器高环の脚部小片で、器面剥落する。胎土精良で雲母粒を含む。

弥生時代中期末～後期初頭頃の円形住居であろう。

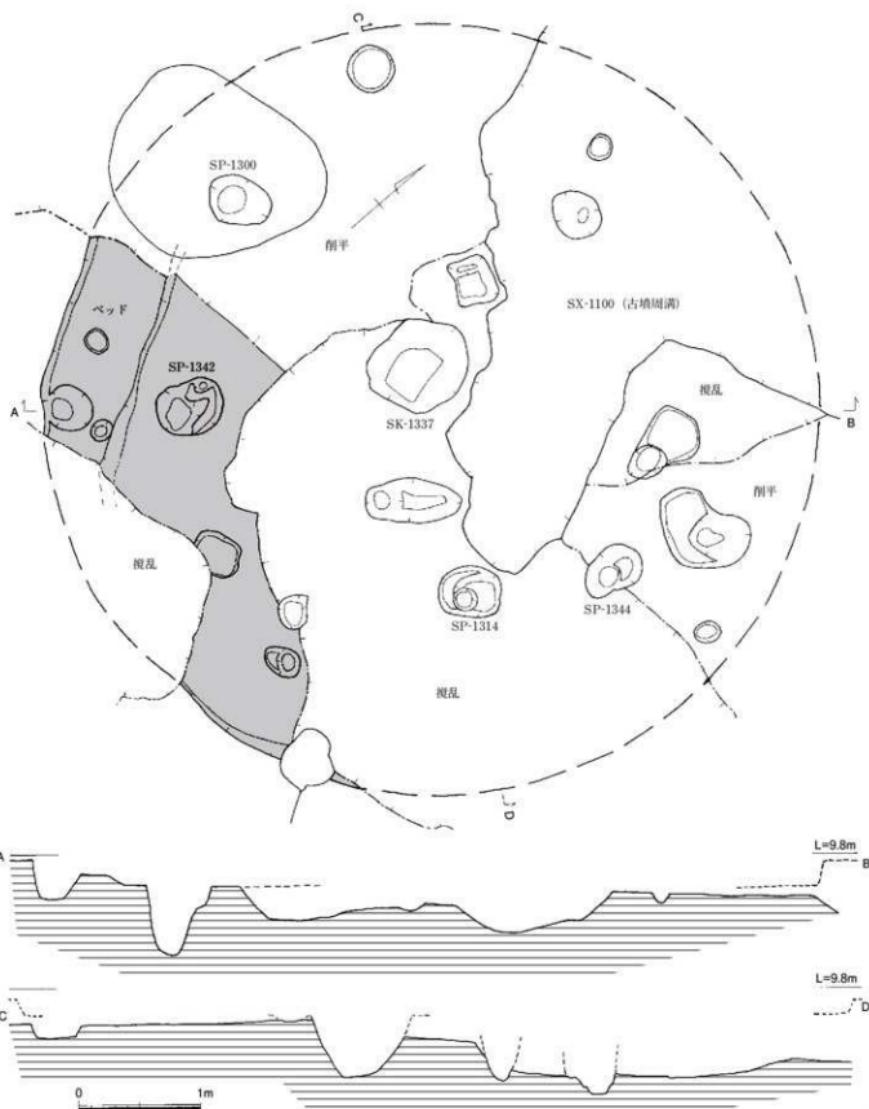


Fig.26 積穴住居 SC-1073 実測図 (1/40)

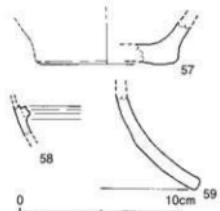


Fig.27 SC-1073
出土遺物実測図 (1/3)

竪穴住居 SC-1079 Fig.28

擾乱に大きく破壊された1区北東隅に僅かに暗褐色粘質土の包含層が残っており、これを掘り下げるに4本の柱穴が現れた。包含層は住居覆土であったと考えられる。調査区北壁土層に高さ10cmほどの住居東壁の立ち上がりが認められるが、古墳時代溝SD-1081と重なるためプランが明確でない。柱穴は平面梢円形で径30~70cm、深さ60~70cm。柱痕跡はない。

SC-1079 出土遺物 Fig.29

土師器、須恵器が少量出土した。

60は土師器楕の小片で磨滅する。61は土師器高杯で調整痕は残らない。

62は赤焼土器甌で、外面に撫格子タタキ、内面に円弧文の當て具痕が残る。

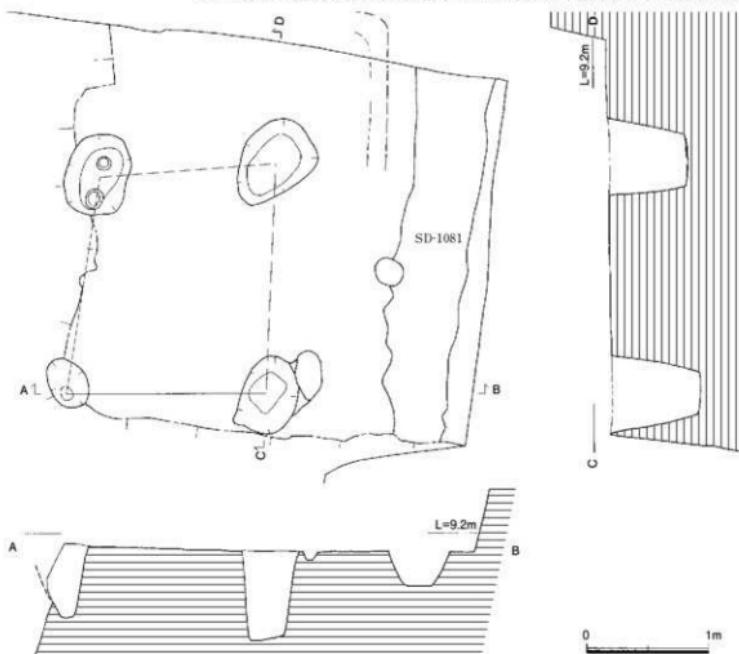


Fig.28 竪穴住居 SC-1079 実測図 (1/40)

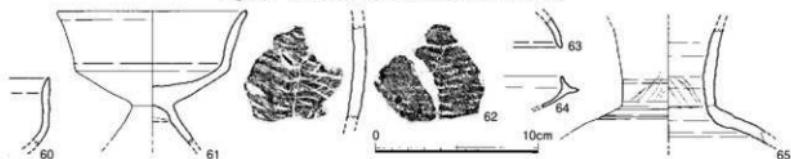


Fig.29 SC-1079 出土遺物実測図 (1/3)

63は須恵器蓋の極く小片で磨滅する。64は須恵器坏身で、蓋受けの立ち上がりは低く内傾する。65は須恵器の長頸壺で、頸部内面に螺旋状のシボリ痕が残る。横ナデで、肩部外面に沈線1条を巡らす。口縁外面に降灰がある。

古墳時代後期、九州須恵器編年のIV b期、7世紀初頭頃の遺構か。

竪穴住居 SC-1101 Fig.30、PL.5

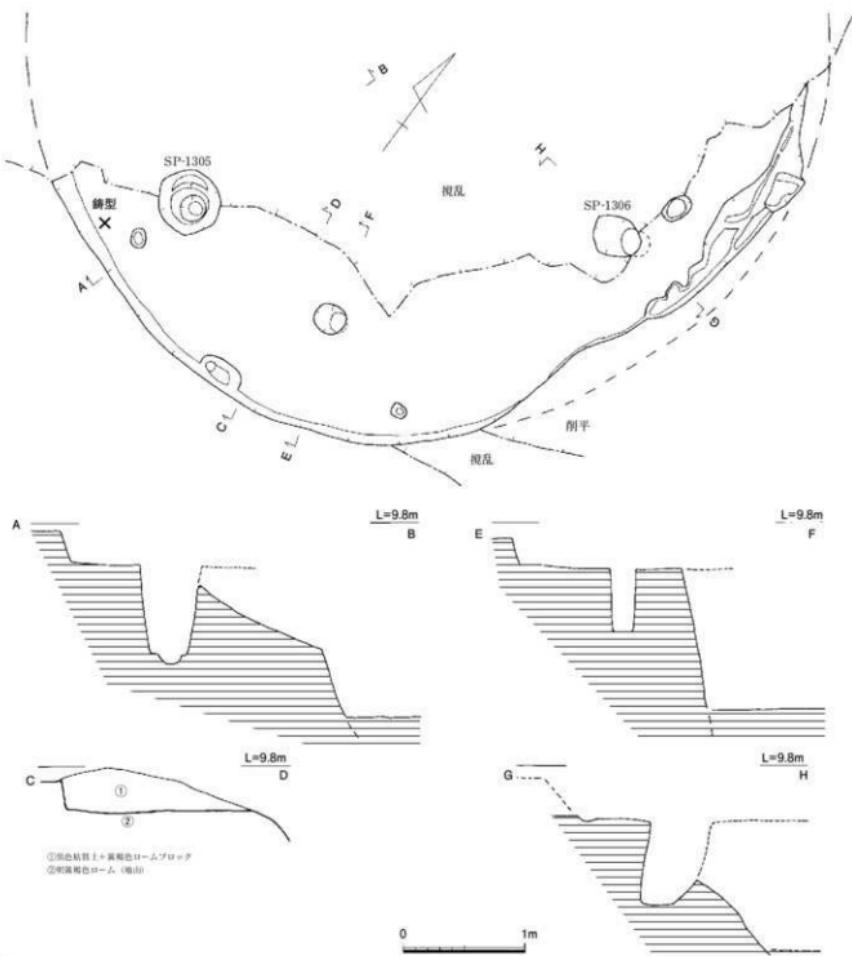


Fig.30 竪穴住居 SC-1101 実測図 (1/40)

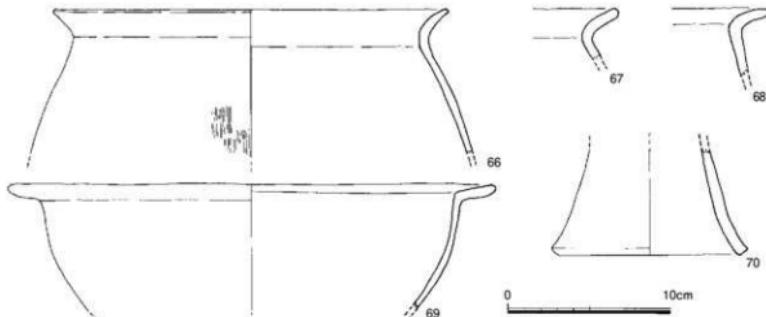


Fig.31 SC-1101 出土遺物実測図 (1/3)

1区東半、円形住居SC-1073の北西に約3m離れて位置する。SC-1073同様、円形プランの住居であるが、南東辺を除き工場地下施設による搅乱により大きく破壊されている。南東辺は深さ20cmほど覆土が残り、弧を描く住居壁の立ち上がりから径6.5mほどの円形プランと推定される。床面の東辺には一部壁溝が巡る。円周に沿って床面に3本の柱穴が巡っており、主柱穴の一部と考えられる。柱穴は円形プランで、径25~50cm、深さ50~80cmを測る。住居覆土は黒色粘質土で地山ロームブロックを含む。平面図の×は青銅器鋳型(202頁-1)の出土位置を示し、他にも覆土から真土型(同-9)が出土した。

SC-1101出土遺物 Fig.31

弥生土器が少量出土した他、青銅器鋳型がある。

66~68は弥生土器甕で、口縁が「く」字形に開くが頸部内面は丸みがある。胴部外面に縱刷毛目を施すが、他は器面が荒れている。69は弥生土器鉢もしくは高壺か。器面剥落するが内面ナデ調整か。70は器台で、極く小片である。

弥生時代中期末頃の住居であろう。

竪穴住居 SC-2051 Fig.32

2区中央部のやや北西寄りに位置する。西へ落ちる段差の間にあり、大きく削平され、北側も搅乱により失う。方形に巡るプランから竪穴住居と想定したが、床面が緩やかに西へ下っており疑問が残る。現状で南北に長く、南北3.6m以上、東西2.5m以上。床面の東辺沿いが一段高く、10cm程の段をなす。床面の南辺に深さ20cm程の不整形土坑が、東辺付近に深さ30cm弱の柱穴ひとつがある。遺構覆土は暗褐色粘質土である。

須恵器小片や土器小片が少量出土したが、固化できない。古墳時代後期以降の遺構であろう。



Fig.32 竪穴住居 SC-2051 実測図 (1/40)

竪穴住居 SC-3001

Fig.33・34, PL.6

3区中央部のやや北寄りで検出した竪穴住居である。南辺中央と東辺の一部は攢乱により失われている。西へやや開く隅丸方形プランを呈しており、南北長4.4~4.1m、東西長4.1mである。造構面の削平が著しく、床面まで最大20cmである。主柱穴は4本であるが、床面では確認できず、全て貼床除去後に検出した。いずれも柱穴は円形プランで、径30~43cm、深さ55~75cmであり、柱痕跡は確認できなかつた。壁際には途切れながら小溝が巡る。西壁の中央に灰白色粘土を用いて造り付けのカマドを設け、カマド内部に粘土製の支脚を据えている。図に濃いアミで示した部分にカマド本体とみられる粘土が残り、薄く示した範囲にはカマドが破壊された粘土が散っている。カマドと対面する東壁中央にも灰白色粘土が薄く広がっている。カマド横断面図に示したように、貼床を切り込む窪みを埋めてカマド粘土を積んでおり、造

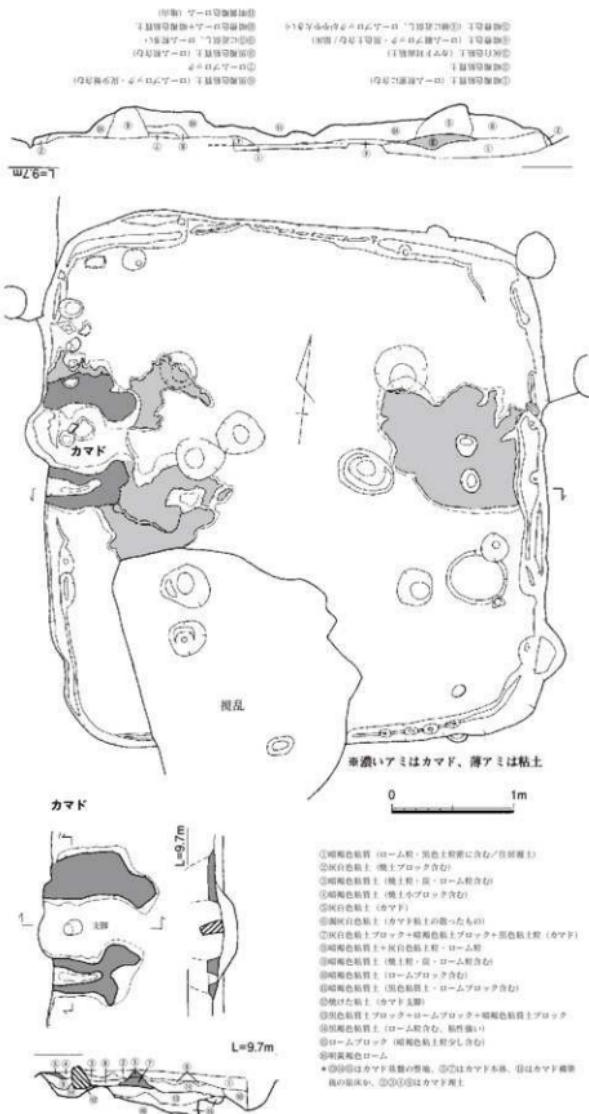


Fig.33 竪穴住居 SC-3001 実測図 (1/40)

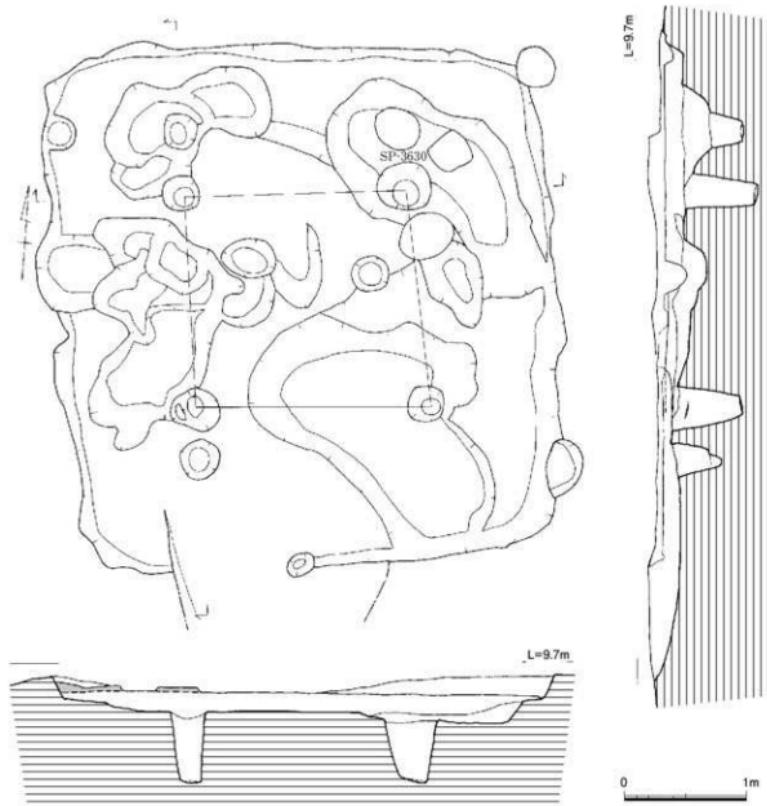


Fig.34 積穴住居SC-3001 貼床除去後の実測図 (1/40)

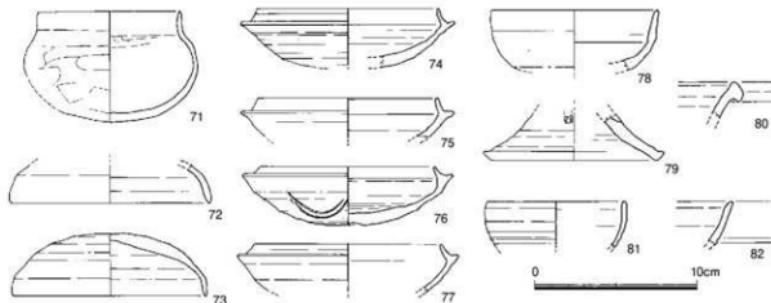


Fig.35 SC-3001 出土遺物実測図 (1/3)

り替えを示すものと考えられる。カマドは住居廃棄時に破壊したのであろう。貼床を除去すると、中央をやや高く掘り残すドーナツ状の掘り込みが現れた。この掘り込みを暗橙色ローム主体の汚れた地山上で厚く埋め戻して床面としている。住居覆土は暗褐色粘質土で、カマドの北側あたりの床面上から須恵器片が多く出土した。

SC-3001 出土遺物 Fig.35

弥生土器、土師器、須恵器がコンテナ 2 箱出土した。

71 は土師器小壺で、磨滅するがヘラミガキ調整であろう。

72・73 は須恵器蓋で口縁端部は丸く、73 は外面の約 1/2 に回転ヘラ削りを加える。復元口径は 12.2cm と 12.0cm。74～77 は須恵器环身で、蓋受けの立ち上がりは低く内傾し端部は丸くおさめる。74・76 には回転ヘラ削りを認めるが、他の 2 点は不明。以上 6 点の蓋環のロクロ回転はいずれも時計回りである。78 は須恵器环もしくは高环であろう。79 は須恵器高环の脚で、上端には透孔が認められる。80 は須恵器壺の口縁。小片で口唇に降灰がある。81・82 は須恵器甌の口縁部片であろう。外面に沈線 1 条を巡らせる。

古墳時代後期、九州須恵器編年 IV 期の竪穴住居である。

竪穴住居 SC-3002 Fig.36・38、PL.7

3 区 SC-3001 の北に 7 m 離れている。隅丸方形プランの竪穴住居で、南辺を除き比較的整った方形をなしている。南端部は下層に別の遺構 (SC-3016) が重複するため、プランが曖昧である。西辺中央と南東隅は攪乱に少し切られる。南北 3.9 m、東西 3.6 m を測る。全体的に削平されており、遺構検出面から床面まで 15cm 程度が残る。主柱穴は 4 本と考えられ、北東と南西の柱穴で柱痕跡を確認した。柱痕跡は貼床上で、柱穴掘方は貼床除去後に検出しており、柱を立てた後に貼床を施したことが分かる。柱穴は円ないし楕円形プランで径 40～60cm、深さ 55～65cm。柱痕跡は径 14cm である。ただし南西隅の柱痕跡は柱穴底面に達しておらず疑問が残る。壁際には途切れながらも小溝が巡る。北壁のやや西寄りに灰白色粘土を用いた造り付けのカマドを設けるが、残りが悪い。図にアミで示した部分はカマド本体と思われる。カマド対面粘土は認められない。貼床の下は住居外周に沿つてドーナツ状に浅い凹凸が多数あり、橙色ロームブロック（地山上）を多く含む暗褐色粘質土で埋め戻して床をならしている。住居覆土は上層が暗褐色粘質土、下層が黒色粘質土である。床面直上から須恵器片が散漫に出土した。

SC-3002 出土遺物 Fig.37

土師器、須恵器、石製品がコンテナ 2 箱出土した。

83 は土師器甌の口縁部小片で、器面が磨滅剥落するが外面刷毛目、内面はヘラ削り調整か。84 は土師器甌の底部片で、磨滅し内面に指押さえ痕が残るのみである。85 は土師器の鉢もしくは甌の底部片であろうか。外面は刷毛目、内面は磨滅するかナデ調整か。86 は土師器椀の小片で、磨滅が著しいか内面にナデ痕を留める。87 は土師器高环の脚であるが、小片で磨滅が著しい。

88 は須恵器蓋の小片で、口縁端部は丸くおさめる。復元口径 10.6cm。89 は須恵器环身で完品である。蓋受けの立ち上がりは短く内傾して端部は丸い。外面の約 1/2 に回転ヘラ削りを施す。88・89 はともにロクロ回転は時計回りである。90 は須恵器甌の口縁部片であろう。口縁内面に降灰がある。91 は同じく甌の胸部片である。外面に沈線 1 条を巡らせる。92 は須恵器高环の脚で低脚。螺旋状のシボリ痕が残り、外面に 6 条以上の沈線を回す。脚内面には 3 本線のヘラ記号がある。

古墳時代後期、九州須恵器編年 IV 期の遺構であろう。

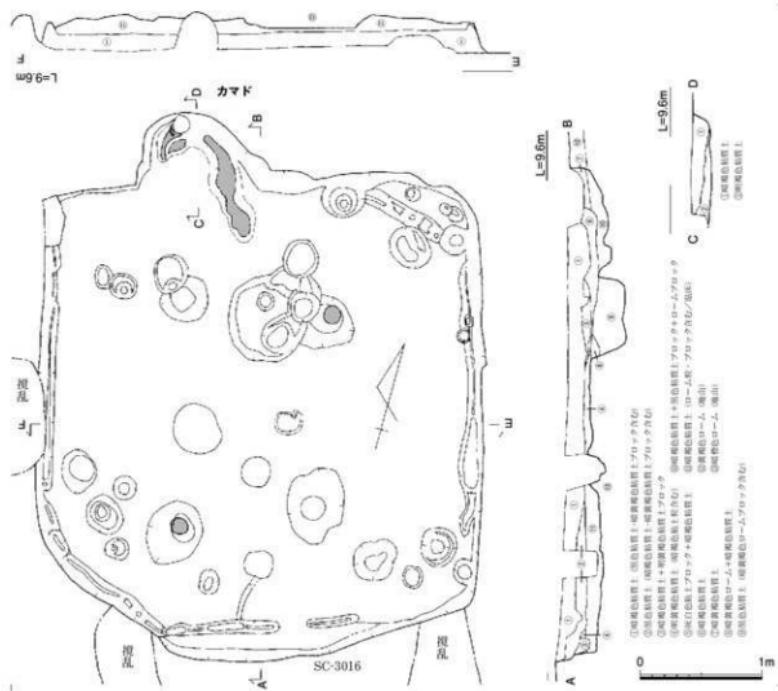


Fig.36 穂穴住居 SC-3002 実測図 (1/40)

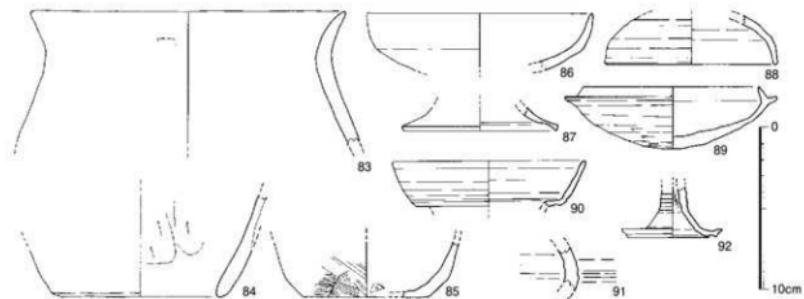


Fig.37 SC-3002 出土遺物 (1/3)

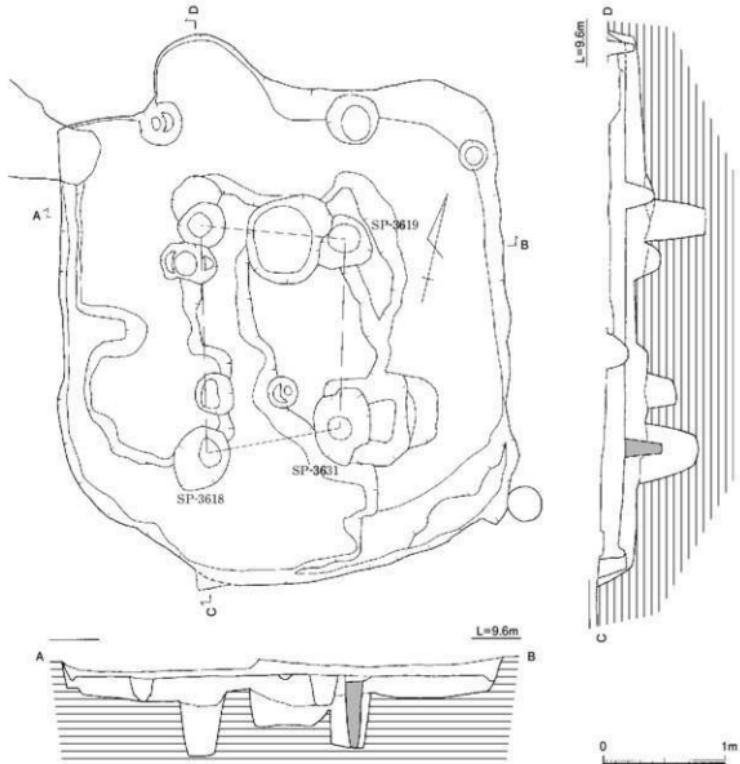


Fig.38 穫穴住居 SC-3002 貼床除去後の実測図 (1/40)

豕穴住居 SC-3003 Fig.39, PL.7

3 区 SC-3002 の北西に重複して検出した豕穴住居で、南東隅を SC-3002 に切られる。西辺の一部を擾乱により失う。やや南へ聞く隅丸方形プランをなし、南北 3.4 m、東西 3.45 m を測る。検出面から床面までは深さ 10cm 未満である。主柱穴は南北に並ぶ 2 本とみられ、貼床下で検出している。柱穴は円形プランで径 35 ~ 40cm、深さ 60 ~ 70cm。柱痕跡は認められない。北壁を除き、途切れながら壁溝が巡る。北壁の東寄りに灰白色粘土を用いて造り付けのカマドを設ける。図に濃いアミで示した部分がカマド本体で、薄アミで示した範囲に破壊された粘土が散っており、住居廃棄時にカマドを破壊したものと考えられる。カマド内には焼土の層が 2 枚認められた。貼床下は住居外周に沿つてドーナツ状に浅い窪みが巡り、ロームブロックを含む暗褐色土で埋め戻されている。住居覆土は暗褐色粘質土である。

SC-3003 出土遺物 Fig.40

土師器、須恵器がコンテナ 1 箱出土した。

93は赤焼土器の甕で、磨滅するが胴外面に平行タタキ痕がある。須恵器の技法で作られ、土師器焼成されている。94も赤焼土器の甕で、底部近くの破片か。外面平行タタキで僅かに木目が浮きだし擬格子気味である。内面は指押さえ後ナテ調整。93と同一個体の可能性がある。95は土師器の碗と思われる。小片のため図の傾きは不確実。調整不明。96・97は土師器の高坏で、脚部小片。97の内面に横ナテ痕を僅かに留める。98は須恵器蓋か。 2×1.5 cm ほどの極小片であり、図の傾きは不確実である。99は須恵器の高环脚片である。

98の須恵器は九州須恵器編年V～VI期だが余りにも小片である。詳細時期は決めがたい。

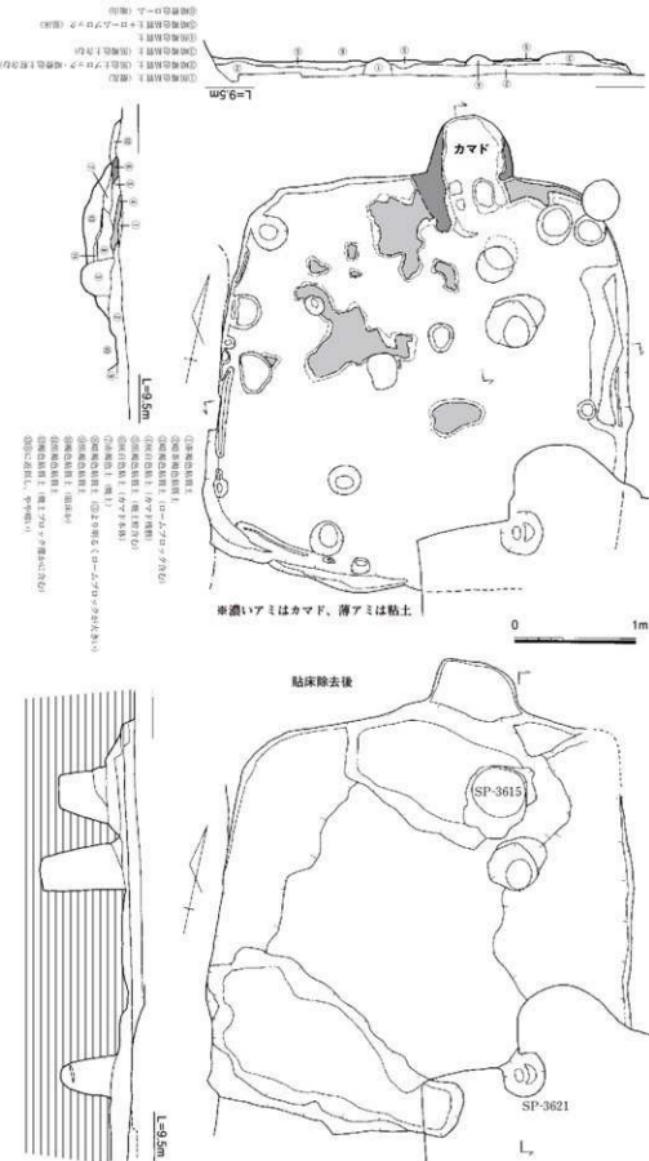


Fig.39 積穴住居 SC-3003 実測図 (1/40)

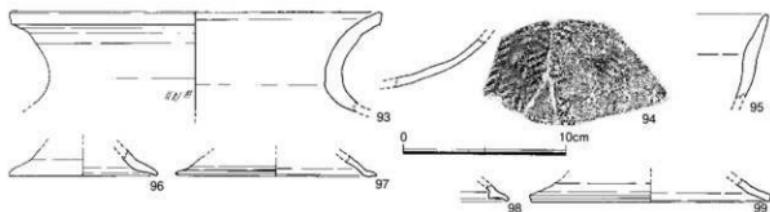


Fig.40 SC-3003 出土遺物実測図 (1/3)

竪穴住居 SC-3004・3006・3007 Fig.41, PL.7

3区SC-3003の北東に隣接して4軒の竪穴住居(SC-3004～3007)が切り合っており、明確に区分できるSC-3005を除いた3軒についてまとめて報告する。SC-3007→SC-3006→SC-3004の順に新しい。

SC-3004は最も後出の遺構で、隅丸長方形プランなし、 $3.4 \times 2.4\text{ m}$ 、 $5 \sim 10\text{cm}$ の覆土が残る。北辺中央が北へ張り出して僅かに粘土が残り、カマドの痕跡とみられる。主柱穴は明らかにしがたい。

SC-3006はSC-3004とほぼ重複し、東西に長い隅丸長方形プランで、やはり覆土は $5 \sim 10\text{cm}$ 程度。北辺に壁溝が巡り、西側に偏ってカマドとみられる赤変した粘土が認められる。SP-3624・SP-3627が主柱穴である可能性が強い。

SC-3007は上記2軒の住居の西側で検出した隅丸方形の住居で、南北 3.4 m 、東西規模は不明である。覆土は 5cm 未満。深さ 13cm の壁溝が全周する。暗黄褐色粘土(汚れた地山ローム)で薄く床を貼っている。5cmほどの段差でSC-3006と区分されるが、主柱穴やカマドの痕跡等が認められず、あるいは1軒の不整プランの住居である可能性も残る。

SC-3004 出土遺物 Fig.42

弥生土器、土師器、須恵器、石製品がコンテナ1箱出土した。

100は土師器壺で、胴内面のヘラ削り以外は磨滅して調整が不明。101は須恵器壺の胴部片で、外面擬格子タタキでヘラ記号があり、内面は同心円文～円弧文の当て具痕が残る。102は須恵器杯で、胴中位に沈線1条を回す。底部は回転ヘラ削りし、「W」のヘラ記号を加える。横ナデ、ヘラ削りとともに時計回りに施す。

SC-3007 出土遺物 Fig.42

弥生土器、土師器、須恵器が少量出土した。

103は須恵器の壺で小片である。外面はタタキをスリ消して帶状にカキ目を入れ、内面は横ナデし当て具痕を完全にスリ消す。104は須恵器壺の胴部小片で、外面擬格子タタキ、内面円弧文当て具痕。

SC-3006からは弥生土器、土師器、須恵器が少量出土したが、図化できるものがない。SC-3004・3006・3007はいずれも古墳時代後期の遺構であり、大きな時期差はないと考えられる。

竪穴住居 SC-3005 Fig.43, PL.7

3区の北東部に検出した隅丸方形プランの竪穴住居である。古墳時代後期の竪穴住居SC-3004・3006・3007が上に重なっている。南北に長く、南北 5.1 m 、東西 3.6 m を測る。遺構検出面から床面まで 30cm を残す。長軸上に並ぶ2本のピットが主柱穴で、他のピットは浅い。主柱穴の平面形は円形で径 45cm 、深さ $70 \sim 80\text{cm}$ 。東壁の中央部に梢円形プランの土坑があり、径 $125 \times 90\text{cm}$ 、深さ 40cm 。住居の南半には壁溝が途切れながら巡る。床面は地山削り出しで、下層遺構に重なる部分には薄く床を貼った可能性がある。炉跡は認められず、焼土等もない。覆土は黒色～黒褐色粘質土

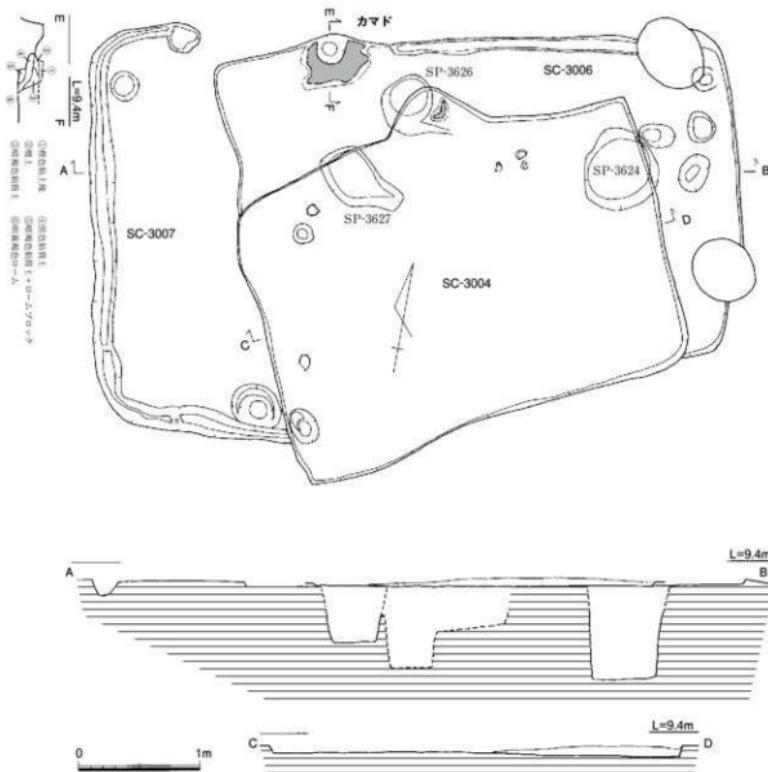


Fig.41 横穴住居 SC-3004・3006・3007 実測図 (1/40)

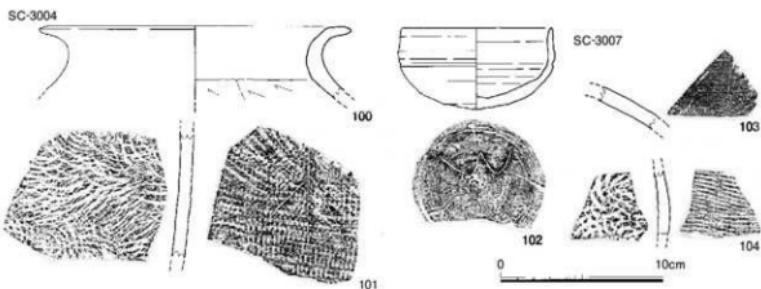


Fig.42 SC-3004・3007 出土遺物実測図 (1/3)

で、床面から 5 ~ 30cm 浮いたレベルから大量の土器が集中して出土した。土器は面が描って南から北に傾斜しており、住居がある程度埋没した段階で投げ入れた一括遺物とみられる。



Fig.43 積穴住居 SC-3005 実測図 (1/40)

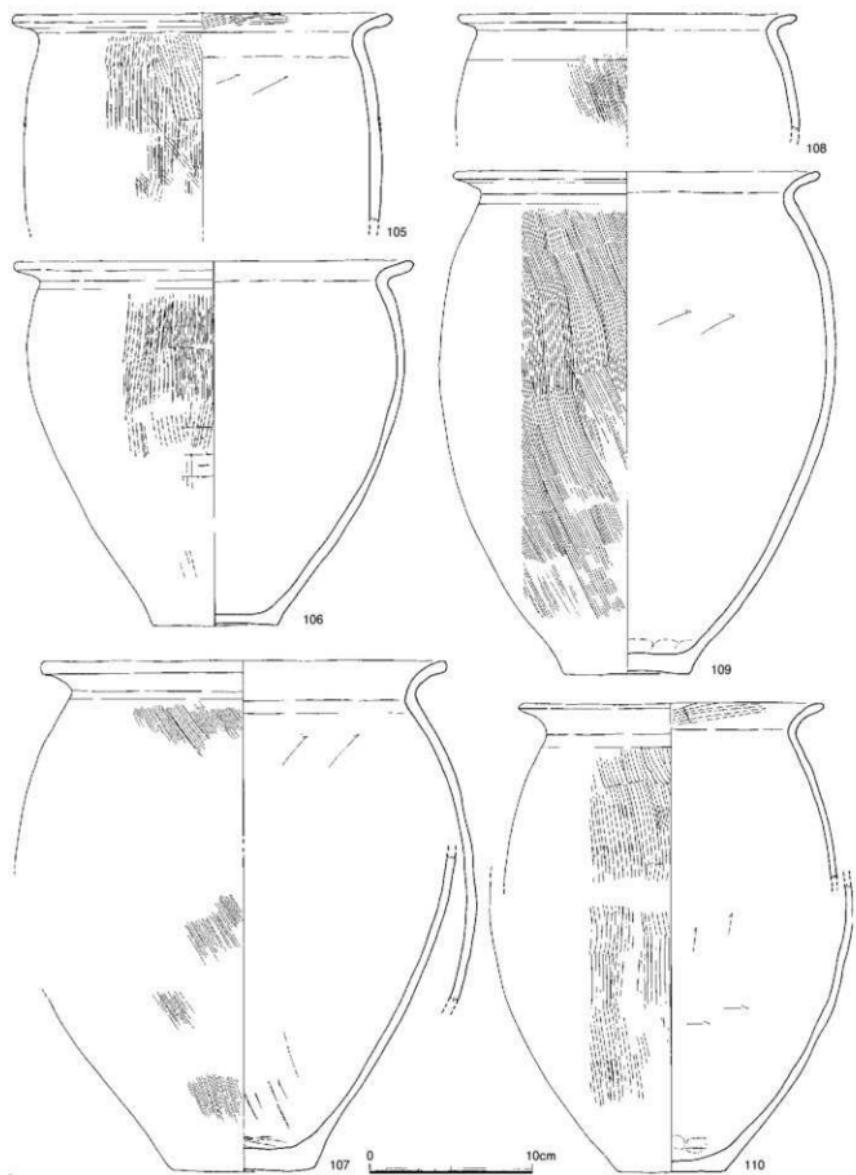


Fig.44 SC-3005 出土遺物実測図 I (1/3)

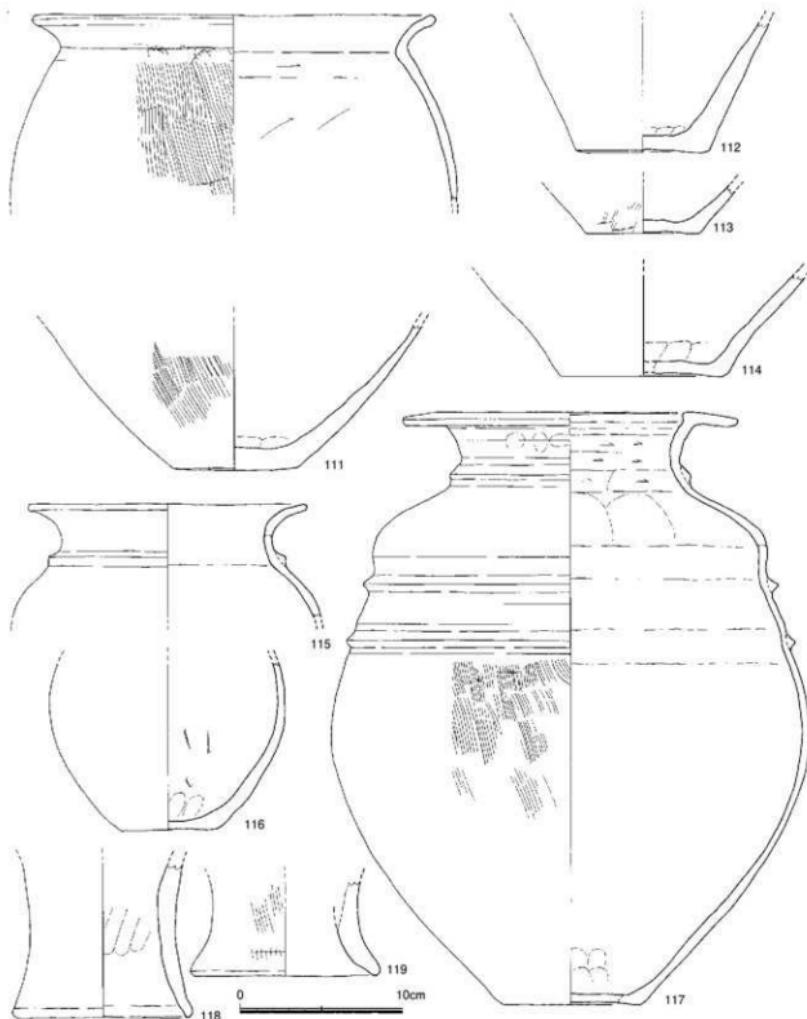


Fig.45 SC-3005 出土遺物実測図Ⅱ (1/3)

SC-3005 出土遺物 Fig.44・45

弥生土器、須恵器、石製品がコンテナ 8 箱出土した。図示した遺物は全て弥生土器である。

105～111 は甕で、107・110・111 は口縁部と底部が接合しないか同一個体とみられる。いずれも口縁が「く」字形をなすが、頸部内面は丸味があり稜が不明瞭である。胴径は 105・106 が口径をや

や下回るが、他は口径を超える張り出す。胴外面刷毛目調整で一部ナデを加える。胴内面は指押さえ後、工具等によるナデ調整。口縁内外横ナデし、105・110・111は口縁内面に横刷毛目を加える。111の外側には煤が付着する。112～114は甕又は壺の底部である。115は壺で、口縁が強く外反して開く。頸部に三角形突帯を貼付する。磨滅が著しいが口縁外面に横刷毛目の痕跡がある。116は壺の胴部から底部の破片で、磨滅が著しいが内面に工具圧痕、内底に指押え痕を残す。117は瓢形壺で、口縁は鋤先形をなす。頸部に1条の、胴部に2条の三角形突帯を貼付する。外面縱刷毛目で、口縁と突帯は横ナデ、肩部外面と口縁上面にヘラミガキを加える。内面は指押さえ後ナデ調整で、口縁内面は工具により削り気味に横ナデする。118・119は器台の一部で、小片のため天地不明。

須恵器小片が混入するが、弥生時代後期前葉までの土器が一括廃棄されており、その直前の住居と考えられる。

竪穴住居 SC-3008 Fig.46

3区のSC-3004～3007の北東に接して検出した竪穴住居である。北～東は大きく削平されており、一部の確認に留まる。現状で隅丸方形プランをなし、東西1.5m、南北1.3mが残る。深さは20cm。壁に沿って深さ5cm強の小溝が巡る。東の攪乱の斜面に柱穴の痕跡をひとつ確認しており、住居に伴う可能性がある。床面は地山削り出しである。覆土は黒色粘質土である。

SC-3008 出土遺物 Fig.48

弥生土器を含む土器小片が少量出土した。

120は古式土師器か。甕又は壺で、器壁は剥落する。121は弥生土器甕の口縁部小片で「く」字形をなす。器面剥落が著しい。122は弥生土器の甕で「く」字形をなすが、やはり器面の剥落が著しい。古墳時代前期頃の遺構と考えられるが、出土遺物が少なく確証はない。

竪穴住居 SC-3014 (5009)・3015 Fig.47

3区の北西隅から5区にかけて検出した遺構である。未調査部分が多い上、周辺はピットが集中して切り合っており不明な部分が多い。SC-3014とSC-5009は一連の遺構で、SC-3015はSC-3014と切り合う遺構とみられるが前後関係は不明である。隅丸方形プランをなし、南北3.4m以上、東西3.1mを測る。検出面から床面まで10～15cmほどが残る。主柱穴等は明らかにしがたい。點

床はない。覆土は黒色粘質土である。小形の竪穴住居とも考えられるが、確証はない。

SC-3014・5009 出土遺物 Fig.48

SC-3015として取り上げた遺物はない。SC-3014・5009からは弥生土器が少量出土した。

123は弥生土器甕の底部か。小片で磨滅する。124は弥生土器壺の底部小片であろう。磨滅するが内面に工具圧痕があり、ナデ調整を加えたと思われる。125・126は弥生土器の器台で、小片で磨滅が著しい。126は被熱して赤変している。

弥生時代の遺構とみられるが、詳細時期は明らかにしがたい。

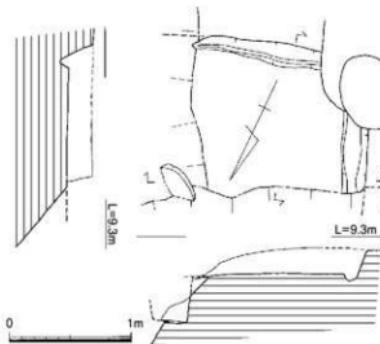


Fig.46 竪穴住居 SC-3008 実測図(1/40)

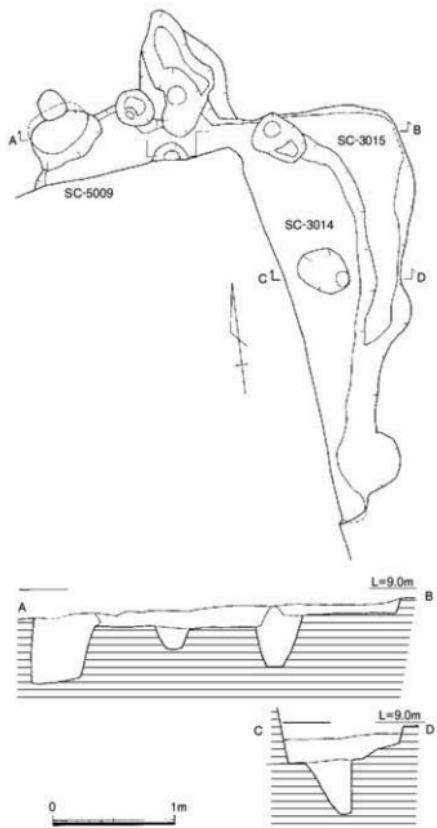


Fig.47 積穴住居 SC-3014(3015・5009) 実測図(1/40)

穴とみられる円形プランのピット二つがあり、西柱穴は径 50cm、深さ 45cm、東柱穴は径 25cm、深さ 35cm と小さい。住居南辺際の床面上には長軸方向に並ぶ土坑状の遺構が 3 つあり、配置から考えて住居に伴う遺構と考えられる。柱穴にしては規模が大きく、隅丸長方形プランをなし、長径 95 ~ 105cm、短径 55 ~ 65cm。深さは 35 ~ 65cm で、中央の土坑のみや浅い。住居の床面は地山削り出して、壁溝が途切れながら巡る。アミで囲示した範囲に炭化物が広がり、炉や土坑の上面を覆っている。焼失家屋の可能性がある。住居覆土は黒色粘質土である。

SC-3050 出土遺物 Fig.50

弥生土器、石製品が少量出土した。

127・128 は弥生土器甌の口縁部小片で、「く」字形をなすが調整不明。127 は頸部に三角形突帯を貼付する。129 は袋状口縁甌の口縁部小片で磨滅する。130 は弥生土器甌の底部で、外面刷毛目、内面指印さえ痕が残る。外底がすり減っている。131 は弥生土器甌の底部小片である。外面ナデ、

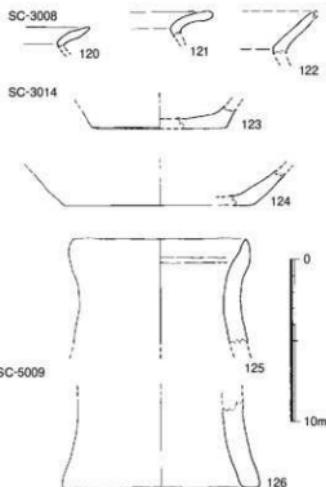


Fig.48 SC-3008・3014・5009
出土遺物実測図 (1/3)

竪穴住居 SC-3050 Fig.49, PL.8

3 区の南端付近に検出した竪穴住居で、南西隅は後出遺構 SX-3059 に切られる。床面直上まで削平を受けており、東半は床面が飛んでいる。東西に長い隅丸方形プランをなすものと考えられ、東西 5.1 m + α、南北 3.3 m を測る。検出面から床面まで 5cm 未満である。住居中央のやや南寄りに径 50cm、深さ 10cm 程の円形の浅い溝みがあり地床炉であろう。炉を挟んで東西に主柱

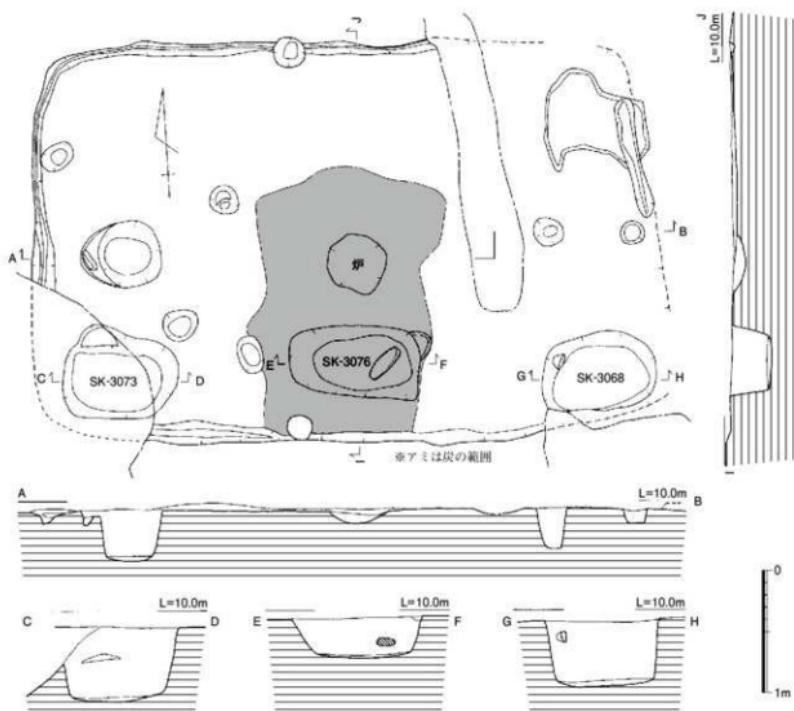


Fig.49 穫穴住居 SC-3050 実測図(1/40)

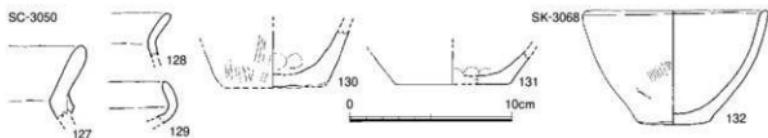


Fig.50 SC-3050・SK-3068 出土遺物実測図(1/3)

内面は剥落する。132は弥生土器の鉢で、口縁の一部を欠くが完存する。外面刷毛目、内面ナテ調整。弥生時代後期の住居であろう。

竪穴住居 SC-4011 Fig.51, PL.8

4区の中央部に検出した。小形の竪穴住居とみられる遺構で、南西隅を搅乱に、南東隅を土坑 SK-4013に切られる。隅丸方形プランを呈し、 3.2×3.3 mで南北に若干長い。検出面から床面まで最大20cmが残る。南辺から西辺にかけて壁溝が巡る。床面中央に東西に並ぶ柱穴が主柱穴とみられる。柱穴は円形プランで径35cmと40cm、深さ70cmと80cmである。柱痕跡は認められない。図にアミで示した部分には灰白色粘土が認められるが、粘土は床面に直に置かれ、最大厚15cmほどの大きなブ

ロックもある。粘土が最も集まる部分には深さ40cmほどの柱穴があるが、粘土の存在から遺構を土器製作跡と推定すれば、この柱穴は回転台を据えた穴と捉えることが可能となる。床は地山削り出しで、遺構覆土は暗黒褐色土を主とする。

SC-4011出土遺物

Fig.54

弥生土器、須恵器が少量出土した。

133は須恵器坏身である。小片のため図の傾きは不確定である。

遺構の切り合い関係から奈良時代の遺構と考えられる。

豊穴住居 SC-4012

Fig.52, PL.8

4区SC-4011の南東に重複し、これに切られる。小形の豊穴遺構で、南辺の一部は擾乱に切られる。隅丸方形プランを呈し、 2.7×2.85 mで僅かに東西に長い。検出面から床面まで30cmが残る。床面の南東隅に壁溝が巡る。主柱穴とみられるものはない。北辺中央に 100×70 cmほどの楕円形の浅い落ち込みがある。床は地山削り出しで、遺構覆土は暗黒褐色土である。

SC-4012出土遺物 Fig.54

弥生土器、土師器が少量出土した。

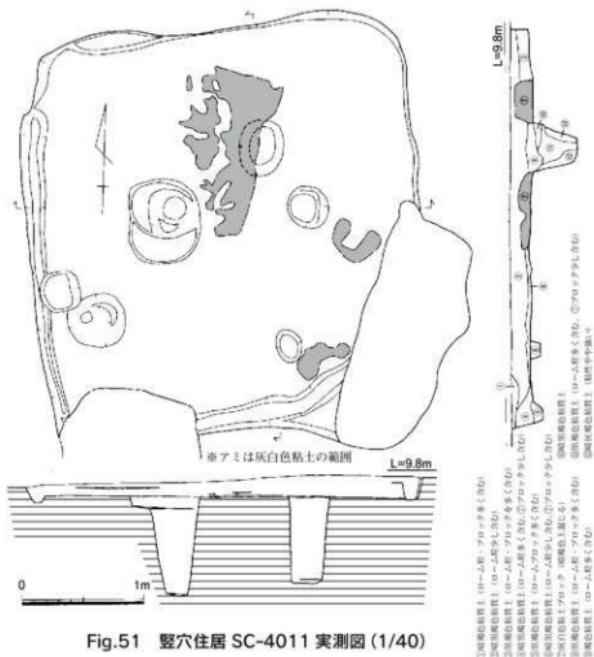


Fig.51 豊穴住居 SC-4011 実測図 (1/40)



Fig.52 豊穴住居 SC-4012 実測図 (1/40)

134は土師器壺である。胸外面細かい縦刷目、内面ヘラ削り調整。口縁内外横ナデか。135は土師器高杯もしくは鉢の小片である。磨滅しもろい。

古代の遺構で、SC-4011に先行しよう。

竪穴住居 SC-5001 Fig.53

5区東端に検出した。遺構の東隅は3区で調査を行い、3021の遺構番号で遺物を取り上げている。小形の竪穴遺構で、隅丸方形プランをなし、 $2.5 \times 2.3\text{m}$ で南北に少し長い。検出面から床面まで20~30cmが残る。東辺を除き床面外周に小溝が巡る。東西南北の中央壁際に柱穴があるが、いずれも浅い。床は地山削り出しで、遺構覆土は暗褐色粘土質である。

SC-5001出土遺物 Fig.54

弥生土器を含む土器小片、須恵器が少量出土した。

136は須恵器壺身の小片である。蓋受けの立ち上がりは短く内傾しており、端部は丸くおさめる。

古墳時代後期の遺構であろう。

(3) 溝 (S D)

溝は14条以上を検出した。弥生時代1、古墳時代前期2、古墳時代後期7以上、奈良時代2、中世2以上である。調査期間の不足から、近世溝は調査対象外とし、中世溝の一部は重機で掘り下げた。近世溝は台地上を灌漑するための水路と考えられ、調査区中央を南から北に流れる本流と、分かれて東と西へ流れる支流とがあり、網の目状に掘り巡らされている。

溝 SD-1040 Fig.55・56、PL.8

1区中央部を南北に縱断する溝である。南側は未調査区を越えて2区まで伸び、段落ちにより削平消滅している。北側は5区で検出したSD-5020・5023がその延伸線上に位置するが、出土遺物には時期差が認められる。やや蛇行するが主軸方位は磁北から 2° ほど東偏する。溝幅1.2~2.0mで、横断面形は逆台形をなし、深さ1.1~1.2m。底面のレベルは1区の中央部で30cmほど低いが南北端ではほとんど差がなく、傾斜がない。ちなみに5区SD-5020底面は1区北端と比較して30cmほど低い。覆土は暗褐色~黒色の粘土質で、自然に埋没しており、水流の痕跡は認められない。

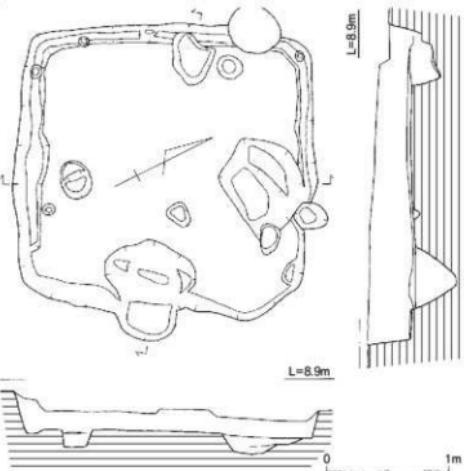


Fig.53 竪穴住居 SC-5001 実測図 (1/40)

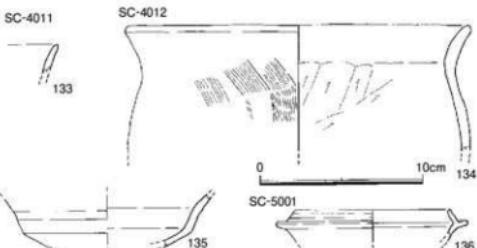


Fig.54 SC-4011・4012・5001 出土遺物実測図 (1/30)

SD-1040 出土遺物 Fig.57・58、PL.28

弥生土器、土師器、須恵器、近世染付（混入品）、瓦、石製品（砥石等）がコンテナ 10 箱出土した。

137・138 は土師器環の小片で磨滅が著しい。139 は土師器の小形土器で、内底に指押え痕が残るが磨滅が著しい。140・141 は土師器甕で外面刷毛目、内面ヘラ削り、口縁横ナテ。142～146 は土

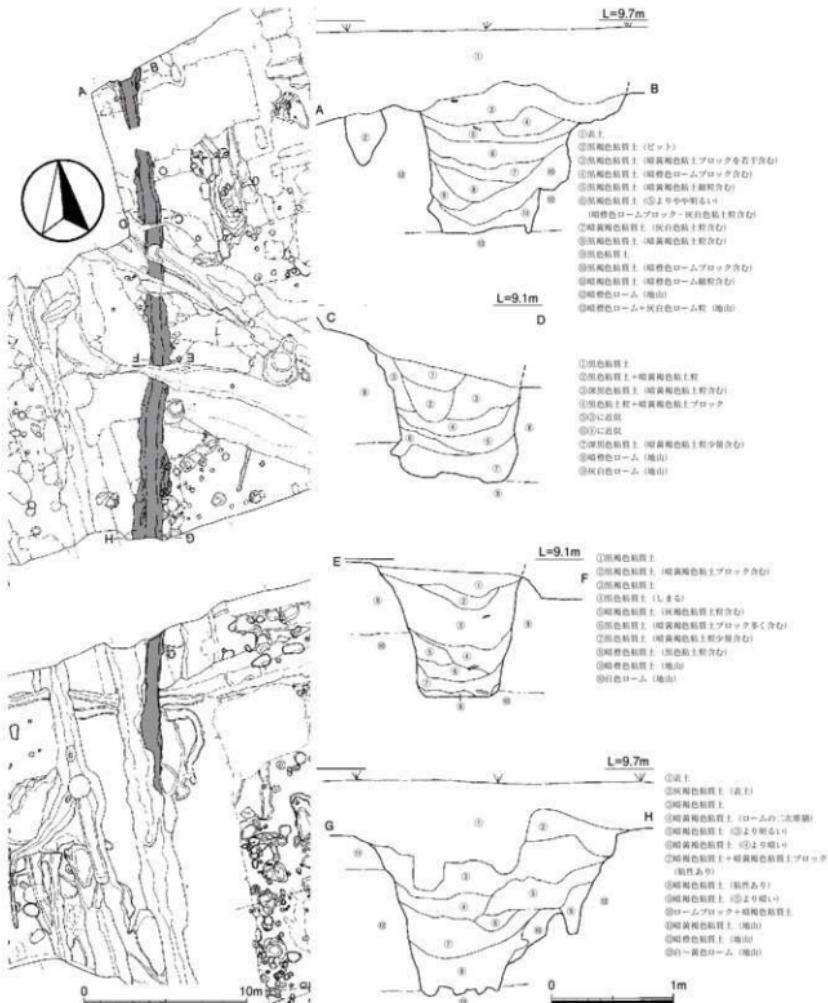


Fig.55 溝 SD-1040 平面図 (1/300)

Fig.56 溝 SD-1040 土層断面実測図 (1/40)

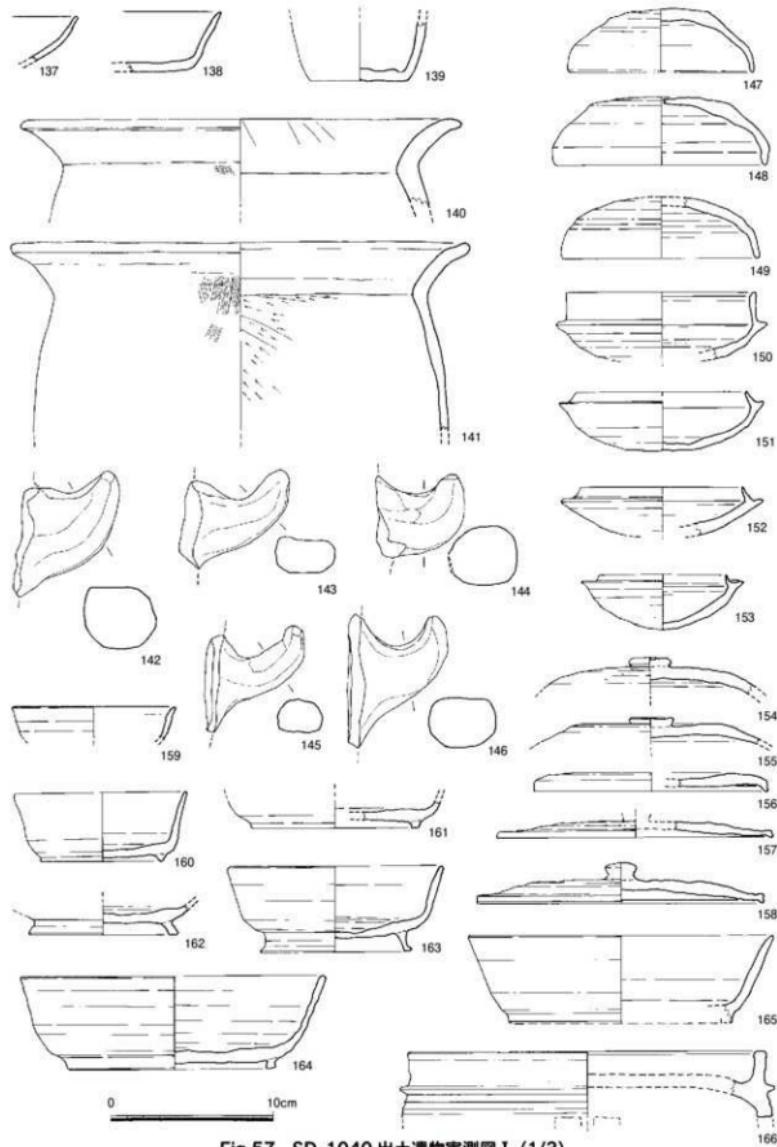


Fig.57 SD-1040 出土遺物実測図 I (1/3)

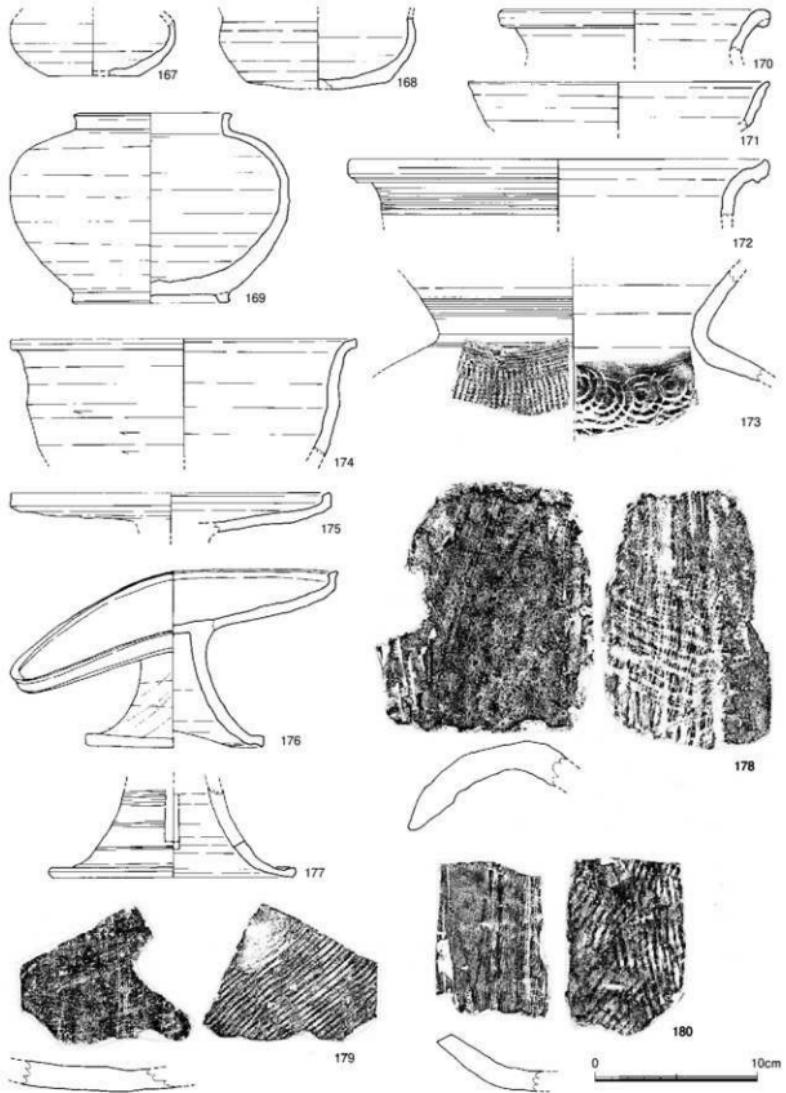


Fig.58 SD-1040 出土遺物実測図Ⅱ (1/3)

師器瓶の把手。147～149は須恵器蓋で、天井部は147がヘラ切り未調整でヘラ記号を入れ、他は回転ヘラ削りする。復元口径は順に11.4cm、13.0cm、12.2cm。150は須恵器坏身で、蓋受けの立ち上がりは直に長く、端部に段の痕跡を残す。151～153も須恵器坏身で、立ち上がりは低く内傾する。154～158は須恵器蓋で、天井部回転ヘラ削りで宝珠状鉤が付き、口線は三角形に肥厚する。159～165は須恵器坏身で高台を貼付する。高台は162・163がやや高めで、他は低く底部外寄りに貼付する。底部はヘラ切り未調整。163は赤焼である。以上の須恵器蓋坏の内、ロクロ回転の分かるものは横ナデ・ヘラ削りとも全て時計回りである。166は須恵器の円面鏡で、脚外面の突帯下に沈線2条を回し、その直下に透孔が入る。海部が鮮やかな灰青色をなし墨痕か。167・168は須恵器小壺で、167外底に回転ヘラ削り後ヘラ記号を入れる。168は外底ヘラ切りで雜にナデ調整。169は須恵器壺で高台が付く。ほぼ完存する。下半は回転ヘラ削り。170は須恵器壺、171は須恵器壺の口線か。172・173は須恵器壺で、外面振格子タタキ、内面同心円文當て具痕。174は須恵器鉢で、口線外反し端部面取りする。頭部以下は回転ヘラ削り。175～177は須恵器高杯。176は歪みが著しく、脚には螺旋状にシボリ痕がある。177の脚は帶状にカキ目を入れ、三方に透孔がある。178は丸瓦で、凹面に布目と竹状模骨痕が残り、凸面は工具で雜にナデタタキは残らない。端部は面取りし、土師質焼成で不良。179は平瓦片で、凹面は布目、凸面は平行タタキ。瓦質焼成。180も平瓦で歪みがある。凹面は布目をナデ消して模骨痕は不明瞭、端部近くはヘラ削り。凸面は平行タタキ。側縁は面取りする。土師質焼成。他に土師質焼成の平行タタキの丸瓦1点がある。

古手の須恵器類を多量に含むが、奈良時代後期、8世紀後半の溝であろう。

溝 SD-1060 Fig.59

1区東半部の南壁際に検出した。東西方向に弧状に巡る浅い溝で、西側は中世大溝に切られ、東側は調査区外へ伸びていく。溝幅は0.8～1.3m。断

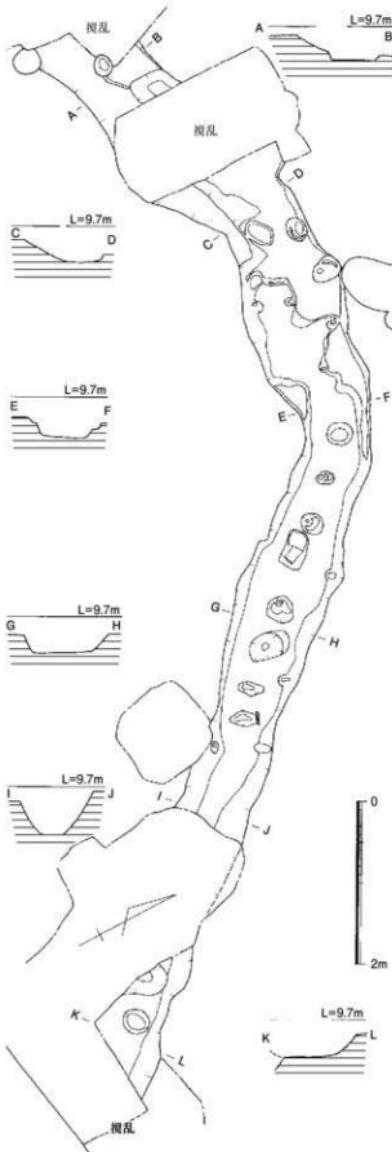


Fig.59 溝 SD-1060 実測図 (1/60)

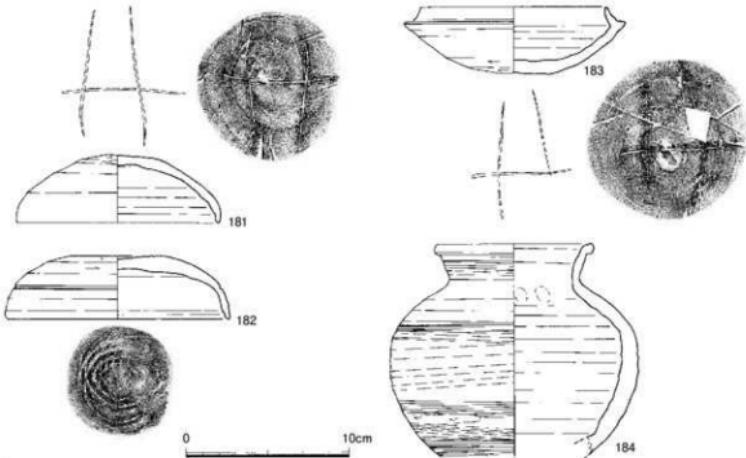


Fig.60 SD-1060 出土遺物実測図 (1/3)

面逆台形で、深さ 20 ~ 50cm。底面レベルは僅かに東が低い。覆土は暗褐色~黒色粘質土である。

SD-1060 出土遺物 Fig.60

土師器、須恵器、石製品が少量出土した。

國は全て須恵器である。181 は環蓋で、天井部は回転ヘラ削りし、ヘラ記号がある。外面に降灰する。完品で口径 12.5cm。182 も蓋で、天井部と口縁部の境に沈線を巡らせ、口縁端部には段を設ける。天井はヘラ切り→板圧痕→回転ヘラ削り。内面に同心円文の當て具痕が残る。口径 13.6cm。183 は環身で、ほぼ完品。蓋受けは短く内傾し端部は丸い。約 1/2 に回転ヘラ削り後、181 と同じヘラ記号を加える。ただし口径が異なる。184 は壺で、外面横ナデ後、肩部と底部に雜なカキ目を施す。

古墳時代後期、IV a 期に位置付けられよう。

溝 SD-1070 Fig.218

I 区東半部の北壁際に検出した。東西方向の溝だが、西へは伸びない。東は攪乱に破壊されており延長不明である。周溝墓 SX-1100 の後方部周溝と重複しており、図は SX-1100 に含めて示した。北側の立ち上がりは調査区外にあり、幅は 6 m を越えよう。横断面は緩く立ち上がる逆台形をなし、深さ 80cm 程度である。覆土は暗褐色粘質土で、自然埋没であろう。

SD-1070 出土遺物 Fig.61

弥生土器、土師器、須恵器、中国産陶磁器（白磁、同安窯系青磁）、瓦、石製品がコンテナ 3 箱出土した。

185・186 は土師器高环で接合しないが同一個体か。187 は土師器小形壺、188・189 は土師器壺である。190 は舟形支脚か。上面の孔は貫通しない。191 は須恵器蓋。192 も須恵器蓋で、返りはやや下に出る。193・194 は須恵器环身、195 は須恵器無蓋高环、196 は須恵器壺である。

197 は白磁碗の口縁部小片で、博多分類の IV 類。198・199 は同安窯系青磁碗で、櫛描文を施す。中世前期、12 世紀後半頃の遺構であろう。

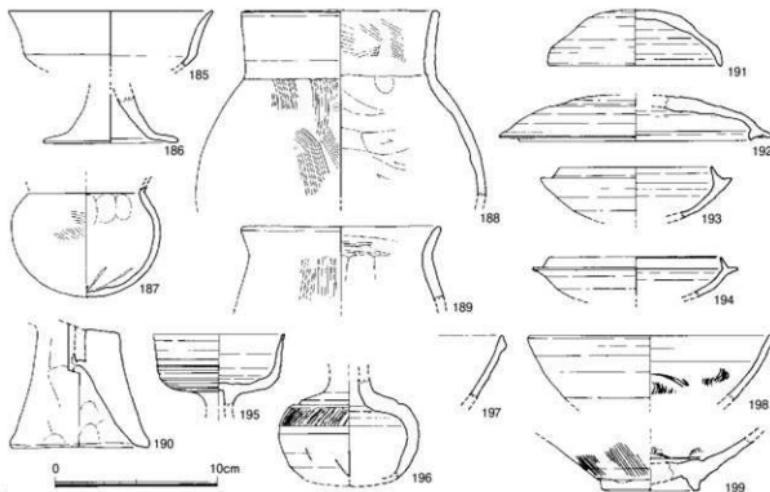


Fig. 61 SD-1070 出土遺物実測図 (1/3)

溝 SD-2010 Fig.63・64

2区から4区の北壁際に検出した。東西方向に伸びる溝である。SD-2020の上にはほぼ重なっており、図はSD-2020に含めて示した。西端は立ち上がって収束し、東側はSD-2020と重複して伸び、東端は近世溝により切られて途切れる。全長30m。主軸方位は磁北に直交する。東の延長が4区SD-4003と3区SD-3074に連続する可能性があり、この場合の全長は64mを超える。幅は1.4～1.6m、横断面は浅い逆台形をなし、深さ25～45cm。底面は東へ緩く傾斜する。覆土は暗褐色粘質土である。

SD-2010 出土遺物 Fig.62

弥生土器、土師器、須恵器、瓦、石製品がコンテナ1/2箱出土した。

200は須恵器壺。201～203は須恵器高台付き壺で、201の高台は低く、他はやや高めである。201は外底に回転ヘラ削りを施すが、他はヘラ切りのままである。204は丸瓦片で、凸面はナデ消してタタキ痕は残らず、凹面は布目に工具ナデを加える。側縁は面取りする。瓦質で焼成不良。

やや古手の須恵器を含むが8世紀代理没の溝で、SD-1040と主軸がほぼ直交し、時期も等しい。

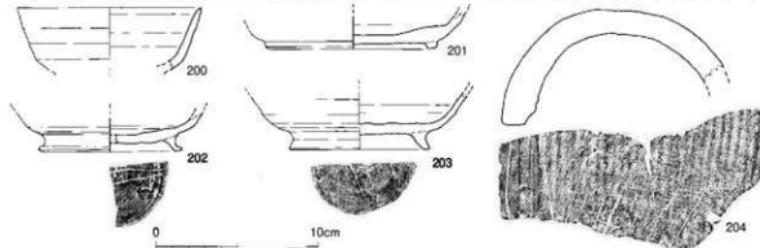


Fig. 62 SD-2010 出土遺物実測図 (1/3)

溝 SD-2020・2040・4040 Fig.63・64, PL.9・10

2区から4区にかけて検出した区画溝である。東西溝SD-2020と南北溝SD-2040がL字形に連続する。東西溝SD-2020の西端は段落ちにより削平消失しており、全長約30m。南北溝SD-2040の南端付近は造構面の削平により残りが悪いが、調査区南壁際に確認でき、全長35mで、更に調査区外に伸びる。溝の主軸方位はSD-2020が磁北から82°東偏、SD-2040が8°西偏で、正しく直交する。横断面形は逆台形で、SD-2020は幅2.6m前後、深さ1.2m、SD-2040は一部が二段掘りとなり、幅1.8~3.3m、深さ1.2mである。溝底面のレベルはSD-2020が8.5~8.6mではほぼ平坦、SD-2040は8.7~8.4mで南へ緩く下る。コーナー部分で両者の溝底にレベル差はなく、スムーズに連続する。覆土は土層図に示した通りで、自然に埋没した状況を示している。また、SD-2040では①層中から弥生甕片に須恵器が供えられた状態で出土した。(PL.9-6)

SD-4040は区画溝SD-2020・2040のコーナー部から2.5m内側(西侧)で分岐して南へ約4m伸びる溝状の造構で、SD-2020に切られており先行する造構と考えられる。南端は方形に整えられ収束する。幅1.7前後、深さ1.0m。溝底はSD-2020より僅かに低く段差をなし、南北溝SD-2040とは並行しない。SD-4040の10.5m南へ離れて位置するSD-2060は同じ軸線上にあり、SD-2020・2040に先行する区画(東側に入口を持つ?)を構成する溝の可能性もある。

SD-2020出土遺物 Fig.65~67, PL.28

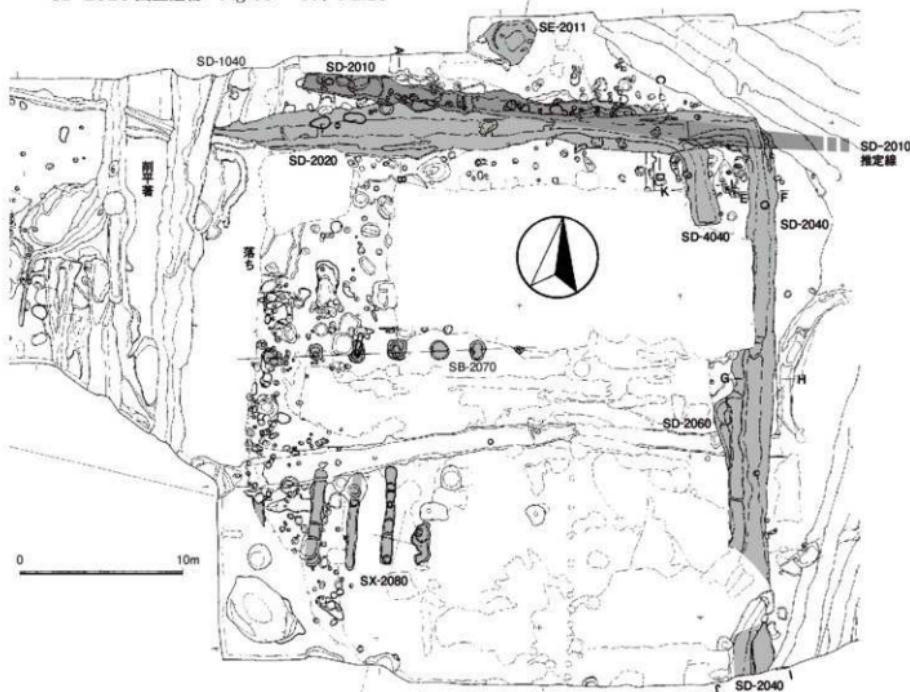


Fig.63 溝 SD-2020・2040 と関連遺構の平面図 (1/300)

弥生土器、土師器、須恵器、瓦、石製品がコンテナ50箱出土した。

205～218は土師器である。205は小型丸底壺、206は須恵器環身を模倣した土師器で橙褐色。207・208は口縁が開く鉢、209は鉢、210・211は高杯。212は壺で外底ヘラ削り。213・214は壺の口縁部片で、外面刷毛目、内面ヘラ削り。215は壺の底部で外面刷毛目、内面指押え後ナデ。内面に炭化物が付く。216・217は壺で、底部は筒状に抜ける。内面に指押さえ痕を留める。218は壺の把手である。

219～221は赤焼土器の壺で3点とも別個体である。219は外面擬格子気味の平行タタキで、内面磨滅する。二次加熱により劣化する。220は外面平行タタキ、内面平行文當て具痕。

221は外面が細い擬格子気味の平行タタキで、内面は磨滅する。222は支脚状の土製品で、上下が窪む。223・224は須恵器蓋で全てほぼ完存する。224は回転ヘラ削り、223は削りを加えない。ともにヘラ

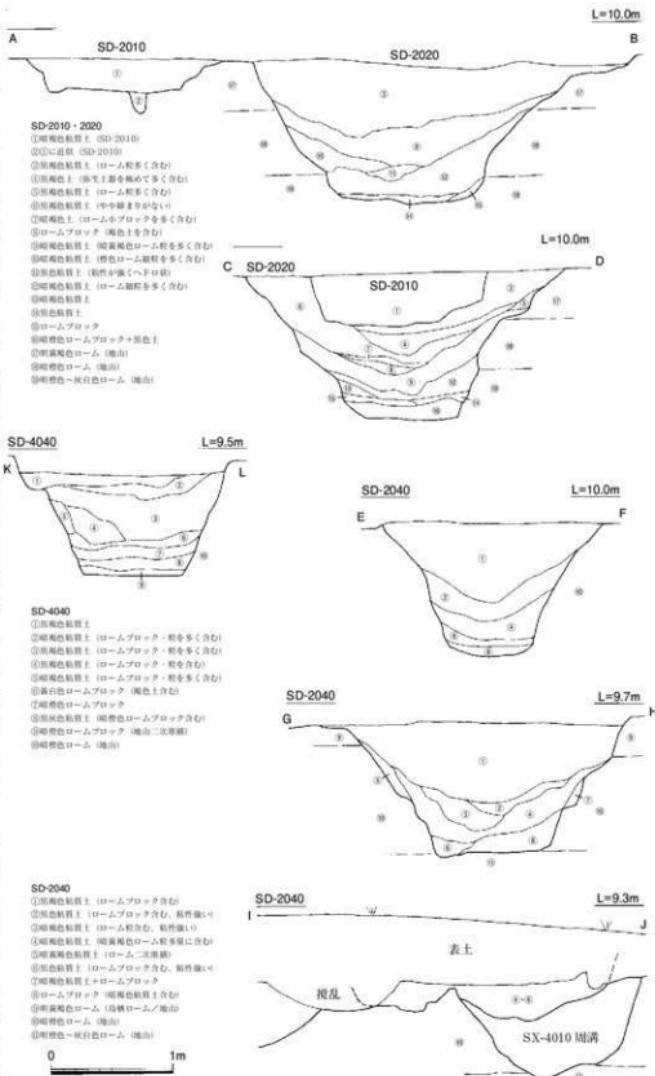


Fig.64 溝SD-2020・2040・4040土層断面図(1/40)

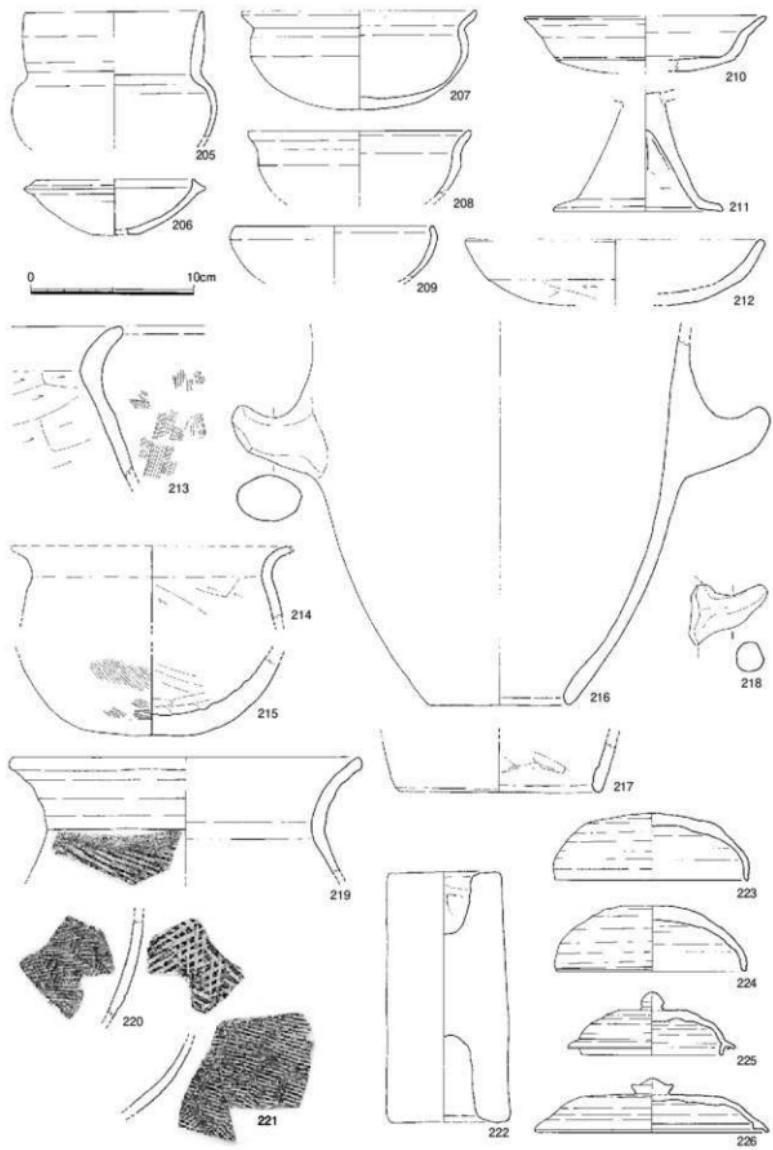


Fig.65 SD-2020 出土遺物実測図 I (1/3)

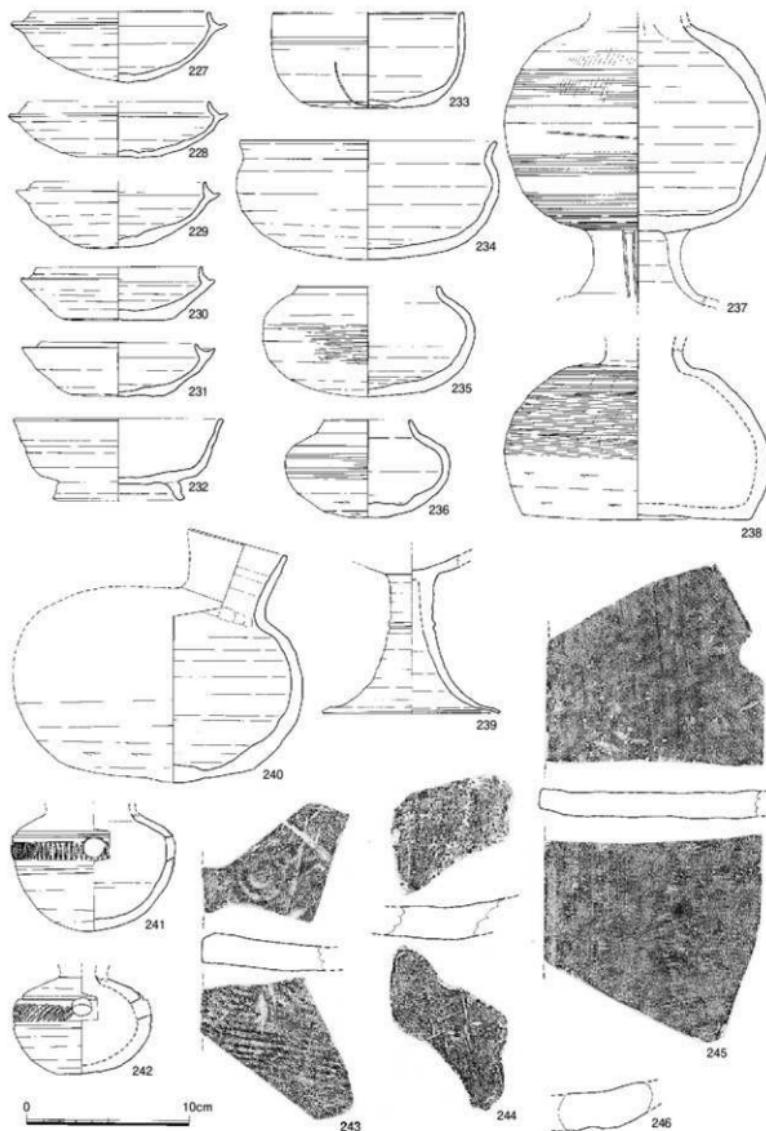


Fig.66 SD-2020 出土遺物実測図 II (1/3)

記号がある。口径 12.0cm、11.5cm。**225・226** は須恵器蓋で、天井部回転ヘラ削りで鋸が付く。**225** は径が小さく返りが下に出、**226** は出ない。**225** はヘラ記号がある。**227～231** は須恵器坏身で、**231** 以外は底部回転ヘラ削り。口径は 11.7cm～9.6cm。**229** を除きヘラ記号がある。**232** は須恵器高台付坏で、高台は内寄りに貼付され高い。**233** は須恵器坏で赤焼。外底は手持ちヘラ削りでヘラ記号を入れる。灰褐色。**234** は須恵器鉢か。外底回転ヘラ削り。**235・236** は須恵器小壺で口縁が内傾して短く伸び、胴部にカキ目を入れ、外底回転ヘラ削り。**237** は須恵器脚付壺で、口縁と脚端を欠く。肩部に斜刷毛目様の平行線がありカキ目を加える。胴下半もカキ目調整。脚の三方に縱長の透孔が入る。**238** は平底の壺で口縁を欠く。色調・胎土は他の須恵器と変わらない。胴上半カキ目後、下半～外底を回転ヘラ削り。**239** は須恵器高坏で脚のみ残り、中位に沈線 2 条を回す。**240** は須恵器平瓶。**241・242** は須恵器壺の胴部で胴外面に板小口押圧による列点文と沈線文を施す。以上の須恵器のロクロ回転は全て時計回りである。

243 は平瓦で、側縁は面取りする。磨滅するか凹面に同心円文當て具痕、凸面に擬格子タタキが残る。須恵器製作技法によるが、焼成は土師質。**244** も平瓦で凹面は布目、凸面は板状工具でナデテタタキを消す。土師質。**245** も平瓦で凹面は布一工具ナデ→ナデか、布目は残らない。凸面は擬格子気味の平行タタキを磨り消す。側縁は面取りする。**246** は取瓶で磨滅が著しい。螢光 X 線分析により鉛を検出した。

247 は須恵器の大甕で 1/6 で図示した。口縁が著しく歪み、窪んだ部分に他の須恵器片が付着することから、別の個体を上に乗せて焼成したと思われる。胴部外面格子タタキで粗い横カキ目を帯状に回し、内面は同心円～半円文當て具痕。上からの降灰を被る。

223 須恵器蓋 (IV b 期) 等が下層から出土し、226・232 (VI 期) 等が溝の中層から出土した。奈良時代溝 SD-2010 からの混入があった可能性があるが、7 世紀初頭掘削、7 世紀後半埋没と考えておきたい。

SD-2040 出土遺物 Fig.67・68, PL.28

弥生土器、土師器、須恵器、近代磁器、瓦、土製品、石製品がコンテナ 23 箱出土した。

248 は土師器壺で外面粗い刷毛目、内面ヘラ削り。**249** も土師器壺で外面右下がりの平行タタキ、内面粗刷毛目。**250** は土師器高坏で磨滅剥落する。脚内面はヘラ削りする。

251～268 は須恵器である。**251・252** は蓋で、天井部はヘラ切りのままでヘラ記号を入れる。口径 11.8cm、11.0cm。**253** も蓋で鋸がされている。返りは僅かに下に出る。天井部は回転ヘラ削りでヘラ記号がある。**254～257** は坏身で返りが付く。底部は回転ヘラ削りするが、**257** はかなり雑である。**254・255** は古い特徴があり、他造構からの流入品か。**258・259** は無蓋坏。**260～262** は低脚の高坏である。**263～265** は甕で、**263・264** は板小口押圧により列点文を入れる。**266** は須恵器に含めたが新羅系の土器である。算盤玉状の胴部に細頸が付くが接合しない。頭部に低い三角形突帯を貼付して竹管文を雜に押圧するが全周しない。胴部外面は横ナデのち、櫛状施文具による押圧文を列状に施し、沈線文を回して横ナデを加える。文様が浅くかなり乾燥した後施文したと思われる。内面横ナデ。細砂粒・白色粒・赤黒色鉱物を少し含み、焼成はやや古く灰褐色を呈する。**267** は甕で外面擬格子タタキにカキ目を加え、内面同心円文當て具痕。口縁横ナデ。**268** は大甕で外面平行タタキ、内面同心円文當て具痕。

269 は丸瓦で、小振りで歪みがある。広端側は縦ぎ目から剥落する。円筒を半截し、端部は面取りする。凸面は粗い平行タタキ、凹面は布目と紐圧痕が残る。砂粒は少なく、土師質焼成で橙褐色である。

270 は取瓶の破片で内面は灰黒色に焼ける。外面ヘラナデとナデ調整。鉛成分を検出した。

248・249・254・257・258・259・263 などが下層から出土し、他は中～上層から出土した。SD-2020 と一連の造構であり、7 世紀初頭掘削、7 世紀後半埋没と考えられる。

SD-4040 出土遺物 Fig.68

土師器が少量出土した。**271** は土師器の壺の把手である。

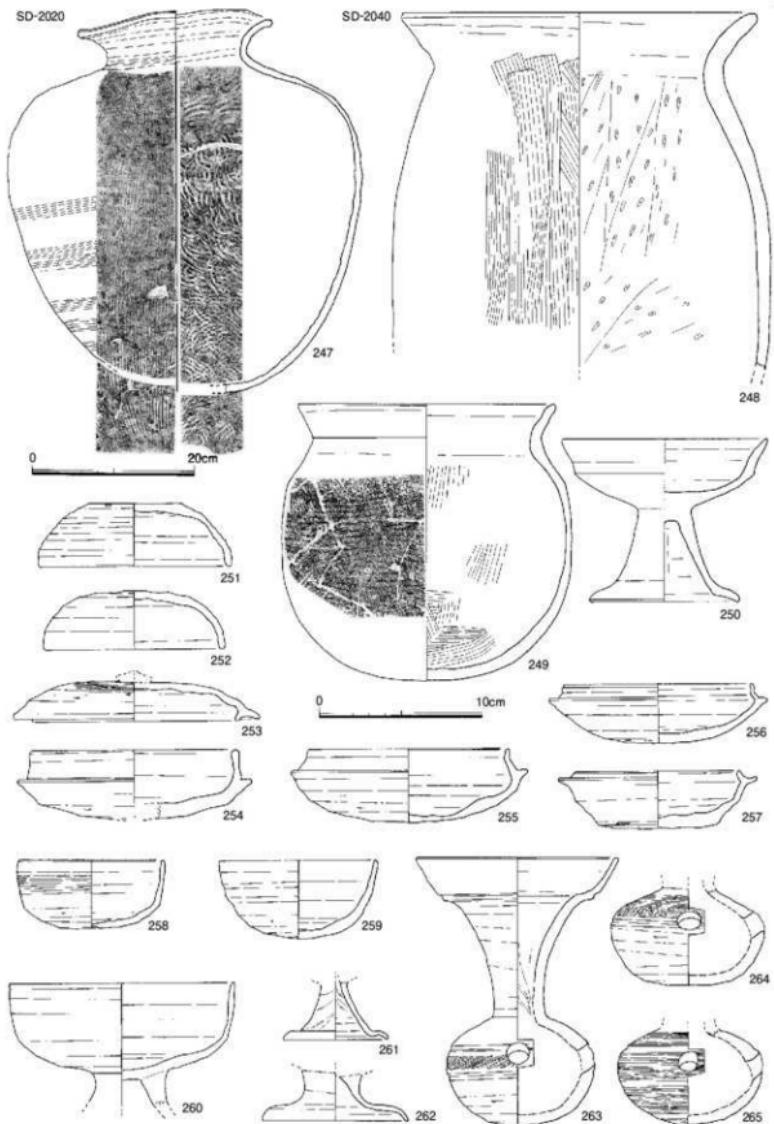


Fig.67 SD-2020・2040 出土遺物実測図 (247は1/6、他は1/3)

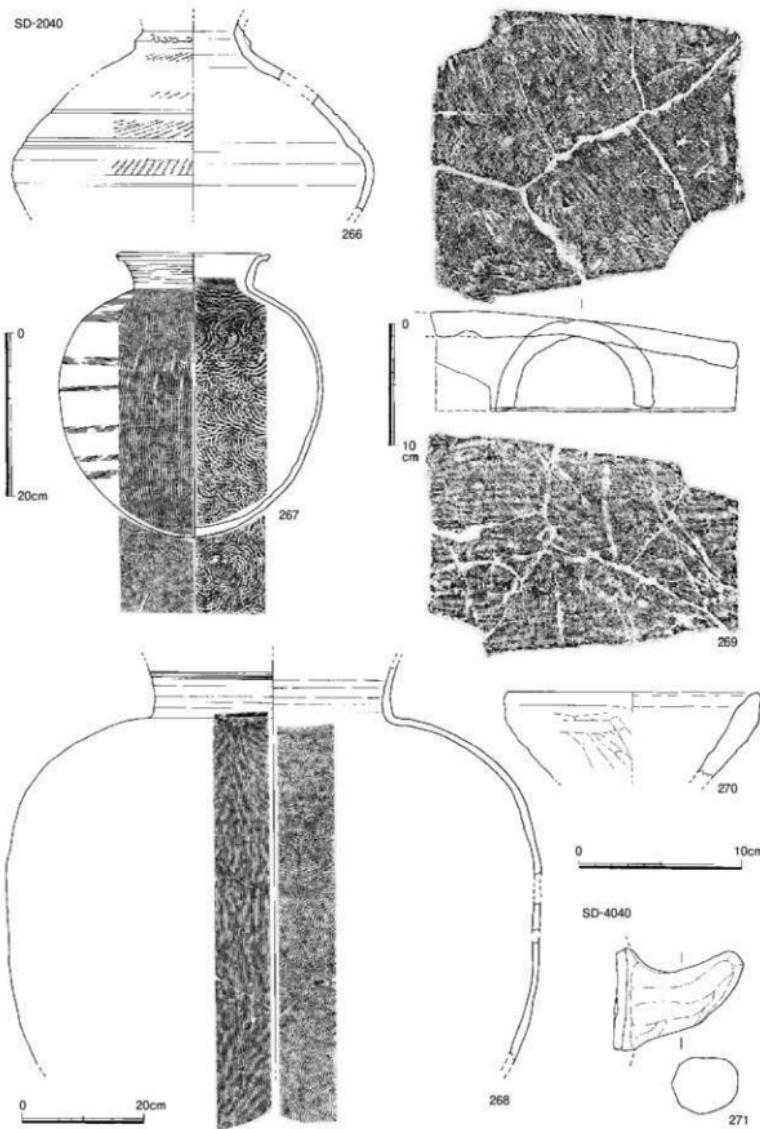


Fig.68 SD-2040・4040 出土遺物実測図 (267は1/6、268は1/8、269は1/4、他は1/3)

満 SD-2030 Fig.69・70, PL.11

2区と4区で調査を行った。僅かに蛇行しながら東西方向に伸びる弥生時代の溝である。調査区内で全長70m弱を確認したが、中央部は工場による削平や近世溝のため消滅している。東西両端は調査区外へ伸びており、東は那珂遺跡群第20次調査のSD-01、西は同第23次調査のSD-44に連続すると考えられ、東西250m以上に渡って続き那珂台地を横断する大溝と想定される。溝の横断面形は逆台形を呈し、最大幅2.1m、最深1m強である。20次では最大幅2.7m深さ1.6m、23次では最大幅2.5m深さ1.2mの規模であったことから、当調査区内ではかなり削平されていると考えられる。溝底は平坦で20~30cmほど窪む部分があるが、極端な傾斜は認められない。ただし西端では底面レベルが下がって落ちており、おそらくここから地形自体が落ちていくものと考えられる。覆土は黒色~黒褐色粘質土で、溝の上層から中層に土器が集中して出土する部分がある。

SD-2030 出土遺物 Fig.71~74, PL.28

弥生土器、土製品がコンテナ25箱出土した。須恵器、近世染付、瓦が攢乱等から混入している。

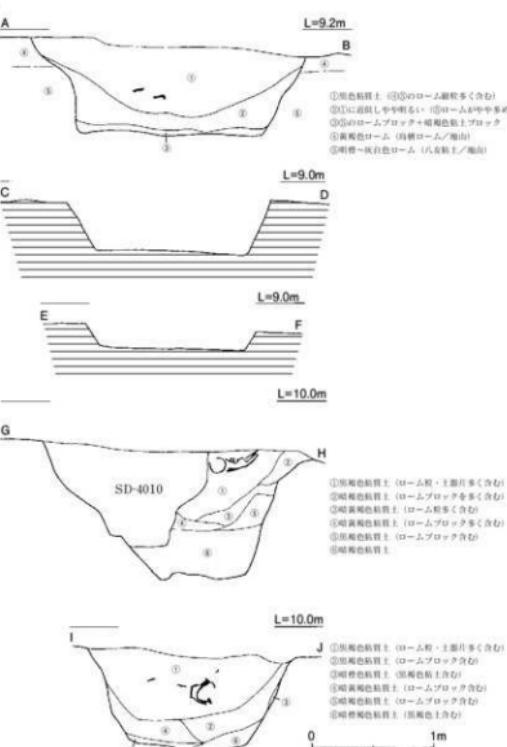
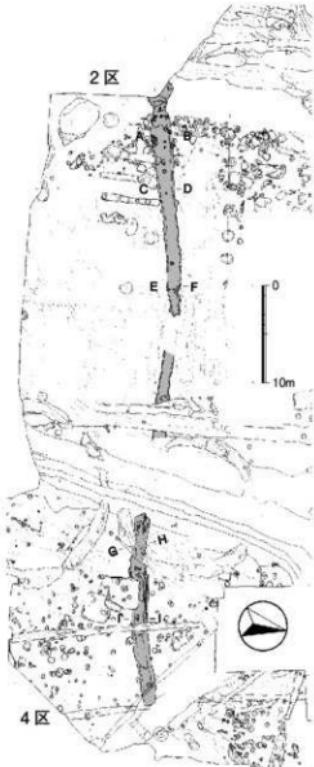


Fig.69 満 SD-2030 平面図 (1/500)

Fig.70 満 SD-2030 土層断面図 (1/40)

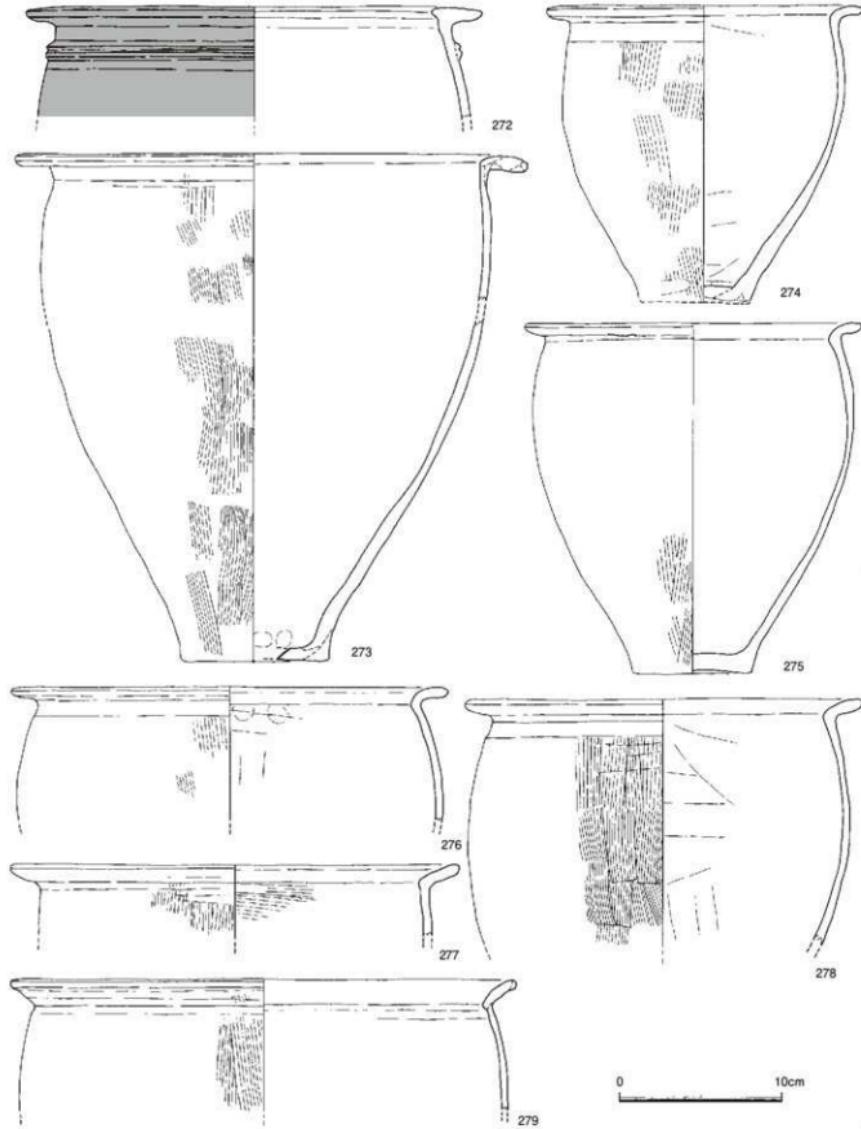


Fig.71 SD-2030 出土遺物実測図 I (1/3)

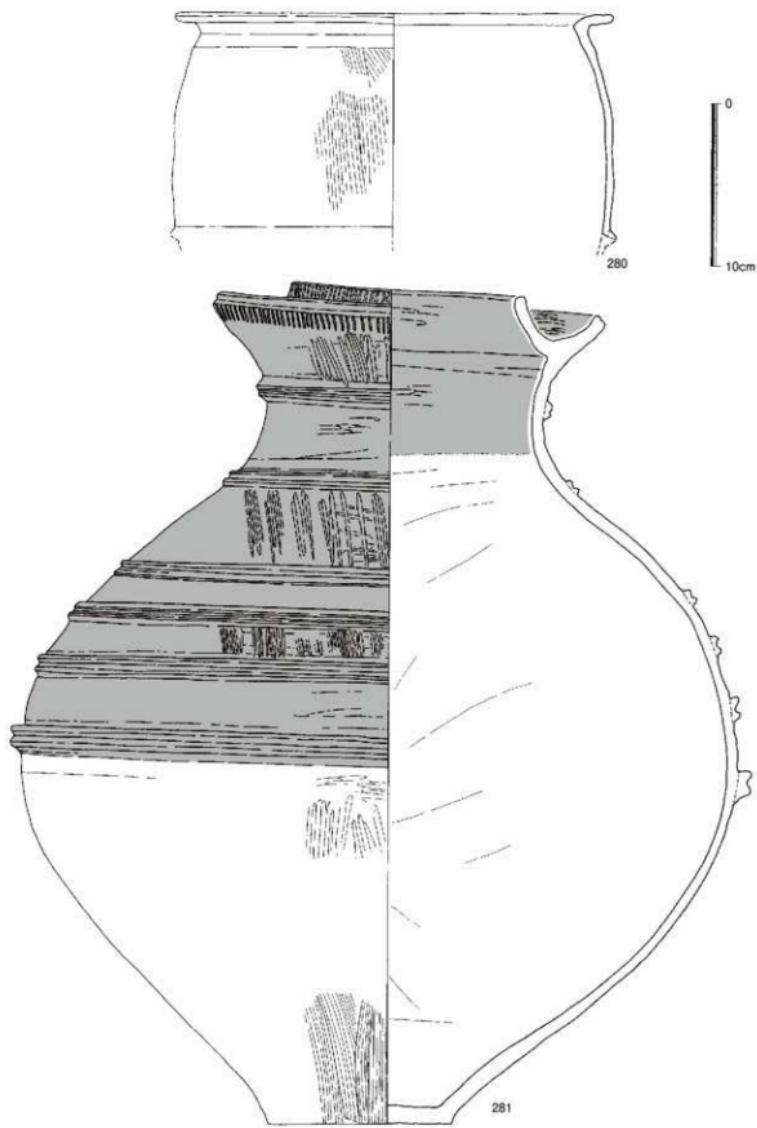


Fig.72 SD-2030 出土遺物実測図 II (1/3)

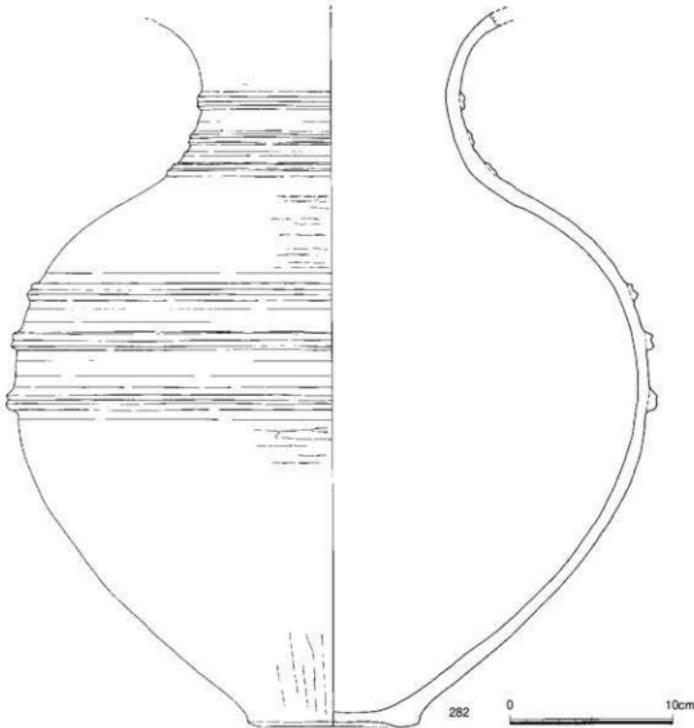


Fig.73 SD-2030 出土遺物実測図Ⅲ(1/3)

多量の弥生土器があり全ては報告できない。器種・タイプを網羅するよう図化し、類似土器は省いた。
272～280 は甌である。272 は口縁が逆「L」字形をなし、他は「く」字形へ移行する形態を示し、
 277・280 では屈曲部内面の稜が明瞭である。いずれも調整は外面縦刷毛目、内面は指押え後ナデまたは工具ナデで、277 は横刷毛目を加える。口縁横ナデ。272 は外面丹塗り、273 は焼成後に底部穿孔、274 は外底剥落、275 は外面に煤が付着する。**281** は口縁が受け口状になる特異な甌で、復元完成。内口縁に密な暗文、外口縁にヘラ刻目を入れ、外面にM字突帯を 6 条貼付する。最下段の突帯～口縁内面を横ミガキし丹塗り。突帯間には一段置きに縦に暗文を施す。突帯下は縦刷毛目後、縦にミガキを加えるが磨滅している。内面は指押え後ナデ調整。**282** も甌で、口縁と下半の一部を欠く。外面は、頸部と胴中位に各 3 条のM字突帯を貼付し横ナデ、胴突帯の上下は横ミガキ。下半は磨滅するが幅広の縦ミガキ。内面は口縁横ナデ、胴は指押え→ナデ調整。**283** は大型甌で鋤先口縁の上面は刷毛目後ミガキ、他は器面剥落するが全面丹塗りであろう。**284～288** は甌の底部である。284 は外面刷毛目後にミガキを加え丹塗り。285 は外面縦刷毛目。286 は外面ミガキで丹塗り、内面丁寧な工具ナデ。287 は外面刷毛目後ミガキ。288 は外面刷毛目後ヘラナデ、内面ナデ。**289** は鋤先口縁の小甌小片で調整は

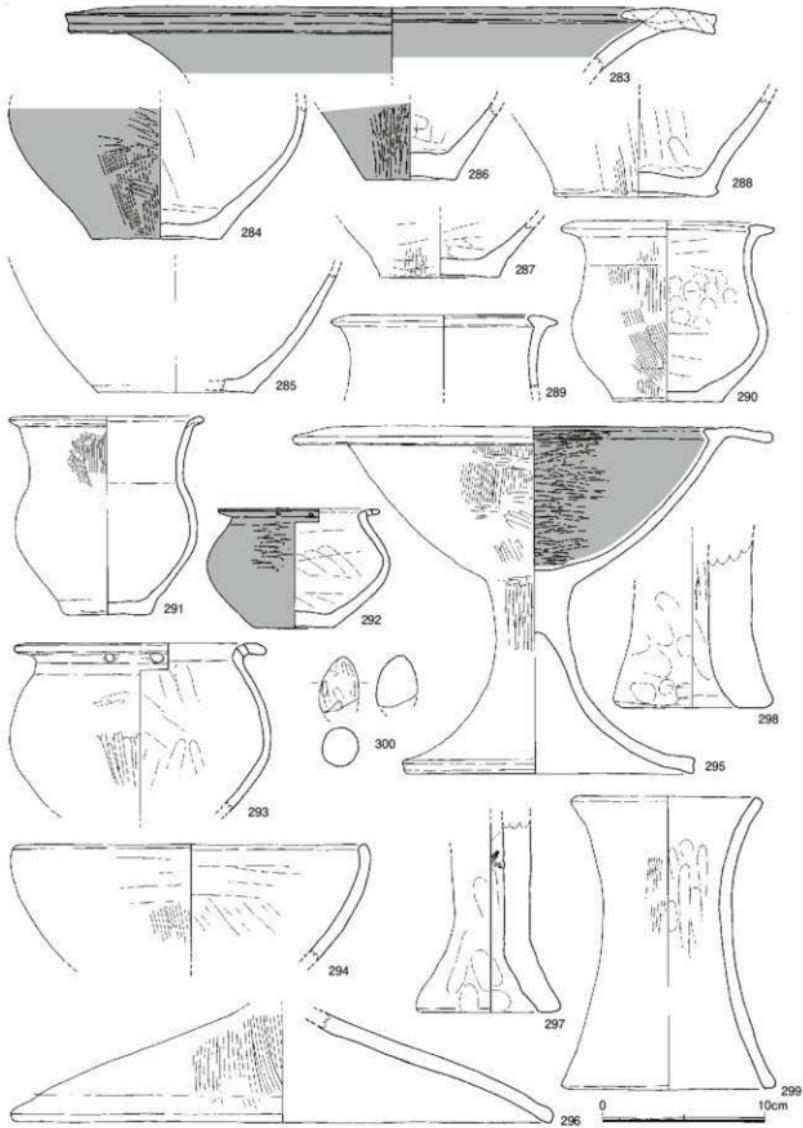


Fig.74 SD-2030 出土遺物実測図IV (1/3)

不明。290 も口縁が鋸先形をなす小壺で上半 1/3 を欠く。外面刷毛目、内面指押え後ナデ、口縁横ナデ。291 も小壺で口縁は外反する。外面に刷毛目、内面に指押え痕が残る。292 は短頸壺で口縁の一部を欠く。口縁に 2 孔が残る。外面ミガキと丹塗り、内面ナデ。293 も短頸壺で底部を欠く。口縁の相対する位置に 2 孔ずつ計 4 孔を穿つ。外面ミガキ、内面指押えが残るが磨滅する。294 は鉢で外面刷毛目、内面ナデ。295 は高環で、口縁は鋸先形をなす。刷毛目後にミガキを加える。丹は環の内面のみ残る。296 は蓋で外面刷毛目、内面は調整痕が残らない。297・298 は支脚、299 は器台、300 は土製投弾である。

以上の土器の大半は溝の上層から出土した。弥生時代中期末～後期初頭頃に位置づけられよう。

溝 SD-2060 Fig.75

2 区東端付近に検出した。SD-2040 に大きく削られて断片的だが、溝又は土坑の一部と思われる。略南北方向に長く、南北 4 m 以上、東西 1.2 m 以上。横断面形は逆台形で、深さ 70cm。底面は平坦で、北端部が 10cm ほど窪む。覆土は黒色粘質土である。

SD-2060 出土遺物 Fig.76

弥生土器、土師器が少量出土した。301 は「ぐ」字形口縁甕の小片で図の傾きは不確実である。弥生時代末から古墳時代初頭頃の土器であろう。遺構の時期は不詳。

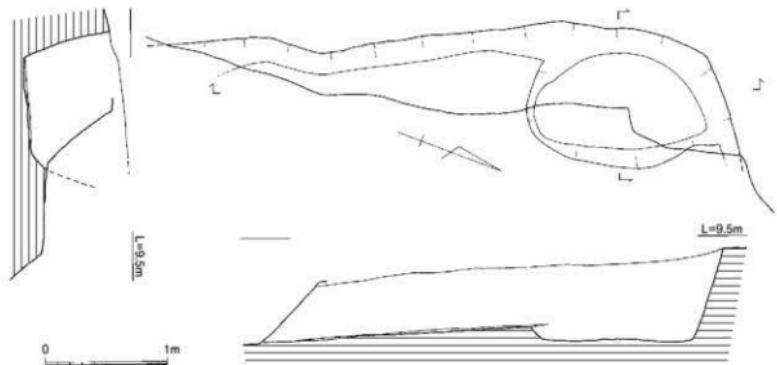


Fig.75 溝 SD-2060 実測図 (1/40)

溝 SD-3009・3010 Fig.77・78

SD-3009 は 3 区北端に検出した東西方向に伸びる浅い溝である。東側は調査区外へと伸び、西側は遺構が集中して不明瞭だが削平消滅したと思われる。全長 17 m。やや蛇行するが、主軸方位は磁北から 90° と計測される。溝幅は 1.0 ~ 1.5 m で、断面逆台形をなし、深さ 15 ~ 40 cm である。底面のレベルは 8.8 ~ 8.5 m で緩く西へ下っている。



Fig.76 SD-2060 出土遺物実測図 (1/3)

SD-3010 は SD-3009 のほぼ中央部から南へ直角に伸びる溝ないし土坑である。平面検出時には SD-3009 を切ると判断したが、覆土が近似しており、一連の遺構の可能性もある。SD-3009 との交点から 3 m 南に伸び、最大幅 1.3 m。南端は丸く収束して立ち上がる。底面は北へ傾斜しており、交点では SD-3009 より 10cm ほど深い。

SD-3009 出土遺物 Fig.79

弥生土器、土師器、須恵器がコンテナ 1 箱出土した。

302は土師器椀で、器面磨滅するが内面は細かい刷毛目後ナデ調整。303・304は須恵器蓋の小片で端部は丸い。305は須恵器環身で、受け部は短く内傾する。外面にヘラ記号がある。306は須恵器高坏の小片で透孔の有無は不明。307・308は須恵器大型台器の一部で同一個体であろう。307は口唇部が肥厚し、粘土粒を貼り付けて装飾する。外面には沈線が4条以上ある。308は外面カキ目の後、斜めに片切彫りの線刻を入れ、粘土粒を貼付する。内面横ナデ。309は須恵器甕で外面振格子タタキ、内面

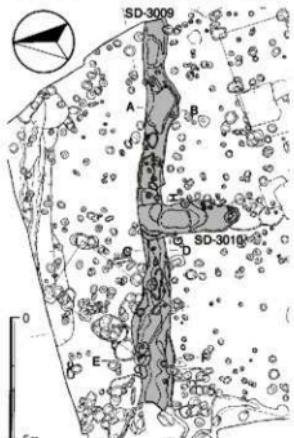


Fig.77 溝 SD-3009・3010
平面図 (1/200)

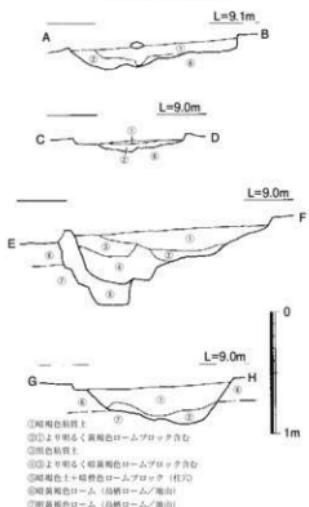


Fig.78 溝 SD-3009・3010
土層断面図 (1/40)

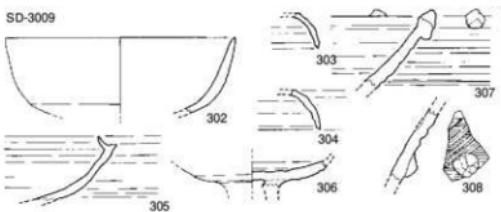


Fig.79 SD-3009・3010 出土遺物実測図 (1/3)

当て具痕が一部残る。310は移動式カマドの底部分で、アミで示した部分は破面である。

SD-3010 出土遺物 Fig.79

弥生土器、土師器、須恵器、石製品がコンテナ1箱出土した。311は土師器瓶の把手である。312は須恵器蓋小片で口縁端部は丸い。313～315は須恵器環身で受け部は低く内傾する。315は底部回転ヘラ削りでヘラ記号がある。蓋环のロクロ回転は時計回り。ともに古墳時代後期の遺構で、カマドを持つ竪穴住居群と同時期か。



溝 SD-3019 Fig.80・付図3

3区中央に検出した。南へ弧を描く細い溝状の遺構である。東西端は削平や擾乱により消滅する。幅0.2～0.7m、深さ30cm。覆土は黒色粘質土。土師器、須恵器の小片が出土したが図示できない。

溝 SD-3051 Fig.81

3区南端に検出した。調査区東壁にかかり、かつ擾乱や削平に破壊され一部の確認に留まるが、南北に長い溝もしくは土坑とみられる遺構である。断面皿状で深さ45cm。覆土は暗褐色粘質土である。

SD-3051 出土遺物 Fig.82

弥生土器、土師器、須恵器、石製品が少量出土した。

316は土師器甕で、外面細かい刷毛目、内面ヘラ削り。317は土師器甕の底部か。内面に突起を

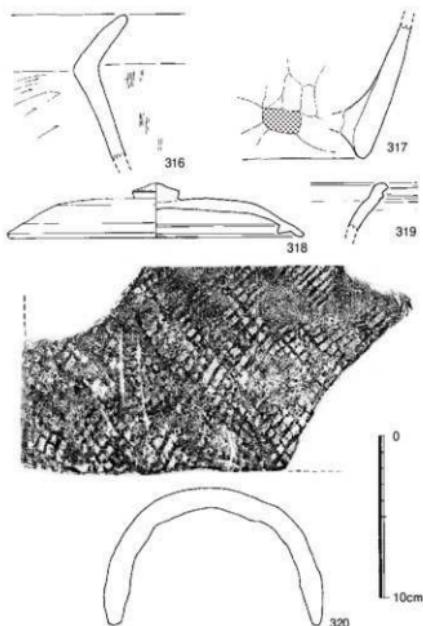
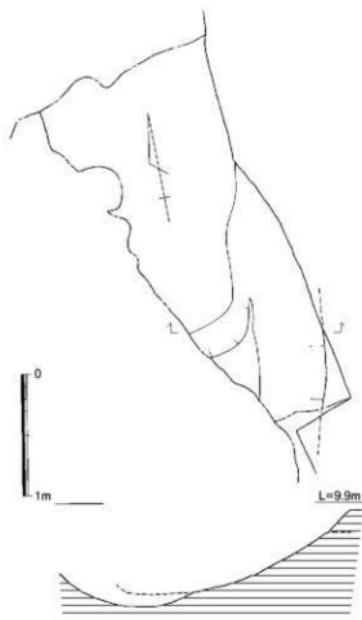


Fig.81 溝 SD-3051 実測図 (1/40)

Fig.82 SD-3051 出土遺物実測図 (1/3)

貼り付ける。318は須恵器蓋で、天井部は回転ヘラ削りで宝珠状鉤が付き、口縁の返りは内側に隠れる。319は須恵器蓋の口縁部小片でローリングが著しい。320は丸瓦で、凸面は目の細かい格子タタキで一部は平行タタキ、内面は布目で袋の紐圧痕がある。側縁は面取りして丸く仕上げる。土師質で橙褐色。

奈良時代の遺構であろう。

溝 SD-3074・4003 Fig.83

3区・4区の調査区境で途切れるためSD-3074とSD-4003に分けたが、一連の溝である。東端でSX-3059に切られ、西側は調査区外へ伸びる。主軸方位は磁北から85°西偏する。長さ11.5mを検出した。最大幅1.4m、最深約30cm。断面逆台形で底面は僅かに東へ傾斜する。覆土は暗褐色粘質土。

SD-3074出土遺物 Fig.84

弥生土器、土師器、須恵器がコンテナ1箱出土した。321・322は須恵器蓋で、天井部に回転ヘラ削りし、ヘラ記号がある。323は須恵器坏身で蓋受けは低く内傾する。底部約1/2に回転ヘラ削りを加える。324・325は須恵器蓋である。324は外面擬格子気味の平行タタキに粗力目を加え、内面は同心円文で具痕にナテを加える。325は外面一部擬格子気味の平行タタキにナテを加え、内面は円弧文。

SD-4003出土遺物 Fig.84

土師器、須恵器が少量出土した。326は須恵器坏身で、受け部はかなり短く内傾する。327は須恵器

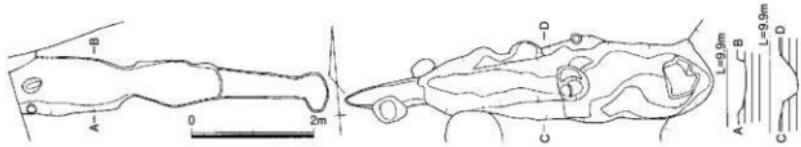


Fig.83 溝 SD-3074・4003 実測図 (1/80)

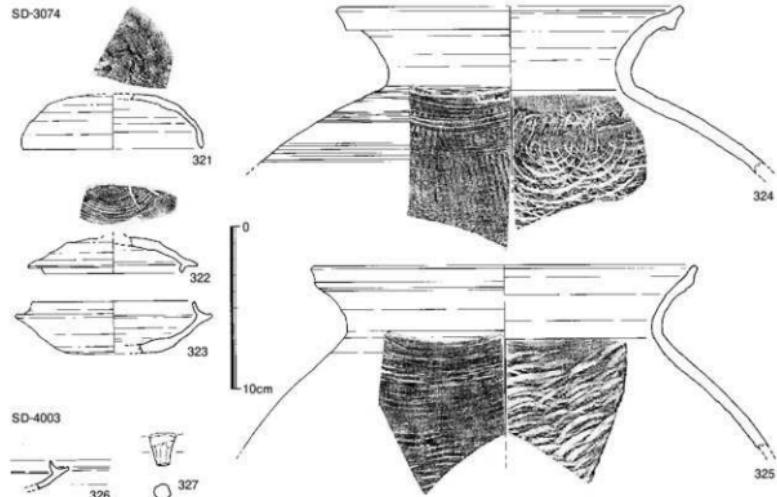


Fig.84 SD-3074・4003 出土遺物実測図 (1/3)

の脚であろう。上面が本体から剥落する。面取りして角柱状に作り、下面是使用により磨り減る。

古墳時代後期の溝であろう。

溝 SD-5020・5023 Fig.85

5区の西半部で検出した。1区SD-1040を北に延長した位置にある。磁北から12°東を指向する。溝幅は1.4m前後で、深さ70cm弱。溝の中程から分岐して東に向かう溝があり、北側は幅が狭くなるが、造構覆土に大きな差はない。北に向かう溝は幅0.6mで、底面が10cmほど浅くなる。東に向かう溝は幅0.8mで、底面レベルは南溝と同じである。造構面は南北端で30cmの差があり北へかなり傾斜しているが、底面レベルは逆に南が若干下がっている。覆土は暗褐色粘質土である。

SD-5020・5023 出土遺物 Fig.86

土師器、須恵器、中国産陶磁器(白磁)、瓦、石製品がコンテナ1箱出土した。

328・329は土師器丸底環で、底部ヘラ切りか。磨滅が著しい。330は土師器環で底部系切り。復元口径10.8cm。331は土師器椀で

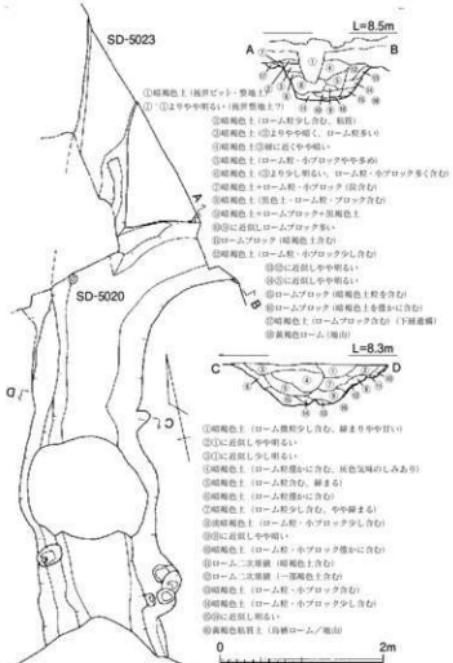


Fig. 85 溝 SD-5020・5023 実測図 (1/60)

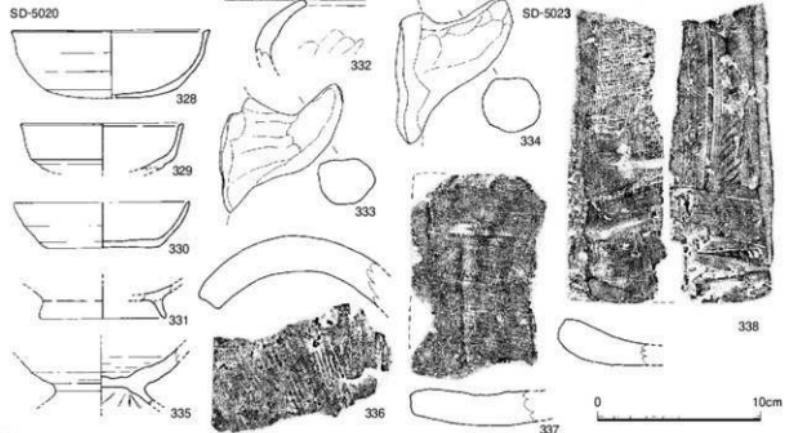


Fig. 86 SD-5020・5023 出土遺物実測図(1/3)

高台が付く。磨滅が著しい。332は土師器甕の口縁部小片。胴外面はヘラナデ、内面ナデ。333・334は土師器甕の把手で、ヘラ整形。335は須恵器甕の脚であろう。脚内面は雜なナデで、斜めのヘラ刻みが半周する。336は丸瓦で、凸面ナデ、凹面は布目とコビキ痕が残り、ナデを加える。側縁は押し削りによる破面が残る。土師質焼成。337は平瓦で、門面は布目の下に細い板状の模骨筋が残る。側縁は面取り。土師質。338も平瓦で、門面は細かい布目にナデを加え、端部はヘラ削り、凸面は平行タタキにヘラ削りを加え面取りする。側縁は入念に面取りし丸みを持つ。瓦質焼成。

系切り底の土師器坏、瓦器、瓦等の中世遺物は主に上層から出土しており、遺構が重なっている可能性がある。北へ向かう浅い溝が中世、L字形に東へ巡る深めの溝が古代である可能性が考えられる。また、下層出土遺物は9~10世紀頃のもので、一連の溝と考えた8世紀代のSD-1040とは時期差がある。

溝 SD-5024 Fig.87

5区SD-5023の西に検出した磁北から68°東偏して伸びる溝状の遺構である。東端はSD-5023に切られるが調査区外へと伸び、西は浅くなつて途切れる。北側の掘立柱建物SB-5050とは並行しており、関連する遺構かもしれない。溝幅は0.7m前後、断面逆台形で深さ20cm前後。底面は緩く東へ傾斜する。覆土は黒色粘質土である。

SD-5024 出土遺物 Fig.88

土器小片、須恵器、白磁片が少量出土した。

339は須恵器の甕で、胴外面は平行タタキ後、一部カキ目調整、内面は同心円文當て具痕が残る。口縁外面にタタキ痕が残り横ナデ調整。胴内面の一部を除き黒く塗られており、口縁内面と胴外面に降灰があり、特に胴外面は著しい。口縁外面は光沢がある。340は須恵器の口縁部小片で、口唇が肥厚し、直下に沈線1条を巡らせる。

内外とも黒色で、
339と同様に塗つ
ているものと思わ
れる。口唇に降灰
がある。

白磁小片1点
は混入遺物であろ
う。遺構の切り合
いから古代以前の
溝と考えられる。

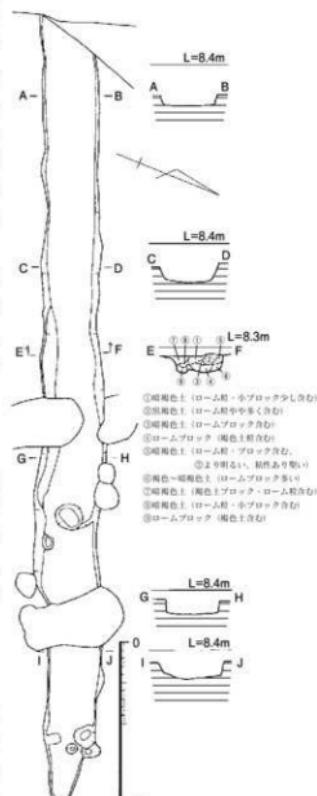


Fig.87 溝 SD-5024 実測図 (1/60)

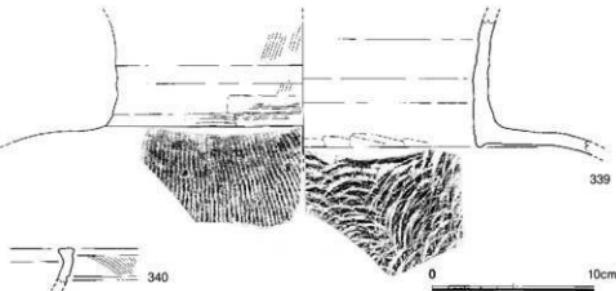


Fig.88 SD-5024 出土遺物実測図 (1/3)

(4) 井戸 (S E)

井戸は23基検出した。時代別には弥生時代8、古墳時代後期2、古代3、中世10である。台地最高所に位置するためか、井戸はいずれも深い。

井戸 SE-1074・1075 Fig.89, PL.12

I区南東隅に検出した2基の井戸の切り合いである。擾乱坑に破壊されて最上部が荒れており、一つの造構として70cmほど掘り下けた段階で二つの井戸であること分かった。SE-1075が古い井戸で、少し北へずらした位置に掘り直した井戸がSE-1074である。1.5mほど下げた段階で人力による掘削を中断し、3mまで重機で断ち切った後、再度人力で調査を行った。

SE-1074はやや南北に長い円形プランをなし、径1.2~1.0m。壁面はすばりながら直に落ちており、壁の崩壊は認められない。底面は丸く、遺構検出面から最深部まで4.9mを測り、本次調査で確認した井戸では最も深い。八女粘土層を貫通して硬砂層を1.7mほど掘り抜いており、底面標高4.7mを測る。底から40cm上まで湧水する。覆土は黒色粘質土で、井戸底をサンプリングし土壤分析を行った。底面から60cm浮いた位置で土器がまとまって出土した。

SE-1075は円形プランで径1.3m。壁はほぼ直に落ちておらず、八女粘土層上部で壁が少し崩壊している。底面は丸く、検出面からの深さは3.6m。八女粘土層を掘り抜いて、硬砂層に達したところで掘り下げをやめたものと思われる。底面標高6.0m。湧水はない。覆土は黒色粘質土で、底面から30cm浮いた部分で割れた土器がまとまって出土した。

SE-1074出土遺物 Fig.90~92

上部70cmまではSE-1075と同時に掘り下けたため、両者の遺物が混じっている。SE-1074が時期的に新しいため、こちらに含めて報告する。

大半が弥生土器で、他に磁石が数点出土した。コンテナ5箱がある。

341~348は口縁が「く」字形に屈曲して開く窓で、全て破片である。341・342・344は頸部内面の稜が明瞭で、他は不明瞭か丸みを持つ。全形を伺える資料がないが、343を除き、胴部最大径が口径を上回るようである。胴部は外面刷毛目、内面ナデ調整。口縁

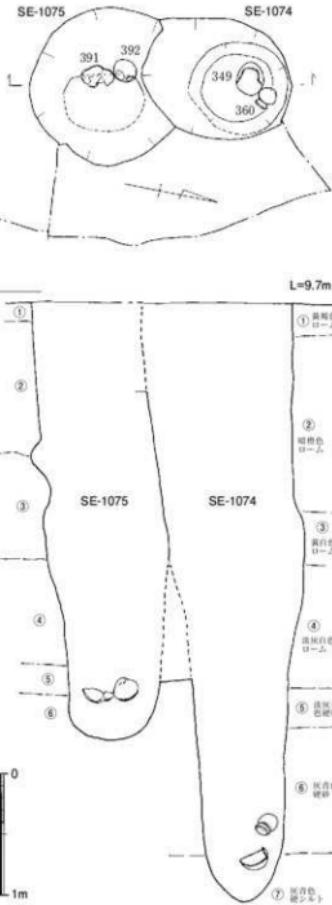


Fig.89 井戸 SE-1074・1075 実測図 (1/40)

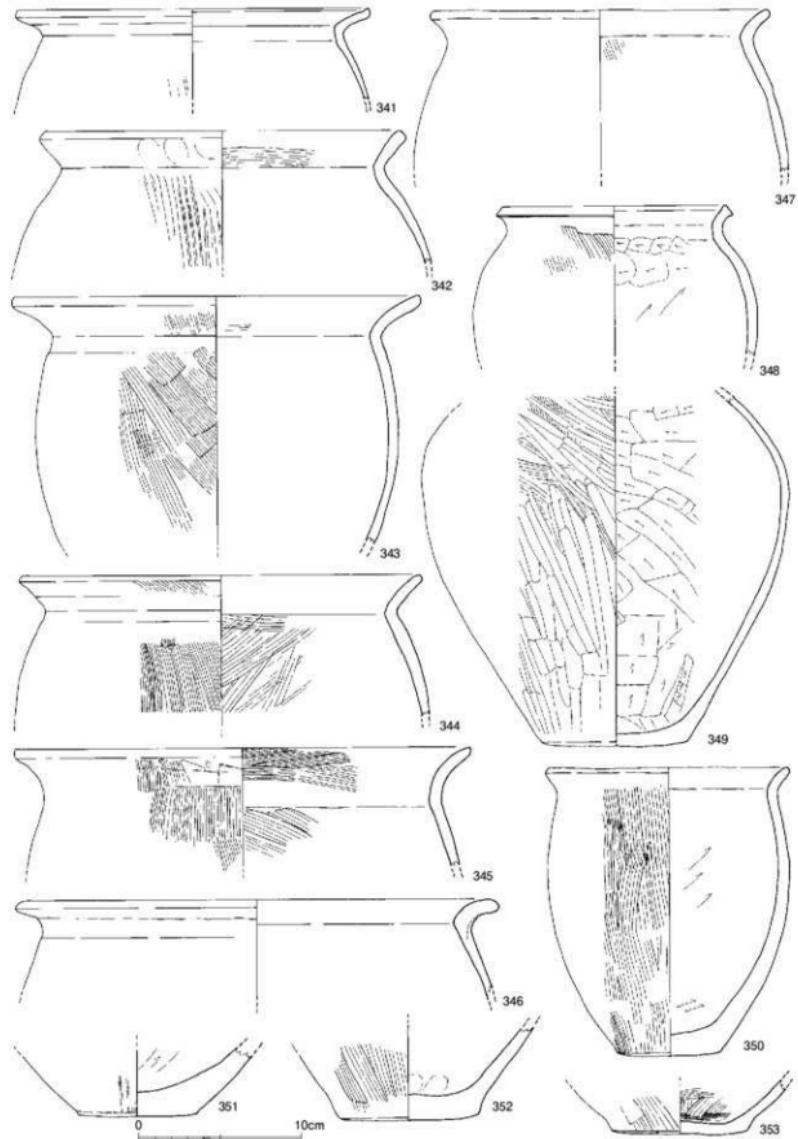


Fig.90 SE-1074 出土遺物実測図 I (1/3)

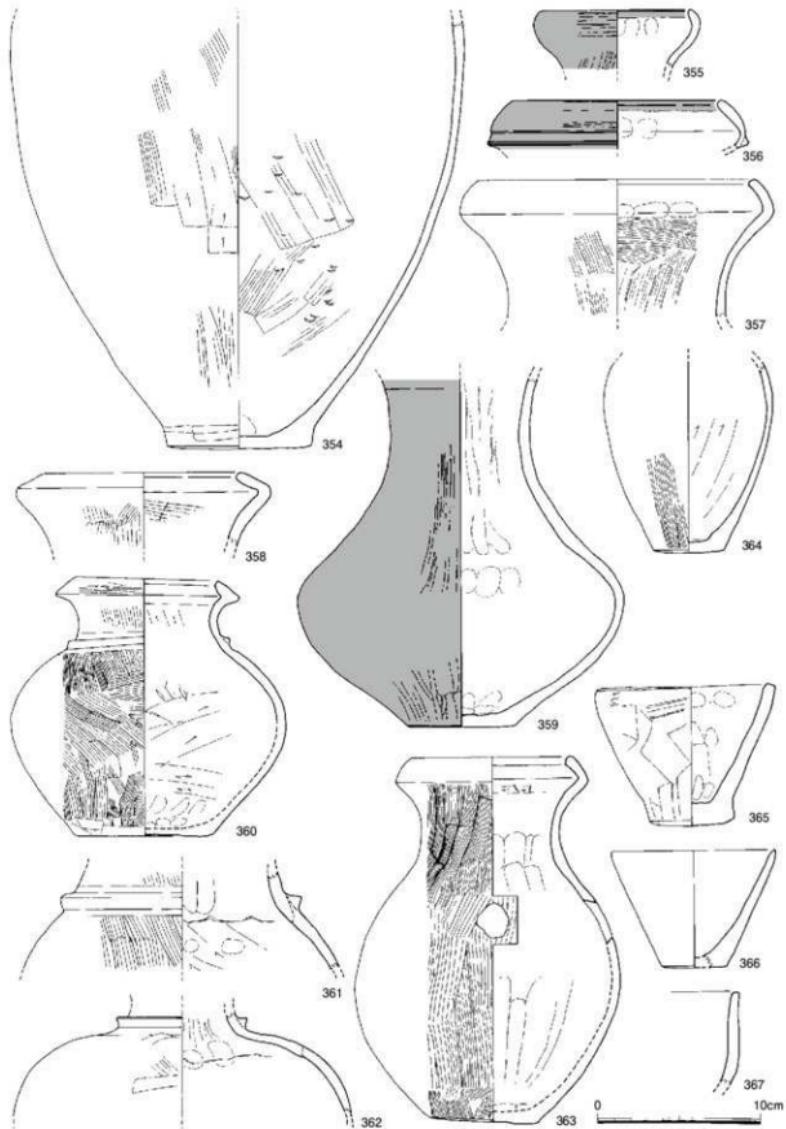


Fig.91 SE-1074 出土遺物実測図 II (1/3)

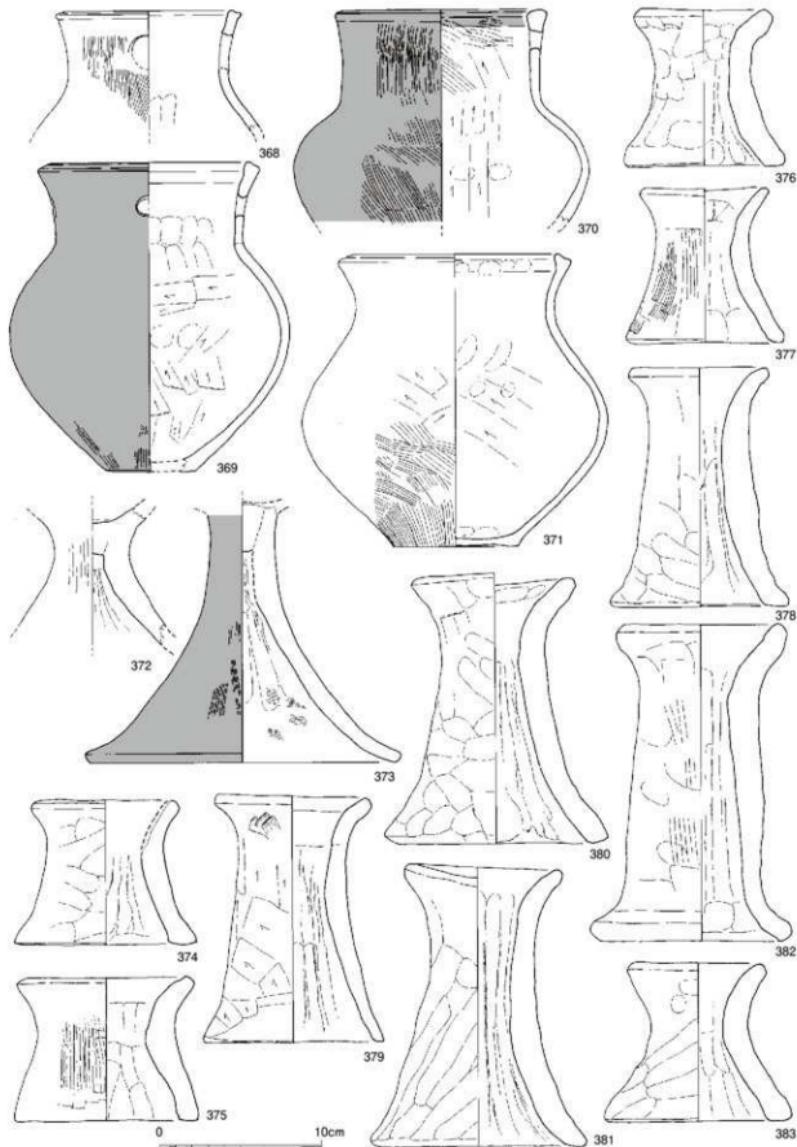


Fig.92 SE-1074 出土遺物実測図III (1/3)

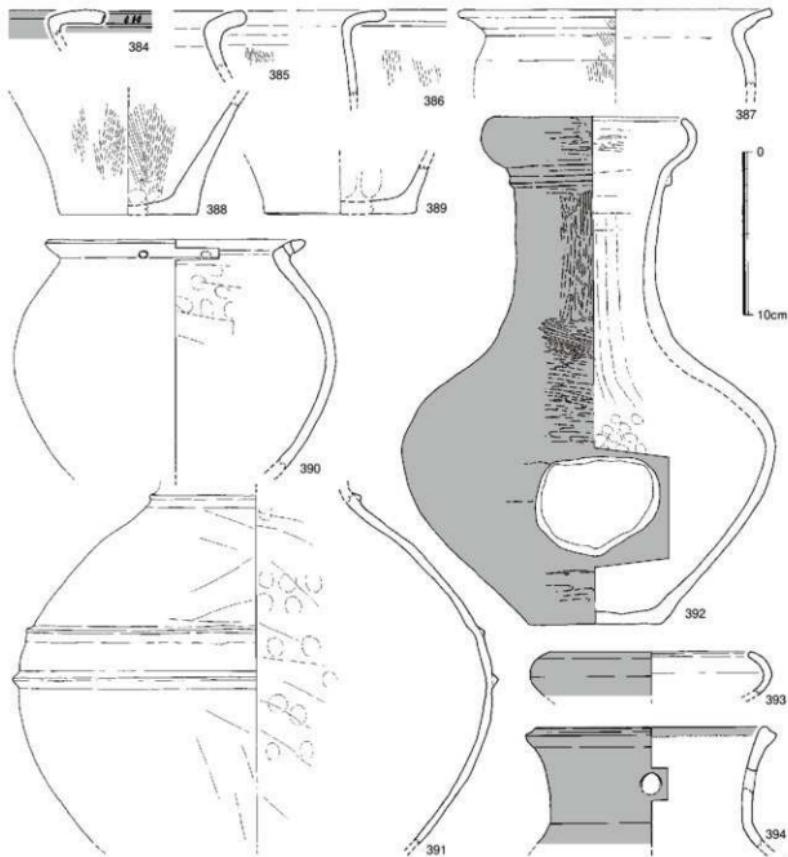


Fig.93 SE-1075 出土遺物実測図 (1/3)

内外を横ナテ調整し、342・343・345は口縁内面に刷毛目調整を加える。349は甌で口縁を欠く。胴部は肩が張り、底部は不安定な平底をなす。外面は刷毛目後、下半を密、上半を疎にヘラミガキし、内面はヘラ削りを加える。外底はナテ調整。外面暗橙褐色、内面灰褐色を呈し、胎土に径5mmから1mm以下の砂粒や雲母粒を含むが少なく、焼成良好。外底に黒斑があり一部は銀化する。瀬戸内系の搬入土器とみられ、遺構図に示すように井戸最下層で360と共に出土した。350は小形の甌で、「く」字形口縁で底部は丸みがある。外面刷毛目、内面工具ナテ調整。351～353は甌又は壺の底部片である。平底だが丸みがあり不安定である。調整は外面刷毛目、内面ナテで、353は内面刷毛目調整。354は甌の下半部で、丸みのある平底。外面は胴から底部にかけて刷毛目後にナテを加える。内面は指押えに刷毛目を加えており、爪状の圧痕が多数ある。

355・356 は袋状口縁壺の口縁部小片で、356 は外面にM字突帯を貼付する。外面から口唇にかけミガキと丹塗りを施す。胎土精良。**357・358** は過渡期的形態の袋状口縁である。内外面とも刷毛目調整で、口縁横ナデ。**359** は袋状口縁壺の胴部であろう。外面へラミガキで丹塗り、上端は横ナデで突帯が付くと思われる。内面はシボリ痕と指押え痕が残り、ナデ調整する。**360** は複合口縁壺で完品である。頸部に三角形突帯を貼付する。外面刷毛目調整で口縁と突帯を横ナデ、内面は指押え後、工具ナデ調整。外底は刷毛目にナデを加える。**361・362** は壺の肩部で、外面刷毛目後、頸部に三角形突帯を貼付し横ナデする。内面は粘土帶の継ぎ目が残り、指押え後ナデ調整で、**362** の頸部内面にはシボリ痕がある。**363** は小壺で、複合口縁壺だが丸みを残す。肩部に焼成後の穿孔がある。外面綴刷毛目、内面は指押さえ後、ナデないし工具ナデ調整。口縁内外は横ナデ調整。

364 は小形の土器で口縁を欠く。磨滅するが外面は刷毛目調整、内面は工具によるナデ調整。外底剥落。二次加熱を強く受け暗赤色を呈する。胎土精良でカクセン石を含み、焼成不良で破面が黒色を呈する。瀬戸内系の搬入土器か。**365** は小形の鉢ではほぼ完品。外面粗刷毛目後ナデ、内面指押え後ナデ。**366・367** も破片であるが小型鉢か。**368～371** は広口壺で、口縁の相対する2ヶ所に外から焼成前穿孔を施す。口縁端部が肥厚し、370 を除き上面に凹線を回す。外面刷毛目、内面指押さえしナデ又は工具ナデ。**370** は内面にも刷毛目を入れる。**369・370** は外面丹塗り。**372・373** は高環脚である。外面綴刷毛目調整、内面にシボリ痕があり**373** は刷毛目が残る。**373** は外面丹塗り。**374～383** は器台である。指押え後、刷毛目やナデで調整する。内面にシボリ痕が残る。**374・375・376・378・382・383** は二次加熱を受けていると思われる。

SE-1075 に伴う古手の土器が含まれるが、SE-1074 は弥生時代後期中葉頃の井戸であろう。

SE-1075 出土遺物 Fig.93

出土遺物は弥生土器のみである。**390～392** 以外は小片少量である。

384 は逆「L」字形口縁の甕で、丹塗り。口唇にヘラ刻みを入れる。**385～387** は「く」字形口縁の甕で、頸内部は丸みを持つ。外面刷毛目、内面ナデ、口縁横ナデ調整。**388・389** は甕の底部で、**388** は内面に炭化物が付着する。**390** は短頸甕で、短い口縁に2孔対の4孔を上から開ける。内外面ナデ調整で、内面に指押え痕が残る。**391** は甕で胴部のみ残るが磨滅する。頸部に1条、胴中位に2条の三角形突帯を貼付し横ナデ。内面は指押さえと刷毛目具の痕跡が残る。**392** は袋状口縁甕で、ほぼ完存する。頸部に三角形突帯1条を貼付する。外面はラミガキして丹塗り、内面は口縁のみミガキ、他はナデ調整で、頸部にシボリ痕、胴内部に指押え痕が残る。胴下半に焼成後に穴を開けている。**393** も袋状口縁甕で、口縁部小片。横ナデで、外面丹塗り。**394** は双孔広口甕の口縁部。磨滅するが、外面から口縁内まで丹塗りの痕跡が残る。

弥生時代中期末頃の井戸であろう。

井戸 SE-1080 Fig.94, PL.12

I 区東端の中央に検出した井戸である。遺構検出面から1m下まで擾乱坑により破壊されている。1.5mほど下げたところで危険防止のため人力掘削を中断し、3mまで重機で断ち切った後、再度人力で調査した。北東～南西にやや長い円形プランで、径1.4～1.5m。壁面は深さ2.5mまではほぼ直で、そこからすぼまって丸い底面に至る。壁面②層の下端で壁が一部崩壊している。遺構検出面から底まで3.9mを測り、八女粘土層を貫通して灰青色硬砂を0.7mほど掘り抜いたところまで達している。底面標高5.6m。現在は湧水がない。覆土は黒色粘質土で、底面の上40cmの位置から双孔広口甕の完品1個体が出土した。

SE-1080 出土遺物 Fig.95・96

弥生土器がコンテナ 2 箱出土した。他に土製投弾 1 点があり、それ以外の図は全て弥生土器である。

395～402 は甕の口縁部片で「く」字形に屈曲するが、小片のため図の傾きは不確実。頭が丸く屈曲するものと、401 のように内面に明瞭な棱を持つものがある。器面が磨滅剥落するものが多いが、外面刷毛目、内面ナデ調整で、口縁横ナデ調整。397 は内面にも刷毛目を施す。403 は甕の底部で、平底で外底が窪む。404 は袋状口縁壺の口縁部片で外面丹塗り。内面は剥落する。405 も袋状口縁壺で、完存する胴部と口縁部片がある。頭部に三角形突帯を貼付し、口縁まで横ナデ。胴外面はミガキ、内面は刷毛目をナデしている。外面から口縁内面まで丹塗りを施す。406 は樽形土器か。内外面にミガキと丹塗りを施す。407 は瓢形壺であろう。外面に台形突帯と三角形突帯を貼付し横ナデ。突帯下にミガキを施し、外面を丹塗りする。内面はナデ調整。408 も瓢形壺で、外面に高い台形突帯と三角形突帯を貼付し横ナデ調整。外面は工具ナデの後ナデを加えて丹塗り。内面は磨滅が著しいか、指揮え後ナデ調整か。409 は広口壺で口唇肥厚し凹面をなす。内面に細かい横刷毛目が残る。410 は双口広口壺で完品。遺構図に出土状況を示した土器である。内外面に粘土帶の継ぎ目を留める。孔は口縁の相対する 2ヶ所にある。外面は刷毛目にナデを加え、内面は指揮えにナデを加える。411 は壺の底部片で磨滅する。412 は短頭壺で外面丹塗り。内面工具ナデ、口縁横ナデ。胎土精良である。413 はほぼ完形だが口縁を欠き、孔の位置は不詳。外面刷毛目、内面指揮え痕が一部残るが、器面の剥落が激しい。414 は鉢で、口縁は「く」字形に短く開く。外面細かい刷毛目、内面工具によるナデ、口縁横ナデ調整。415 は高環で、器表面が完全に剥げ落ちている。胎土精良で丹塗りの可能性が高いが不明。416 は环部が楕円形をなす高環で、底部を欠く。内外ヘラミガキだが単位は不鮮明である。脚内面にシリポリ痕とナデ痕が残る。胎土精良。417 は鉢である。外面ナデで丹塗り、内面工具ナデとナデ調整で指揮え痕が残る。418・419 は器台である。ともに二次加熱を受ける。420 は土製投弾である。

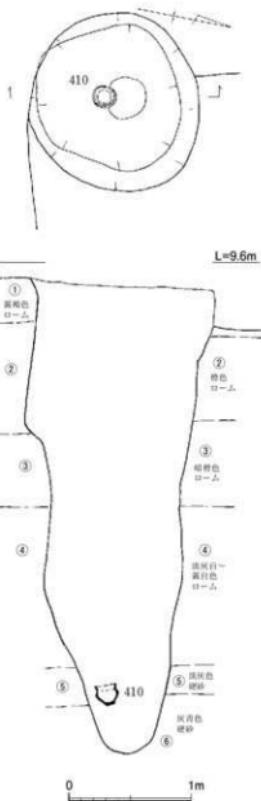


Fig.94 井戸 SE-1080 実測図(1/40)

以上の遺物のうち、407・410・413 は井戸の下層で出土しており、弥生時代中期末～後期初頭に位置づけられる。

以上の遺物のうち、407・410・413 は井戸の下層で出土しており、弥生時代中期末～後期初頭に位置づけられる。

井戸 SE-2011 Fig.97

2 区中央の北壁際に一部を検出し調査区を北へ拡張したが北端の一部は未調査である。東辺は擾乱に切られる。隅丸方形プランの井戸で、径 2.8 m。南東側に溝状の浅い窪みが取り付くが、井戸に伴うか不明。断面逆台形で、灰白色の八女粘土層を少し掘り下げたレベルを底面としており、深さ 2.8 m、底面標高 7.1 m を測る。底面は隅丸長方形プランで中央が皿状に窪む。壁面の数カ所には足場状の小さな段

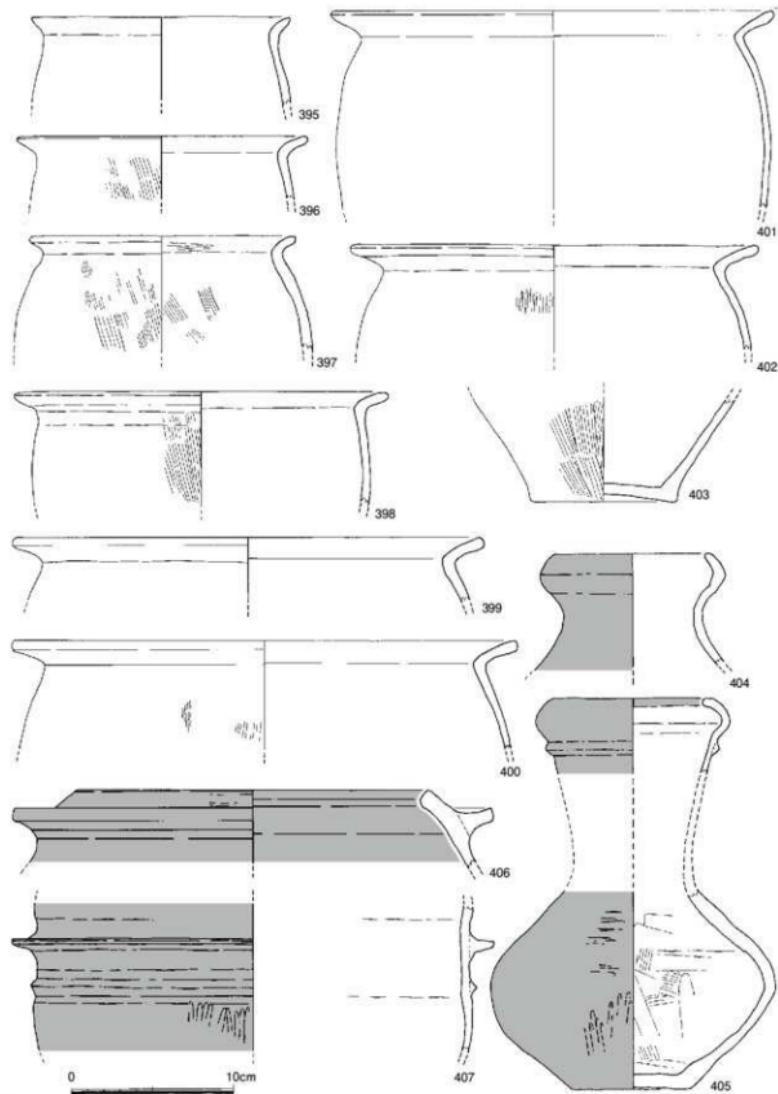


Fig.95 SE-1080 出土遺物実測図 I (1/3)

を設ける。覆土は上層が黒色粘質土、下層が暗褐色粘質土を主とし、調査時点での湧水はない。

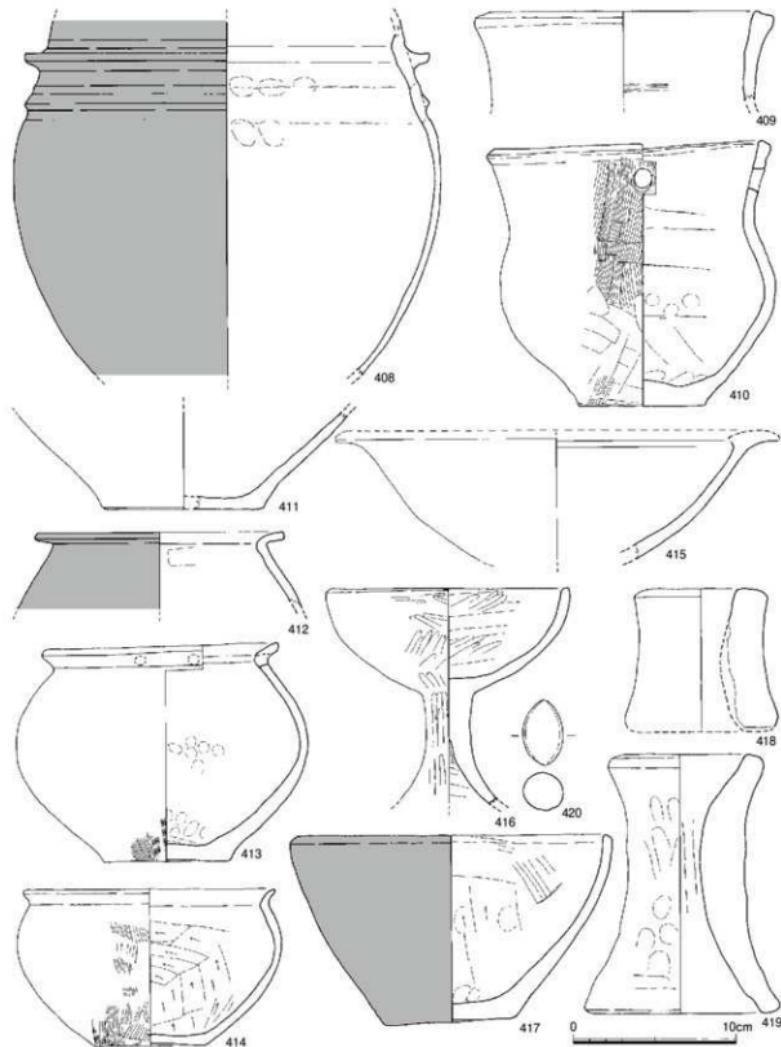


Fig.96 SE-1080 出土遺物実測図 II (1/3)

SE-2011 出土遺物 Fig.98

弥生土器、土師器、須恵器、瓦、石製品がコンテナ 4 箱出土した。

421～425は土師器の甕である。421は口縁部片で胴外面継刷毛目、内面ヘラ削り。422は厚手で小片。胴外面刷毛目、内面ヘラ削り、口縁横ナデ。423は底部を欠く。胴外面剥落、内面粗い刷毛目、口縁横ナデ。使用により赤変する。424は小型の甕で縦1/2が残る。外面刷毛目、内面ヘラ削り後ナデで粘土帶接合痕を残す。口縁内外横ナデ。425は外面に擬格子タタキ、内面は円弧文当て具痕があり刷毛目を加える。口縁内外横ナデ。**426・427**は土師器高坏の脚で、磨滅が著しいが外面は工具により面取りする。**428**は脚で、磨滅するが内面ヘラ削りでナデを加える。426～428は胎土精良。**429**は土師器鉢で約1/3が残る。口縁外面は指押え後ナデ、体部はヘラ削り。内面は削り後ナデを加える。

430は須恵器坏又は蓋でほぼ完存。1/2以上に回転ヘラ削りし、ヘラ記号を入れる。**431～436**は須恵器坏身で、蓋受けの立ち上がりは短く内傾する。431・435は底部に回転ヘラ削りを施し、他はヘラ切り未調整。

432と433を除きヘラ記号があり、433は底面に降灰する。以上の坏身はロクロ回転・ヘラ削り回転とも時計回りで、口径は11.2～9.6cm。**430・431・435・436**は完品又はほぼ完存する。**437**は須恵器横瓶で、体部上面と側面の三ヶ所にヘラ記号がある。**438**は須恵器甕の口縁部片。**439～441**は須恵器高坏の脚で、439は外面に沈線2条を回す。440は外面に薄く降灰、441は脚内面に厚く降灰を被る。

442は平瓦で、左側縁は面取りする。凹面は細かい布目と板状の模骨痕が残り、一部をナデ調整する。凸面は板状の工具で叩き、ナデを加える。橙褐色で、土師質焼成。胎土に砂粒が多い。

九州須恵器編年のIVb期に相当し、7世紀初頭頃の遺構か。

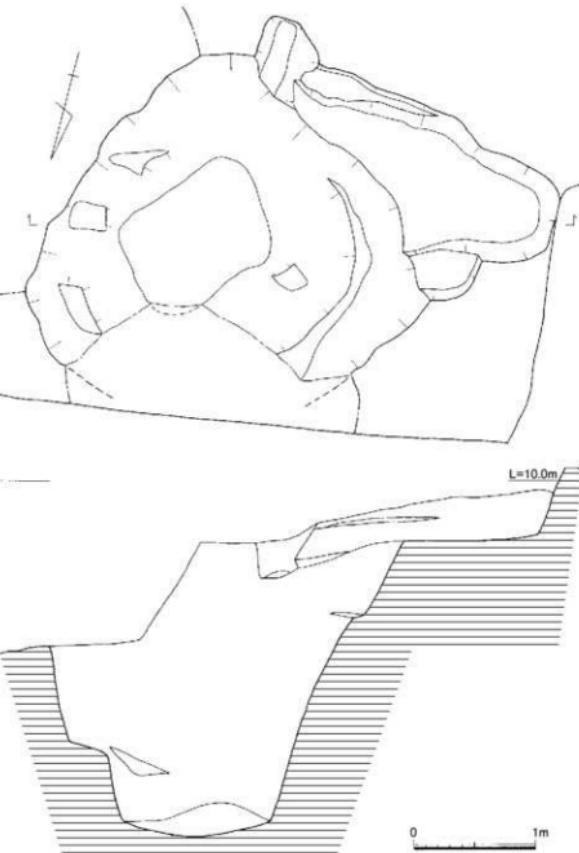


Fig.97 井戸 SE-2011 実測図 (1/40)

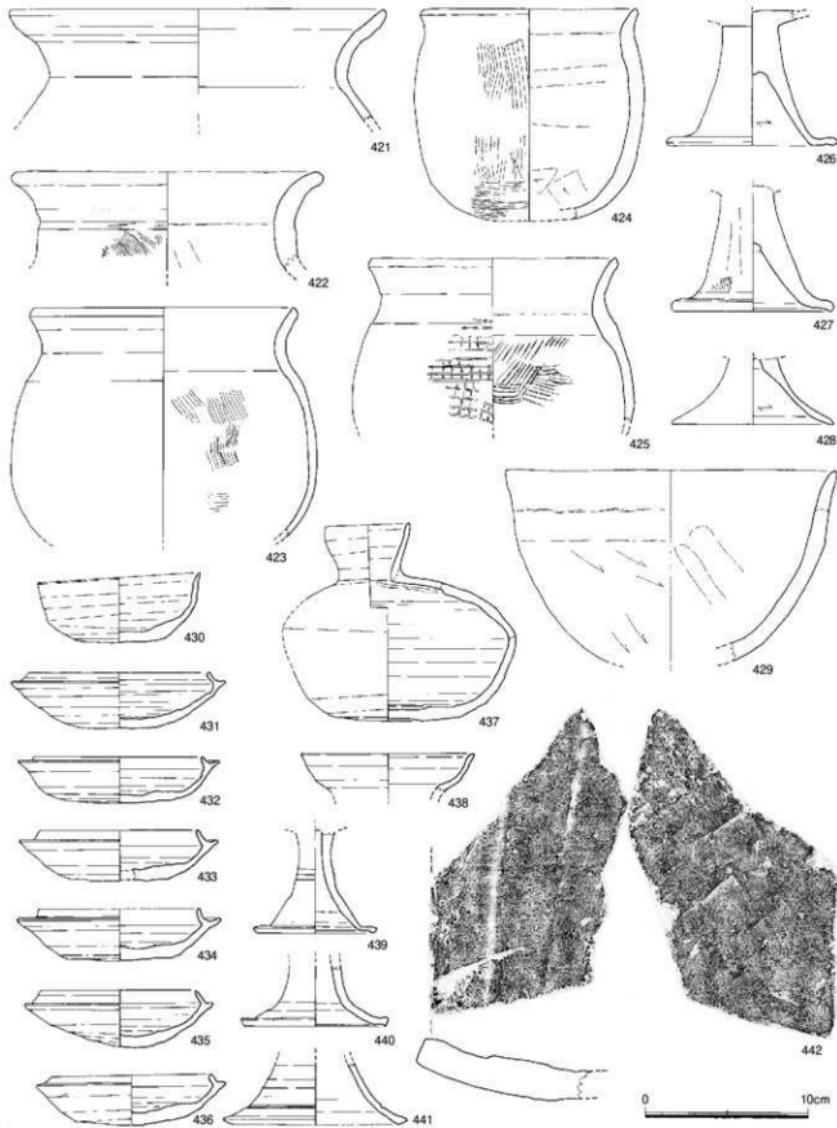


Fig.98 SE-2011 出土遺物実測図 (1/3)

井戸 SE-2043 Fig.99, PL.13

2区南西隅に検出した大型の井戸である。開田による段落ちの直下に位置しており、上部は1m前後削平されているものと考えられる。東西に長い楕円形プランで、長径4.8m×短径3.3mを測る。断面逆台形で

深さ2.1

mである。

南西辺の

深さ0.5

~1.0m

あたりに

テラス状

の段があ

る。底面も

楕円形ブ

ランで径

2.3×1.3

m。造構

面は明黄

褐色ロー

ム下部で、

灰白色ロ

ーム層中

に掘り込

んでいる。

覆土は暗

褐色粘質

土を主と

し、底面

の標高は

6.2mで、

現時点で

の湧水は

認められ

ない。

SE-2043出土遺物 Fig.100

弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶器、中国産陶磁器（龍泉窯系青磁・白磁・明代青花）がコンテナ1箱出土した。

443・444は明代龍泉窯系青磁碗である。体外面に蓮弁文、内底に圓線と印花文を施す。443は高台内側まで施釉し、外底は露

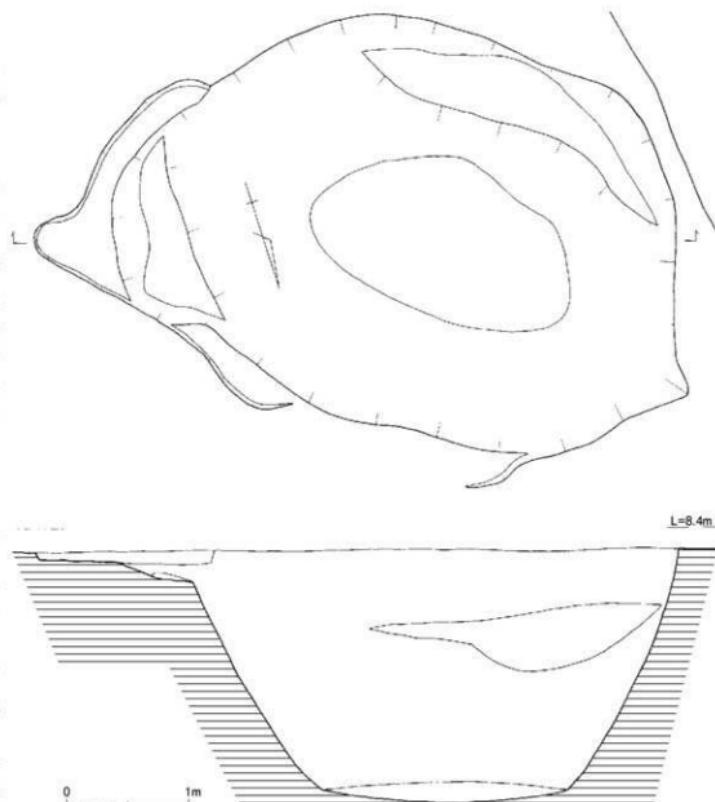


Fig.99 井戸 SE-2043 実測図 (1/40)

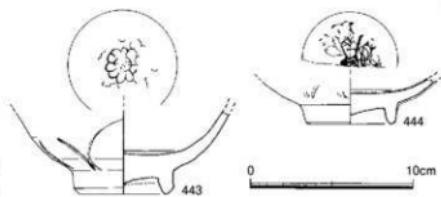


Fig.100 SE-2043 出土遺物実測図 (1/3)

胎である。444は外底を輪状に軸剥ぎする。

16世紀代の井戸であろう。

井戸 SE-2044 Fig.101, PL.13

2区SE-2043の北側に0.5mの間を置いて検出した井戸である。開田による段下にあり、最低1mは上部が失われていると考えられる。南北にやや長い円形プランで、径1.6m×1.4m。断面逆台形に掘り込み、暗橙色ロームと明黄～白色ロームの境で大きく抉れ、1.9m×1.6mの径に拡がる。深さ2.0m、底面は径0.9mの円形で平坦面をなす。灰白色ローム層まで掘り込み、底面標高6.2m。覆土は暗褐色粘質土を主とし、調査時点での湧水はない。

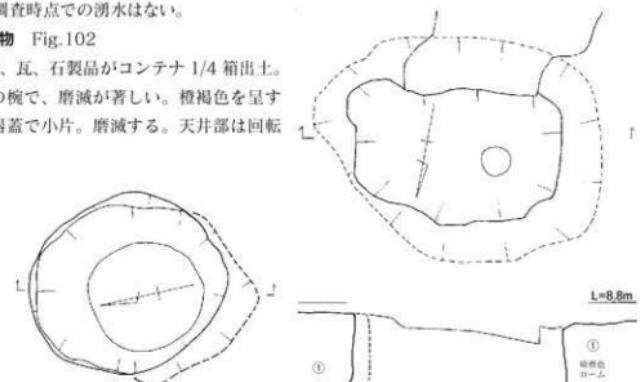
SE-2044 出土遺物 Fig.102

土師器、須恵器、瓦、石製品がコンテナ1/4箱出土。

445は土師器の椀で、磨滅が著しい。橙褐色を呈する。446は須恵器蓋で小片。磨滅する。天井部は回転ヘラ削りを加え

る。口縁端部は断面三角形に下方へ肥厚する。

他に縄目タタキの平瓦片等がある。奈良時代の遺構であろう。



井戸 SE-2046

Fig.103, PL.13

2区の西南部に検出した井戸である。遺構面は工場により大きく削平されている。崩壊のおそれがあるため、重機により断ち割り調査を行った。東西に長い隅丸方形プランで、径2.4m×1.8m。黄白色ロームの八女粘土層まではほぼ垂直に掘り下げ、

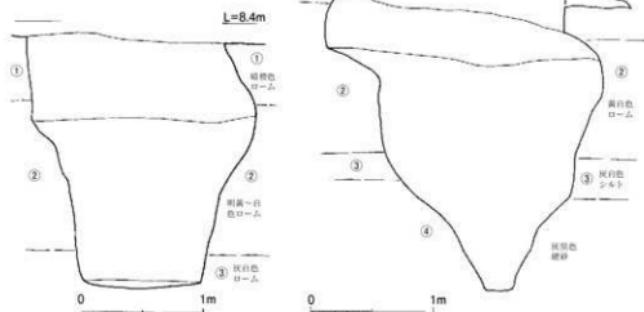


Fig.101 井戸 SE-2044 実測図(1/40)

Fig.103 井戸 SE-2046 実測図 (1/40)

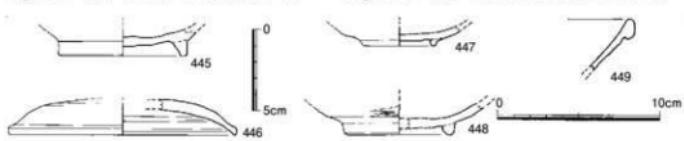


Fig.102 SE-2044 出土遺物実測図(1/3)

Fig.104 SE-2046 出土遺物実測図 (1/3)

灰黒色の硬砂層をすり鉢状に掘り込み底面は小さな円形平坦面をつくる。深さ 3.2 m を測り、底面の標高 5.5 m。黄白色ローム上部で大きく壁面が抉れており、現在も崩壊が進行している。覆土は黒色粘質土を主とし、調査時点での湧水はない。井戸底の粘質土を採取し土壤分析を実施した。

SE-2046 出土遺物 Fig.104

弥生土器、土師器、瓦器、須恵器、中国産陶磁器（白磁・青白磁）が少量出土した。

447・448 は瓦器椀の底部小片である。高台は低く丸い。447 は磨滅して調整不明。448 は体部内外へラミガキだが、ミガキの単位は不鮮明。底部へラ切り未調整で、高台脇を横ナデ調整。449 は白磁碗で、博多分類のⅣ類である。他に青白磁の小片などがある。

12世紀前半代の井戸であろう。

井戸 SE-2050 Fig.105, PL.13・14

2区南西部に検出した。SE-2046 の西側 3 m に位置する。弥生大溝 SD-2030・溝状土坑 SK-2031・土坑 SK-2061 等と切り合い、覆土が近似するため検出面でのプラン確認が困難であった。従って平面形が今ひとつ明確でないが、およそ楕円形プランと推定され、 $2.1\text{m} \times 1.4\text{m}$ 前後でやや南北に長い。造構面は削平されており、黄褐色の上部ローム層は存在しない。崩壊のおそれがあるため、重機により断ち割り調査を行った。黄白色ロームの八女粘土層までほぼ垂直に掘り込んだとみられるが、壁面が崩壊してしまっている。灰黒色の硬砂層に達したところで径 75 ~ 85 cm の楕円形坑に改め、深さ 1.2 m のすり鉢状に掘り込む。検出面から深さ 4.2 m で、底面の海拔標高は 4.9 m を測る。覆土は黒色粘質土を主とする。井戸底の粘質土を土壤分析した。調査時点での湧水はなかった。楕円形坑の上部から完品を含む土器がまとめて出土した。

SE-2050 出土遺物 Fig.106

土師器、須恵器、石製品がコンテナ 5 箱出土した。

450 は土師器壺の小片で、底部は回転ヘラ削りである。スリップをかける。451 は小型の甌で完品である。胴外面刷毛目、内面へラ削り、口縁内外横ナデ調整である。内底には指揮え痕が残る。外底は使用により磨滅する。452 は土師器甌で、口縁部の破片である。外面刷毛目、内面へラ削り、口縁横ナデ調整。他に未図化の土師器甌 2 個体がある。453・454 は土師器鉢で、胴の二ヶ所に把手を付けるが正対せず、やや偏った位置に対峙する。胴外面刷毛目、内面は上半がへラ削りで下半は指揮えをナデ調整。口縁は内面に横刷毛目後、内外を横ナデ調整する。453 は外面に煤が付

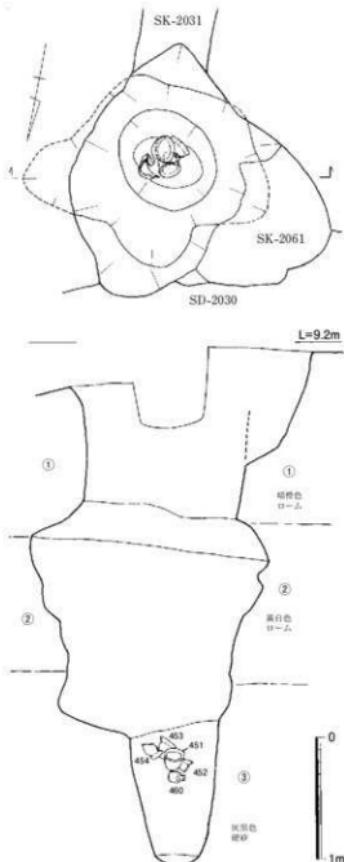


Fig.105 井戸 SE-2050 実測図 (1/40)

着する。455 は土師器移動式カマドの上端部である。外面刷毛目、内面ヘラ削りで上端部は横ナデ調整。内面に煤が付着する。456 はカマドの底の一端である。焚き口に面する部分は焼けて煤が付着する。

457 は須恵器坏で小片。458 は須恵器高台付坏で、高台は低く外寄りに付く。459 は須恵器底部で、鉢か。内面は横ナデ後ナデを加える。外底の端に高台を雜に貼り付ける。460 は須恵器小壺で口縁が欠ける。体部の下半から外底に回転ヘラ削りを行う。

8世紀後半～9世紀初頭頃の井戸であろう。

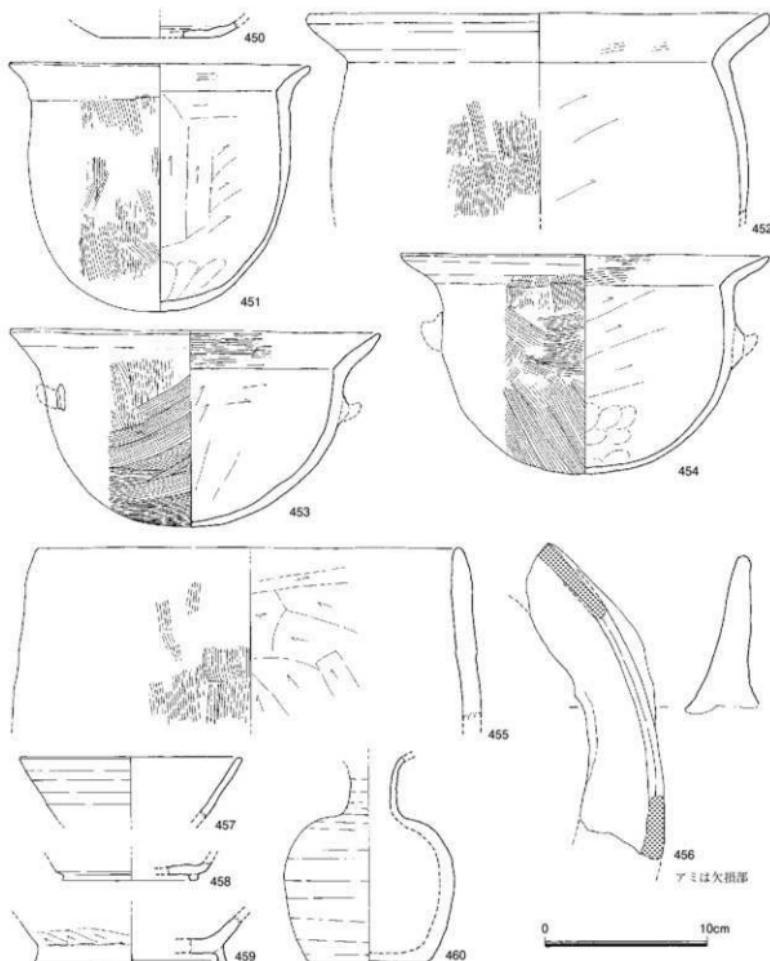


Fig.106 SE-2050 出土遺物実測図 (1/3)

井戸 SE-2053 Fig.107、PL.14

2区南半部に検出した。構造は削平され、黄褐色ロームは残存していない。崩壊のおそれがあつたため、重機を用いて断ち割った。平面は歪な楕円形プランで、径 $1.3m \times 1.2m$ 。黄白色ロームの八女粘土層までほぼ直に壁が落ち、灰黒色硬砂層を逆円錐形に掘り込み小さな底面をつくる。検出面から深さ $3.8m$ を測り、底面標高 $4.9m$ 羽。黄白色ローム（八女粘土）の上部で壁面が大きく抉れており、調査時にも崩壊が進行した。覆土は暗褐色粘質土を主とし、調査時点では湧水しない。

SE-2053 出土遺物 Fig.108

土師器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、中国産白磁、朝鮮王朝白磁がコンテナ1箱出土した。

461は朝鮮王朝白磁である。底部小片で、白色の胎土に薄い緑味のある透明釉を全軸する。他に口禿げの白磁等が出土している。中世後期の井戸であろう。

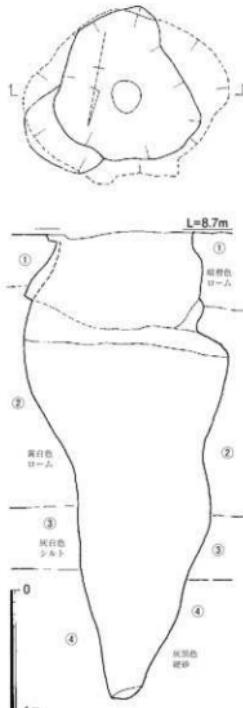


Fig.107 井戸 SE-2053 実測図(1/40)



Fig.108 SE-2053 出土遺物実測図(1/3)

井戸 SE-2056 Fig.109、PL.14・15

2区の南東隅に検出した井戸である。SD-2040に切られている。崩壊するおそれがあつたため、重機で断ち割り調査した。いびつな楕円形プランで、径 $1.0m \sim 0.9m$ 。黄褐色ロームは削平により存在せず、黄白色ロームの八女粘土層を円筒形に貫き、灰青色硬砂層まで掘り込んで小さな底面をつくる。黄白色ローム上部が崩壊して大きく壁面が抉れている。深さ $2.6m$ で、底面標高 $5.8m$ 。現在の湧水はない。覆土は黒色粘質土を主とする。祭祀土器の一括投げ込みが上下2回以上行われており、底面上 $20cm$ のレベルで1回、底面から $70 \sim 90cm$ のレベルでは壺類が上下にばらついて出土しており、2回以上の投げ込みがあったものと考えられる。

SE-2056 出土遺物 Fig.110・

111、PL.28

弥生土器がコンテナ5箱出土した。國は全て弥生土器で、463～468は下層出土で464・465・467は一括出土、469～472は上層出土の一括土器で、いずれも完品か一部の欠落に留まる。

462～464は壺で、464は口

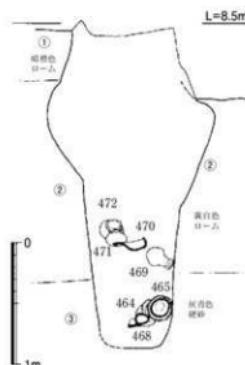
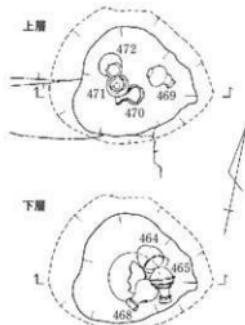


Fig.109 井戸 SE-2056 実測図 (1/40)

縁が1/4欠けるのみで、他は破片資料である。いずれも口縁が「く」字形をなし、内面の稜は甘い。胴外面刷毛目、内面ナデで内底には指壓痕が残る。口縁は内面に刷毛目を施した後、全体を横ナデ調整。465～470は袋状口縁壺である。468までが下層、469・470は上層出土で、比較すると上

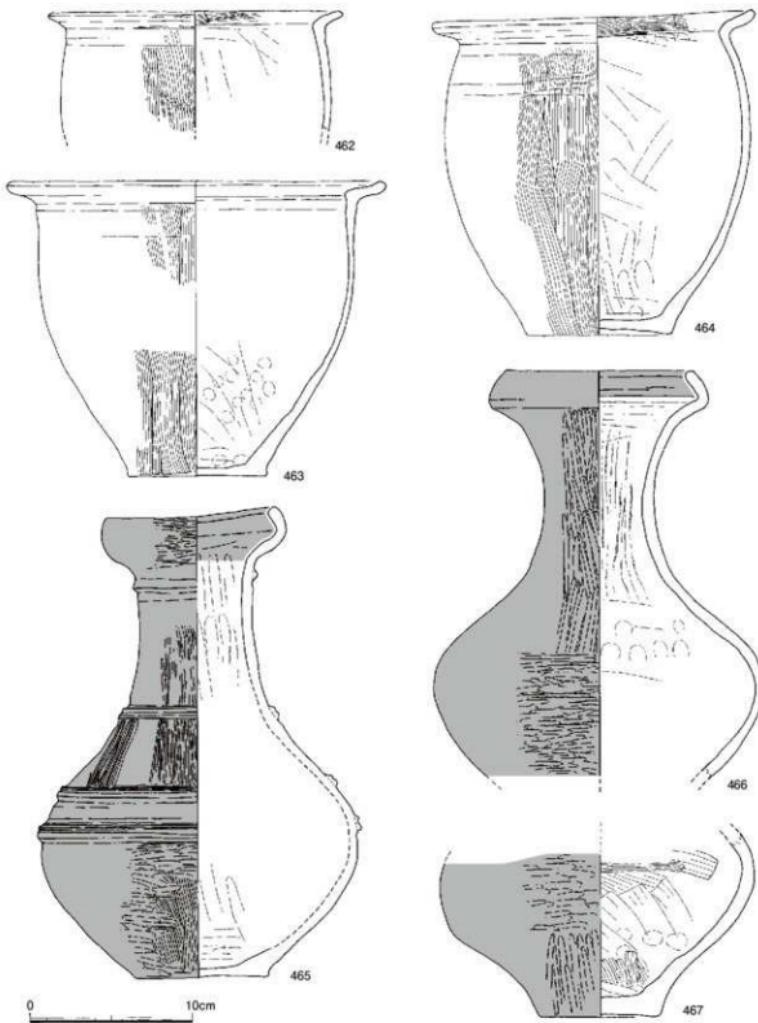


Fig.110 SE-2056 出土遺物実測図 I (1/3)

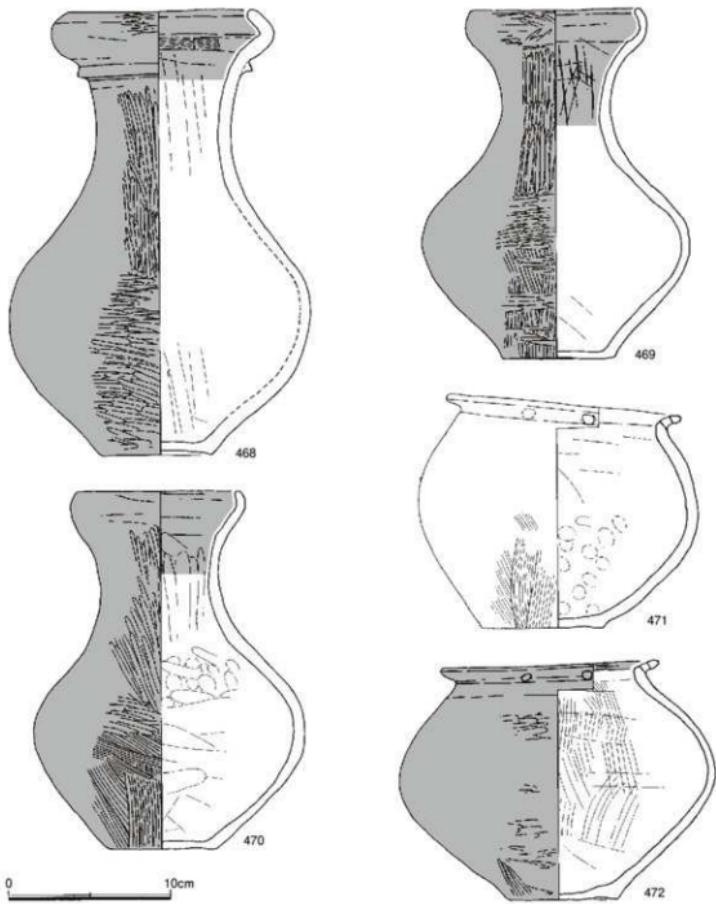


Fig.111 SE-2056出土遺物実測図II (1/3)

層土器は口縁がやや開く点、外底が窪まない点などが異なっている。外面に刷毛目後ミガキを施し、口縁内面まで丹塗りを施す。内面は頸部にシボリ痕、胴に指押え痕を残し、ナデまたは工具ナデ調整を行う。465と468は口縁直下に三角形突帯を貼付するほか、更に465は胴部にM字突帯を貼付し、肩部に放射状暗文帯を不等間隔に配置しており装饰性が高い。袋状口縁壺は破片資料が他に6点ある。471・472は短頭壺とともに上層一括出土。口縁の孔は2孔一対を対峙して配置する。471は磨滅し、外面刷毛目、内面指押さえと工具ナデの痕跡が残るのみ。472は外面ミガキで、口縁内面まで丹塗り、内面は粗い刷毛目調整で内底に指押さえ痕が残る。外底はヘラ削りを加える。

弥生時代中期～後期初頭頃の井戸である。

井戸 SE-3020 Fig.112, PL.15

3区中央のやや西寄りで検出した。南北を攪乱坑に破壊されている。隅丸方形プランで、径1.3m × 1.1mを測る。黄褐色の上部ロームは削平により存在しない。白色ローム（八女粘土層）の中途まで円筒形に掘り下げて平坦面を造り、ここから逆円錐形に掘り下げて丸底とする。検出面から深さ3.5m、底面標高6.0mで、灰色硬砂層に40cmほど掘り込んでいる。壁面に大きな崩壊は認められない。覆土は黒色粘質土で、現在は湧水がない。

SE-3020 出土遺物 Fig.113

弥生土器がコンテナ3箱出土した。

図は全て弥生土器である。

473・474は「く」字形口縁の甕で、頸部内面の棱は明瞭である。外面刷毛目、内面ナデ、

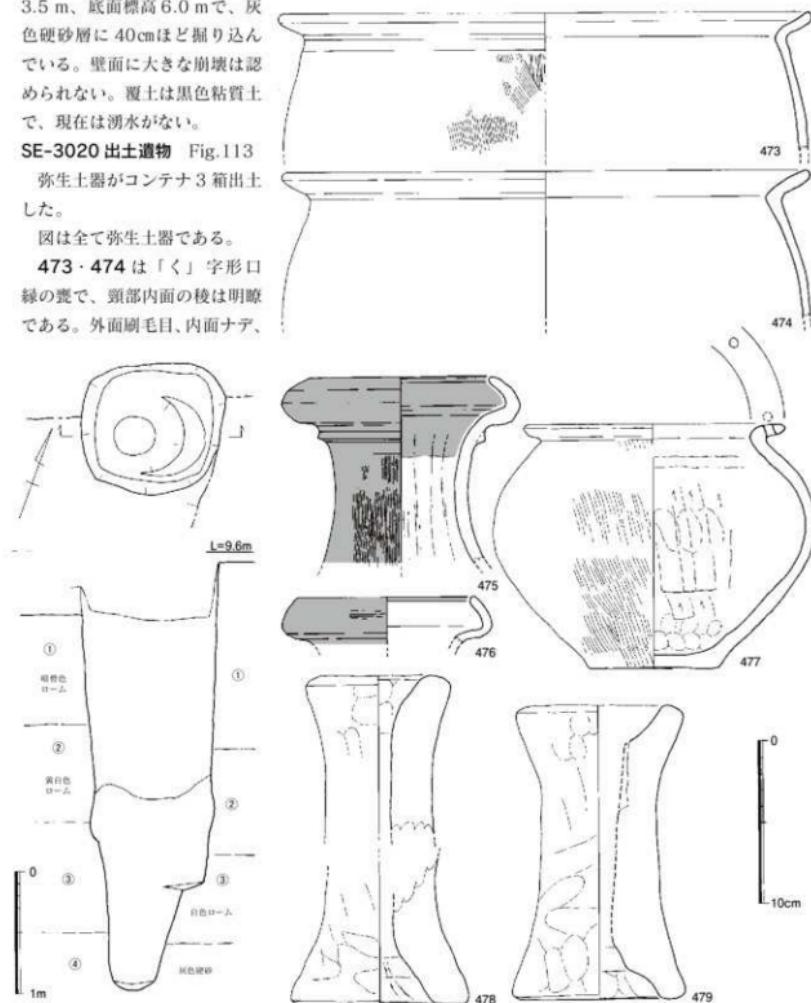


Fig.112 井戸SE-3020実測図(1/40)

Fig.113 SE-3020 出土遺物実測図 (1/3)

口縁横ナデ調整。474は内面に刷毛目痕が残り、473は外面に煤が付く。475・476は袋状口縁壺で、外面刷毛目のちミガキ、内面シボリ痕をナデ、口縁横ナデ調整。外面へ口縁内は丹塗りである。477は短頸壺で口縁の1/3を欠く。穿孔は2孔一対で計4孔。外面刷毛目のちナデ、内面は砂粒が動くほど強いナデ、内底に指搾え痕がある。口縁横ナデ、外底は無調整。478・479は器台で、棒状の心材に巻き付けて整形し、ナデ仕上げ。二次加熱を受けている。

弥生時代後期初頭頃の井戸であろう。

井戸 SE-3025 Fig.114, PL.15

3区北東隅に検出した井戸で、北東側は一部調査区外にある。造構面が北へ下がっていく落ち際に位置する。南北にやや長い円形プランで、径1.8m～1.5m。逆円錐形に掘り込んで行き、底面は丸く造る。黄白色ローム（八女粘土層）を貫通し、灰色硬砂層に1.6m食い込んでいる。造構面からの深さ4.3mで、底面標高4.5m弱。壁面は大きく波打つが、崩壊は認められない。覆土は黒色粘質土を主とし、調査時点での湧水はない。底から1.2m浮いた位置から完品の上器3点（482・485・489）が出土した。

SE-3025 出土遺物 Fig.115～117

弥生上器、石製品がコンテナ10箱出土した。須恵器片が混入する。

503を除き、図は全て弥生上器である。

480・481は「く」字形口縁の壺で、480は接合完形、481は図上復元である。外面刷毛目、内面刷毛目のちナデ調整。内底に指搾え痕が残る。口縁横ナデ。482は小振りな壺で接合完形。外面は細かい刷毛目、内面ナデ調整で刷毛目を数回加える。口縁内も刷毛目を加え、最後に口縁内外横ナデ調整。483～486は袋状口縁壺である。483は頭部に三角形突帯を貼付し、外面丹塗り、内面は指搾え痕のみ残り磨滅する。口縁横ナデ。484も頭部に三角形突帯を付けるが器壁剥落する。485は完品。頭が短い。外面は刷毛目後端にミガキを施し、底部付近は暗文風にミガキを入れる。内面はナデ調整で、頭部と底部に指搾え痕が残る。口縁は丁寧に横ナデ調整する。486は口と胴の一部を欠く。外面刷毛目のちナデ調整か。内面は剥落し指搾え痕が残るのみ。487は瓢形壺で接合完形である。頭部に三角形突帯、胴上位に高い台形突帯と低い三角形突帯を貼付し横ナデ調整。外面は磨滅し調整不明である。内面ナデ調整で、その前に頭部横刷毛目。口縁横ナデ。488も瓢形壺で頭部の突帯が487より低い。外面刷毛目のち突帯と口縁を横ナデ。内面は肩部を指搾えし、全体ナデ調整。489は完品の瓢形壺である。頭部の突帯は三角形に近い台形で、三角形突帯は省略し、貼付が入念でなく突帯下に隙間がある。外面は粗刷毛目で、底部付近はナデと刷毛目を重ねる。内面ナデ調整で、突帯裏と内底は指搾え。突帯・口縁は横ナデ。490は壺で、内外磨滅するが、頭部に三角形突帯と指搾えを残す。491は小型壺ではぼ



Fig.114
井戸 SE-3025 実測図 (1/40)

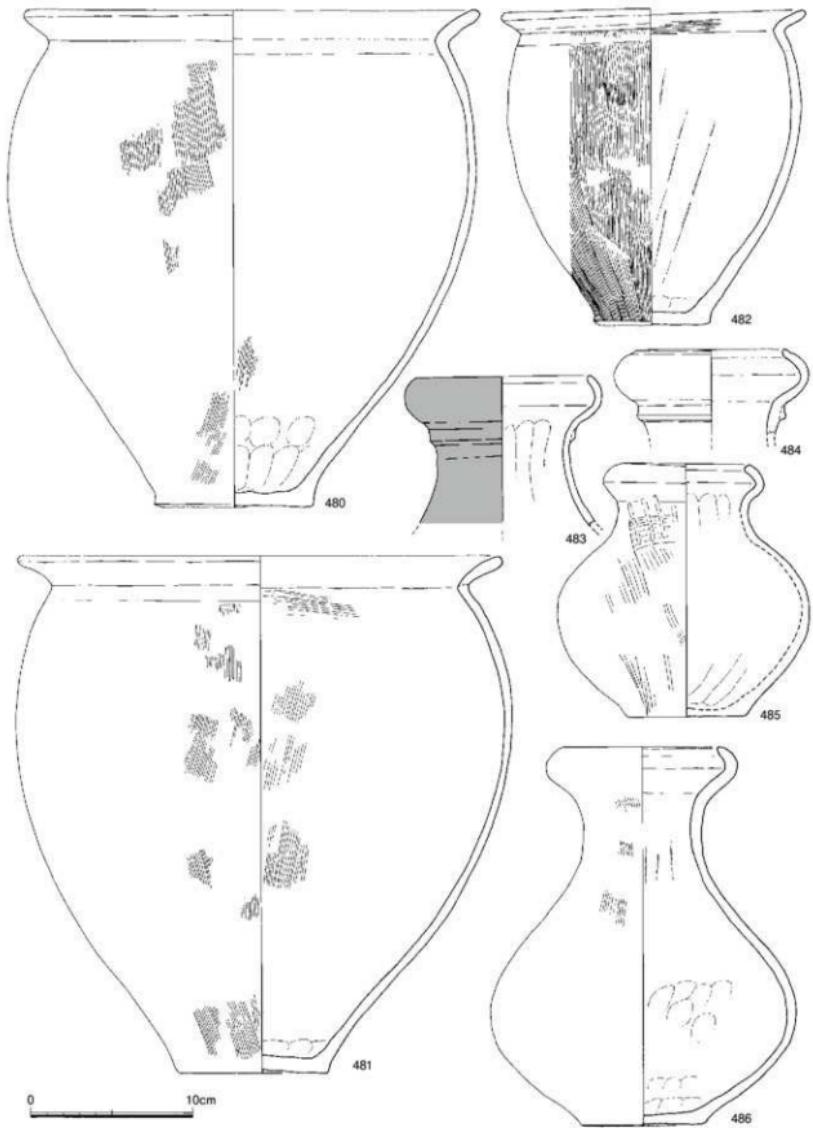


Fig.115 SE-3025 出土遺物実測図 I (1/3)

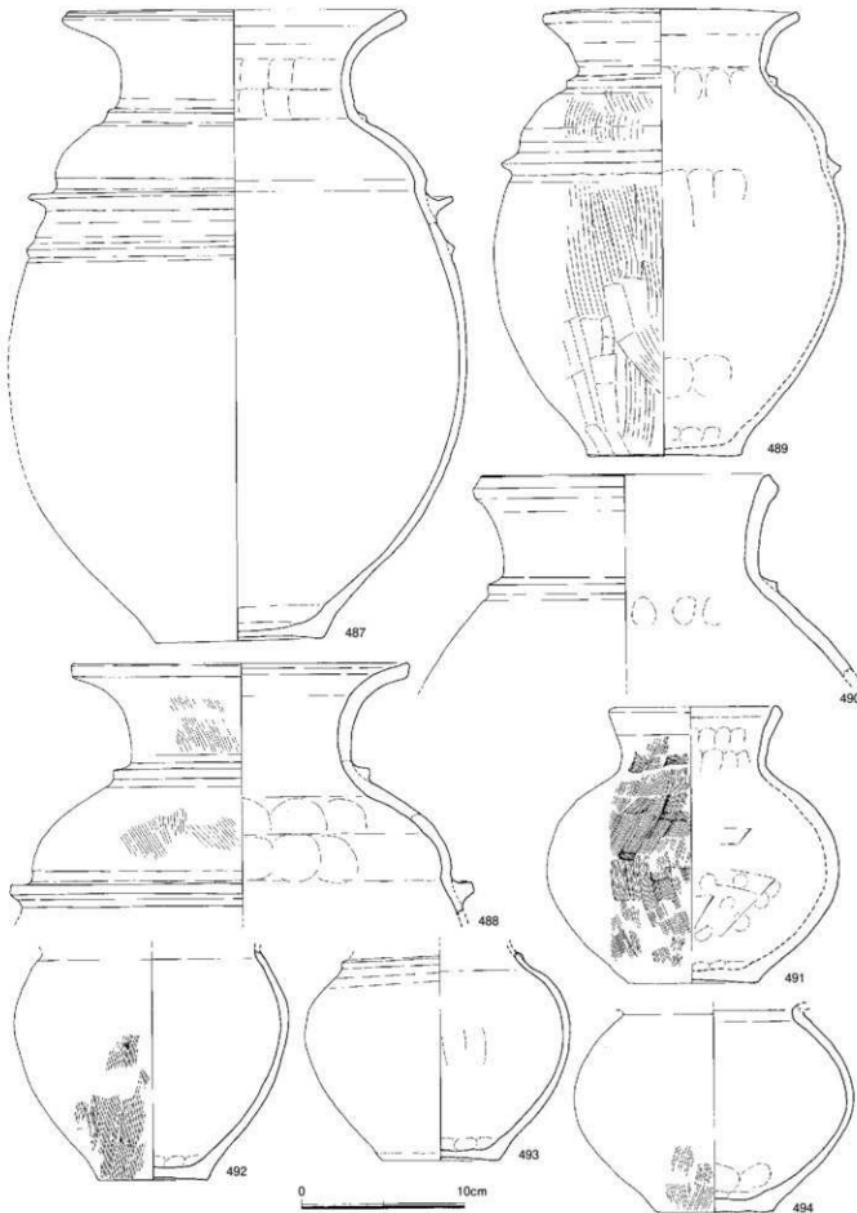


Fig.116 SE-3025 出土遺物実測図 II (1/3)

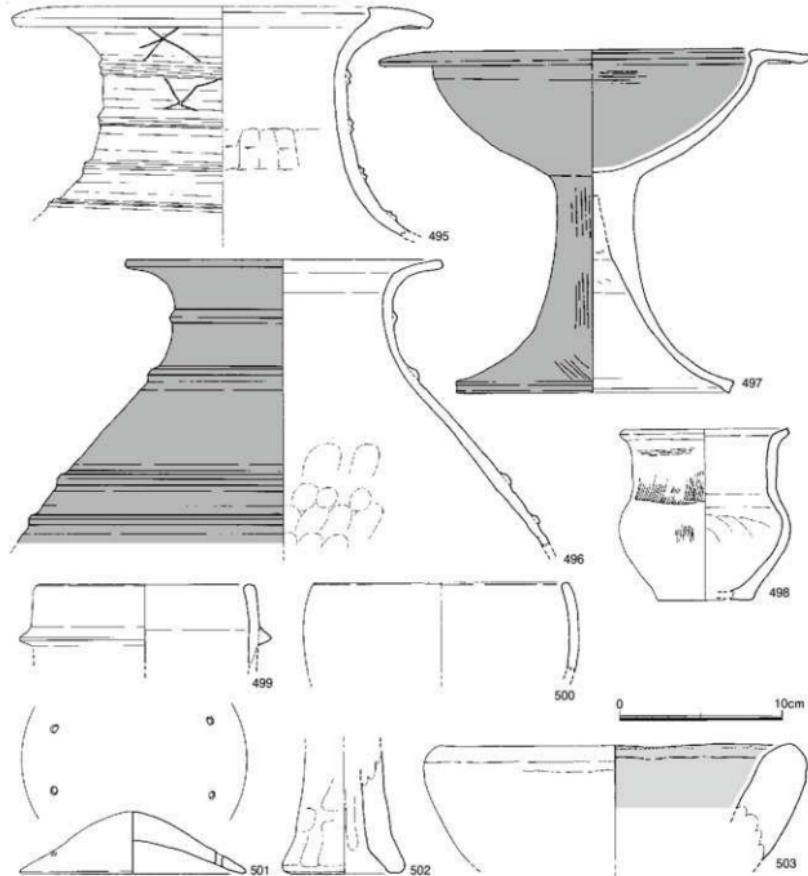


Fig.117 SE-3025 出土遺物実測図Ⅲ(1/3)

完存する。外面刷毛目、外底ナデ、内面指押えのち工具ナデ・ナデ調整。口縁横ナデ。**492** も小型壺で口縁を欠く。上端に横ナデ痕があり、頸部に突帯が付くと思われる。外面刷毛目、内面剥落するがナデ調整か。内底に指押え痕が残る。**493** も小壺で頸部に三角形突帯を貼付する。内外磨滅が著しく、内面に指押え痕を残すのみ。**494** は短頸壺で口縁を欠く。磨滅するが外面刷毛目、内面ナデ、内底指押え。**495** は鋤先口縁の壺で、頸部に4条のM字突帯を貼付し横ナデ。ヘラ先で3ヶ所に「×」の文様を入れる。内面指押えのち工具ナデ調整。**496** も壺で外面にM字突帯を4条貼付し丹塗りする。内面は磨滅しているが指押え痕が残る。**497** は高環である。脚内面を除いて全面にミガキと丹塗りを施す。口縁上面に放射状に暗文を入れるが不鮮明である。脚内面はヘラ削り。**498** は小壺で外面刷毛目、内面ナデ調整。

499は器台にしては器壁が薄い。外面に突帯が付くが磨滅が著しい。500は鉢の小片である。磨滅が著しいが、外面刷毛目、内面ナデ調整。501は短頸壺の蓋で、ほぼ完存する。相対して2孔×2孔を開ける。ナデ調整。502は器台で小片のため天地不明。503は取瓶であろう。焼けて赤変しており脆い。内面は黒青色に変色する。蛍光X線分析の結果、内面から鉛の成分が検出された。

弥生時代後期前葉墳の井戸と考えられる。

井戸 SE-3052 Fig.118、PL.15

3区南東部の東へ張り出した調査区の東端に検出した井戸である。東端の一部が調査区外にある。東西に長い不整梢円形プランで、東西推定3.4m、南北2.6mを測る。すり鉢状に大きく掘り下げる、底面は径0.6m～0.75mの小さな梢円形平坦面をつくる。八女粘土層を貫通し、灰黒色硬砂層を1.5mほど掘り下げている。遺構検出面から深さ4.0mで、底面標高は4.9m。壁面の崩壊は認められない。覆土は灰褐色粘質土とロームが混じった土で、人為的に埋め戻されたと考えられる。湧水はなかった。

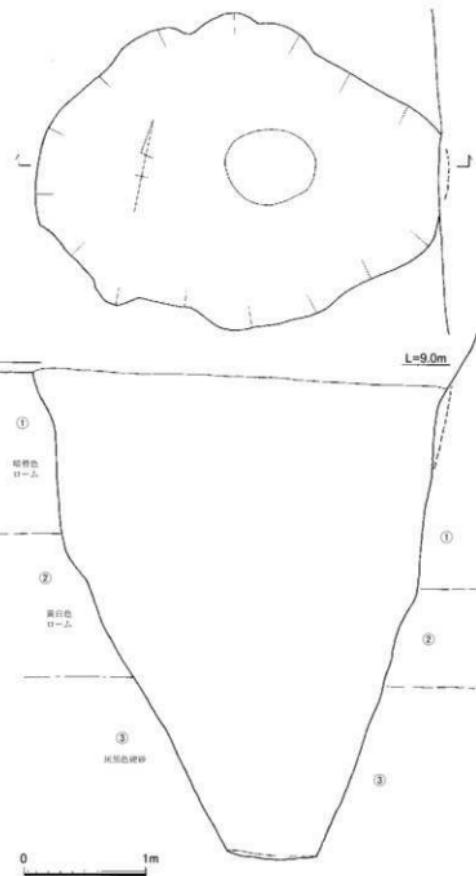


Fig.118 井戸 SE-3052 実測図 (1/40)

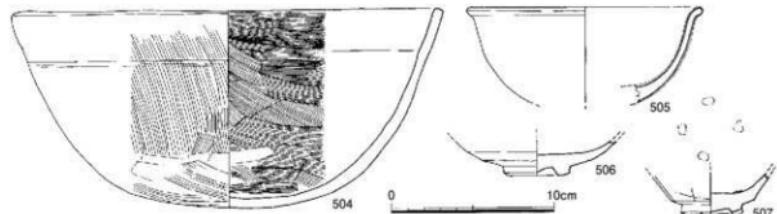


Fig.119 SE-3052 出土遺物実測図 (1/3)

SE-3052 出土遺物 Fig.119

土師器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、中国産陶磁器（龍泉窯系青磁・明代白磁）、瓦、石製品がコンテナ1箱出土した。近世施釉陶器が混入して出土している。

504は土師質土器の鍋で、ほぼ完存する。外面刷毛目調整で、頸部に横刷毛目を一周して口縁を分ける。内面刷毛目で内底ナデ調整。口縁端部横ナデ。外面に煤が付着する。505は明代龍泉窯系青磁碗で、深緑色釉を全軸する。506は明代白磁皿で、高台脇以下は無釉。内底が使用により磨滅する。507は明代白磁多角杯で、高台の4ヶ所に抉りを入れる。乳白色釉で体部下半は無釉。内底に目痕が付く。

國化していないが、他に糸切り底の土師器皿、土師質土器すり鉢が出土している。15世紀代の井戸であろう。

井戸 SE-3053 Fig.120, PL.15

3区のSE-3052の西に接し、SE-3052に切られている。一部を擾乱溝に切られる。不整な円形プランの井戸で、径2.4m。暗橙色ロームを円筒状に掘り下げ、軟弱な黄白色ローム（八女粘土層）に達したところで径を狭め、灰色硬砂に達したレベルで掘り下げをやめ平坦面をつくっている。平坦面は径0.9m～1.1mの楕円形で、東寄りに径50cm深さ15cmほどの水溜めを設けている。遺構検出面から最深部まで深さ3.2mを測り、底面の海拔標高は5.7m。壁面に大きな崩壊はない。灰褐色粘土とローム土の混じった土で埋められている。調査時には湧水はなかった。

SE-3053 出土遺物 Fig.121

弥生土器、土師器、須恵器、石製品、曲げ物の蓋、獸骨がコンテナ3箱出土した。獸骨は付.3(209頁)参照。

508は土師器甕で、ほぼ完存する。口縁は「く」字形に折れる。胴外面刷毛目で外底ナデ、内面ヘラ削りで口縁と内底に刷毛目を加える。口縁横ナデ調整。赤変し外面の一部に煤が付着する。509も土師器甕で底部を欠く。外面と口縁内に刷毛目、内面ヘラ削りし、内底は指押えのちナデ調整。口縁横ナデ。同様の土師器甕は他に3個体が出土している。510は土師器鉢で、ほぼ完存する。外面は粗い刷毛目、内面は指押えを工具によりナデ調整し、雜にヘラミガキを加える。口縁の対応する2ヶ所に焼成後に外から小さく穿孔している。外面にタール状の煤が付着しており、外底は輪状に煤が剥げ落ちる。孔に釣り手を付け、カマド等で煮炊きに用いた状況を想定しうる。511は土師器鉢である。外面刷毛目のちナデ、内面ヘラ削りのちナデ調整。外面に煤が付着する。512は土師器杯で底部へラ切り。灰褐～橙褐色で、口径13.0cm。

513は須恵器高杯の脚で、螺旋状のシボリ痕が残る。

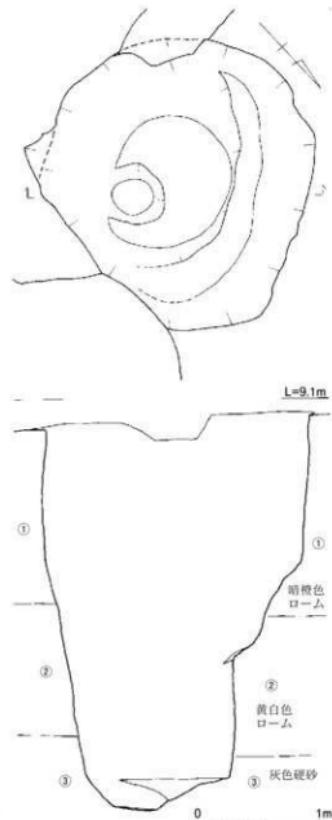


Fig.120 井戸SE-3053実測図(1/40)

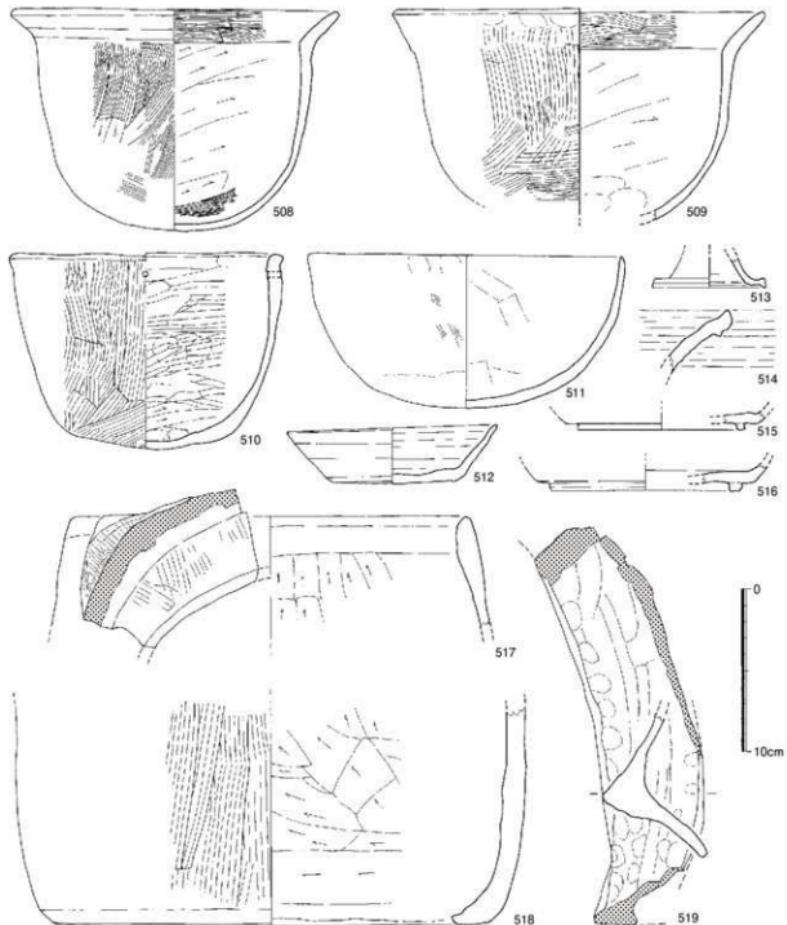


Fig.121 SE-3053 出土遺物実測図 (1/3)

514は須恵器甕の口縁部小片で、口縁直下に三角形突帯を回す。515・516は須恵器高台付き環で、断面方形の高台が底部のやや内寄りに付く。

517～519は移動式カマドで、アミで示した部分は削れている。517は焚き口の上部で、外面は刷毛目のちナデ、内面はヘラ削り。上端は横ナデする。底部分は欠けている。518は焚き口ではない部分の底部片である。外面刷毛目、内面ヘラ削り、接地面はヘラ削り後ナデ調整。内面は黒く変色する。519は焚き口の底部分で、指押えで整形しナデ調整する。

8世紀前半頃の井戸であろう。

井戸 SE-3054 Fig.122, PL.16

3区南東のSE-3053の西に5m離れて検出した井戸である。調査区南壁にかかつており、壁面を保護するため南半は大きく掘り残した。擾乱溝が井戸中央を東西に横断するが、井戸上部の破壊に留まる。東西に長い梢円形プランをなす井戸で、長径3.6m、短径は2.8m程度となる。すり鉢状に掘り下げており、白色ロームに達したところで一旦平坦面をつくり、さらに灰黒色硬砂層を50cmほど掘り下げて、円形の平坦な底面を設けている。造構検出面からの深さは3.4mを測り、底面の標高は5.6mである。壁面に大きな崩壊痕は認められない。覆土は灰褐色粘質土と地山ロームブロックの混在土で、人為的に埋め戻しているものと考えられる。調査時の湧水はなかった。

SE-3054 出土遺物 Fig.123

土師器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、中国産陶磁器（明代龙泉窯系青磁・白磁）、朝鮮王朝陶磁器、瓦、石製品がコンテナ1箱出土した。

520は土師器小皿の小片で、底部糸切りである。復元口径7.4cm。521は土師器坏で、底部糸切りである。復元口径12.2cm。522も土師器坏で、底部は糸切り。復元口径は13.2cmである。

523は朝鮮王朝陶器碗の底部片である。胎土は緑味のある灰色で、黄味のある深緑釉を全軸し、高台は釉剥ぎする。内底と高台に3ヶ所の目痕が付く。524は朝鮮王朝陶磁器の白磁碗である。胎土は乳白色で、白潤釉を全体に施釉し、内底に目痕が付く。復元口径10.2cm。

16世紀代の素掘り井戸と考えられる。

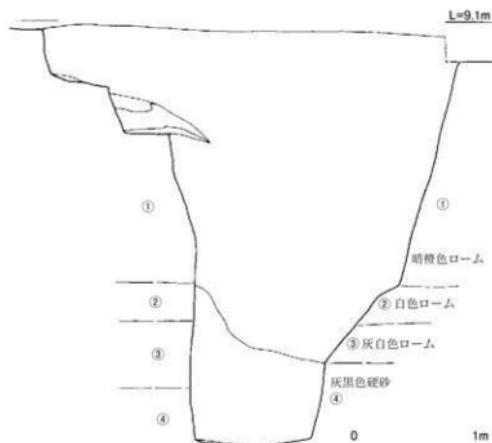
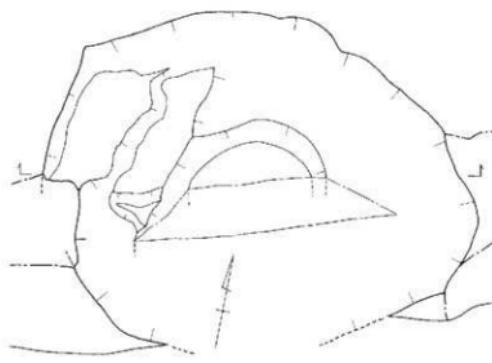


Fig.122 井戸 SE-3054 実測図 (1/40)

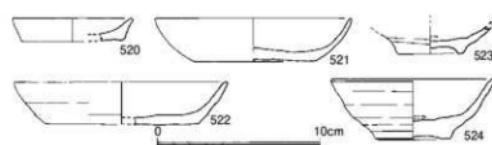


Fig.123 SE-3054 出土遺物実測図 (1/3)

井戸 SE-3058 Fig.124

3区南半部の中央に検出した井戸である。中央を近世溝が横断しており、この部分は未調査である。不整な円形プランをなし、径3.7m前後である。遺構面が削平を受けており、黄褐色の上部ロームは消失している。すり鉢状に大きく掘り下げ、灰青色硬砂層に少し食い込んだところで小さな円形の平坦面をつくり底面としている。遺構検出面からの深さは2.9mで、底面標高は5.6m強を測る。壁面は②黄白色ロームの上部で少し抉れているが、他に大きな崩落は認められない。覆土は灰褐色粘質土に地山ロームブロックを多く含んでおり、人為的に埋め戻されたと考えられる。調査時点での湧水はなかつた。

SE-3058 出土遺物 Fig.125

土師器、須恵器、国産陶器、石製品が少量出土した。

525は土師器小皿で磨滅する。底部糸切りで、復元口径7.0cmである。526は土師器环で、口縁を欠く小片である。底部糸切りで、板圧痕が付く。

527は陶器すり鉢で、口縁部の小片である。口縁端部が肥厚し、断面三角形をなす。体部内面に6本一組のスリ目を刻む。赤味のある暗褐色を呈する。備前焼編年のIV b期。

出土遺物が少ないがSE-3054と覆土等の状況が似ており、15世紀代の素掘り井戸と考えられる。

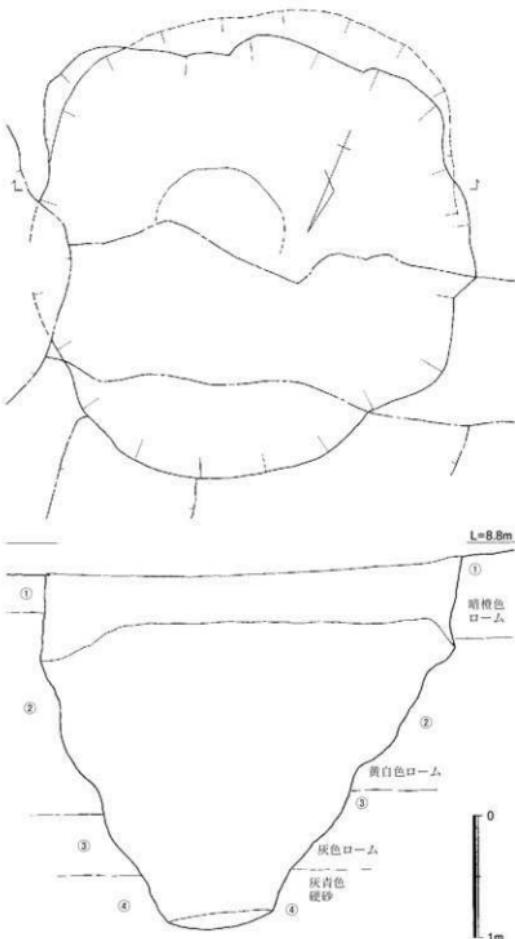


Fig.124 井戸 SE-3058 実測図 (1/40)

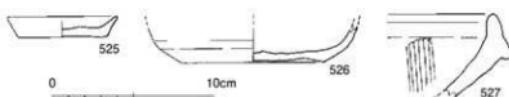


Fig.125 SE-3058 出土遺物実測図 (1/3)

井戸 SE-3070 Fig.126, PL.16

3区 SE-3058の北東3mに検出した井戸である。攪乱坑が重複しており、井戸の上部が大きく破壊されている。遺構面は強い削平を受けており、黄白色ローム（八女粘土層）が一部露呈する。やや不整な円形プランを呈し、径1.3m前後である。やや径を狭めながら円筒形に掘り下げており、灰青色硬砂層を70cmほど掘り抜いたところで円形の平坦底面をつくっている。遺構検出面から深さ3.7mで、底面標高5.3mを測る。井戸壁面に見える②黄白色ローム（八女粘土層）の上部で壁面の一部が抉れているが、他に大きな壁面の崩れはない。底面に密着して一抱えほどの扁平蝶が出土した。調査時には若干の湧水があった。

SE-3070 出土遺物 Fig.127

土師質土器、瓦質土器、朝鮮系もしくは国産の陶器が少量出土した。

528は瓦質土器のすり鉢である。体部が直線的に開き、口縁端部がやや肥厚する。外面指押さえ後ナデ調整、内面は剥落して調整痕が残らない。口縁内外は横ナデ調整する。

529は瓦質土器の釜で、底部を欠く。肩部の対する2ヶ所に縦長の外耳を付け、孔を穿つ。外耳の直下に三角形突帯1条を貼付する。外面は横方向の細かい刷毛目調整を行い、口縁には縦方向に粗めの刷毛目のち横ナデを加え、その直下に雷文の印花文を密に施す。突帯は横ナデし、胴下半はナデ調整する。内面は指押えのち刷毛目調整し、ヘラ状の工具でナデを加え、一部は光沢を持つ。内外黒色で、胎土は精良、焼成不良である。外面下半には煤が厚く付着している。固化していないが、同様の釜が別に1個体あり、頭部の雷文に換えて柳齒状の列点文を施している。

やはり煤が厚く付着しており、煮炊きに使用されたと考えられる。

530は朝鮮王朝の陶器碗である。胎土は灰色で、緑味のある乳灰色釉を全体に施す。内底と高台脛付に砂目が4ヶ所付く。

中世後期、16世紀代の井戸であろう。

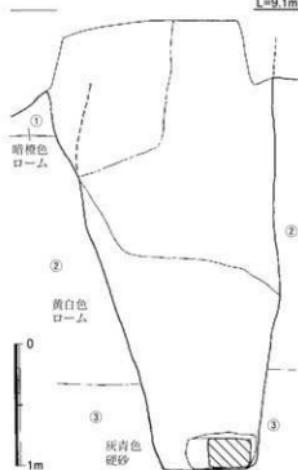
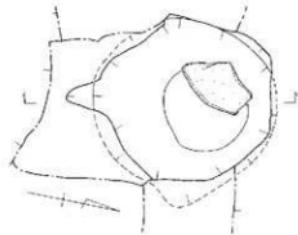


Fig.126 井戸 SE-3070 実測図 (1/40)

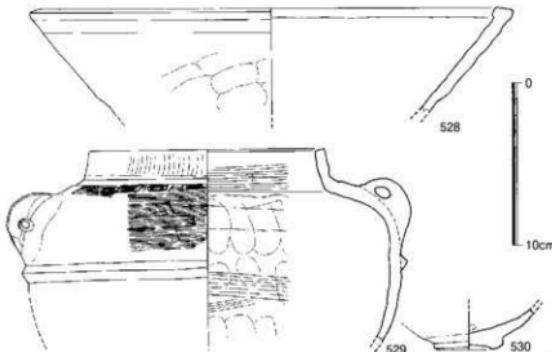


Fig.127 SE-3070 出土遺物実測図 (1/3)

井戸 SE-3071 Fig.128、PL.16

3区SE-3070の東に0.5mの間を置いて検出した井戸である。崩壊のおそれがあるため、断ち割りを行った段階で調査を中断した。東西にやや長い不整な楕円形プランをなし、径3.8m×2.9mを測る。すり鉢状に大きく掘り下げており、灰青色硬砂層を少し下げたところで小さな底面をつくっている。遺構検出面からの深さ3.5mを割り、底面標高は5.4mである。井戸壁面の②黄白色ローム（八女粘土層）の上部で壁面が崩壊している。井戸覆土は、中層に一部暗褐色土を挟むが、底面から開口部までロームブロックで一気に埋め戻された状況を示していた。調査時点では若干の湧水があった。

SE-3071 出土遺物 Fig.129

土師器、土師質土器、朝鮮王朝又は国産の陶器、石製品が少量出土した。

531は土師器環である。底部は縦に糸切りを加えている。復元口径12.3cm。

出土遺物が少ないが、中世後期の井戸と考えられる。

井戸 SE-4019 Fig.130、PL.16

4区の北東部に検出した井戸である。SX-4005の底面で検出しており、上部が0.8mほど削平されている。北東側に浅い土坑が切り合はが、井戸との関係は不明。楕円形プランの井戸で、径1.05m～0.8mを測る。八女粘土層を円筒形に掘り抜き、灰青色硬砂層に少し掘り込んだところですり鉢状に窪めて小さな丸底とする。遺構検出面から深さ2.9mが残り、底面標高は5.8m弱である。①暗橙色ロームと②黄白色ロームの境で大きく崩れて壁面が抉れているが、掘削中に崩壊する危険性があったため、断面線上で壁面を確認するに留めている。覆土は黒色粘質土を主とし、調査時点での湧水は認められなかった。底面から60cm浮いたレベルから弥生土器の複合口縁壺1個体(538)が出土した。



Fig.128 井戸 SE-3071 実測図 (1/40)

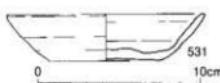


Fig.129 SE-3071 出土遺物実測図 (1/3)

SE-4019 出土遺物 Fig.131

弥生土器がコンテナ 1/2 箱出土した。図は全て弥生土器である。

532 は逆「L」字形をなす口縁の壺である。口唇にヘラ刻みを入れ、頸部にM字突帯を貼付する。器面の残りが悪いが、全面丹塗りであろう。533 は「く」字形口縁の壺で、頸部内面の棱は丸みがあり不明瞭である。内外面とも刷毛目調整で、外面の刷毛目は粗目である。口縁は横ナデする。534 は口縁が丸く外反する壺で、頸部に三角形突帯を貼付する。外面刷毛目、内面ナデ調整で、口縁と突帯は横ナデ調整。535・536 は「く」字形口縁の壺で、535 の頸部内面の棱は明瞭である。ともに磨滅して調整痕は残らない。

537 は壺で、口縁端部は内外に少し突出するT字形をなす。内外ナデ調整で、口縁端部横ナデ調整。538 は遺構図に出土状況を示した土器で、ほぼ完存する。複合口縁をなし、不釣り合いな太い三角形突帯を頸部に貼付する。平底だが安定が悪い。外面は雑な刷毛目調整でナデを加える。内面は工具によるナデ調整。口縁と突帯は横ナデする。

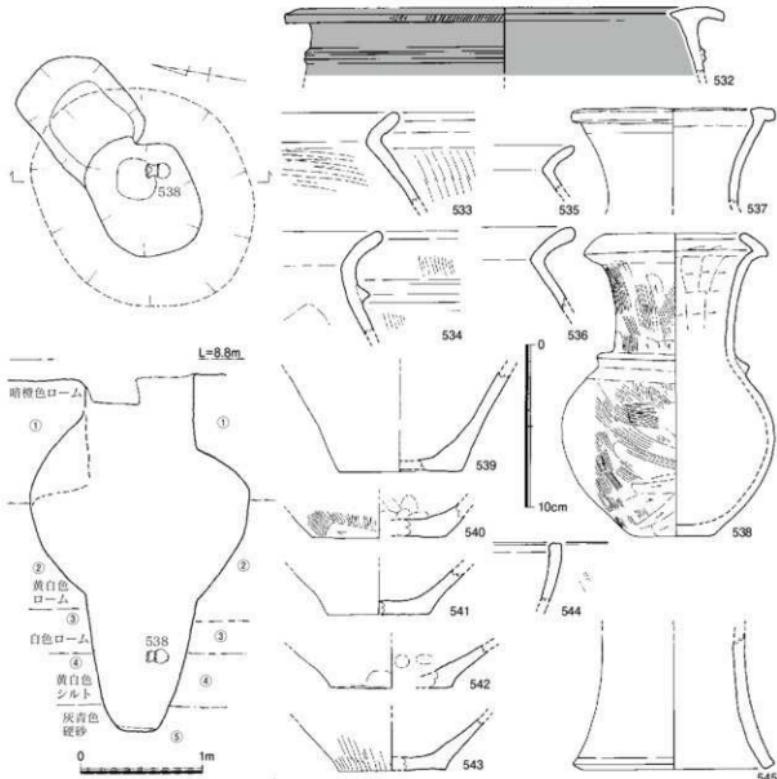


Fig.130 井戸SE-4019実測図(1/40)

Fig.131 SE-4019 出土遺物実測図 (1/3)

539～543は甕もしくは壺の底部片である。539は磨滅して調整痕が残らない。540は外面刷毛目調整、内面は指押え痕が残る。541は磨滅して調整不明。542は内外ともナデ調整で、内底に指押さえ痕が残る。543は外面粗刷毛目、内面ナデ調整である。

544は鉢の口縁部小片で、内湾し、端部が肥厚して口唇が若干窪む。外面刷毛目、内面ナデ調整である。545は器台である。磨滅して調整痕は残らない。

弥生時代後期中葉頃の井戸であろう。

井戸 SE-4020 Fig.132, PL.16

2区SE-4019の南側1mに検出した井戸である。SE-4019同様、SX-4005により遺構面が0.8mほど削られている。北東～南西に長い楕円形プランで、径1.5m～1.3mを測る。③黄白色ローム（八女粘土層）の途中まで円筒形に掘った後に径をやや狭め、⑤灰青色硬砂層を60cmほど掘り込んで丸底につくる。検出面から深さ3.5mで、底面標高は5.9mである。③黄白色ローム中で壁面が一部抉れているが、大きな壁の崩壊はない。覆土は黒色粘質土で、調査時点では湧水はない。底面から50cmほど浮いて完品の弥生土器壺（551）が出土した。

SE-4020 出土遺物 Fig.133

弥生土器、石製品がコンテナ3箱出土した。近世陶器1点が混入している。図は全て弥生土器である。

546は甕で「く」字形口縁をなし、内面の稜はやや甘く不明瞭である。外面刷毛目、内面ナデ、口縁は内外とも横ナデ調整する。

547も内面の稜がやや不明瞭な甕で、器面剥落して調整は不明である。548は内面に明瞭な稜を持つ「く」字形口縁の甕である。内外面に刷毛目を施し、口縁を横ナデして仕上げる。549は小型の甕で、口縁はやはり「く」字形で内面の稜は明瞭である。外面刷毛目、内面ナデ、口縁横ナデ調整。550は小型の壺で、ほぼ完存する。複合口縁で、底部はかなり丸味を帯びた平底である。外面は細かい刷毛目に一部ナデ調整を加える。内面は指頭の痕を良く残すナデ調整で、頸部にシボリ痕、肩部に粘土接合痕が残る。口縁は内外とも横ナデ調整である。551は遺構図に出土状況を示した壺で、完品である。口縁・頸とともに短く、底部は平底だが安定に欠ける。外面は細かい刷毛目の後、下半をヘラナデするが、底部付近は強くナデで削りに近い。頸部は工具ナデ、口縁は刷毛目のち横ナデ。内面は指押さえ後、粗い刷毛目を施しており、肩部にナデを加える。552～554は甕又は壺の底部片である。外面刷毛目、内面はナデもしくは工具を用いたナデ調整で、指押え痕が残る。555は高環で、口縁を失う。脚内面にナデ調整を施すが、他は磨滅剥落してより調整不明である。

556は高環脚の残欠で、外面ヘラミガキ後丹塗りを施し、内面はシボリ痕が残るが磨滅する。557は高環の环底の一部で、脚内面を除きヘラミガキと丹塗りを施している。558は蓋の天井部片である。横ナデ調整で、天井部の内外はナデ調整する。559はミニチュア土器の鉢で、内面ナデ調整、外面は磨滅する。560は器台である。外

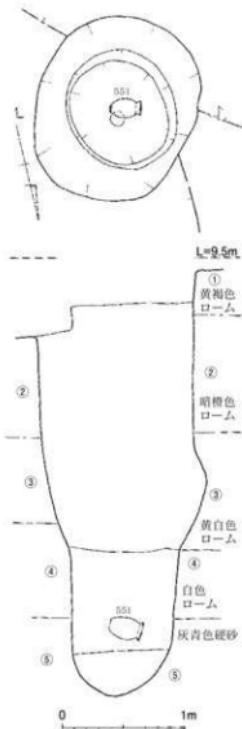


Fig.132 井戸 SE-4020
実測図 (1/40)

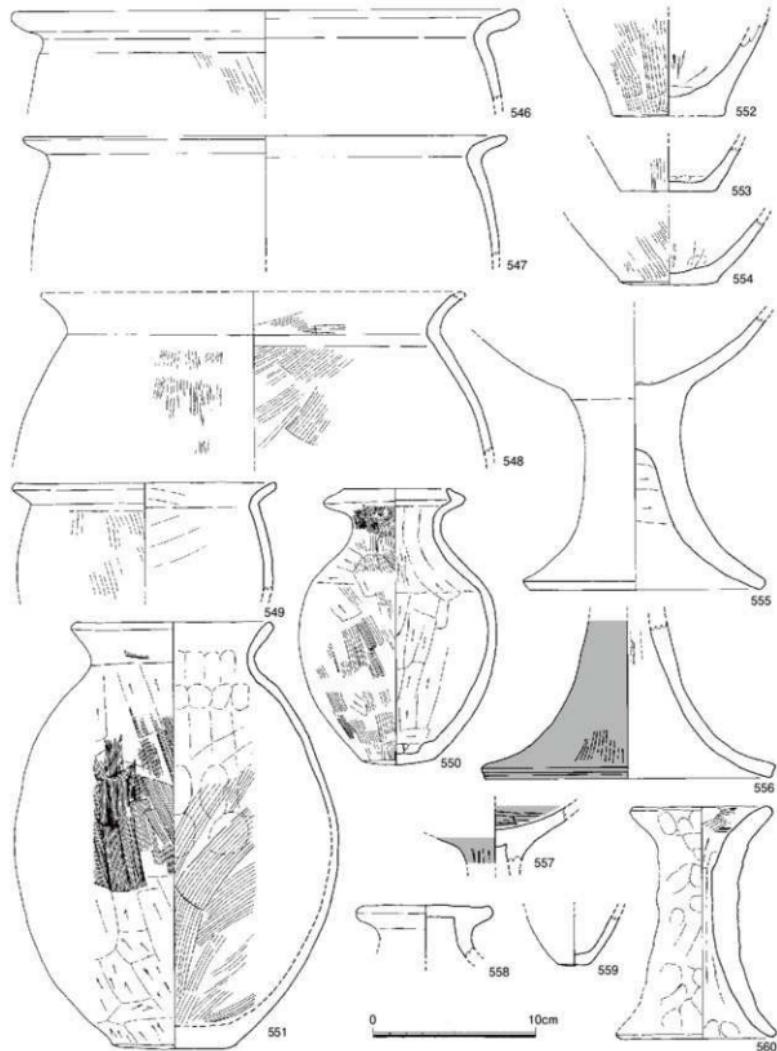


Fig.133 SE-4020 出土遺物実測図 (1/3)

面は指押えのちナテ調整、内面はシボリ痕をナテ調整し、上端に刷毛目を加えている。

弥生時代後期後葉頃の井戸であろう。

井戸 SE-5005 Fig.134、PL.17

5区の東端付近に検出した井戸である。北東側には分厚いコンクリート基礎が残っており調査できなかった。基礎の東側は搅乱により破壊されている。東西にやや長い隅丸方形プランの井戸で、径2.1m×1.8mを測り、遺構検出面からの深さは1.3mで、他の井戸に比べるとかなり浅い。底面標高は6.9mである。断面逆台形をなすが、②暗橙色ローム以下は壁の角度がやや急になり、③黄白色ロームに達したレベルで梢円形の平坦な底面をつくる。壁面には崩壊は認められない。覆土は、上層が暗褐色粘質土、下層は地山ローム土で黒色粘質土を帯状に挟む。調査時の湧水は認められない。

SE-5005 出土遺物 Fig.135

須恵器が少量出土した。

561は須恵器坏身である。蓋受けの立ち上がりは低く内傾する。底部は平たく、外底はヘラ切りのままで回転ヘラ削りは行わず、ヘラ記号を刻んでいる。蓋受け部分に他の器が融着しており、蓋を被せて焼成した可能性が高い。底部外面に薄く降灰がかかる。ロクロ回転は時計回りである。562は須恵器大甕である。口縁は長く伸び、端部は面取りして凹面をなし、その直下に三角形突帯を回す。頸部屈曲部の外面には粘土を貼付して補強する。口縁外面にカキ目調整の後、ヘラによる平行斜線文を刻み、その上端に2条、下側に3条の沈線文を巡らせて装飾している。胴部外面擬格子タタキ、内面同心円文の当て具痕が残る。口縁内面に薄く、胴部外面に厚く降灰がある。

古墳時代後期の井戸である。

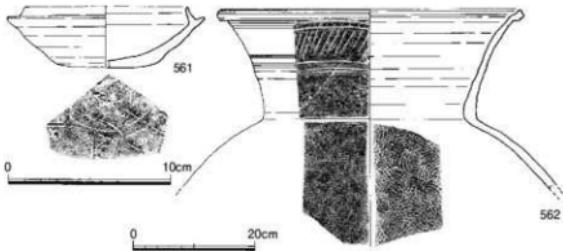


Fig.134 SE-5005 実測図(1/40)

井戸 SE-5039 Fig.136、PL.17

5区西半部に位置する井戸である。溝 SD-5020 の掘削後に底面で検出しており、上部は溝により一部破壊されている。北東-南西方向に長い梢円形プランを呈し、長径2.0m、短径1.7mを測る。断面は逆台形をなし、③黄白色ローム（八女粘土層）に達したところで一旦平坦面をつくり、30cmほど掘り下げて梢円形の小さな底面をつくる。遺構検出面から底面まで深さ2.5mを測り、底面標高は5.7mである。壁面崩壊や、調査時の湧水は認められなかった。覆土は暗褐色粘質土である。

SE-5039 出土遺物 Fig.137

土師器、須恵器、中国産陶磁器（越州窯系青磁）、瓦、石製品が少量出土した。

563は土師器環の小片である。磨滅するが外底へラ切りであろう。淡灰黄色を呈する。564は土師器の椀で、小片で磨滅しており、調整痕は残らない。淡灰黄色。565～567は黒色土器B類の椀で、高台は細く低めである。565は磨滅するが内底へラミガキ、外底へラ切りであろう。566は外底が接地する。内底へラミガキだが、ミガキの単位は不明瞭である。567は内底へラミガキで、磨滅のためミガキの単位は不明瞭。外底へラ切りで、板状痕がある。高台横ナテ調整。568は土師器の甌で、磨滅が著しいか、外面の胴部上半に横刷毛目を施し、下半をナテ調整。内面は磨滅して調整痕が残らない。

569は越州窯系青磁の皿である。全軸で、外底接地部分は釉剥ぎする。内底に圓沈線を巡らせ、体外面にヘラを縦に押圧する。内底は使用により磨滅している。

570は丸瓦の小片である。側縁は面取りする。凸面は磨滅するがナテ調整、凹面は布目と刃の結節痕、竹状模骨痕が残る。側縁沿いはヘラ削りする。瓦質焼成。他に竹状模骨痕のある土師質焼成の平瓦1点がある。571は平瓦の小片で、凹面は磨滅した布目が残る。凸面は擬格子タタキのちナテを加える。土師質焼成で、ローリングが著しく、他所より流入した遺物か。

10世紀代の井戸であろう。

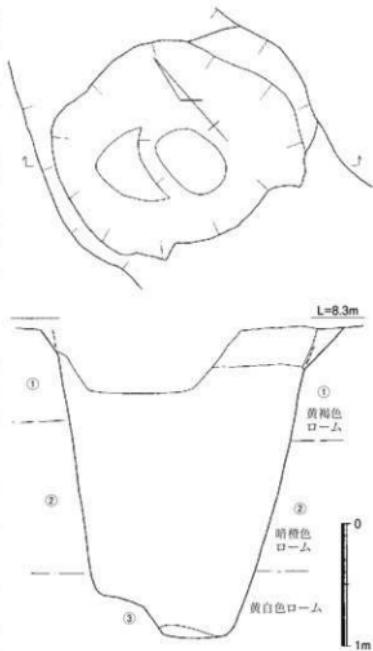


Fig.136 井戸 SE-5039 実測図(1/40)

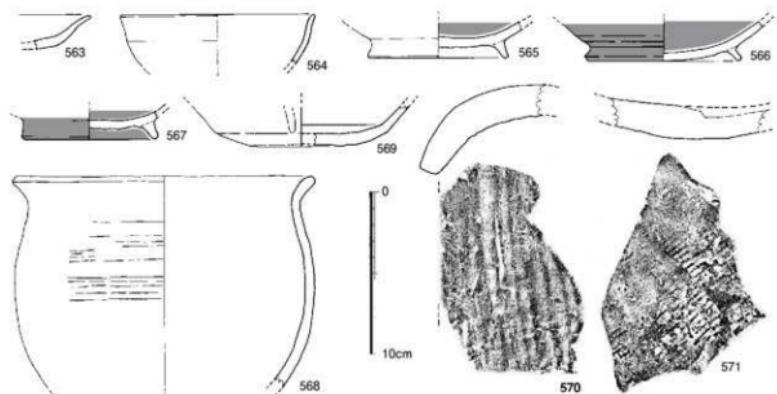


Fig.137 SE-5039 出土遺物実測図 (1/3)

(5) 古墳時代前期の道路
(並列溝/SF) Fig.138

第114次調査区のほぼ中央を南北に縱断する2条の並列する溝で、古墳時代前期の古式土師器が出土している。那珂・比恵遺跡群のこれまでの調査で類例が確認されており、この2条の溝に挟まれた部分を道路と考える推定が有力となっている。かねてから通過ルート上に位置する当調査区における遺構検出が予想されており、これまでの推定を裏付けたと言えよう。第114次調査区は中央部分から南側の標高が最も高く、東と西へ地形が落ちていくが、2条の溝はこの調査区の最も高い台地尾根部分を通るように配置されたものと考えられる。

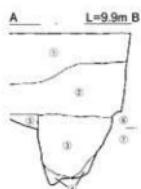
検出した遺構番号で示すならば、南から順に、4区で検出したSD-4001とSD-4002、1区で確認したSD-1081、5区で確認したSD-5004とSD-5010がこれに該当する。SD-1081・4002・5010が一連の西溝、SD-4001・5004が一連の東溝である。SD-4002の南端からSD-5010の北端まで102mを測るが、実際に調査を行って掘削を行った範囲は西溝が計32m、東溝が計29mであり、中央部に大きく残る未調査部分は那珂中央公園内に現状保存されている。また、南側の既に公園となっている部分にも遺構が保存されている。西溝の主軸方位は磁北から15°西偏しており、北端のSD-5010あたりでやや西へ湾曲していく様相を示しており、更に北へと伸びていく。

以下、遺構番号順に遺構と出土遺物について報告する。



Fig. 138 道路遺構平面図 (1/500)

溝 SD-1081 Fig.139, PL.17



- ① 黒褐色土
- ② 黒褐色土 (板状崩壊)
- ③ 灰褐色土
- ④ 灰褐色土
- ⑤ 灰褐色土
- ⑥ 黄褐色土 (堆積)
- ⑦ 黄褐色土 (堆積)

SD-1081 出土遺物 Fig.140

図示した古式土師器の他に、弥生土器、古式土師器が少量出土している。

572は古式土師器の布留系甕である。遺構平面図に示した位置から出土した。口縁は内湾気味で端部は面取する。胴部最大径はやや上位にある。器面の磨滅剥落が著しいが、胴外面は肩部横刷毛目の中全体を継に刷毛目調整。内面はヘラ削りで、頭部と底部に指揮え痕が残り、屈曲部内面はナデ調整。口縁横ナデ。二次加熱を受け外面に煤が付く。573も布留系甕で、遺構図に示した位置から出土した。口縁は僅かに内湾し、端部は面取りする。胴部最大径はやや上位にある。磨滅が著しい。胴部外面は継の刷毛目のち、肩部に横刷毛目を加えて装飾する。内面は器面が剥落するかヘラ削りで、底部に指揮え痕が残り、頭部内面はナデ調整である。口縁内外は横ナデ調整する。

古墳時代前期の遺構である。

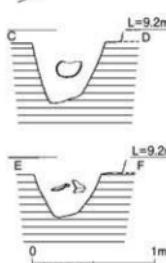
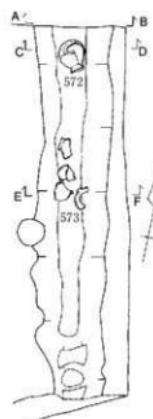


Fig.139
溝 SD-1081
実測図 (1/40)

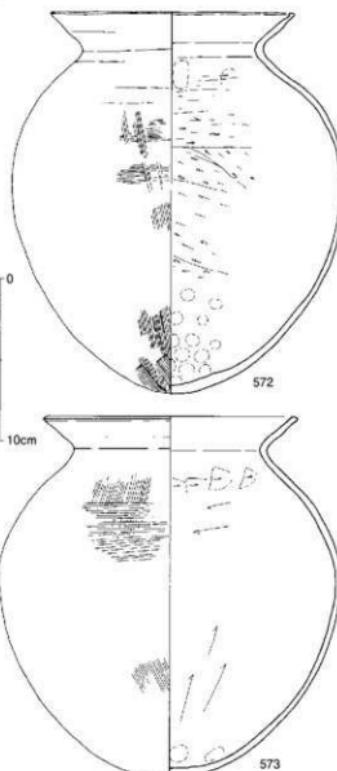


Fig.140 SD-1081 出土遺物実測図 (1/3)

溝 SD-4001・4002

Fig.141, PL.17・18

4区中央に検出した。弥生時代の大溝を切り、古墳時代後期の溝や中世の大溝に切られる。ともに略南北方向に伸びる細い溝で、南北両端とも調査区外へ伸びていく。SD-4001が道路の東溝、SD-4002が西溝である。溝間は内法で 7.2 m ~ 7.6 m、心々距離で 7.7 m ~ 8.5 mを測り、南へ僅かに開いている。溝間には硬化面等の道路痕跡は認められないが、遺構自

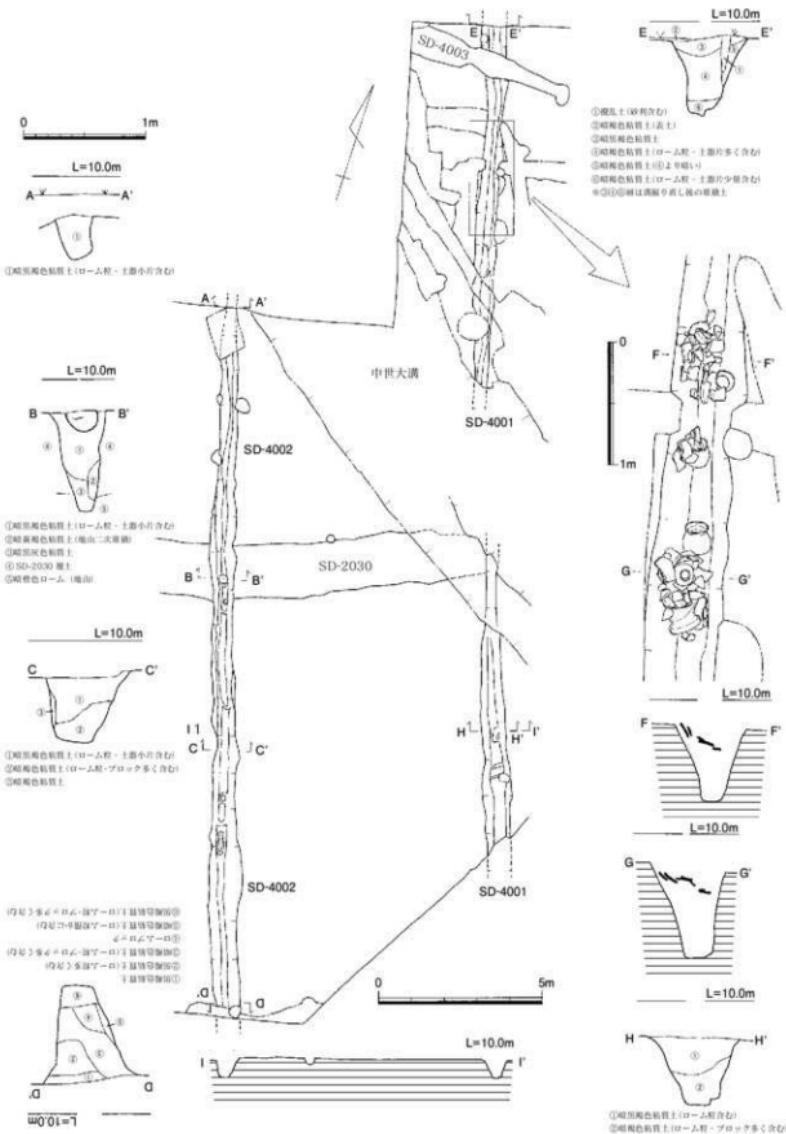


Fig.141 満 SD-4001・4002 実測図 (全体図は 1/150、他は 1/40)

体が少なく、特に古墳時代前期の遺構は存在しない。

SD-4001 は東溝である。長さ 25.3 m を確認した。中央を中世大溝に、北半を古墳時代後期の溝 SD-4003 に切られる。溝幅は 90cm ~ 50cm で、北側がやや狭い。横断面形は U 字形に近い逆台形を呈する。深さは 60cm ~ 70cm で、底面の標高は 9.0m ~ 9.2 m 前後。北側の底面が若干高いが¹、水が流れるような勾配は有していない。SD-4002 に比べると極端な底面の凹凸は認められない。覆土は暗褐色～黒褐色粘質土で、北壁の土層断面には溝を掘り直したとみられる痕跡が確認できる。溝北半に土器を一括廃棄しており、底面から 50cm ~ 70cm 前後浮いて東へ傾斜していることから、溝かわり埋没した段階で西側から投げ入れたものと考えられる。

SD-4002 は西溝である。21.7 m の長さを確認した。中央で弥生時代溝 SD-2030 を切る。北端は攢乱坑に切られるが、調査区北壁に土層断面を確認できる。溝幅は 90cm ~ 50cm で、北へ細くなる。横断面は概ね逆台形を呈する。底面には起伏があり、深さ 60cm ~ 85cm で、底面標高は 8.9m ~ 9.3 m の間にある。SD-2030 と重なる部分では地山が軟弱であったためか、かなり深くなる。覆土は暗褐色～黒褐色粘質土である。SD-4001 と比べると遺物の出土量が少ない。

SD-4001 出土遺物 Fig.142・143

弥生土器、古式土器、須恵器、土製品、石製品がコンテナ 3 箱出土した。須恵器は溝の上層から出土しており、混入した遺物であろう。

図示した遺物は 596 を除き、全て古式土器である。

574 ~ 582 は甕である。574 は肩部片で、外面は右上がりの平行タタキ後に斜めの刷毛目を加え、内面は横の刷毛目調整である。575 は口縁部片で、磨滅して調整痕が残らない。576 も口縁部で、外面は剥落して不鮮明だが右上がりのタタキか。内面は磨滅剥落する。577 は頭部の小片で、外面磨滅のため調整不明で、内面は頭部ナデ、胴部ヘラ削り調整である。578 は肩部の小片で、外面刷毛目のちナデ、内面指押さえ後刷毛目とナデ調整を加える。579 は布留系甕の口縁部小片で、磨滅して調整痕は残らない。580・581 も口縁部の小片である。582 は口縁が欠けるがほぼ完存する。外面は右上がりの平行タタキのち細かい斜刷毛目を加える。内面はヘラ削りで、頭部内面は刷毛目後ヘラナデする。口縁内外横ナデ調整である。胴部下半は内外とも煤が付着している。**583** は厚手の甕で、外面粗刷毛目のちナデ、内面は粗い刷毛目を強く施し削り気味となる。内面に粘土接合痕が残る。口縁外面に指押え痕が残るが、口縁は内外とも横ナデ調整である。

584 は壺か。口縁端部が剥落しており、上方に伸びる可能性がある。器面剥落のため調整は不明である。**585** は二重口縁壺の口縁部片で、内外磨滅する。**586** は二重口縁壺の胴部片で、肩部に横波状文と、その上下に同じ施文具を用いた沈線文を巡らせる。沈線文は水平ではなく、緩く波打っている。内面は指押え後、粗い刷毛目調整を行う。**587** は大型の二重口縁壺の口縁部小片で、磨滅して調整不明である。**588** は同じく大型壺の底部小片で、587 と同一個体かもしれない。外面磨滅し調整不明。内面は刷毛目調整で、炭化物が付着する。**589・590** は長頸甕の口縁部片で磨滅する。589 は胴部内面ヘラ削りか。590 の口縁内面には刷毛目が痕跡的に残る。**591** は大型甕で 1/8 で図示した。内屈する二重口縁で、頭部に台形突帯を貼付して斜めのヘラ刻みを施すが、難に施文しているため山形や斜線や「×」となり不規則である。外面の調整は、口縁が細かい刷毛目後突帯まで横ナデ、胴上半がナデ又はヘラナデ、下半が細かい刷毛目で、底部ナデ調整。内面は細い刷毛目調整である。**592** は壺の底部で、丸底に大きく広がる低い脚を貼り付けている。脚内面に刷毛目と端部横ナデを留めるが、他は磨滅して調整痕が残らない。

593 は高坏の脚部片で、内面にシボリ痕が残るが全体が磨滅している。**594** は小型器台で脚の三

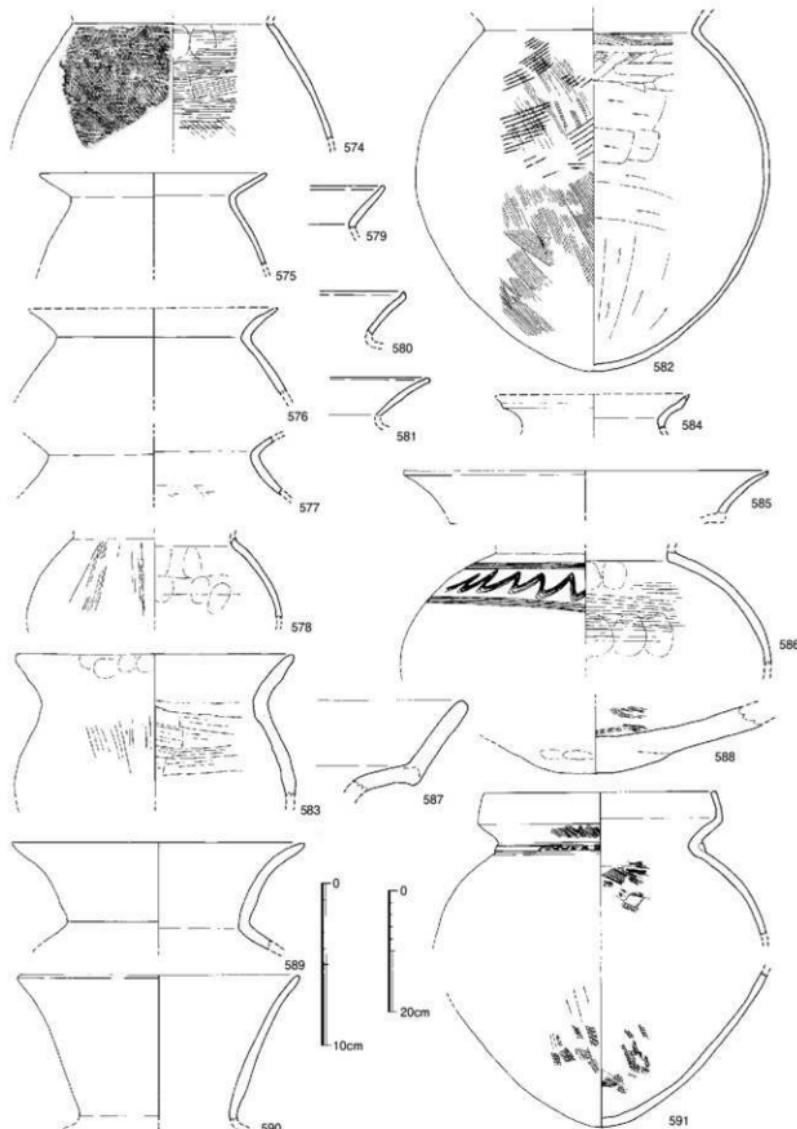


Fig.142 SD-4001 出土遺物実測図 (591は1/8、他は1/3)

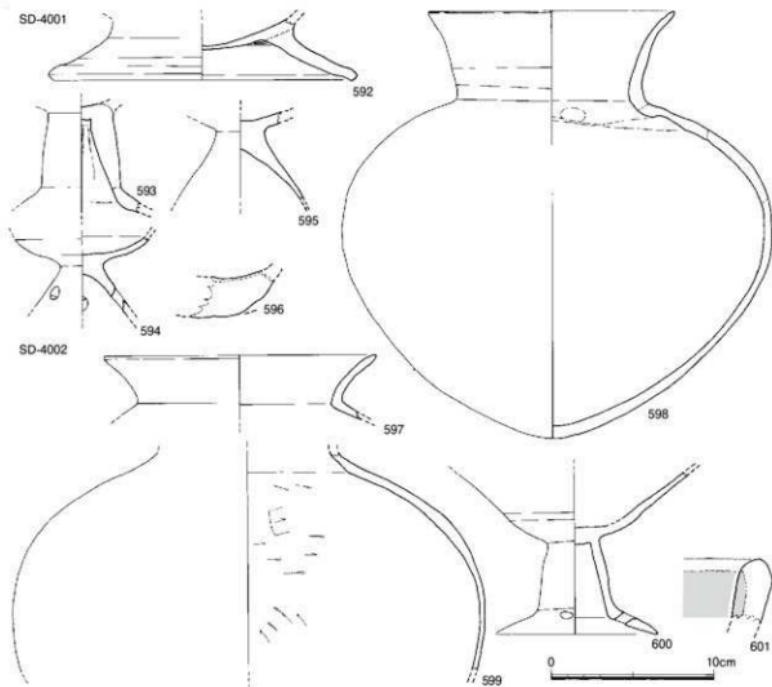


Fig.143 SD-4001・4002出土遺物実測図 (1/3)

方に透孔を入れるが、磨滅のため調整不明。595も小型器台で、磨滅するが脚内面は刷毛目又はヘラ調整か。593～595の小型器種の胎土は精良である。

596は取瓶で分厚く、底部付近の破片とみられる。加熱を受けており、内面に灰黒色の物質が付着しており、鉛が検出された。

SD-4002出土遺物 Fig.143

弥生土器、古式土師器、須恵器、石製品、土製品がコンテナ2箱出土した。須恵器は上層出土の小片であり、混入品と考えられる。図は601を除き、全て古式土師器である。

597は壺の口縁部片である。胴部内面ヘラ削りで、他は磨滅して調整不明である。598は長頸壺で、底部が接合せず図上で復元した。頸部内面に指押さえ痕があるが、他は磨滅して調整痕が残らない。599は壺の胴部片で、外面磨滅して調整不明、内面はヘラ削りする。口縁内面ナデ調整。600は高环で、口縁は接合せず図上復元である。脚の三方に透孔を入れる。磨滅のため調整痕は残らない。601は取瓶の口縁部片で、被熱する。内面が硬化して灰色となり、重量がある。鉛が検出された。取瓶はもう一点ある。

SD-4001・4002とも古墳時代前期の遺構である。

満 SD-5004・5010 Fig.144, PL.19

5区の東半部に検出した。SD-5004が東溝、SD-5010が西溝である。内法で6.4m前後、心々距離で7.0m前後の間を置いている。溝間にには硬化面などの道路痕跡は認められないが、遺構が少なく、ピット等の小遺構が点在するのみで、古墳時代前期の遺構はない。

東溝 SD-5004 は削平により極めて浅く断片的で、深さは10cmに満たない。長さ1.7mを確認している。南側は浅くなつて途切れおり、北側は古墳時代後期の井戸SE-5005に切られ、井戸の北側では確認できなかった。溝の最大幅は60cmで、横断面形は皿状をなし、底面は若干北へ傾斜している。覆土は暗褐色粘質土である。

黒曜石片が僅かに出土したのみで、図示できる遺物はない。

西溝 SD-5010 は長さ6.7mを確認した。溝の中程から北半は削平や防空壕跡等の攪乱により残りが悪いが、北端が西へゆるく曲がっていく状況を示している。南側は調査区外へと伸びていく。溝の最大幅は90cmで、横断面は逆台形を呈する。溝底には起伏があり、深さ40cm～65cmで、南北端で比較すると北が60cmほど低い。ただし、遺構面自体も北が40cmほど低くなつており、基盤ローム土そのものが落ちていくと考えられるので、自然地形にあわせて傾斜しているのであろう。覆土は調査区南壁の土層に示す通り暗褐色粘質土で、一部掘り直したような土層堆積を示す。

弥生土器、土師器、須恵器の小片が少量出土した。図示できるような遺物はない。

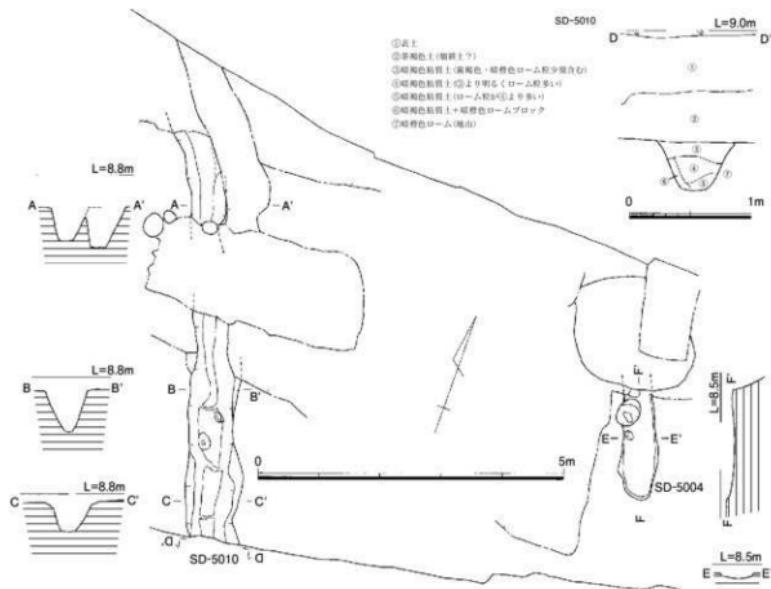


Fig.144 満 SD-5004・5010 実測図（土層断面図は1/40、他は1/80）

(6) 土坑 (S K)

土坑は51基を報告する。貯蔵穴・土壤墓・柱穴に含まれる可能性のある遺構を含む。出土遺物に乏しく、覆土からも詳細時期を特定しかねる遺構が多い。

土坑 SK-1021 Fig.145

I区西半部の北寄りに検出した。攪乱坑に北半分を削平されているが、楕円形プランか。東西径1.1m。断面逆台形をなし、深さ40cmで、底面は平坦である。覆土は黒色粘質土で、喪棺墓の埋め土に近似する。

弥生土器甕の小片など4点が出土したが、図示できるものはない。弥生時代の土坑か、あるいは近世溝を掘る際に甕棺を抜き取った跡かもしれない。

土坑 SK-1028 Fig.145

I区西半部の北壁際に位置し、竪穴住居SC-1026の下層に検出した。北側を調査区壁、南側を近世溝SD-1001に挟まれた三角地にかろうじて残り、全容は不明であるが、径2.5m前後の楕円形プランか。断面逆台形、深さ1m弱で底面は平坦である。覆土は黒色粘質土である。

SK-1028出土遺物 Fig.147

弥生土器がコンテナ1/2箱出土した。図は全て弥生土器である。

602は「く」字形口縁の甕で、口縁内面に明瞭な棱が入る。器壁が完全に一枚剥落する。603～605は逆「L」字形口縁をなす甕で、605は口縁が内済する。604を除き頸部に三角形突帯を貼付する。いずれも磨滅しており調整不明。606は甕の底部で、使用により赤変し磨滅する。607は蓋である。内面に刷毛目を認めるが磨滅が著しい。608は鶴先形口縁の壺で、磨滅が著しいか外面刷毛目、内面横ナデ。

SC-1026で報告した土器にも、本来当遺構に伴ったとみられる弥生土器が多数含まれている。弥生時代後期初頭頃の遺構であろう。

土坑 SK-1030 Fig.145

I区西半部の北壁際に位置する。近世溝の北肩にあり、北側は攪乱溝に破壊される。残りが悪く全容は不明で、二段掘り状になっており、二つの遺構が重複する可能性もある。径1.3m×0.6mの楕円形に深い部分があり、断面が一部袋状をなす。深さ50cmで底面平坦。覆土は黒色粘質土である。貯蔵穴の可能性があるが、確定できない。

SK-1030出土遺物 Fig.147

弥生土器の甕・壺が少量出土した。609は弥生土器甕の底部片で、磨滅が著しい。外面ナデ調整。

弥生時代中期以前の遺構と思われるが、詳細時期は不明である。

土坑 SK-1031 Fig.145

I区西半部の北西隅に位置し、北側は調査区壁にかかり攪乱坑に切られる。短径1.1m、長径1.1m以上の楕円形プランか。断面逆台形で、南壁・西壁は段をなす。底面まで深さ50cm。覆土は黒色粘質土である。

弥生土器、須恵器、瓦がコンテナ約1/3箱出土しているが、北壁際で重複する攪乱坑の遺物が混入した可能性がある。図化できる遺物はない。

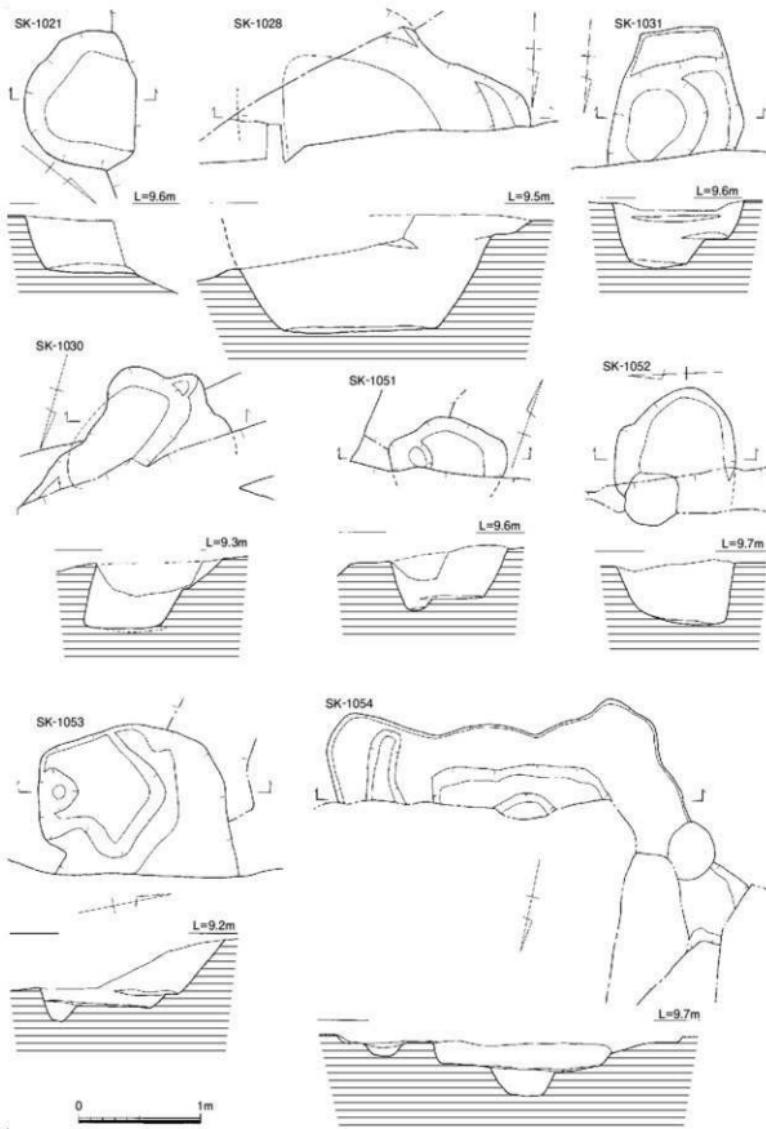


Fig.145 土坑 SK-1021・1028・1030・1031・1051・1052・1053・1054 実測図 (1/40)

土坑 SK-1050 Fig.146, PL.19

I区東半部中央のやや北寄りに検出した。古墳時代前期の周溝墓SX-1100を切る。南端と西端の一部を攪乱坑が破壊する。不整なプランで、東西長4.1m以上、南北長3.6m以上である。壁は傾斜があり10cm~15cmほど斜めに立ち上がる。底面は概ね平坦であるが、生痕様の小ビット多数による凹凸があり、柱穴もいくつか認められるがいずれも浅い。覆土は黒褐色粘質土である。

SK-1050 出土遺物 Fig.147~148

土師器、須恵器、石製品などがコンテナ3箱出土した。

610は土師器甕の口縁部片で調整不明。611も土師器甕の口縁部片で、胴外面刷毛目その他は調整不明。612は土師器の小型甕で、外面刷毛目、内面ヘラ削りか。口縁横ナデ。613は土師器甕の底部片で外面刷毛目、内面ヘラ削り。614は土師器甕の口縁部か。外面刷毛目、内面ヘラ削り、口縁横ナデ。615~617は土師器甕の把手。618は赤焼土器の甕の口縁部片で、外面擬格子タタキ、内面平行文当て具、口縁横ナデ。619は土師器脚、620は土師器脚付鉢、621は土師器高杯。

622~628は須恵器蓋で、ロクロ回転は全て時計回り。625・626は天井部の約1/2に回転ヘラ削りを加えるが、他は未調整である。622・624・626はヘラ記号がある。625は赤焼で、622は外面に降灰がある。622・626・628はほぼ完存する。口径は順に14.0cm、12.4cm、12.0cm、11.6cm、11.6cm、10.6cm、11.4cm。629~635は須恵器坏身で、ロクロ回転は全て時計回り。629は底部の約1/2を回転ヘラ削りするが、他はヘラ切り未調整。629・630は外底にヘラ記号がある。

629・630・631・634はほぼ完存する。

636は須恵器の脚坏鉢で歪みがある。底部ヘラ切りで約1/2に回転ヘラ削りを加える。口縁外面に斜めのカキ目を付ける。637・638も脚付き鉢で外底回転ヘラ削り。638は土師質焼成で淡黄白色である。639は須恵器無蓋高杯で脚を欠く。640は須恵器甕の肩部小片で、外面に細かいカキ目を施す。外面の数カ所にヘラで細い縦沈線を入れる。641は須恵器甕の口縁部。642は須恵器平瓶の口縁部。

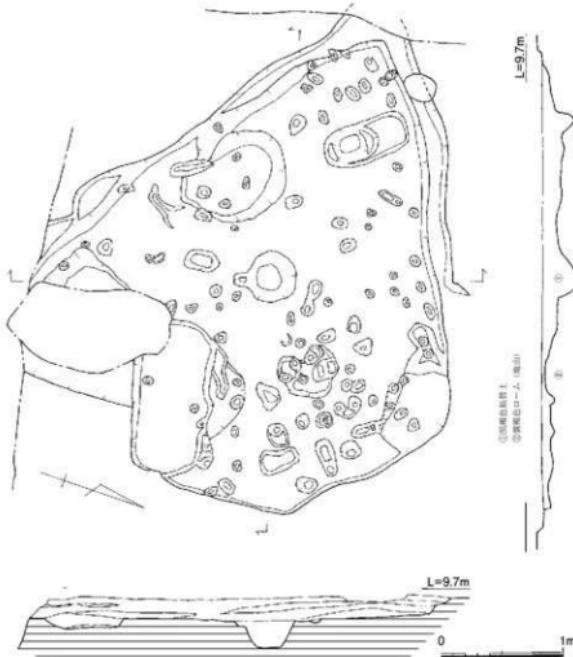


Fig.146 土坑 SK-1050 実測図 (1/40)

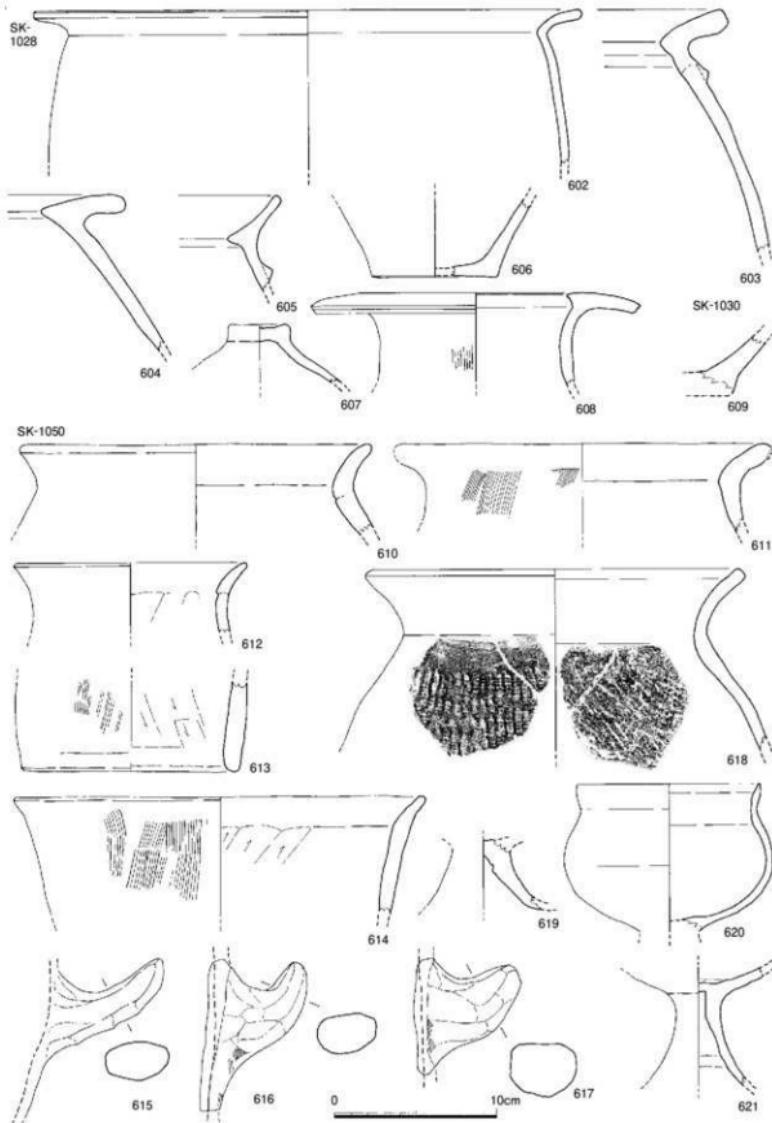


Fig.147 SK-1028・1030・1050 出土遺物実測図 (1/3)

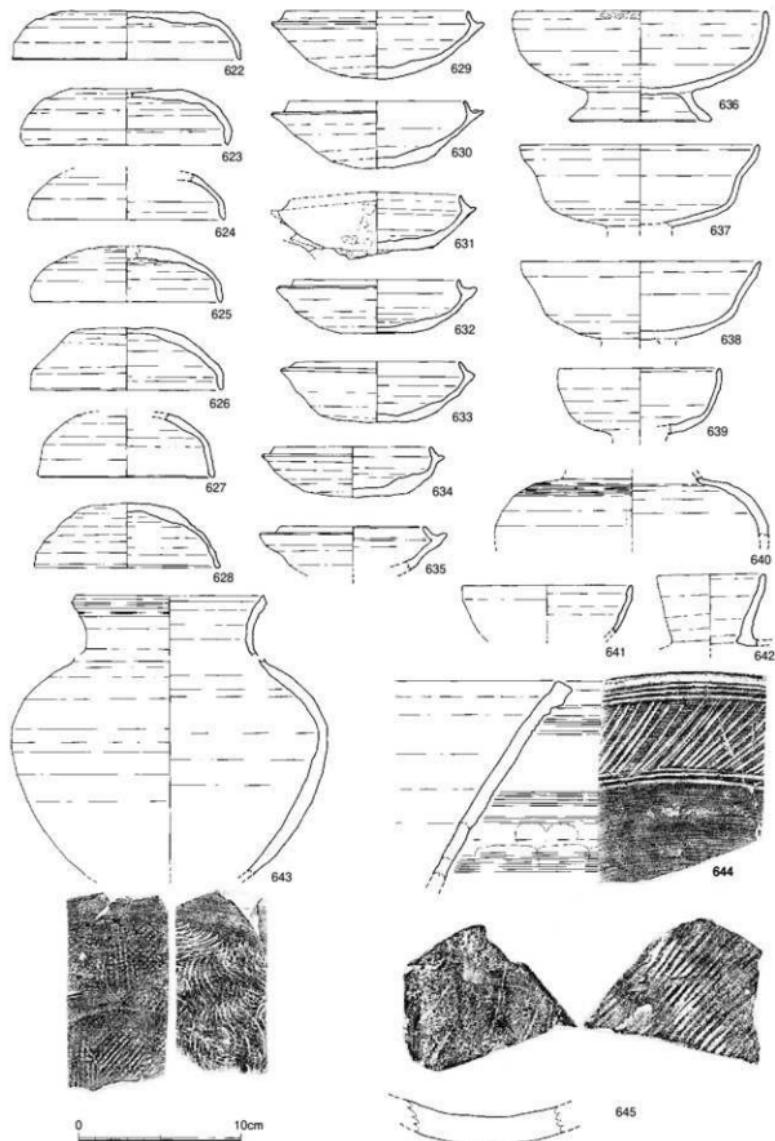


Fig.148 SK-1050 出土遺物実測図 (1/3)

643 は須恵器壺で口縁と胴があり接合しない。口縁横ナデ、胴部外面振格子タタキ、内面同心円文当て具痕で上半は横ナデを加える。**644** は須恵器大甕の口縁部片。端部を方形に肥厚させ直下に三角形突帯を回す。外面にカキ目を施した後、片切り彫りの斜沈線を連続させ、上 3 条、下 2 条の沈線を入れる。**645** は平瓦である。凹面は布目でヘラ削りを加え、凸面は平行タタキである。土師質焼成。

古墳時代後期、九州須恵器編年のIV b 期、7世紀初頭頃の土坑であろう。

土坑 SK-1051 Fig.145

1 区東半部の南西隅に検出した。南側が調査区壁にかかり 1/2 ほど検出に留まる。西側は古代溝 SD-1040 に切られる。東西 1.0 m。断面逆台形で、底面西端がやや深く 50cm。

丹塗りのある弥生土器などの小片 6 点が出土したが図化できるものはない。弥生時代の遺構か。

土坑 SK-1052 Fig.145

1 区東半部の SK-1051 の北 1.5 m に位置し、西側は古代溝 SD-1040 に切られる。全容不明だが、短径 1.0 m の楕円形プランか。断面逆台形で、深さ 50cm。覆土は黒色粘質土である。

弥生土器片が 15 点出土したが、図示できるものはない。弥生時代の遺構であろうか。

土坑 SK-1053 Fig.145

1 区東半部の SK-1052 の北 5 m に位置し、西側は一部古代溝 SD-1040 に切られる。径 1.5 m 以上の隅丸方形プランか。断面逆台形で、底面が北へ下かり、深さ 50 ~ 65cm。

弥生土器片が 5 点出土したが、図示できるものはない。

土坑 SK-1054 Fig.145

1 区東半部の中央南西寄りに検出した。攢乱坑に大きく破壊され遺構の残りが悪い。東西に長い不整隅丸方形プランか。東西 3 m 以上、南北 2 m 以上。中央が深く 50cm を測る。覆土は黒褐色粘質土。

弥生土器が 10 点出土したが図示できない。

土坑 SK-1055 Fig.149

1 区東半部の北西寄りに位置する。南辺から西辺にかけて攢乱に切られており、全容を掴み難いが不整な隅丸方形プランか。東西長 2.6 m 以上、南北長 1.9 m 以上。断面逆台形で深さ 80cm。底面は不整な平坦面をなす。北西壁が袋状に抉れており、貯藏穴の可能性がある。覆土は黒色粘質土である。

SK-1055 出土遺物 Fig.150

弥生土器が少量出土した。**646** は弥生土器の甕で逆「L」字形口縁をなす。磨滅した小片である。**647** は「ぐ」字形口縁の弥生土器甕で、内面の稜は甘い。小片のため図の傾きは不確実。磨滅する。

土坑 SK-1059 Fig.149

1 区東半部の西隅近、弥生時代の祭祀土坑 SX-1045 の底面で確認した。土壇墓の可能性がある。南北に長い楕円形プランで、長径 1.2 m、短径 0.7 m。円筒状に深く掘り下げており、深さ 90cm で、底面も楕円形の平坦面をなす。覆土は黒色粘質土である。

SK-1059 出土遺物 Fig.150

弥生土器が少量出土した。**648** は弥生土器甕の口縁部小片で、逆「L」字形をなす。磨滅が著しい。

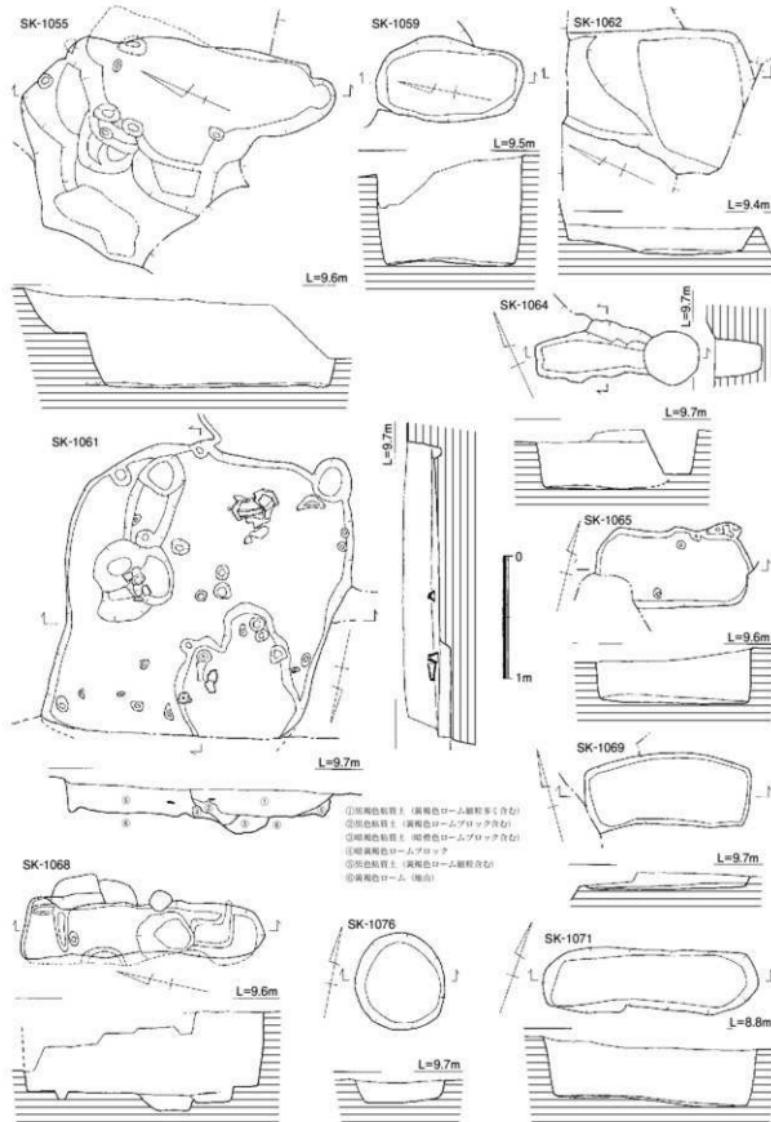


Fig.149 土坑 SK-1055・1059・1061・1062・1064・1065・1068・1069・1071・1076 実測図 (1/40)

土坑 SK-1061 Fig.149, PL.19

I区東半部の中央に位置する。西半は古墳時代の周溝墓 SX-1100 と重複し、北辺は攪乱溝に切られる。隅丸方形プランを呈し、南北長 2.4 m 以上、東西長 2.2 m。断面逆台形で壁が直に立ち、深さ 30cm。底面は平坦で北西隅が浅く窪む。深さ 30cm 未溝の浅いビットが幾つかあり、生痕様の小ビットが点在する。覆土は黒色粘質土で、土層断面図の①（あるいは②まで）は SX-1100 の覆土である。

SK-1061 出土遺物 Fig.150

弥生土器、古式土師器がコンテナ 2 箱出土した。遺構検出時に SX-1100 のプランを識別できずに掘り下げており、遺物が混入している。

649 は弥生土器の甕で口縁が「く」字形をなす。外面刷毛目、内面は器面剥落、口縁横ナデ。650 ~ 653 は弥生土器甕あるいは壺の底部で、器面が磨滅剥落しており調整不明である。654 は弥生土器の瓢形壺で、口縁と底部を欠く。頭部に三角形突帯、胴部に台形突帯と三角形突帯を巡らせる。胴外面刷毛目で丹塗りを施す。突帯に横ナデ、胴下半にナデを加える。内面は刷毛目後丁寧なナデで、突帯裏に指押え痕が残る。口縁付近は内外ナデ。655 ~ 660 は器台の小片で天地不明。磨滅するものが多いが、丸い心棒に巻き付けて整形したとみられ、指押え・ナデ痕が残る。全て二次加熱を受ける。

661 は古式土師器の布留系甕である。4 × 4cm 程の口縁部小片で、SX-1100 からの混入であろう。

弥生時代中期末頃の土坑であろう。

土坑 SK-1062 Fig.149

I 区の中世溝 SD-1070 の上面で検出した。南端は攪乱坑に切られ、北側は調査区外へ伸びる。南北に長い不整隅丸方形で、幅 1.2 m、長 1.6 m 以上、深 20cm。底面は南へ下る。覆土は暗褐色粘質土。

弥生土器、土師器壺、須恵器、平瓦等が少量出土した。図化できるものはない。中世遺構であろう。

土坑 SK-1064 Fig.149

I 区東半部中央の北寄りに位置する。周溝 SX-1100 の底面で検出した。東端はビットに切られる。東西に長い不整隅丸方形プランで、長さ 1 m 以上、最大幅 0.4 m。断面逆台形で深さ 40cm である。底面平坦である。やや小形ではあるが土塼墓の可能性がある。

SK-1064 出土遺物 Fig.150

図示した土器のみが出土した。662 は古式土師器の小型丸底壺である。頭部の小片で、磨滅して調整痕は残らない。古墳時代前期の遺構か。

土坑 SK-1065 Fig.149

I 区東半部の土坑 SK-1050 の底面で検出した。南西隅を攪乱坑に切られる。土塼墓の可能性がある。東西に長い楕円形プランを呈し、長径 1.3 m、短径 0.65 m。ほぼ直に掘り下げており、深さ 45cm。底面は平坦である。

SK-1065 出土遺物 Fig.150

図示した土器のみが出土した。663 は器台である。小片のため天地不明。二次加熱を受ける。

土坑 SK-1068 Fig.149, PL.19

I 区東半部中央に位置し、前方後方形墳周溝 SX-1100 に切られる。土塼墓の可能性がある。南北に細長い隅丸方形プランで、長径 2.0 m、短径 0.4 m 前後。ほぼ垂直に掘り下げており、深さ 70cm 弱である。

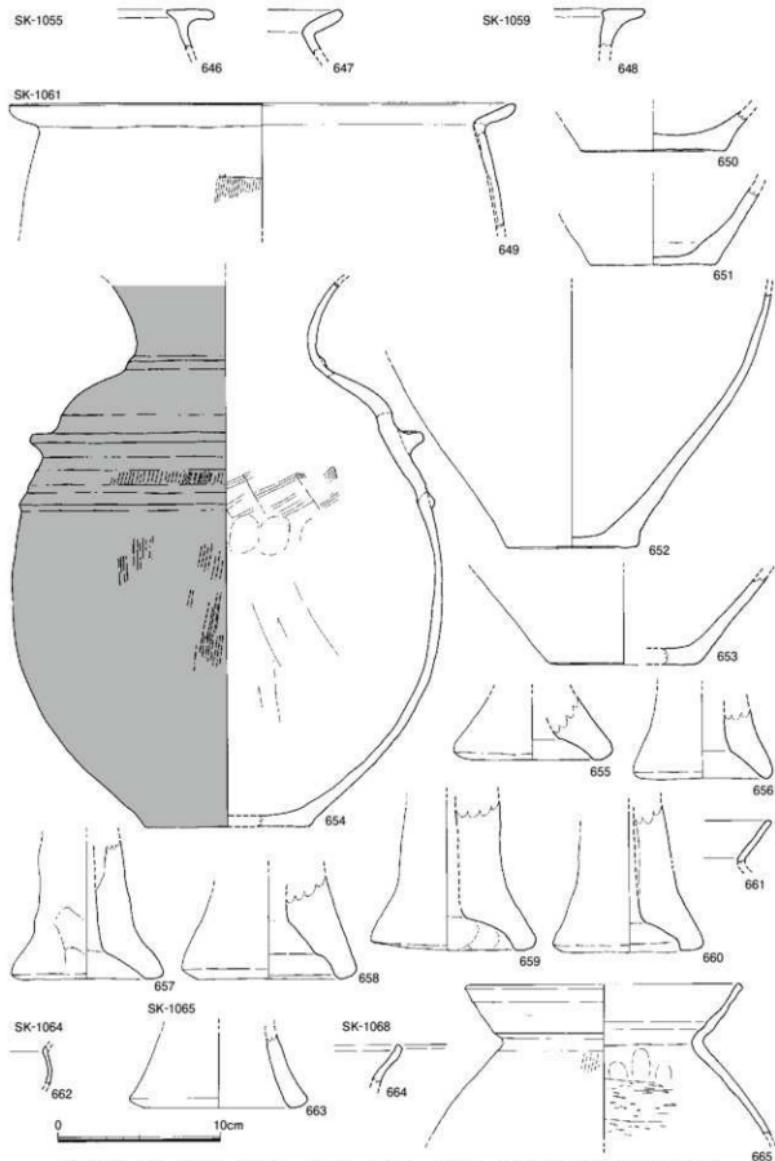


Fig.150 SK-1055・1059・1061・1064・1065・1068 出土遺物実測図 (1/3)

底面は平坦で、不整な浅い窪みが幾つか認められる。覆土は黒色粘質土である。

土坑 SK-1068 出土遺物 Fig.150

弥生土器、古式土師器が少量出土した。664は古式土師器の布留系甕で、口縁部小片。磨滅が著しい。665も古式土師器布留系甕で1/4周弱が残る。胴外面磨滅、内面ヘラ削りで頭部指揮え後ナテ。屈曲部内面もナテ。口縁横ナテ調整。古墳時代前期の遺構である。

土坑 SK-1069 Fig.149

1区の土坑SK-1068の南西1.5mに位置する。西端の一部が擾乱に切られる。東西に長い不整隅丸方形プランで、長さ1.35m、幅0.6m。断面逆台形、深さ10cmで、底面平坦。覆土は暗褐色粘質土。

土器小片が13点出土したが、図化できるものはない。

土坑 SK-1071 Fig.149

1区の前方後方形墳周溝SX-1100の底面で検出した。土壙墓の可能性がある。東西に長い隅丸方形プランで、長1.75m、幅0.5m。断面逆台形で底面まで45cmを測り、底面は平坦である。

丹塗りのある弥生土器片などが2点出土したが、図示できない。

土坑 SK-1076 Fig.149

1区東壁際の中央部に位置する。円形プランの土坑で、径0.8m～0.7m。断面逆台形で深さ17cm。底面平坦で、覆土は黒色粘質土である。

土器小片が6点出土したが、図化できるものはない。

土坑 SK-2012 Fig.151

2区中央の北東寄りにある大きな擾乱坑の北縁に一部が残った遺構である。隅丸方形かとみられるが、プラン・規模は不明。深さ50cm弱で、底面は平坦である。覆土は暗褐色粘質土である。

土器小片が少量出土した。図示できる遺物はない。

土坑 SK-2013 Fig.151

2区SK-2012に切られる。東西に長い楕円形プランで、径2.05m×1.5m。断面逆台形で、底面の西寄りに不整形の窪みがある。深さ70cmで底面は平坦である。覆土は黒色粘質土である。

土器小片、須恵器片が少量出土した。古代の遺構か。

土坑 SK-2014 Fig.151

2区中央の北東寄りの大擾乱に破壊される。南北に長い楕円形プランで、長径1.5m、短径1.2m以上。円筒形に直に掘り下げ、底面中央が埋む。最深部まで95cmを測る。覆土は暗褐色粘質土である。

弥生土器、土師器、須恵器が少量出土した。

土坑 SK-2015 Fig.151

2区SK-2014の西1mに位置する。径95cmの円形プランで、円筒形に掘り下げており、深さ105cmで、底面平坦である。覆土は暗褐色粘質土である。

弥生土器、土師器、須恵器が少量出土した。古墳時代後期であろう。

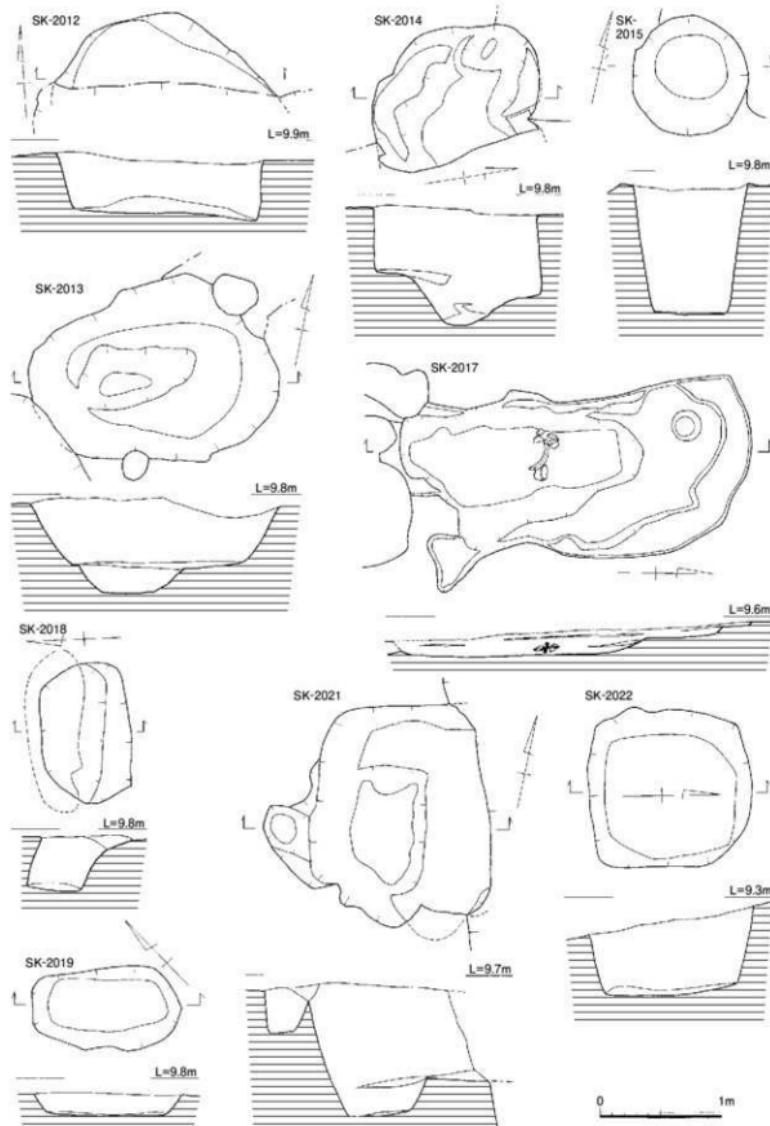


Fig.151 土坑 SK-2012 ~ 2015 · 2017 ~ 2019 · 2021 · 2022 実測図 (1/40)

土坑 SK-2017 Fig.151

2区中央のやや北寄りに検出した。SK-2015の南に4m離れる。南北に長い不整形で、長径2.9m、短径1.3m。底面南半の径 $2.0\text{m} \times 1.0\text{m}$ が皿状に窪み、土器片がまとまって出土した。覆土は黒色粘質土。

SK-2017出土遺物 Fig.152

弥生土器がコンテナ1/2箱出土した。図は全て弥生土器である。

666は壺の口縁部で鋸先形をなす。口縁横ナデ、外面刷毛目後ナデ、内面ナデか。667は広口の壺か。約1/4周が残る。口縁端部が肥厚する。器面が剥落して調整痕は残らない。668は壺の底部である。外面刷毛目後ナデ、丹塗り。内面指押えに刷毛目を加える。669も壺の底部で、内外面ナデ調整。

弥生時代中期後半の遺構であろう。

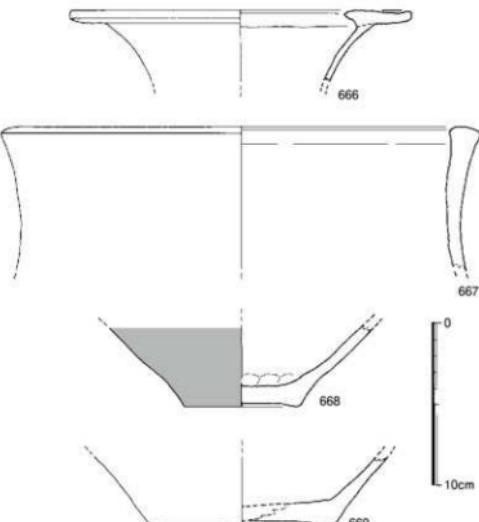


Fig.152 SK-2017 出土遺物実測図(1/3)

土坑 SK-2018 Fig.151

2区中央のやや北寄り、SK-2014の1m南に位置する。東西に長い楕円形プランで、径 $1.15\text{m} \times 0.75\text{m}$ 。北壁が大きくオーバーハングしており、深さ45cmで、底面平坦。覆土は暗褐色粘質土である。土器小片が少量出土した。

土坑 SK-2019 Fig.151

2区中央の北寄り、SK-2018の1.5m南に位置する。楕円形プランで径 $1.2\text{m} \times 0.65\text{m}$ 。断面逆台形で、深さ15cmと浅く、底面は平坦である。覆土は黒色粘質土である。遺物は全く出土していない。

土坑 SK-2021 Fig.151

2区中央北寄りの大攪乱の西縁に位置し切られる。隅丸方形プランで、南北長1.8m、東西長不明。断面逆台形で底面平坦。西寄りに径 $1.3 \times 0.9\text{m}$ の方形坑を掘る。深さ105cm。覆土は黒色粘質土。弥生土器が少量出土した。

土坑 SK-2022 Fig.151

2区のほぼ中央に位置し、SB-2070の柱穴を切る。径1.3m前後の隅丸正方形のプランで、断面逆台形をなす。深さ70cmで、底面は平坦である。覆土はロームと暗褐色粘質土の混合土である。

弥生土器、須恵器が少量出土した。

土坑 SK-2023 Fig.153

2区SK-2022の北に隣接し切られている。全容は不明だが隅丸方形プランか。短径1.25m、長径不明。断面逆台形で、深さ20cm。底面は南へ傾斜する。覆土は暗褐色粘質土である。

須恵器小片1点のみが出土したが、図化できない。

土坑 SK-2033 Fig.153

2区南西隅付近に位置する。SK-2028 (SX-2080の一部) の底面で検出した。南北に長い隅丸方形プランで、長径1.5m、短径1.1m。断面逆台形に深く掘り下げており、底面まで1.0mで、底面は皿状に窪む。覆土はロームと暗褐色粘質土の混合土である。

土器小片が1点のみ出土した。

土坑 SK-2038 Fig.153

2区南西部の調査区南壁際に検出した。南側は調査区外に伸びている。プランは不整で、東西2.1m、南北1.2m以上。断面逆台形をなし、深さ30cmで底面は平坦である。覆土は暗褐色粘質土である。

遺物は出土していない。

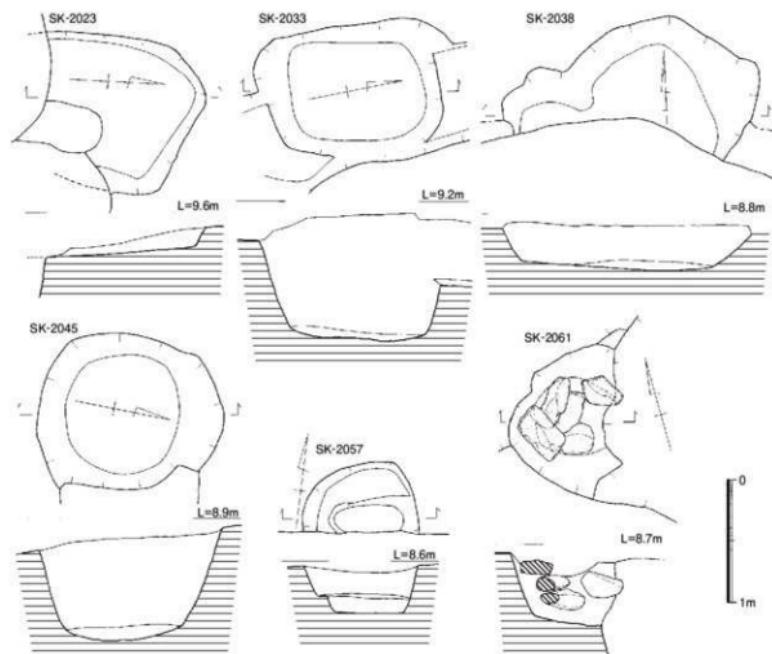


Fig.153 土坑SK-2023・2033・2038・2045・2057・2061実測図(1/40)

土坑 SK-2045 Fig.153

2区中央の南西寄りに位置する。東側と南西側を擾乱坑に切られる。南北にやや長い楕円形プランで長径 1.5 m、短径 1.3 m。断面逆台形で深さ 80cm、底面中央が窪む。覆土は黒色粘質土である。

弥生土器、土師器、須恵器、中国産白磁、石製品が少量出土した。

土坑 SK-2057 Fig.153

2区中央の南壁際に位置し、南側は調査区外に伸びており、平面形は不明。東西 0.95 m。断面形は逆台形で、底面の南側に楕円形の坑を掘る。最深部まで深さ 40cm を測る。

土師器、須恵器が少量出土したが、図示できるものはない。

土坑 SK-2061 Fig.153

2区南西部に位置し、古代井戸 SE-2050 に切られる。弥生溝 SD-2030 との切り合いは不明。平面は楕円形か。南北長 1.3 m。断面逆台形で深さ 60cm。底面は東に若干下る。径 20 ~ 30cm の角砾 5 個が投げ入れられていた。覆土は黒色粘質土である。

弥生土器、土師器の小片が 2 点出土したのみである。

土坑 SK-3024 Fig.154

3区中央に位置する。東端は擾乱に切られる。径 2.0 m のやや不整な隅丸方形プランを呈し、断面逆台形をなす。深さ 20cm で、底面は平坦である。覆土は黒褐色粘質土を主体とする。

土器小片が数点出土した。図化できるものはない。

土坑 SK-3026 Fig.154

3区中央の東壁際に位置する。整った隅丸方形プランで、径 1.4 m × 1.2 m で南北にやや長い。断面逆台形で深さ 35cm。底面は平坦である。覆土は暗褐色粘質土でロームブロックを含む。

SK-3026 出土遺物 Fig.155

少量の土器小片・須恵器と、670 の明代龍泉窯系青磁皿が出土した。中世後期の遺構である。

土坑 SK-3064 Fig.154

3区中央のやや南寄り位置する。西側を擾乱坑に、南側を近世溝に切られ、隅丸方形のコーナー部が残るのみ。深さ 20cm ほどの逆台形の横断面をなす。底面は平坦である。覆土は暗褐色粘質土。

土師器、須恵器、土師質土器、中国産白磁Ⅳ類が数点出土した。中世の遺構であろう。

土坑 SK-3065 Fig.154

3区東壁際に位置する。南側を近世溝の落ちに削平される。やや不整な隅丸方形で長径 2.0 m、短径 1.9 m。断面逆台形で、深さ 1.1 m、底面平坦である。覆土は暗褐色粘質土にロームブロックが混じる。

須恵器、土師質土器、瓦が少量出土したが図化できるものはない。中世の土坑であろう。

土坑 SK-3067 Fig.154

3区南西部に位置する。北側と南西側を擾乱や近世溝に切られる。大型の土坑で、やや南北に長い隅丸方形プランを呈し、南北長 3.5 m 以上、東西長 3.3 m を測る。断面逆台形で、東壁は上半がラッパ状

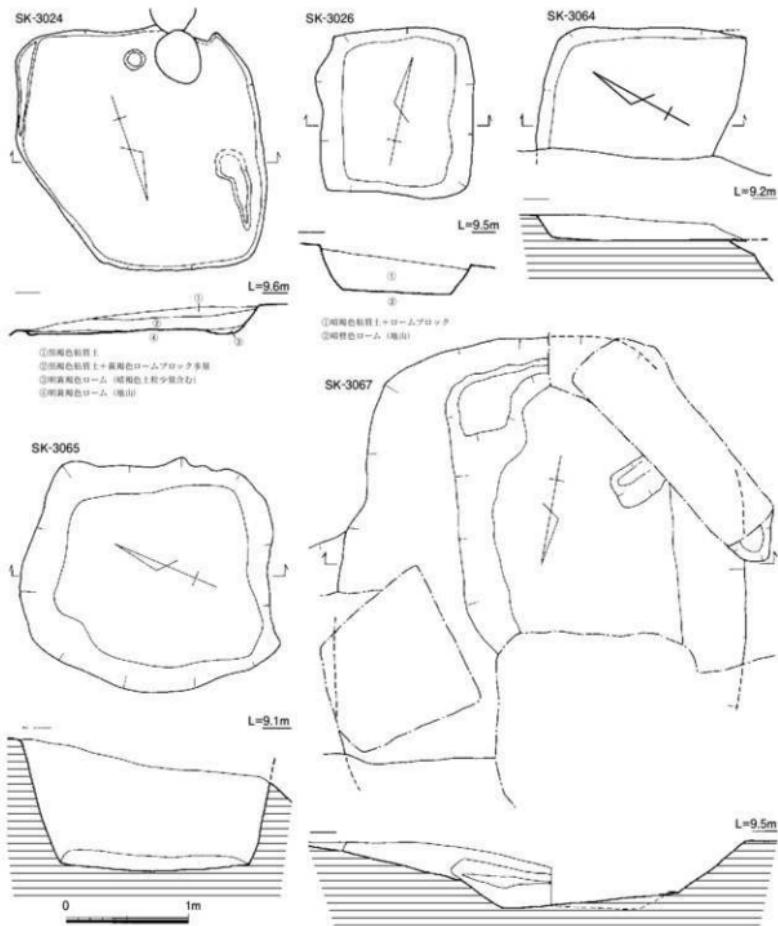


Fig. 154 土坑 SK-3024・3026・3064・3065・3067 実測図 (1/40)

に開く。遺構検出面から底面まで深さ 50cm で、底面はほぼ平坦である。遺構覆土は黒色粘質土。

SK-3067 出土遺物 Fig. 155

弥生土器、古式土器、石製品がコンテナ 2/3 箱出土した。671 は弥生土器の器台で、内面に指押さえ痕を残すが器面の剥落が著しい。

古墳時代前期の遺構か。

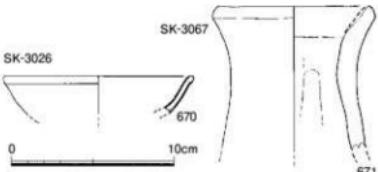


Fig. 155 SK-3026・3067 出土遺物実測図(1/3)

土坑 SK-4008 Fig.156

4 区の北寄りに検出した。比較的整った隅丸方形プランを呈し、長径 1.1 m、短径 0.85 m を測る。断面逆台形で、深さ 20cm、底面は平坦である。

土器小片、須恵器、骨が極く少量出土した。図化できる遺物はない。

土坑 SK-4013 Fig.156

4 区中央の SC-4011・4012 に重複し、これらを切る。南北に細長い隅丸方形プランで、長径 1.95 m、短径 0.7 m 前後である。断面逆台形で深さ 25cm、底面は平坦である。覆土は暗褐色粘質土を主とする。

SK-4013 出土遺物 Fig.157

弥生土器などの土器小片、須恵器、石製品が少量出土した。

672 は須恵器高台付き環で、高台部分のみの小片である。横ナデ調整。古代の遺構であろう。

土坑 SK-4014 Fig.156

4 区北寄りの SK-4008 の南東側 2m に位置する。北西を搅乱坑に切られる。南東部は方形プランだが、他は不整形なし、複数の遺構が切り合っている可能性がある。長径 2.6 m 以上、短径 0.9m ~ 1.9 m で、浅い。底面は平坦である。覆土は黒色粘質土である。

SK-4014 出土遺物 Fig.157

図示した土器のほか、弥生土器、土師器、須恵器が少量出土した。

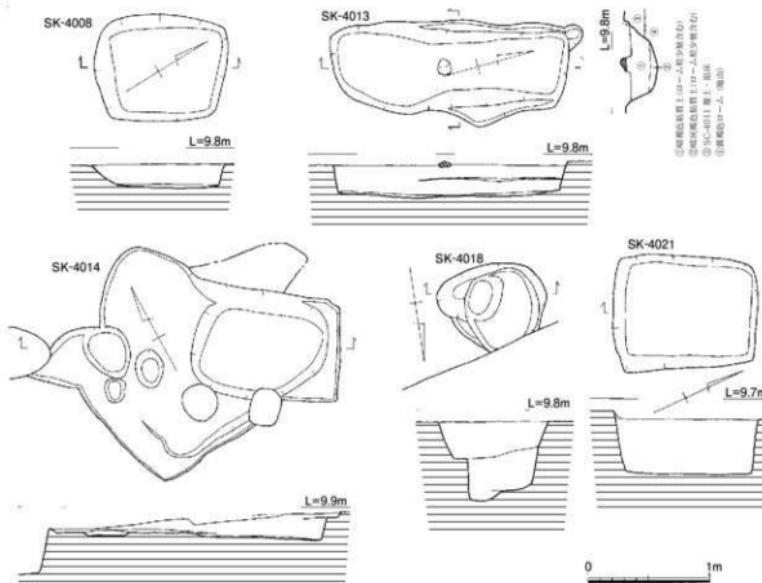


Fig.156 土坑 SK-4008・4013・4014・4018・4021 実測図 (1/40)

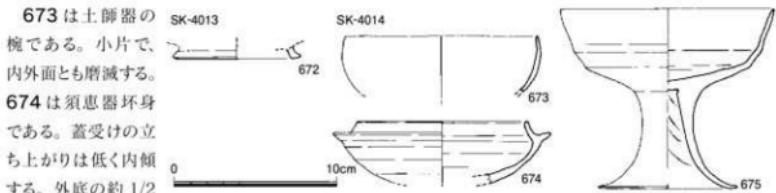


Fig.157 SK-4013・4014 出土遺物実測図 (1/3)

673は土師器の楕である。小片で、内外面とも磨滅する。
 674は須恵器坏身である。蓋受けの立ち上かりは低く内傾する。外底の約1/2に回転ヘラ削りを加える。ロクロ回転は時計回り。675は土師器高环である。脚内面にシボリ痕を留めるが、器面が完全に剥落しており本来の器厚ではなく、調整痕も残らない。古墳時代後期の遺構であろう。

土坑 SK-4018 Fig.156

4区のほぼ中央で、弥生時代の大溝SD-2030に切られる。楕円形プランで、複数の遺構の切り合いで考えられる。長径0.9m、短径0.7m以上である。断面逆台形で、最深部まで65cmを測る。覆土は黒色粘質土である。

弥生土器、土師器が少量出土したが、図化できない。弥生時代と古墳時代前期の遺構の重複か。

土坑 SK-4021 Fig.156

4区の北西に位置する。整った隅丸方形プランで、径1.2m×0.9m。断面逆台形をなし、深さ50cmで、底面は平坦である。覆土はロームブロックである。

土師器小皿片、須恵器片が3点出土したが図示できない。中世の遺構であろう。

土坑 SK-5013 Fig.158

5区中央に位置する。楕円形プランで長径1.1m、短径0.95m。断面逆台形をなし、深さ20cm。底面平坦で中央に浅い窪みがある。覆土は黒色粘質土である。

SK-5013 出土遺物 Fig.159

弥生土器、土器小片が数点出土した。676は弥生土器壺の胴部片である。偏球形で三角形突帯を貼付するが、内外磨滅して調整痕は残らない。弥生時代の遺構であろう。

土坑 SK-5014 Fig.158

5区中央の北壁際に位置する。北側は調査区外に伸びる。南北に長い隅丸方形プランとみられ、南北2.2m以上で、東西は1.6mを測る。断面逆台形だが浅く、深さ10cmで、底面平坦である。覆土は黒色粘質土である。

土器小片、須恵器片が2点出土した。図化できるものはない。

土坑 SK-5015 Fig.158

5区中央の南壁際に位置する。SK-5014の南西に2.5m離れる。東西に細長い楕円形プランで、径1.3m×0.6m。断面逆台形で深さ20cm。底面は平坦である。覆土は黒色粘質土である。

土器小片が数点出土したのみで、図示できない。

土坑 SK-5016 Fig.158

5 区のほぼ中央、SK-5014 と SK-5015 の間に位置する。土壤墓の可能性がある。東西に細長い楕円形プランで、長径 1.3 m、短径 0.4 m を測る。底面は東がやや深く、深さ 20cm。覆土は暗褐色～灰褐色粘質土。西端の一段浅い部分に土師器皿の上に土師器壺が重ねて置かれてあり、供獻土器であろう。

SK-5016 出土遺物 Fig.159

図示した 2 点が出土遺物の全てである。ともに供獻と思われる土器である。

677 は土師器の壺である。外底を時計回りに回転ヘラ削りする。外面は丁寧なナデ、内面は磨滅する。口縁横ナデ。赤橙褐色を呈する。678 は土師器の皿で、底部は回転ヘラ削り。磨滅しており調整不明である。橙褐色を呈する。8世紀後半～末の土壤墓であろう。

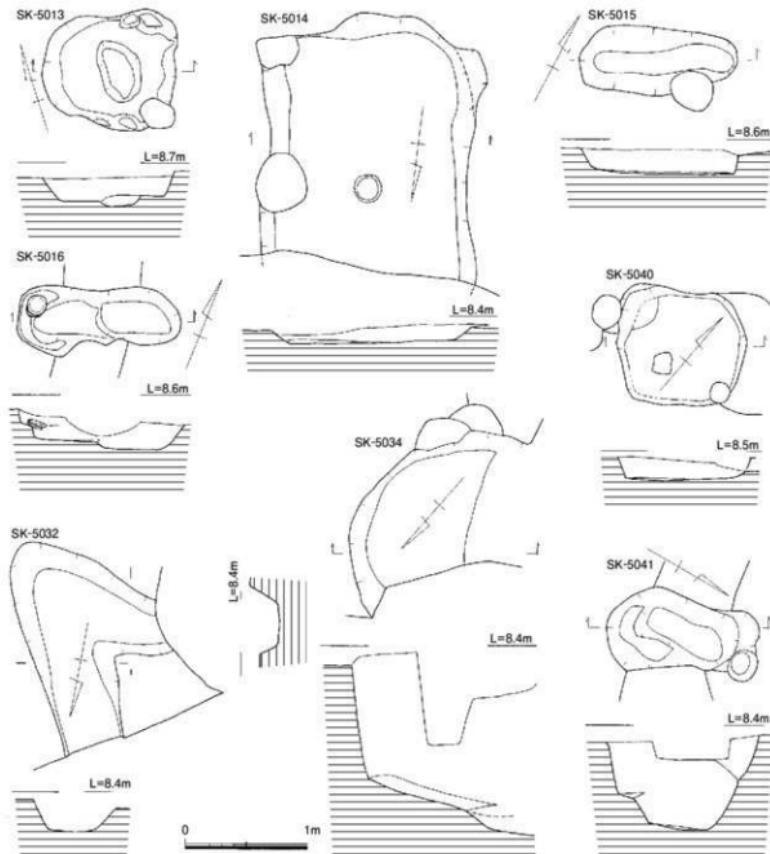


Fig.158 土坑 SK-5013 ~ 5016・5032・5034・5040・5041 実測図 (1/40)

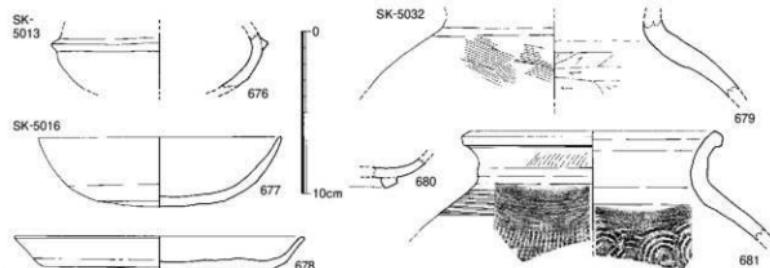


Fig. 159 SK-5013 - 5016 - 5032 出土遺物実測図 (1/3)

土坑 SK-5032 Fig.158

5区西半部の北壁際に位置する。北側は調査区外に伸び、西側は中世地下式壙 SK-5035 に切られる。幅 0.6 m ほどの溝状の遺構がし字形に巡る不整なプランで、東西 1.7 m。深さ 20cm の断面逆台形ないし U 字形である。覆土は暗褐色粘質土である。

SK-5032 出土遺物 Fig.159

図示した土器の他に、弥生土器、土師器、須恵器、瓦が少量出土した。

679 は土師器の壺である。肩部の小片で、外面刷毛目、内面ヘラ削り、内外とも頭部は横ナデ調整。
680 は須恵器高台付き環の小片である。高台は外底の内寄りに貼付し、内側が接地する。横ナデ調整。
681 は須恵器の壺である。口縁から胴部外面に平行タタキ後、肩部にカキ目、口縁に横ナデを加える。胴内面は同心円文の当て具で、口縁内外は横ナデ調整。

奈良時代の遺構であろう

土坑 SK-5034 Fig.158

5区西半部の SK-5035 の東に重複しており、これに大きく切られている。全形は不明で、径 1.5 m 以上の円形土坑であろうか。壁はほぼ直に落ちており、底面は西側へかなり傾斜している。遺構検出面からの深さは 1.2 m である。

弥生土器の小片が 4 点出土した。図化できる土器はない。

土坑 SK-5040 Fig.158

5区西半部の南壁近くに位置する。攪乱坑に上部を削平されている。やや不整な隅丸方形プランを呈し、径 1.05 m × 0.95 m である。断面逆台形だが浅く、深さ 20cm。底面は平坦である。覆土は暗褐色粘質土である。

須恵器环などの小片 2 点が出土したが、図示できない。

土坑 SK-5041 Fig.158

5区西半部のほぼ中央に位置する。不整な梢円形プランで、長径 1.25 m、短径 0.65 m。断面逆台形で、中央を一段深く掘り下げる。深さ 70cm。覆土は暗褐色粘質土である。

土師器（环）、須恵器、瓦器、東播系須恵器の小片などが極く少量出土したが、図化できない。中世の遺構であろう。

(7) 弥生時代の木棺墓 (S O)

木棺墓 SO-1058 Fig.160

1区東半部の北西寄りに位置する。祭祀土坑SX-1045の掘り下げ後に検出しており、これに先行する遺構である。北側は搅乱に切られている。隅丸長方形プランをなし、長さ143cm以上、幅50cmを測る。主軸方位は磁北から30°西を向く。遺構検出面から底面まで深さ40cmで、壁はほぼ直に立つ。底面平坦で、南北の小口に長さ40cm、幅5cm、深さ10cmほどの掘り込みを設ける。遺構覆土は黒色粘質土である。

SO-1058 出土遺物 Fig.161

丹塗りのある弥生土器片等が出土したが、上層SX-1045の遺物が混入した可能性がある。

682は弥生土器甌の口縁部小片である。口縁は逆「L」字形をなし、上面内傾する。刷の張り出しあはない。外面縦刷毛目、内面ナデ、口縁内外横ナデ調整。

弥生時代中期前半以前の遺構とみられ、甌棺墓群に先行しよう。

木棺墓 SO-2059 Fig.162

2区西半部中央の段落ち際に位置する。周囲の全ての遺構に切られており、先行する。遺構の残りが悪いが、南北に長い隅丸長方形プランで、長さ130cm、幅60cm。遺構切

出面から底面まで40cmが残る。主軸方位は磁北から13°西偏する。断面逆台形をなし、底面は平坦で、東西両側辺に深さ5cm弱の掘り込みが巡るが、小口部分には回らない。西辺の掘り込みは東辺に比して浅く、途切れる部分がある。底面の北寄りに浅い窪みがあるが、この遺構に伴うかは不明。覆土は黒色粘質土。

遺物は出土していない。

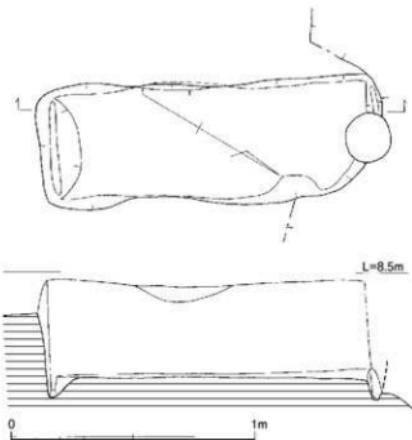


Fig.160 木棺墓 SO-1058 実測図(1/20)

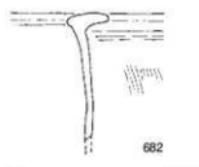


Fig.161 SO-1058
出土遺物実測図 (1/3)

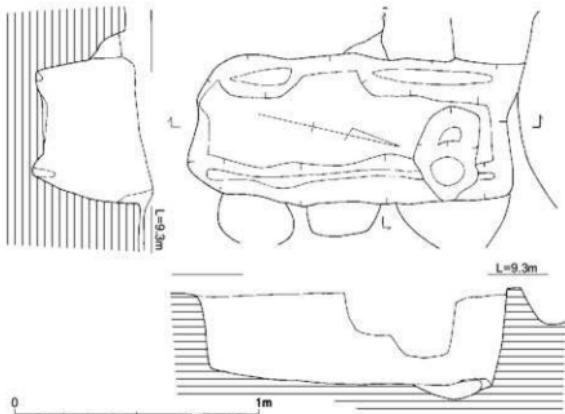


Fig.162 木棺墓 SO-2059 実測図(1/20)

(8) 弥生時代の甕棺墓 (S T) Fig.163・164、PL.19・20・22

甕棺墓は1区で16基、2区で4基を確認した。数基ずつ群集してグループをなしており、1区ではST-1011・1022の群、ST-1012・1013・1024・1025の群、ST-1014～1020の群があり、やや東に離れてST-1047・1048の群があり、北に離れてST-1046が単独で分布する。2区ではST-

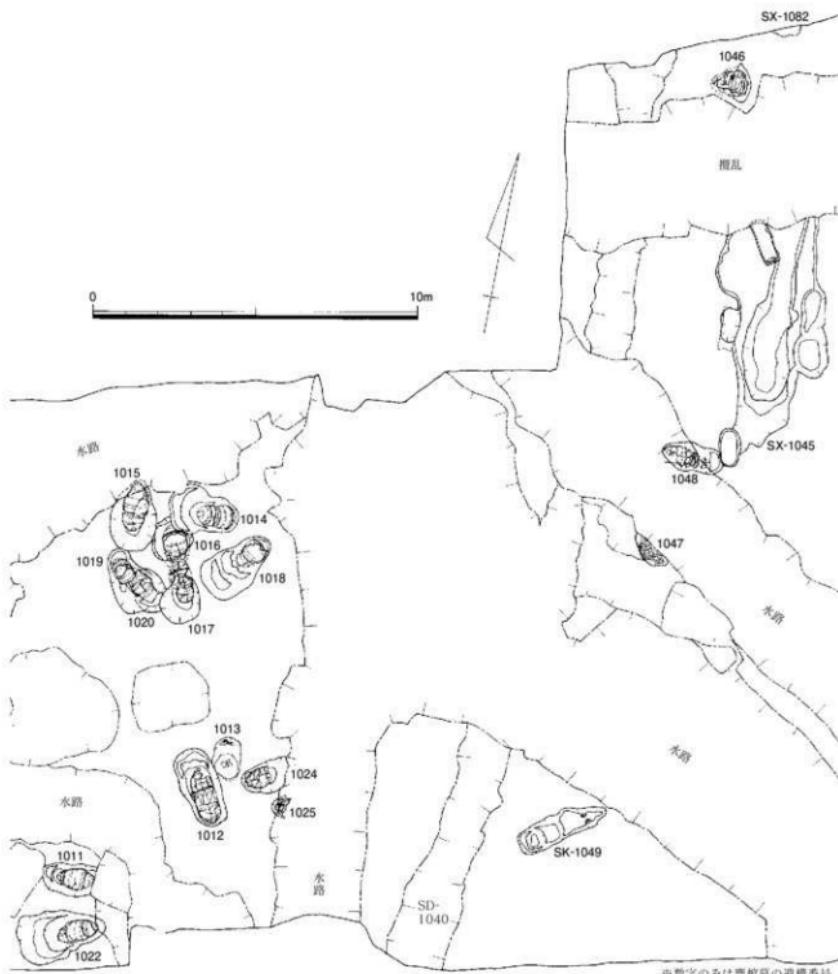


Fig.163 1区の甕棺墓の配置 (1/150)

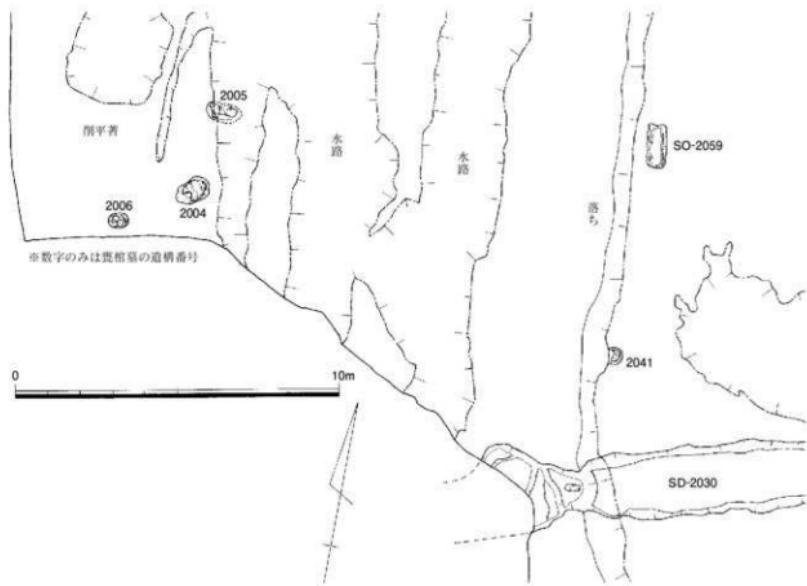


Fig.164 2区の甕棺墓の配置 (1/150)

2004～2006の群と、東に離れて位置するST-2041（小児棺）が単独で分布する。しかし、分布状況から攪乱や削平により失われた甕棺墓が多いことが推定され、上記したみかけの群構成が本来の姿を示すとは考えられない。時期的には大半が弥生時代中期末の立岩式であることから、短期のうちに集中して造られたものと考えられる。また、1区では甕棺墓群の分布の東現に溝状のSX-1045があり、上層から多量の弥生土器が出た。甕棺墓群に対応する遺構である可能性が強い。当該期の堅穴住居はSX-1045の東で2軒確認しており、墓地と居住地とを隔てる境界の役割があろう。

甕棺墓 ST-1011 Fig.165、PL.20

1区西半部の南壁近くに位置する成人甕棺墓である。上甕がかろうじて残る程の強い削平を受けおり、かつ攪乱による破壊が大きい。墓壙掘り方は北辺のみが残っており、平面形や規模は不明である。墓壙は東へ段状のテラスを設けながら掘り下げており、棺を据える部分をやや高く残す。遺構検出面から墓壙底面まで60cmを測る。甕棺は合わせ口で、下甕に大型の甕形土器を用い、墓壙を埋めて傾斜を整えた後、上半部を打ち欠いた小型の上甕を被せている。接合部に粘土等による覆いは認められなかった。主軸方位は磁北から75°東偏しており、頭位はほぼ西向きと言えよう。埋置角度は浅く、25°前後である。

ST-1011出土遺物 Fig.166、PL.29

683は上甕で、胴上半部を打ち欠く。打ち欠きは主に内面に行っており、外面がきれいな外観を保つよう配慮している。底部は削平により失われている。内外面ともナデ調整である。橙褐色を呈し、胎土に細砂粒多量と赤色粗大鉱物粒少量を含む。焼成良好で、底部近くに黒斑がある。胸部最大径46.9cm。

684は下蓋である。接合復元による歪みが著しい。口縁は逆「L」字形をなし、上面が丸みを持つ。口縁外端は丸くおさめ、屈曲部内端は尖り氣味に突出する。胸部最大径は中位にあり、口径を若干上回る。口縁直下に三角形突帯1条を、胸部中位に台形突帯2条を貼付し、横ナテを加える。底部は平底である。器面が荒れて調整が観察しにくいが、外面繊刷毛目、内面ナテ調整で、内底付近に板状工具によるナテ調整を留める。橙褐色を呈し、胎土に径2mm以下の砂粒を多量に、雲母粒を少量含み、焼成良好で、胸部上半に黒斑がある。外口径59.5cm、胸部最大径61.8cm、器高97.3cmを測る。

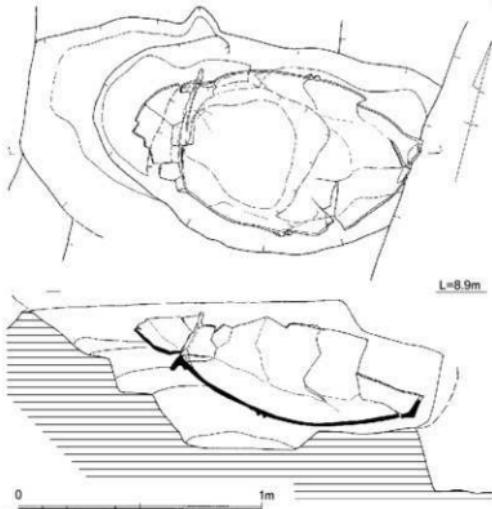


Fig.165 壺棺墓 ST-1011 実測図 (1/20)

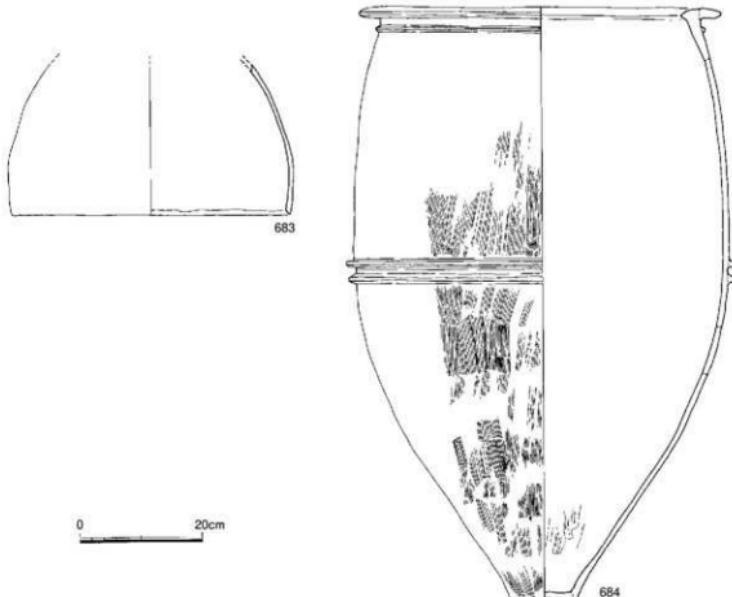


Fig.166 ST-1011 壺棺実測図 (1/8)

壺棺墓 ST-1012 Fig.167、PL.20

I 区西半部の南壁近くに検出した成人壺棺墓である。壺棺墓 ST-1011 の北西に 4 m 離れており、後述の ST-1013 と並列配置されている。墓壙掘り方は概ね南北に長い圓丸方形をなすと思われるが、南壁は崩落しており、現状で長さ 2.1 m、幅 1.2 m を測る。北壁にテラス状のステップを 1 段設けており、墓壙底面の中央がやや窪む。遺構検出面から墓壙底面まで 90 cm を測る。南壁へ横坑を掘って下甕を据えている。壺棺は合わせ口で、下甕に大型の壺形土器を据え、その後に埋土を行って底面高を調整し、口縁を打ち欠いた上甕を被せている。接合部に粘土による被覆等は認められなかった。主軸方位は磁北から 27° 西偏し、頭位は北向き。埋置角度は 19° 前後とゆるやかである。

ST-1012 出土遺物 Fig.168、PL.29

685 は上甕で、口縁を打ち欠いている。打ち欠きは主に内面に対して加えており、外縁には少ない。底部は平底である。胴部に台形突帯 2 条を貼付するが、下段突帯の大半は脱落している。外縁は縱刷毛目その後、胴中位に工具によるナデ調整を加えており、突帯周辺を横ナデする。内面ナデ調整で底部に指押え痕が残る。橙褐色を呈し、胎土に石英粒などの砂粒を多量に含み、焼成良好。相対する 2 ヶ所に黒斑がある。胴部最大径 64.9 cm。

686 は下甕である。口縁は逆「L」字形をなし、上面が僅かに外傾する。口縁の内外端部は面取りする。胴部最大径は上位にあり、口径より小さい。胴中位で僅かにくびれしており、ここに三角形突帯 2 条を巡らせている。口縁直下にも三角形突帯 1 条を貼付する。突帯は丸みのある三角形で、シャープではない。

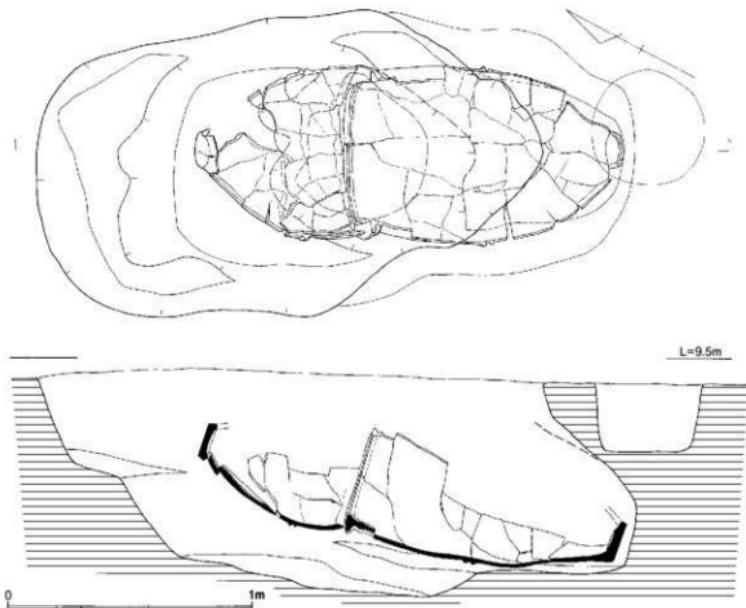


Fig.167 壺棺墓 ST-1012 実測図 (1/20)

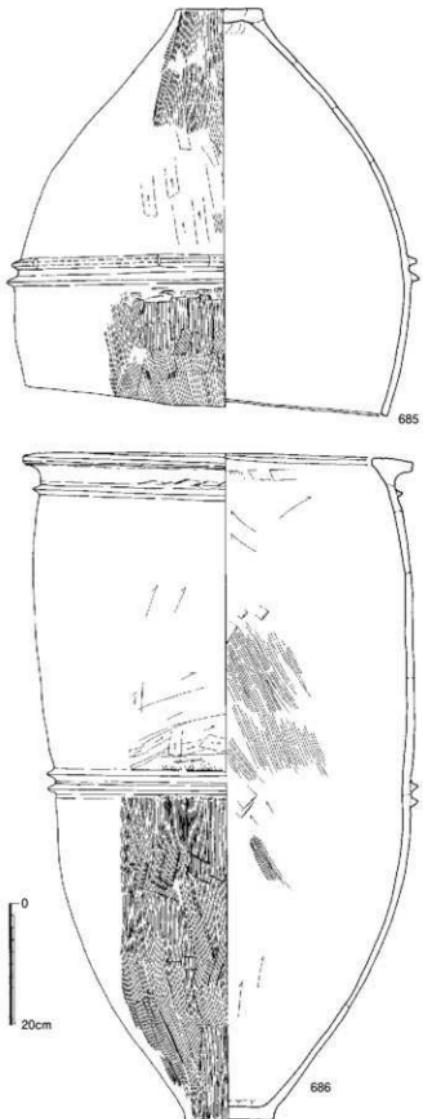


Fig.168 ST-1012 壽棺実測図 (1/8)

底部は平底である。胴下半を中心にして縦の刷毛目調整を行い、上半には板状の工具によるナデ調整を加える。口縁と突堤周辺は横ナデ調整する。内面は斜刷毛目の上から板状の工具によるナデ調整を加えており、内底には指押え痕が残る。橙褐色を呈し、胎土に石英粒等の砂粒を多く含み、焼成良好で、胴部の中位から下半にかけて黒斑がある。外口径 64.0cm、胴最大径 61.9cm、器高 110cm を測る。

壽棺墓 ST-1013 Fig.169, PL.20

ST-1012 の北に隣接するが、切り合いは不明である。壽棺のほとんどが抜き取られているが、墓壙上層から須恵器の高環脚が出土したことから考えて、古墳時代後期以降に何らかの原因で掘り返されたものと推定される。位置がやや離れているが、古墳時代後期の溝 SD-2040 の上層からは、壽棺片に須恵器を添えて一括廻棄した遺物が出土しており (PL.9-6)、7世紀代に一帯を造成した際に撤去された可能性も考えられる。ST-1013 の墓壙は隅丸方形プランをなし、長径 1.3m、短径 0.9m を測る。墓壙の大きさから考えて成人棺であったと思われる。南へ斜坑を掘っており、ここに棺を安置したものと考えられる。頭位は ST-1012 と同様に北向きであろう。遺構検出面から墓壙底面までの深さは 35cm で、地山は明黄褐色ロームである。

墓壙底面に密着して壽棺の胴部破片が数点出土したが、図化できるものではない。

壽棺墓 ST-1014 Fig.170, PL.20

1 区西半部の北壁寄りに位置する。ST-1013 から北に 7m 離れている。8 基で一群をなすグループに含まれる。墓壙北西側を一部搅乱に切られる。墓壙プランは円形を呈し、径 1.5m 前後。東へ向かって斜めに墓壙を掘り下げており、西壁は 4 段のテ

ラス状に平坦面をつくり、埋納時の足場としている。底面は小さな平坦面をなし、検出面から深さ1.1mを測る。斜坑は壺棺の形状に合わせて掘られ、下甕を設置した後に埋め戻して底面を整え、上甕を置いている。下甕には大型の甕を用い、上甕は一回り小さな甕を下甕に差し込んで呑口をしている。調査時には口縁を打ち欠いた上甕と考えられたが、整理の結果口縁まで接合できたことから、割れて脱落していたものと思われる。接合部に粘土は認められなかった。主軸方位は磁北から85°東偏しており、頭位は西向きである。埋置角度は45°前後で、かなり急角度である。墓壇埋土は暗褐色～黒色土で、上甕の下は汚れたローム土で埋め戻している。棺

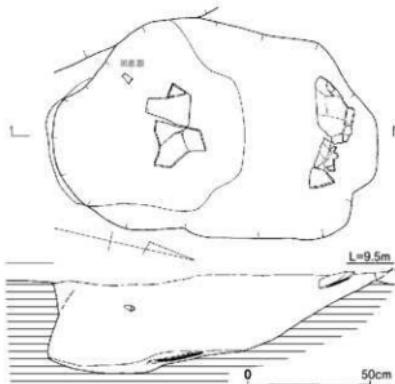


Fig.169 壺棺墓 ST-1013 実測図 (1/20)

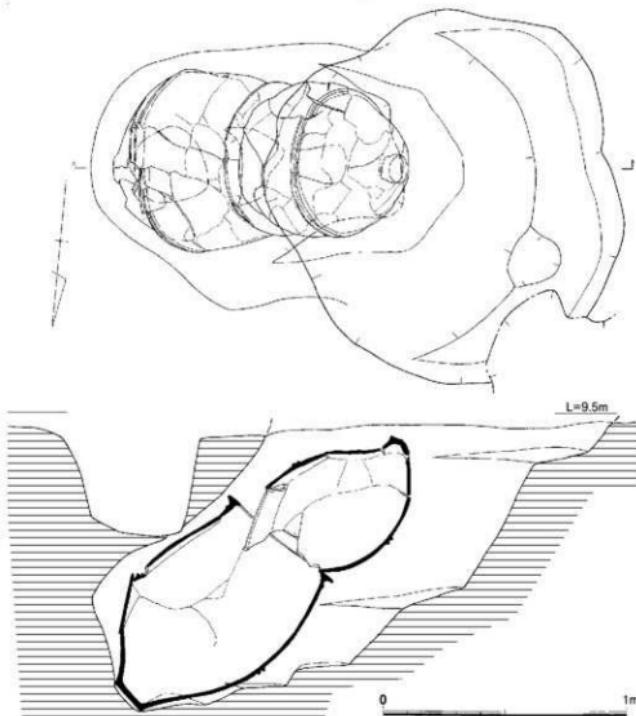


Fig.170 壺棺墓 ST-1014 実測図 (1/20)

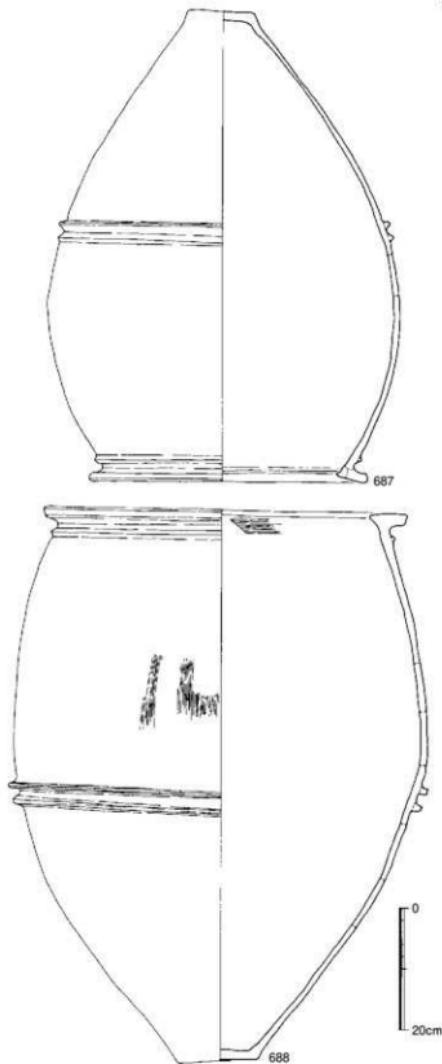


Fig.171 ST-1014 墓棺実測図 (1/8)

全体に細かいひび割れや座屈が顕著であり、後世にかなりの重圧がかけられたものと考えられる。棺内には土砂が詰まっていた。

ST-1014出土遺物 Fig.171, PL.29

687は上甕である。口縁は逆「L」字形をなし、上面が内傾する。口縁外端は面取りする。胴の張りが強く、胴最大径は口径をかなり上回る。底部は平底である。口縁直下に三角形突帯1条を、胴部のやや下位に台形突帯2条を貼付する。外面上半は磨滅するが、下半はナデ調整。内面ナデ調整である。口縁と胴部突帯附近を横ナデ調整する。橙褐色を呈し、胎土に径3mmまでの砂粒を多量に含み、焼成良好である。胴外面の相対する2ヶ所に黒斑がある。外口径45.6cm、胴最大径57.7cm、器高77.3cmを測る。

688は下甕である。口縁は逆「L」字形に屈曲し、上面は僅かに内傾する。口縁外端は面取りにより浅く窪み、内端は突出して小さな平坦面をなす。胴最大径はやや上位にあり、口径をやや上回る。口縁直下に三角形突帯を1条、胴のやや下位に高めの台形突帯を2条貼付する。底部は平底である。外面は器面が荒れて観察しにくいが、縱刷毛目の後ナデを加えたか。内面ナデ調整。口縁と突帯周辺は横ナデ調整する。淡い橙褐色を呈し、胎土に砂粒を少量含み、焼成良好で、胴部上半に黒斑がある。外口径59.7cm、胴最大径67.7cm、器高90.7cmを測る。

蓋棺墓 ST-1015 Fig.172, PL.20

I区西半部の蓋棺墓ST-1014の西隣に位置する。北側が攪乱により大きく抉られており、下甕の底部まで削られて失われている。遺構面自体も大きく削平されており、上甕の大半は原位置を保っていない。墓壙掘り方は、現状で梢円形プランをなすが、掘り方最大径より上位の

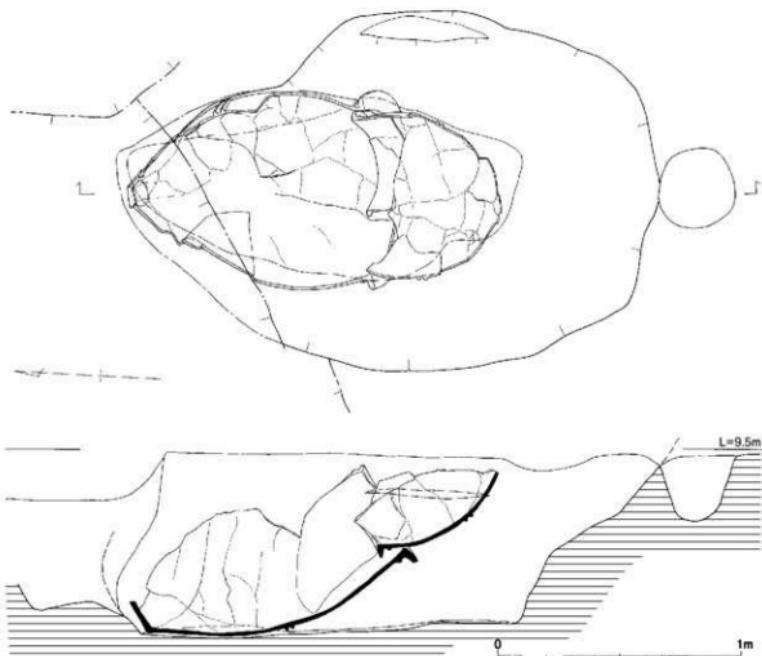


Fig.172 墓壇墓 ST-1015 実測図 (1/20)

壁面が崩落して墓壇が大きく損なわれており、本来は隅丸方形プランであったものと推定される。墓壇断面形は現状で逆台形を呈し、底面は平坦で、検出面から深さ 75cm を測る。下蓋には大型の甕を、上蓋にはかなり小さな甕を用いており、上蓋口縁を下蓋に差し込んで呑口としている。接合部に粘土は認められなかった。主軸方位はほぼ磁北を指し、頭位は南向きである。埋置角度は 33° 前後で、下蓋を据えた後、地山ローム主体の土で埋め戻して傾斜を整えて上蓋を置いたものと考えられる。墓壇上部には黒色粘質土が詰まっていた。

ST-1015 出土遺物 Fig.173. PL.29

689 は上蓋である。口縁は逆「L」字形を呈し、上面内傾する。口縁外端は面取りされ、凹面をなす。胴部最大径は上位にあり、口径を上まわる。底部は欠く。口縁直下に 1 条、胴のやや下位に 2 条の台形突帯を貼付し、横ナテを加える。外器面は磨滅するがナテ調整か。内面はナテ調整で、外面突帯に対応する位置に指壓さえ痕が残る。橙褐～淡い橙褐色を呈し、内面に黒い斑点がある。胎土は径 3mm～5mm の粗砂粒を少量、径 2mm 以下の細砂粒を多量に含む。焼成は良好で、外面中位に黒斑がある。外口径 52.6cm、胴最大径 60.0cm。

690 は下蓋である。口縁は逆「L」字形に屈曲する。歪みがあり、断面図では上面水平だが、全体的には僅かに内傾している。口縁外端は面取りにより浅く窪み、内端は突出して小さな平坦面をなす。胴最大径は口径をやや上回る。底部は平底で、外底がやや窪む。口縁直下に台形突帯 1 条、胴の

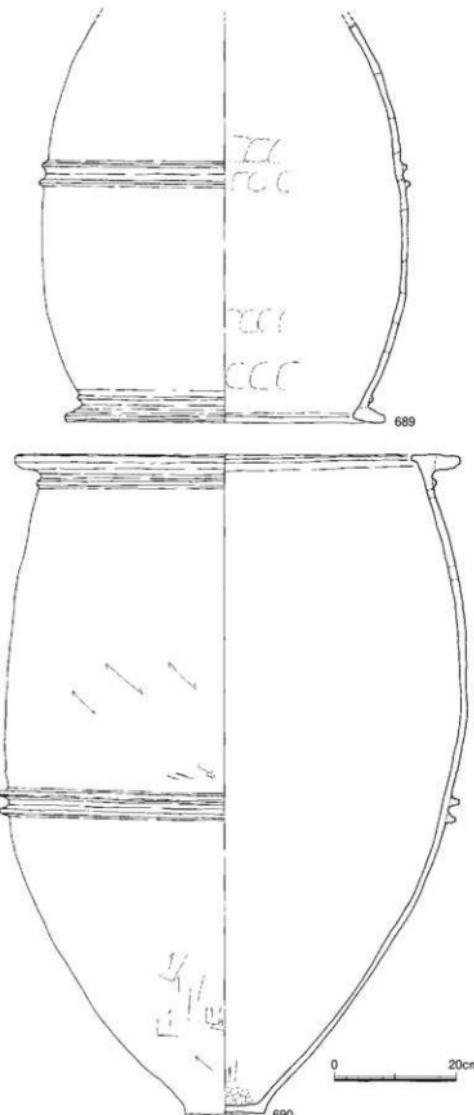


Fig.173 ST-1015 墓棺実測図 (1/8)

やや下位に高めの台形突帯 2 条を貼付する。内外面ともナデ調整で、外面の一部に工具によるナデを加える。内底には指押痕が残る。口縁と突帯付近は横ナデ調整する。橙褐色を呈し、胎土に粗大砂粒を僅かに、細砂粒を多く含み、焼成良好。底部付近の相対する 2ヶ所に黒斑がある。外口径 72.8cm、胴最大径 75.8cm、器高 108.3cm を測る。

墓棺墓 ST-1016 Fig.174、PL.21

I 区西半部に検出した。ST-1016・1017・1019・1020 の 4 基は 2m × 2m ほどの範囲に密集して営まれた一群で、ST-1020 → ST-1017・1019 → ST-1016 の順に新しい。墓壙埋土が近似し、重複する部分では個々の墓壙プランが明確につかめなかった。ST-1016 の墓壙掘り方が ST-1017 墓壙を大きく切り、ST-1017 下甕の一部が掘り方内に現れている。いわば ST-1017 に覆い被さるように ST-1016 が営まれた状態にある。このため両者が重なる南側では墓壙の形状が不明確だが、おそらく梢円形プランの掘り方であろう。ST-1017 を避けて北へ斜めに掘り込まれており、底面は平坦で、遺構検出面から深さ 85cm である。かなり広めに横穴を掘って下甕を据えており、掘り方最大径が甕棺を大きく上回り、貯蔵穴のような袋状をなしている。底面から少し浮かせて下甕を据えた後、埋め戻して傾斜を整え、かなり小振りの甕を上甕に被せたとみられる。上甕の圧により下甕の口縁が折れている。遺構面が大きく削平を受けており、上甕の残りは悪い。

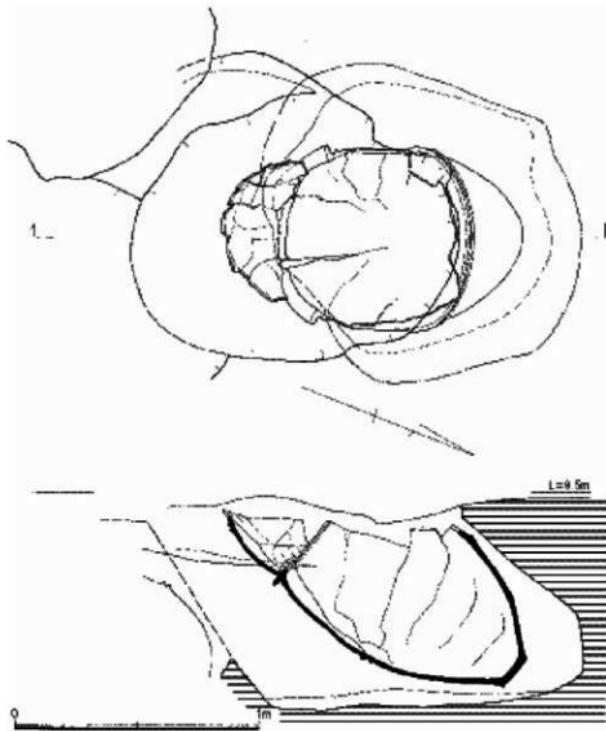


Fig.174 霊棺墓 ST-1016 実測図 (1/20)

合わせ口蓋棺で、粘土による接口部の被覆はない。上蓋は口縁を打ち欠いた蓋を用いるが、整理時に墓壙内出土の他の口縁部破片と接合しており、打ち削った破片も墓壙内に収めたものと考えられる。主軸方位は磁北から 21° 西偏しており、頭位は南向きである。埋置角度は 41° 前後。墓壙埋土は黒色粘質土である。

ST-1016 出土遺物 Fig.175, PL.29

691は上蓋である。調査時には口縁を打ち欠いた状態で下蓋に被せられていたが、整理の結果口縁まで接合しており、打ち欠いた口縁を墓壙内に収めたものと考えられる。また底部も削平により失わっていると思われたが、接合しないものの底部が遺存しており、削平以前に陥没して棺内に落ち込んだものと考えられる。胸部は削平により持ち去られたとみえる。口縁は逆「L」字形をなし、上面はかなり内傾する。口縁外端は面取りし断面三角形をなす。倒卵形に胴が強く張り、胴最大径は口径をかなり上回る。底部は平底で、中央の粘土が剥落するが外器面と同色に焼き上がりおり、焼成前ないし焼成時の剥落と考えられる。口縁直下には低い三角形の高まりがあるが突帯ではなく、口縁の横ナデによって生じた粘土瘤である。胸部最大径のやや下に三角形突帯を2条貼付し横ナデする。外

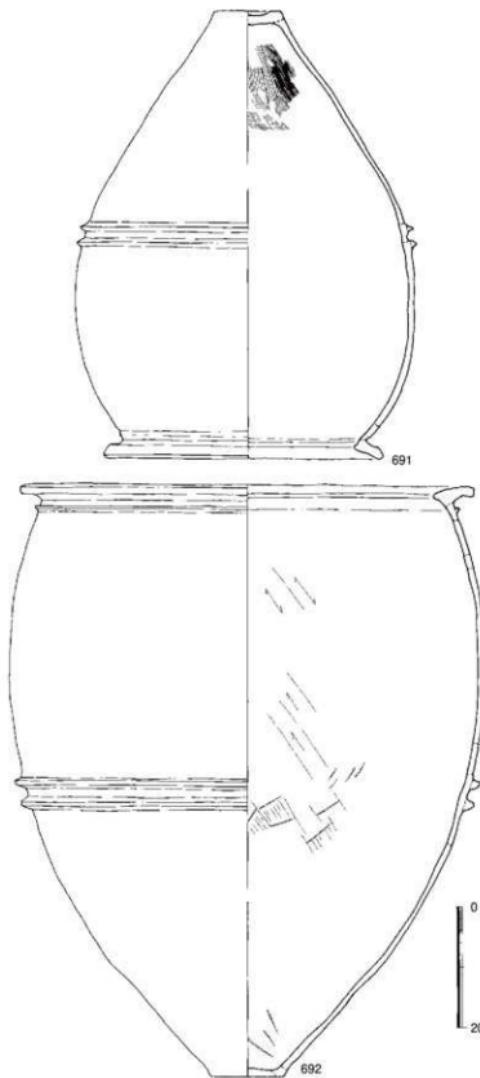


Fig.175 ST-1016 壱棺実測図 (1/8)

面を造った後、北へ斜坑を掘り、下壺を据える。最深部まで深さ 80cmで、斜坑は下壺に合わせてぎ

器面は磨滅が著しい。内面は粗い刷毛目の後ナデ調整で、内底ナデ。外面淡橙褐色、内面明橙褐色を呈し、胎土は砂粒が少なく、焼成良好である。外面の相対する 2ヶ所に黒斑がある。外口径 45.8cm、胴最大径 55.5cm、器高は推定 73.5cm前後とみられる。

692 は下壺である。口縁は逆「L」字形に屈曲し、上面が内傾外反する。口縁外端は面取りにより浅く窪み、内端は丸く突出する。胴最大径は上位にあり口径を上回る。口縁直下に三角形に近い台形突帯を 1 条、胴のやや下位に台形突帯を 2 条貼付する。底部は平底である。外面は磨滅するがナデ調整、内面は板状工具で調整した後ナデ調整しており、板小口の圧痕が残る。口縁と突帯周辺は横ナデ調整。橙褐色を呈するが部分的に黒い斑点がある。胎土は径 3mm～4mmの石英等粗砂粒が目立ち、細砂粒を多量に含む。焼成良好で、胴部下半に黒斑がある。外口径 74.4cm、胴最大径 78.0cm、器高 97.3cmを測る。

壹棺墓 ST-1017 Fig.176、PL.21

1 区西半部に検出した。ST-1016 等とともに 2m×2m ほどの範囲に密集して営まれている。ST-1020 を切り、ST-1016 に切られる。特に ST-1016 とは掘り方が重複しており、墓壙形状が不明確である。平面形は不整な楕円形とみられるが、壹棺墓主軸に対しだけく西へ偏っている。現状で 1.5m×1.2m。深さ 50cmで平坦

りぎりに掘られている。上蓋は合わせ口で、口縁下に大きなロームブロックを置いて高さを調節している。粘土による接口部の被覆はない。遺構面が大きく削平され上蓋の残りが悪い。主軸方位は磁北から 24° 西偏し、頭位は南向き。埋置角度は 35° 前後。墓壙埋土は暗褐色粘質土で、炭化物・焼土を含む。

ST-1017出土遺物 Fig.177、PL.29

693は上蓋である。底部と口縁の $1/3$ が欠ける。口縁は「く」字形に屈曲し、内湾気味に開く。頭部外面に三角形突帯を貼付し、横ナテ調整。胴外面は綿刷毛目調整だ

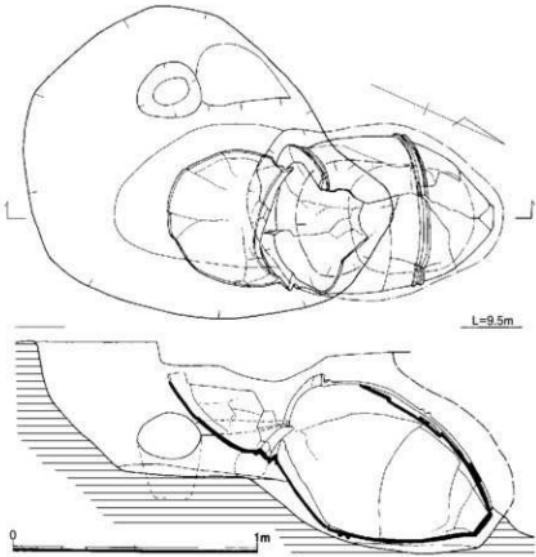


Fig.176 蓋棺墓 ST-1017 実測図 (1/20)

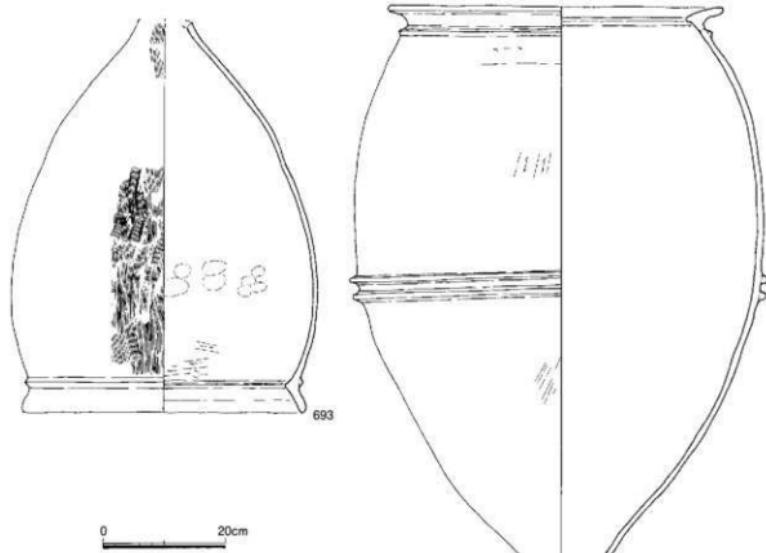


Fig.177 ST-1017 蓋棺実測図 (1/8)

が磨滅して残りが悪い。内面はナデ調整。橙褐色を呈し、胎土に径2mm以下の細砂粒を多く、径5mm以上の粗砂粒を僅かに含む。焼成良好で、外面に黒斑がある。復元口径45.5cm、器高は65cm程度か。

694は下蓋である。口縁は逆「L」字形で上面内傾する。口縁外端は面取りにより窪み、内端は突出し狭い平坦面をなす。口縁直下に三角形突帯を1条、胴中位にやや上向きの台形突帯を2条貼付し、横ナテ調整する。底部平底で外底はやや窪む。外面は刷毛目の後ナデ調整。内面は剥落するが、軽いヘラ削りの後、丁寧なナデ調整を行っている。橙褐色を呈し、胎土に径3mm以下の砂粒を少し、径5mm以上の粗砂粒を僅かに含む。焼成良好で、胴外面の1ヶ所に黒斑がある。口縁の1/4弱を欠く。外口径55.2cm、最大径67.2cm、器高92.2cmである。

臺棺墓 ST-1018 Fig.178, PL.21

1区西半部に検出した。ST-1017の東に隣接するが直接の切り合はない。墓壙上面を攢乱に切られている。墓壙掘り方は調査中に崩壊が進み、特に蓋棺の上部にあたる東肩はローム土が乾燥して

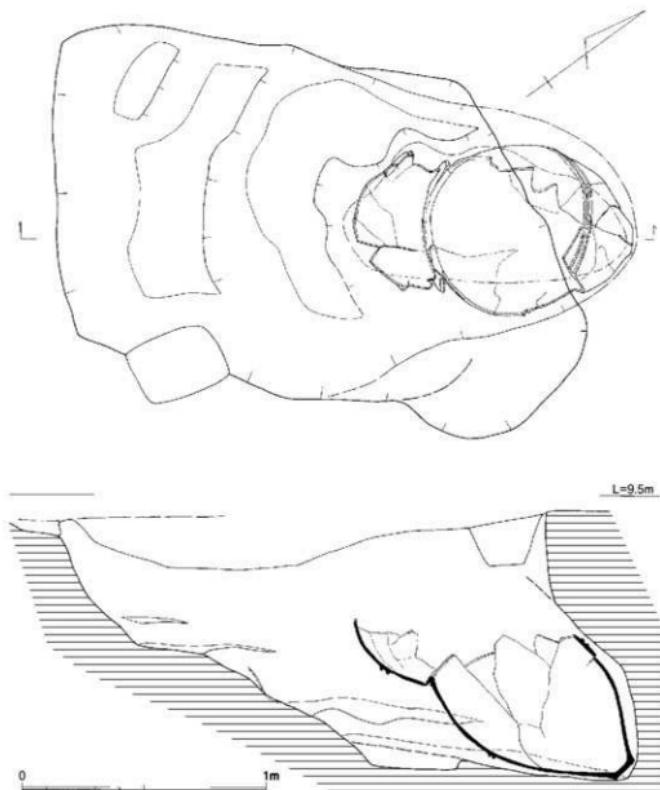


Fig.178 台棺墓 ST-1018 実測図 (1/20)

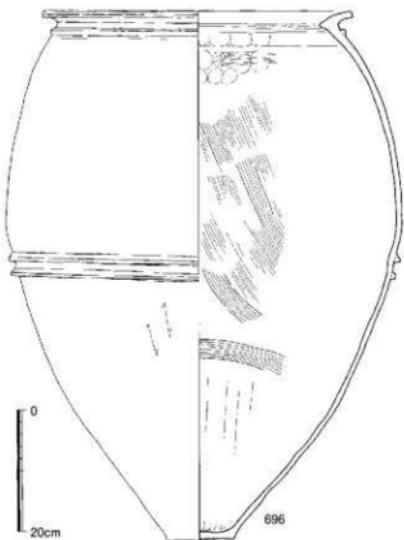
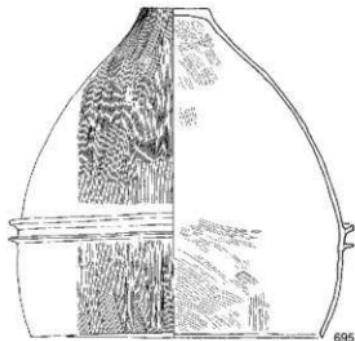


Fig. 179 ST-1018 瓢棺実測図 (1/8)

は認められないため、焼成中に付着したか焼成後に塗られたと考えられる。

696 は下甕である。口縁は逆「L」字形をなし、上面が内傾し、やや外反する。口縁外端は面取りにより凹面をなし、内端は小さな平坦面をなす。口縁直下に三角形突帯を 1 条、胴部中位に台形突帯 2 条を巡らせる。外面ナデ調整で、口縁と突帯の周囲は横ナデ調整。内面はかなり粗い刷毛目の後、ナデ調整を加える。橙褐色を呈し、胎土に細砂粒を少量、雲母粒を微量を含む。焼成はやや不良で、胴外面の片方に大きな黒斑、対面に小さな黒斑がある。外口径 59.0cm、最大径 64.8cm、器高 87.0cm で、ほぼ完存する。

大きく崩落してしまった。墓壙は整った隅丸方形プランをなし、甕棺墓主軸と同じ東西方向に長く、東西 1.8 m 前後、南北 1.4 m の規模である。東へ向かって斜めに墓壙を掘り下げており、遺構検出面から底面まで 1.1 m を測る。対する西壁は階段状に掘り下げてあり、3 段のステップをなす。甕棺埋納の際の足場としたものと考えられる。斜坑は下甕の大きさぎりぎりに掘られており、底面は僅かに東へ傾斜する。下甕を掘えた後、埋め戻して高さを調整し、上甕を置いたと考えられ。上甕は底面からかなり浮いている。上甕は口縁を打ち欠いた甕を合わせ口にして被せる。上甕が強く当たったためか、下甕の口縁が折れている。粘土による接口部の保護はない。遺構面の削平や崩壊により、上甕の残りは悪い。主軸方位は磁北から 36° 東偏し、頭位はおよそ西向きである。埋置角度は 39° 前後。

ST-1018 出土遺物 Fig.179, PL.30

695 は上甕である。口縁部は打ち欠かれており存在しない。打ち欠きは内面に対して行っており、外面がきれいな外観を保つよう配慮している。胴部に丸みのある台形突帯を 2 条貼り付けており、突帯は細く高く、やや垂れ下がる。器面の残りが悪いが、外面は細かい刷毛目調整で、内面は粗い刷毛目の後ナデ調整である。突帯付近は横ナデ調整。かなり淡い橙褐色を呈し、胎土に径 4mm 大の雲母粒を僅かに、径 1mm 以下の細砂粒を多量に含む。焼成良好で、外面下半に黒斑がある。また、突帯付近には黒色の塗料が付着する。突帯の剥がれた部分には認められないため、焼成中に付着したか焼成後に塗られたと考えられる。

胴最大径 53cm である。

斎棺墓 ST-1019

Fig.180, PL.21

I区西半部に位置する。ST-1020の墓壙を切り、棺が触れるほど近接して営まれている。覆土が近似しており、墓壙が重複する部分ではプランが不明瞭である。10cmほど掘り下げて面をつくり、その後ST-1020を避けるよう西へ偏って深く掘り下げ、ここから北へ横穴を掘っている。下斎の大さきに比べると横穴はかなり広めに掘られており、同様にST-1017を切るST-1016の墓壙の状況に似ている。遺構検出面から底面まで70cmを測る。斎棺は墓壙底面から

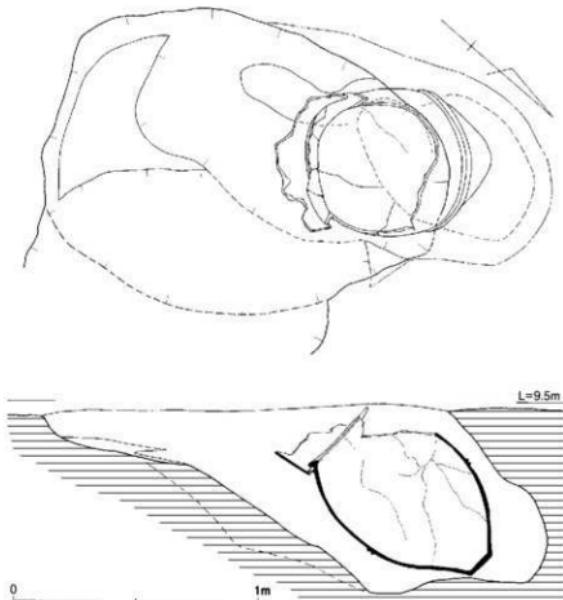


Fig.180 斎棺墓 ST-1019 実測図 (1/20)

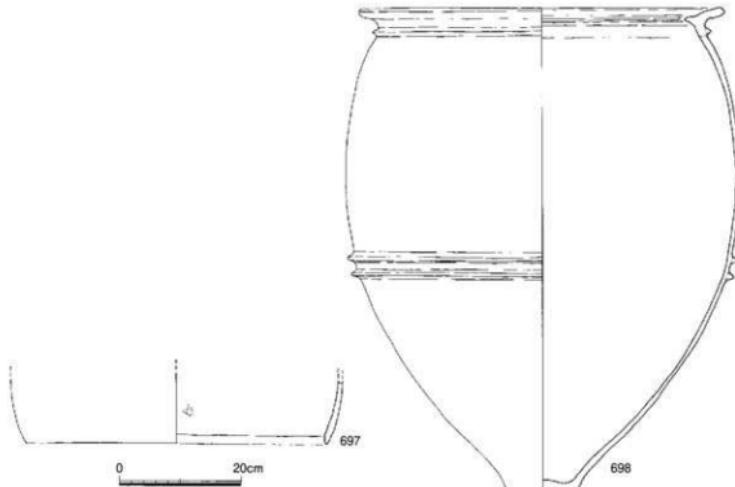


Fig.181 ST-1019 斎棺実測図 (1/8)

浮いた状態にあり、埋め戻しながら下甕と上甕を据えたものと考えられる。上甕は口縁を打ち欠いた甕を合わせ口にして被せるが、東側へずれており、上甕に押されて下甕の口縁が折れている。接口部の粘土被覆は認められなかった。遺構面の削平により上甕の残りが悪い。主軸方位は磁北から 40° 西偏し、頭位は南西を向く。埋置角度は 50° 前後と急で、墓壙覆土は黒色土である。

ST-1019 出土遺物 Fig.181

697は上甕である。大半は削平により失われており、一部が残ったに過ぎない。上半を打ち欠いた甕を用いており、打ち欠きは主に内面に対して行われている。外面は磨滅して調整痕は残らない。内面は刷毛目後ナデ調整である。淡橙褐色を呈し、胎土に細砂粒をやや多く含み、焼成良好である。

698は下甕である。逆「L」字形口縁で、上面は内傾する。口縁外端は丸くおさめ、内端はかなり突出する。口縁直下にシャープな三角形突帯1条を、胴部のやや下位に台形突帯2条を貼し横ナデ調整する。胴径が口径を上回り、平底で外底が若干窪む。外面は磨滅して調整が不明瞭だが、上半刷毛目、下半ナデ調整であろうか。内面ナデ調整で、内底には指押痕が残る。口縁横ナデ調整。赤味のある淡橙褐色を呈し、胎土に細砂粒を多量に含み、焼成はやや良好である。口径60cm、胴部最大径64.8cm、器高79.0cm。

甕棺墓 ST-1020 Fig.182, PL.21

甕棺墓 ST-1017・1019に切られ、墓壙掘り方の大半は失われているが梢円形プランか。北西へ斜めに墓壙を掘り下げており、墓壙底面には凹凸がある。遺構検出面から最深部まで80cm。下甕は墓壙底面に密着するが、ST-1019による圧のためか潰れた状態になっており、底部は座屈している。上甕は口縁を下甕に差し込む呑み口で、埋め戻しながら上甕を据えたものと考えられ、墓壙底面からかなり浮いている。接口部の粘土被覆は認められなかった。遺構面の削平により上甕は残りが悪いが、底部が出土しており、削平前に陥没したものと考えられる。主軸方位は磁北から 53° 西偏し、頭位は南東を向く。埋置角度は 25° 前後。棺下はブロック状のローム（地山土）を主体とする粘質

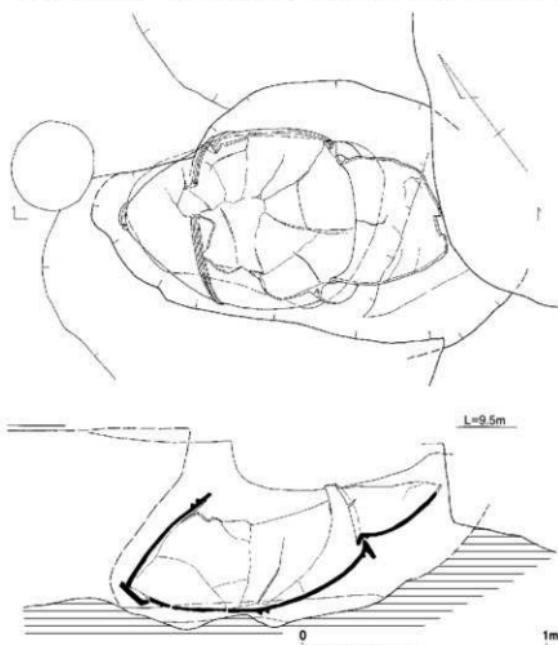


Fig.182 甕棺墓 ST-1020 実測図 (1/20)

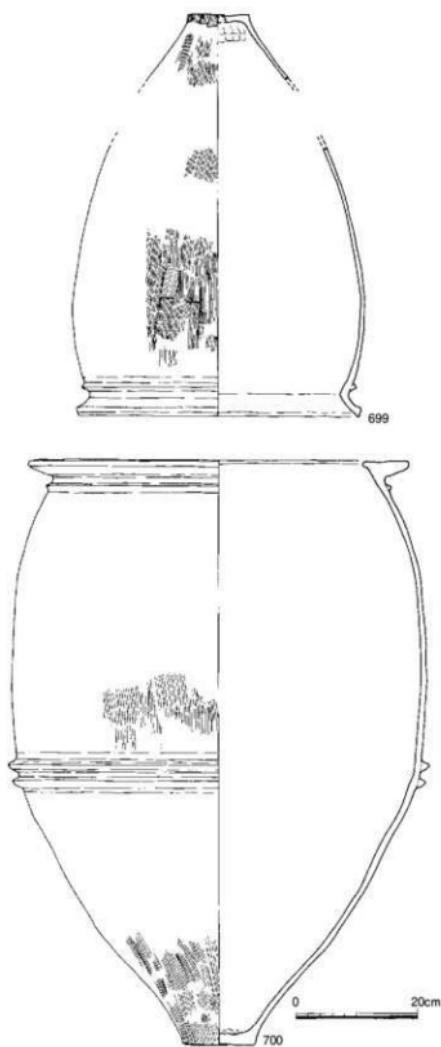


Fig.183 ST-1020 瓢棺実測図 (1/8)

るが、割れ口が不整で隙間があり、図示したように口縁部の破片を逆向きに組み合わせて補っており、土器蓋棺に近い。主軸方位は磁北から 65° 東偏し、頭位は南西を向く。埋置角度は 28° 前後。

上、上部は黒色粘質土の埋土である。

ST-1020 出土遺物 Fig.183、PL.30

699 は上蓋である。「く」字形口縁で、口縁端部は面取りして窪む。口縁直下にシャープな三角形突帯を貼付する。底部があるが接合しない。磨滅が著しいが、外面継刷毛目、内面ナデ調整か。外面は灰褐色～淡橙褐色、内面は灰味かったた橙褐色を呈する。胎土に細砂粒をかなり多く含み、焼成良好。胴外面に黒斑がある。縦に割れた 1/3 ほどが残っている。復元口径 46.0cm、最大径はかなり上位にあり 47.0cm。

700 は下蓋である。逆「L」字形口縁で、上面は平坦、内端は丸く突出する。口縁直下にシャープな三角形突帯 1 条を、胸部や下位に三角形突帯 2 条を貼付し横ナデする。平底。外面粗い刷毛目後ナデ、内面ナデ調整、口縁横ナデ。橙褐色で、胎土に細砂粒を少し含み、焼成良好。外面の一方に大きく明瞭な黒斑、対面に小さな黒斑がある。復元口径 62.4cm、最大径 68.0cm、器高 96.2cm。

甕棺墓 ST-1022 Fig.184、PL.21

I 区西半部の南壁際で検出しており、調査区外へ伸びるため南へ拡張して調査を行った。墓壙は径 1.5 m ほどの隅丸方形プランを呈するが、北辺は攪乱に切られて残っていない。北東に向かって斜めに墓壙を掘り下げており、対面の南西壁には 2 ～ 3 段のテラス状の足場を設けている。墓壙は甕棺の大きさに合わせて掘られ、底面は平坦で深さ 1.4 m を測る。大型の下蓋を据えた後、周囲をロームのほぐし土で埋めて棺を固定しており、更に黒色粘質土で埋めて上蓋を置いている。上蓋は上半を打ち欠いた甕と思われる。

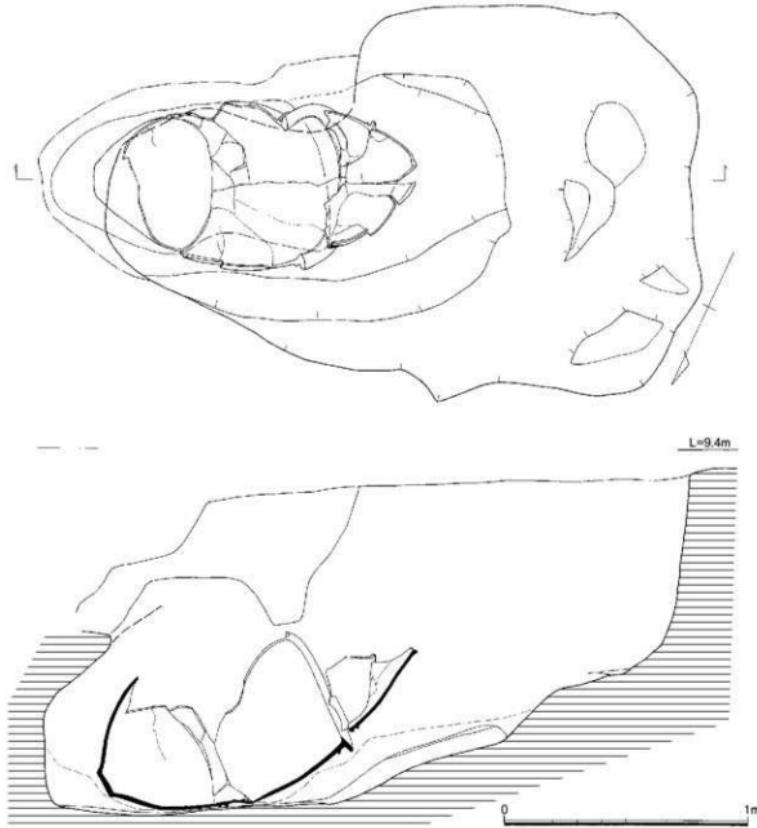


Fig.184 墓室 ST-1022 実測図 (1/20)

ST-1022 出土遺物 Fig.185, PL.30

701は上蓋である。口縁と胴部以下が接合しない。口縁は逆「L」字形をなし上面内傾する。口縁内端は突出し小さい面をなす。口縁直下にシャープな三角形突帯1条を、胴部中位にシャープな台形突帯2条を貼付する。胴外面は継刷毛目調整で、ナデを加えたか。頭部内面横刷毛目、胴内面は粗い継刷毛目でナデを加える。口縁と突帯周辺は横ナデ調整である。橙褐色で、胎土に細砂粒を少し含み、焼成良好。胴外面に黒斑がある。外口径42.5cm、最大径56.0cm。

702は下蓋である。口縁は逆「L」字形で上面内傾し、口縁内端がかなり突出し小さな平坦面をつくる。頭部に三角形突帯、胴部下位に台形突帯2条を貼付する。外面は磨滅するがナデの前に継刷毛目を行ったか。胴下半は工具ナデ後、指ナデ調整。胴内面はヘラや板状工具によるナデ調整。口縁と突帯は横ナデ調整。橙褐色で、石英等粗粒混じりの砂粒を多く含み、焼成良好。胴外面に黒斑があ

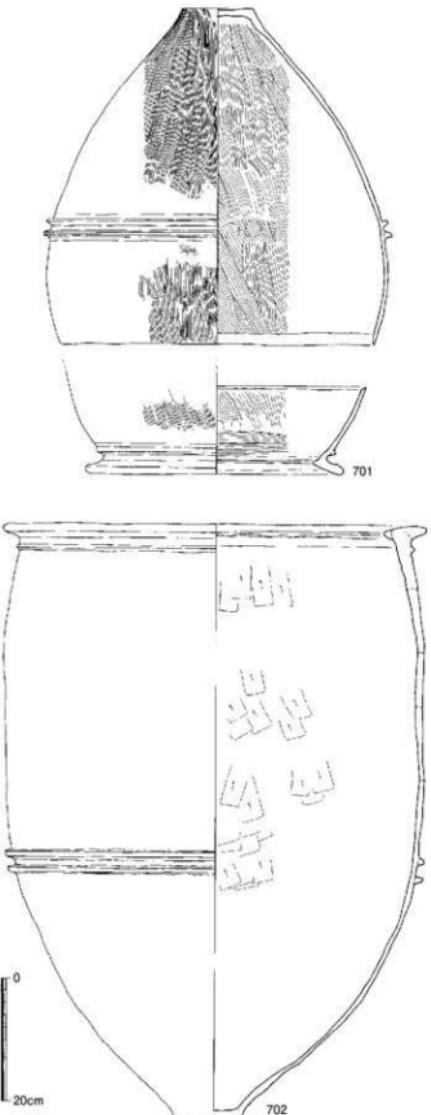


Fig.185 ST-1022 壱棺実測図 (1/8)

る。外口径 69.8cm、最大径 69.6cm、器高 97.2cm。

壹棺墓 ST-1024 Fig.186, PL.22

1 区西半部 ST-1013 の東 0.5 m に近接する成人壹棺墓である。近世溝による破壊が著しく、下壺下半のみが残る。墓壙プランは不明で、南西に斜めに掘り下げて棺を埋置する。墓壙底面は概ね平坦で、遺構検出面から深さ 80cm を測る。壹棺は底面からかなり浮いており、埋め戻しを行って棺を安置したものと考えられる。主軸方位は磁北から 59° 東偏する。

ST-1024 出土遺物 Fig.187

703 は下壺である。口縁はない。胴に斜の甘い三角形突帯 2 条を貼付し横ナデ。器面が磨滅するが、外面工具ナデのちナデ、内面粗い刷毛目のちナデを加え、粘土帶接合痕が残る。外底ナデ。橙褐色をなし、石英等砂粒を多く含み、焼成良好。底部を中心で黒斑がある。

壹棺墓 ST-1025 Fig.188, PL.22

1 区西半部 ST-1024 の南に隣接し、同じく近世溝によりほとんど破壊されている。下壺の底部のみが残り、墓壙形状等は不明である。主軸方位は ST-1024 と平行しよう。

ST-1025 出土遺物 Fig.189

704 は壹棺の口縁部小片である。逆「L」字形をなし、頭部に突帯が剥げ落ちた痕跡がある。赤味のある橙褐色で、砂粒・雲母粒を多く含む。焼成良好。

705 は下壺で、底部のみの残欠である。外面工具ナデのちナデ仕上げ。内面幅 2cm 程のヘラナデ、のちナデ調整。内底は指押さえ痕がある。橙褐色、雲母粒混じりの細砂粒を多量に含み、焼成良好。

上記 2 点は色調・胎土が近似するが、出土状況からみて同一個体とは考えにく

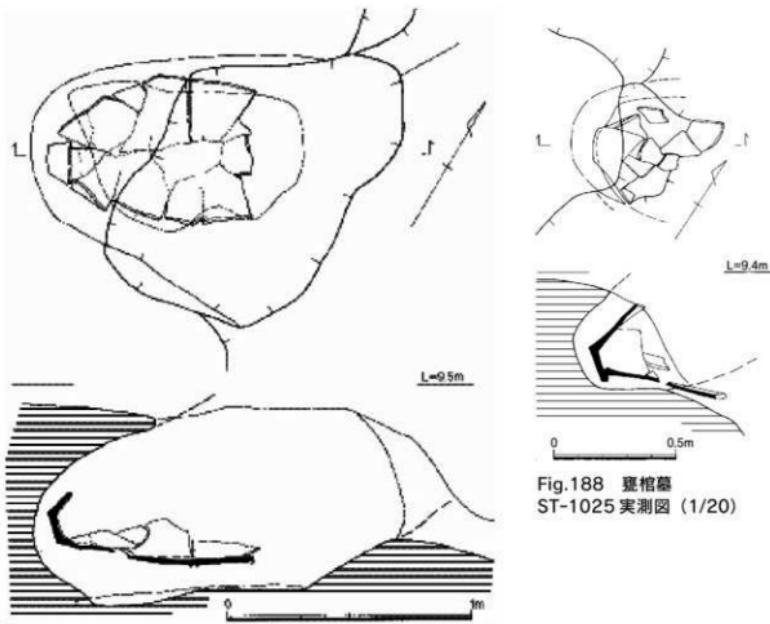


Fig.186 壱棺墓 ST-1024 実測図 (1/20)

Fig.188 壱棺墓
ST-1025 実測図 (1/20)

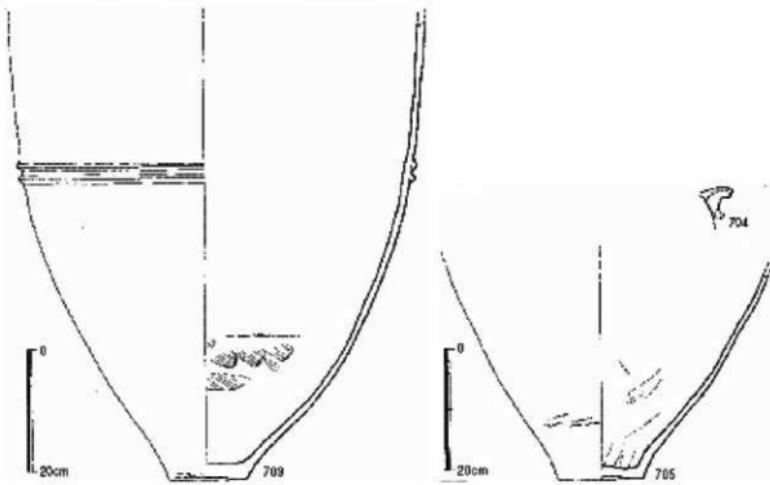


Fig.187 ST-1024 壱棺実測図 (1/8)

Fig.189 ST-1025 壱棺実測図 (1/8)

い。他に接合しないが剥落した台形突帯があり、胸部に貼付したと考えられる。

壺棺墓 ST-1046 Fig.190, PL.22

1区東半部の北西隅で1基のみ検出した成人壺棺墓である。深い擾乱に囲まれており、本来は単独ではなく周辺にも壺棺墓が存在した可能性が高い。擾乱坑により破壊され、下壺のみが残る。南西へ斜めに掘り下げて棺を挿入しており、墓壇は壺棺の大きさに合わせて掘られている。底面も壺棺の形状に合わせて丸く、遺構面から深さ90cm。主軸方位は磁北から74°前後東偏し、頭位は東向きであろう。埋置角度は24°前後。

ST-1046 出土遺物 Fig.191, PL.30

706は下壺である。口縁が接合しない。土圧のためか梢円形に歪んでいる。口縁は逆「L」字形で上面水平で僅かに内傾し、口縁外端は下に肥厚する。頭部に三角形突帯、胸部下位に丸みのある台形突帯をやや上向きに貼付し横ナデする。胸外面は粗い継刷毛目をナデ消し、部分的に工具ナデを加える。内面は刷毛目後、全体にナデを加え、下半は削り気味の工具ナデ調整を行う。橙褐色で、胎上に砂粒を含み、焼成良好。突帯の上と下の相対する計4ヶ所に黒斑がある。最大径64cm。

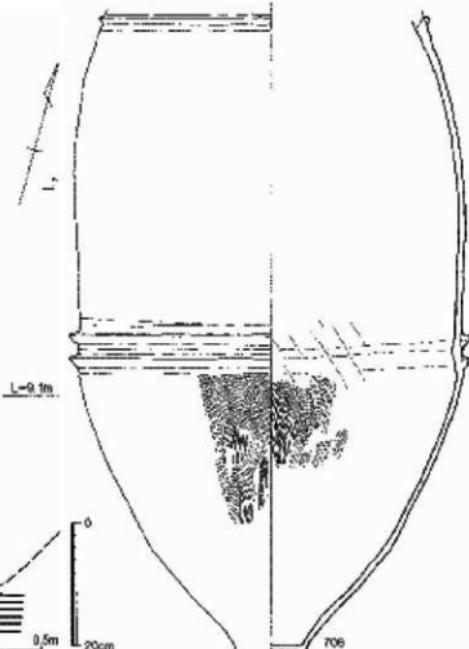
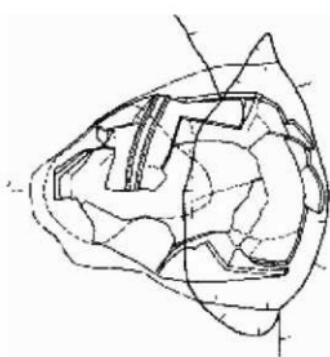


Fig.190 壺棺墓 ST-1046 実測図 (1/20)

Fig.191 ST-1046 壺棺実測図 (1/8)

壺棺墓 ST-1047 Fig.192、

PL.22

1区東半部の中央西寄りに位置する。中世溝や攪乱に囲まれて僅かに残った遺構面に辛うじて残された成人壺棺墓である。中世溝により縦に半截され、浅い攪乱によって上部を荒らされて細かく割れており、極めて残りが悪い。墓壇プランは不明。底面は平坦で、下蓋がほぼ水平に横置きされた状態にある。頭位は南東向きであろう。

ST-1047 出土遺物 Fig.193

707は上蓋と考えられるが、調査時には原位置では押さえておらず、埋土中から出土している。陥没して下蓋内に落ち込んだものと思われる。口縁部のみが残っており、逆「L」字形をなし、口縁上面は内傾内湾する。口縁端部は丸くおさめ、口縁直下に三角形突帯を貼付し、横ナデを加える。胴部外面は刷毛目調整、内面はナデ調整で、口縁部横ナデ調整である。橙褐色を呈し、胎土に細砂粒を多く含んでおり、焼成良好。口径40cm、胴部最大径47.8cmを測る。

708は下蓋である。中世溝により削平されて、口縁は失われている。砕弾型をなし、胴部には台形突帯2条を貼付し、横ナデ調整している。胴部と底部が接合しないため、図上で復元した。平底で、外底が若干窪む。底部付近の外面に刷毛目があり、内外面ともナデ調整で仕上げる。橙褐色を呈し、胎土に細砂粒を少し含み、焼成はやや不良である。胴部最大径75.4cmを測り、器高は90cmを超えよう。

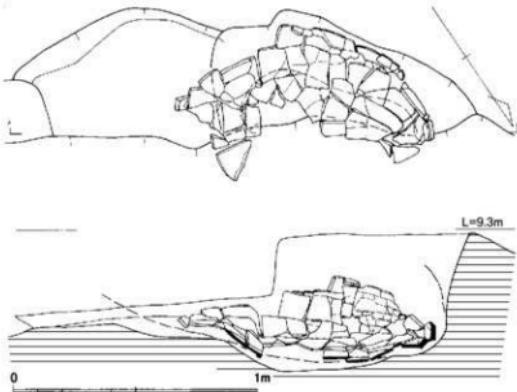


Fig.192 壺棺墓 ST-1047 実測図 (1/20)

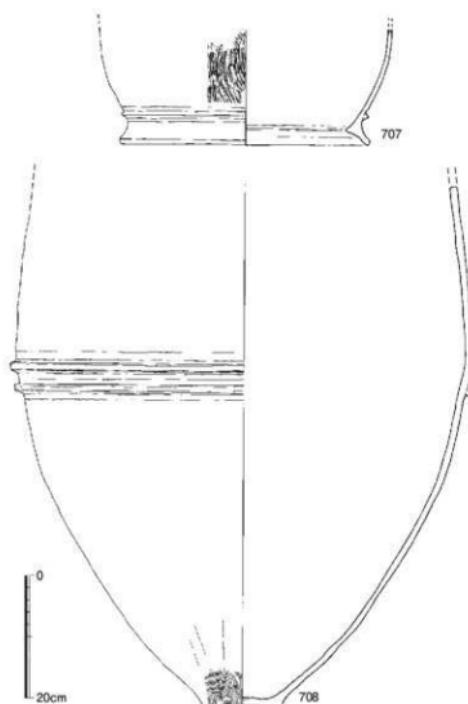


Fig.193 ST-1047 壺棺実測図 (1/8)

壺棺墓 ST-1048 Fig.194,
PL.22

1区東半部 ST-1047 の北
3mに検出した。中世溝に
より大きく破壊されており、
溝の法面にかろうじて残つ
た成人壺棺墓である。墓壙
プランは不明で、西へ斜め
に墓壙を掘り下げたと考え
られる。対面の東壁は段状
に掘り下げて3段のステップ
をつくる。底面は平坦で
深さ80cm。下壺下半は墓壙
底面に据わるが、上半から
上壺にかけて底面から大き
く浮いており、地土山を埋
め戻して棺の安置を図って
いる。上壺は口縁を打ち欠
いており、合わせ口である。
主軸方位は磁北から82°西
偏し、頭位は東向き。埋置
角度は32°前後。

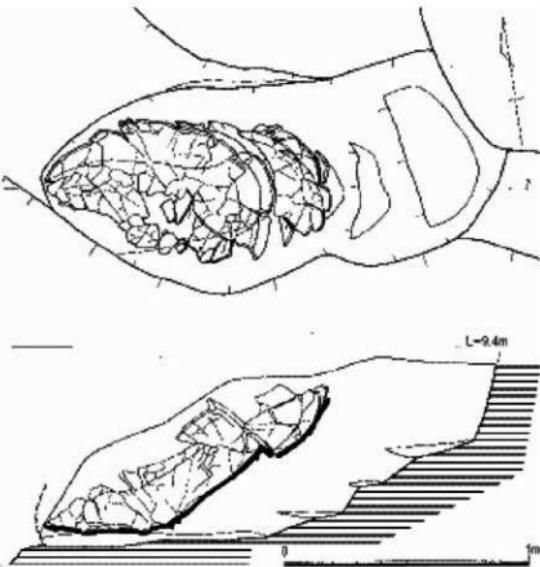


Fig.194 壺棺墓 ST-1048 実測図 (1/20)

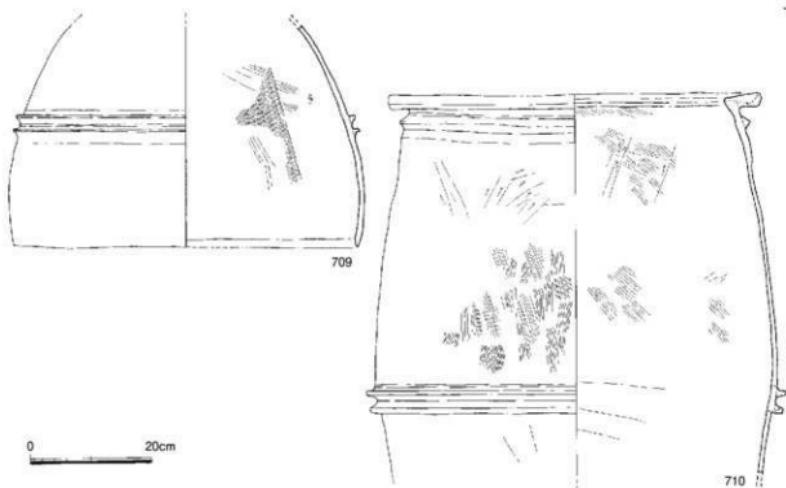


Fig.195 ST-1048 壺棺実測図 (1/8)

ST-1048 出土遺物 Fig.195、PL.30

709は上甕である。大甕の上半部を打ち欠いたものを使用している。残りが良くないが、打ち欠きは主に内面に対して行われているようである。胴部の下位と思われる位置に台形突帯2条を貼付し横ナデ調整する。底部は欠損する。外面ナデ調整、内面は粗い刷毛目調整にナデを加える。胴部最大径は58.3cmを測る。

710は下甕である。逆「L」字形口縁で、口縁上面はやや内傾する。口縁外端に粘土帯を貼り付けて肥厚させるが調整が粗く、内縁の突出は少ない。口縁直下にやや蛇行する三角形突帯1条を、胴部に高めの台形突帯2条を貼付し横ナデする。胴部最大径はかなり下にある。胴下半は接合せず、底部は失われている。外面とも刷毛目調整の後、粗くナデを加える。全体的に造りが粗い印象を受ける。暗褐色～褐色で、胎土に細砂粒を少し含み、焼成良好である。復元口径60.8cm、最大径65.8cm、器高は不明である。

壺棺墓 ST-2004 Fig.196、PL.22

2区西端の南壁近くで検出した成人墓。ST-2005・2006とグループをなすとみられ、開田によって切り下げられた平坦面に分布しており、いずれも遺構の残りが悪い。ST-2004は下甕が20cmほど削り残された状態で残っており、ピットにより一部が破壊されている。南東へ斜めに墓壙を掘り下げたと考えられる。底面は平坦面をなし、下甕は底面に密着する。頭位は北西を指そう。

ST-2004 出土遺物 Fig.197

711は上甕であろう。出土状況からみて、削平前に陥没して下甕内に崩落したものと考えられる。色調・胎土から下甕とは明らかに別個体である。逆「L」字形口縁で上面が著しく内傾し、胴部が大きく張り出す。頸部に後の甘い三角形突帯を

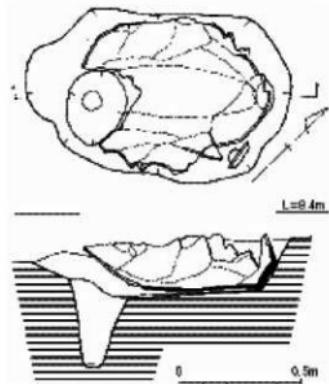


Fig.196 壺棺墓 ST-2004 実測図 (1/20)

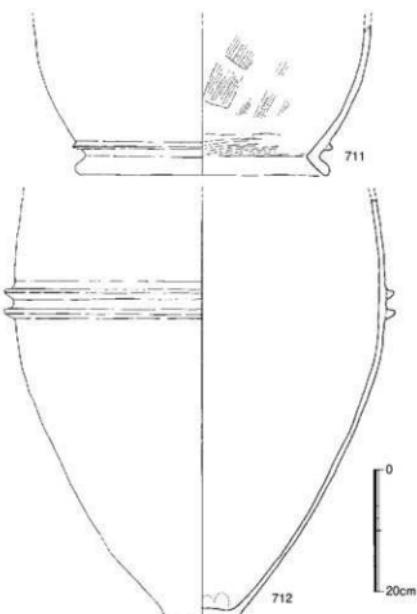


Fig.197 ST-2004 壺棺実測図 (1/8)

貼付し、突帯から口縁を横ナデ調整する。胴外面は磨滅しており調整不明である。内面はかなり粗目の刷毛目調整を施している。赤味の強い橙褐色で、胎土に砂粒を多く含み、焼成良好。口径 41.7cm。

712 は下甕で口縁は失われている。遺構図に見る通り、縦に細長く残るため復元接合時に歪みが生じており、図の傾きや胴径は不確実である。胴部外面にやや上向きの台形突帯 2 条を貼付する。外面は剥落して調整不明である。内面も器壁が磨滅剥落しており、内底に指印痕が残るのみである。橙褐色を呈し、胎土に石英・暗赤粒等が混じる細砂粒を多く含み、焼成良好である。外底を中心に黒斑がある。

壺棺墓 ST-2005 Fig.198, PL.22

2 区 ST-2004 の北側 2 m に検出した成人墓である。ST-2004 と同様、下甕が 20cmほど削り残された状態で残っており、かつ中央を攢乱溝が横断して破壊している。東へ斜めに墓壙を掘り下げたとみられる。底面は平坦で、下甕は底面に密着する。頭位は西向きであろう。

ST-2005 出土遺物 Fig.199

713 は上甕の口縁部とみられる小片である。「く」字形をなし口縁が内湾する。磨滅剥落しており、頭部突帯は本来の形ではない。橙褐色で、胎土に砂粒を多く含み、焼成良好である。

714 は下甕で口縁は残っていない。胴部に細めの台形突帯を 2 条貼付する。外器面が磨滅剥落するが工具によるナデ調整であろう。内面は剥落して調整不明である。橙褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成良好である。

壺棺墓 ST-2006 Fig.200, PL.22

2 区の ST-2004 の南西約 2 m に位置し、墓壙の一部は調査区側溝にかかる。下甕の残りは 10cm未満で、全壺棺墓中最も残りが悪い。下甕は墓壙掘り方の底面から僅かに浮いている。成人墓で、頭位は西向きであろう。

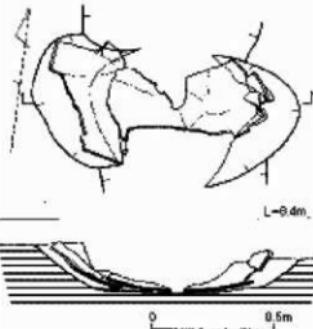


Fig.198 壺棺墓 ST-2005 実測図 (1/20)

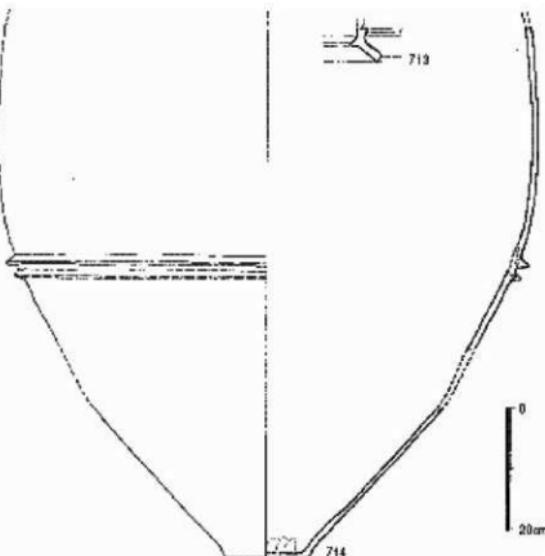


Fig.199 ST-2005 壺棺実測図 (1/8)

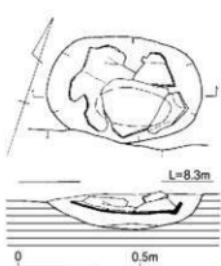


Fig.200 壱棺墓 ST-2006 実測図 (1/20)

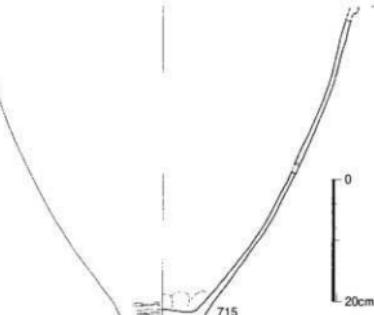


Fig.201 ST-2006 壱棺実測図 (1/8)

ST-2006 出土遺物 Fig.201

715は下甕である。底部と接合しない胴部があり、図上復元した。外面磨滅するがナテ調整とみられ、上端に僅かに横ナテがあり胴部突帯が付こう。底部脇には刷毛目小口の圧痕が残る。内面は剥落が著しいがナテ調整とみられ、内底に指押さえ痕が残る。淡い橙褐色で、粗砂・石英等混じりの砂粒を多く含み、焼成良好である。

壹棺墓 ST-2041 Fig.202, PL.22

2区西半の段落ち際に検出した。単独の小児壹棺墓で、段落ちあたりまで壹棺墓群が広がっていた可能性を示す。削平により造構面が削られており、下甕が20cmほどの高さで残っていた。ピットにより一部が破壊されている。北東へ墓壠を掘り下げたと考えられ、下甕は墓壠壁に密着する。

ST-2041 出土遺物 Fig.203

胴部と底部が出土したが、色調が全く異なっており別個体である。

716は口縁を打ち欠いており、上甕と思われる。外面ナテ調整、内面は調整痕が残らない。暗橙褐色、細砂を多量に含み、焼成良好。口縁の打ち欠きは主に内面に対して加えており、きれいな外観を保つよう配慮している。最大径は34cm。

717は下甕である。外面に刷毛目的一部分が残るが、他は器壁が磨滅剥落する。黄褐色～淡灰褐色で、砂粒を多く含み、焼成やや不良。

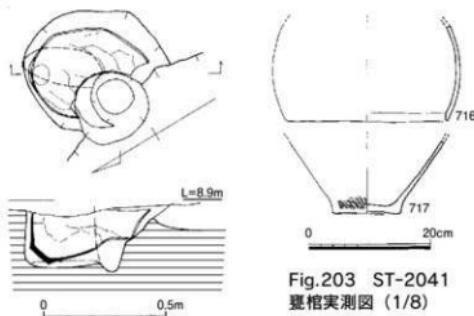


Fig.202 壱棺墓 ST-2041
実測図 (1/20)

Fig.203 ST-2041
壹棺実測図 (1/8)

(9) 弥生時代の祭祀土坑（S X）

土器が多量に出土する溝状の土坑 SX-1045 と SX-1082 がある。間を大きな攪乱で隔てられているが、延長上に位置することや、覆土と土器の出土状況、土器形式の類似などからみて同一時期の一連の遺構と考えられる。

祭祀土坑 SX-1045 Fig.204 ~ 206, PL.23

I 区東半の北西部で検出した南北に長い溝状の土坑である。北端は大きな攪乱に破壊されるが、7 m 離れた調査区の北壁に類似遺構 SX-1082 の断面が確認できる。連続する遺構と断定はできないが、南北 13 m 以上にわたり溝状に伸びていた可能性がある。SX-1045 の南端は土坑 SK-1059 に切られているが、底面が立ち上がって収束しており、これより南側には伸びないものと考えられる。東西は攪乱に削られている。長さ 7.3 m 以上、最大幅 3.1 m を測り、遺構面は削平されて北へ緩く傾斜する。横断面形は逆台形ないし U 字形を呈し、中央の幅 2 m ほどが溝状に一段深い。南側で深さ 90cm、北側で深さ 40cm だが、遺構面が北へ傾斜しているため底面に大きな傾斜はない。土層断面図を記録した中央部分の東西に土坑があつて、当遺構を切っている。また、底面の北端で木棺墓 SO-1058 を検出しておらず、当遺構に先行すると考えられる。覆土は自然埋没の状況を示しており、ほとんど埋没した最終段階で土器を大量投棄している。土器は土坑の中央部分に集中している。

同時期の遺構として、SK-1045 と SX-1082 を結んだラインから西側でのみ壇棺墓群を検出しておらず、東側へは墓群が展開しない。他方、東側は 20 m ほど離れた位置で円形竪穴住居 2 棟を検出している。SX-1045 がかなり埋没した段階で土器の多量投棄が行われていることから、当初は墓域と居住域の間に設けられた区画、後には祖靈祭祀行為の場となった可能性が考えられよう。

SX-1045 出土遺物 Fig.207 ~ 214

弥生土器がコンテナ 37 箱出土した。このうち整理段階で実測を行った土器は 77 点あるが、遺存状況が悪く、型的に類似するものが別にあるものなどを省いた 49 点を報告する。時期的には弥生時代中期後半の須歎 II 式を中心とする。精製の壺と高杯を中心として、煮沸用の甕が一定量伴っている。

718 ~ 724 は鋤先口縁広口壺である。丹塗りは外縁と口頸部内面に施されるものが多いとみられるが、器表の摩滅が進んでおり、丹塗りの範囲や有無が定かでないものも少なくない。718 は口径 50.8cm の大型品である。口唇にヘラ刻み、頸部に暗文を有し、頸基部に三角突帯を貼付。719 は頸部上部に三角突帯を有するタイプである。全形の分かる 721 は口唇にヘラ刻み、頸部に暗文を有し、頸基部と胴部中位に M 字突帯を貼付する。718 は胴部の重心が上位にあり、頸部が短くしまる古い特徴を示すもので、三角突帯を頸部中位に貼付している。724 や、725 の単純口縁広口壺も胴部の重心が高く、頸部があまり広くない古い特徴を示す。

726 と 727 は無頸壺で、728 は蓋である。いずれも丹塗りと思われるが、器表の摩滅が進んでおり、定かではない。726 は口縁部が「く」字形をなし、単位が不明であるが紐孔を有する。727 は鋤先口縁である。729 は鋤先口縁壺と甕が結合した瓢形壺である。内面の丹塗り範囲は不明。730 は口頸部が単純に広がる細頸の小型壺で丹塗りの精製品である。731 ~ 733 は袋口縁壺であるが、731 はその中でもきわめて小型である。732 は頸部が一際細く、より古い型式的特徴とみられる。

734 ~ 741 は鋤先口縁高杯である。外縁と杯部内面に丹塗りが施されるものが多い。734・735・740 は杯部が浅く、やや小型である。739 は口縁部が短く須歎 I 式に上がりうるものであ



Fig.204 祭祀土坑 SX-1045 遺物出土状況平面図 (1/20)

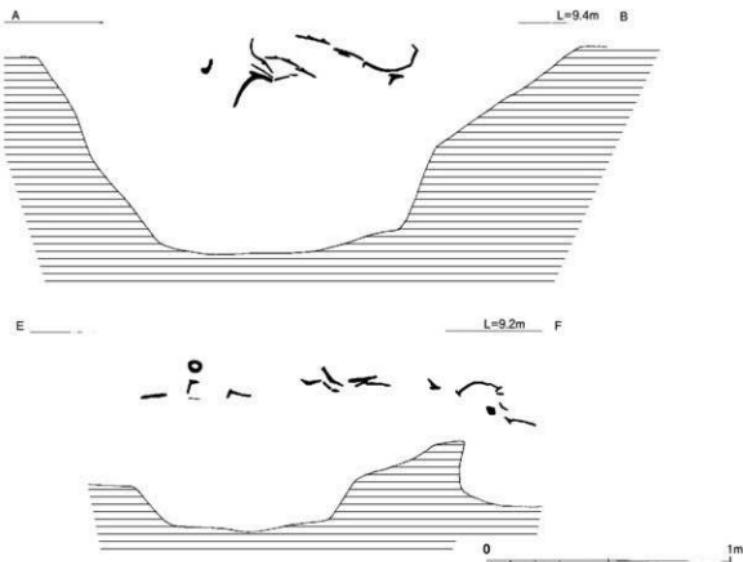


Fig.205 祭祀土坑 SX-1045 遺物出土状況断面図 (1/20)

る。小片であり、後述する下層の土器と関連するものであろう。全形の分かる736は長く垂れ気味に伸びる鋤先口縁と短めの脚部で、須玖Ⅱ式新段階の典型的な鋤先口縁高杯である。これと比べると、737は口縁部が短めで上がり気味であり、杯と脚の接合が底部充填法、738は屈折口縁で長脚、741は頸部直下に段状の突帯を貼付、接合が連続成形ではない底部充填法となっている。これらは同時期のバリエーションや時期差を示すものとみられる。

742・743は杯部が単純口縁の鉢形となるもので、杯部の中位に三角突帯を貼付している。いずれも丹塗りで長脚気味である。742は杯部が浅く、口縁部にかけて開く。杯と脚の接合は底部充填法である可能性が高い。743は口縁部と突帯の間に暗文を施す。744の高杯は杯上半が外反気味に開く。中位に三角突帯を貼付、口縁端部を上下に小さく拡張し、凹面を形成している。丹塗りの精製品であるが、突帯と口縁部の間にハケメを残す。745は高杯の脚部である。脚端を面取りして凹線を施しており、別個体であるが、744の脚部はこのタイプであろう。746は器台の脚部であるが、隣接する集落域からの混入である可能性が高いと考える。

747・748は鋤先口縁蓋形の丹塗り精製土器である。頸部下に1条と胴部中位に2条のM字突帯を貼付する。749はKⅢc段階の小児用慶棺であろう。胴部の張りが強いタイプで、胴部外面ミガキ。

750～758は甕である。調理痕跡(外面の煤、内面のコゲ)がみられるものが少なくない。一部、隣接する集落域からの混入もあるが、遺存のよいものは基本的にSX-1045の祭祀土器群に含まれるとみられるので、墓の祭祀に関連した調理容器と考えられる。甕は屈折口縁、「く」字口縁のものが、鋤先口縁より多い傾向にあり、弥生時代後期初頭に下りうるものもみられる(755・756等)。750は豊前系の屈折口縁甕である。口縁端部をやや肥厚させ、凹線状のヨコナデを施して面取りしている。胴部外面に煤、内面下半に焦げがみられる。751は屈折口縁甕である。胴部があまり張らず、

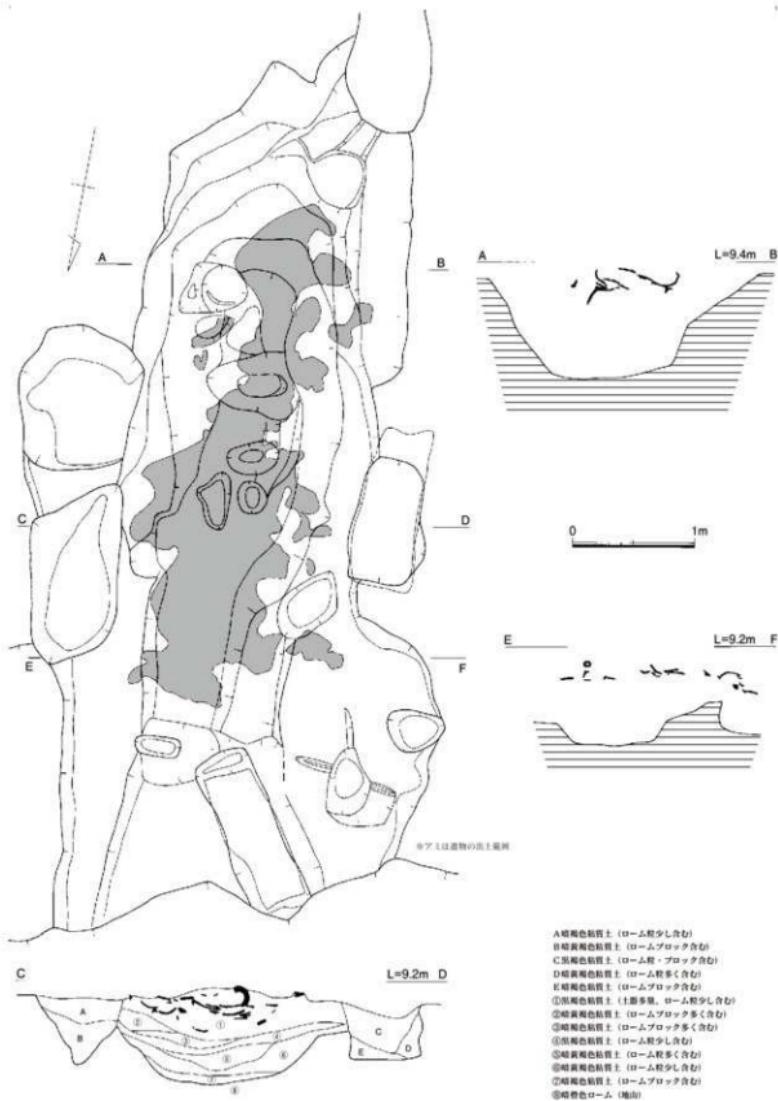


Fig.206 祭祀土坑 SX-1045 実測図 (1/40)

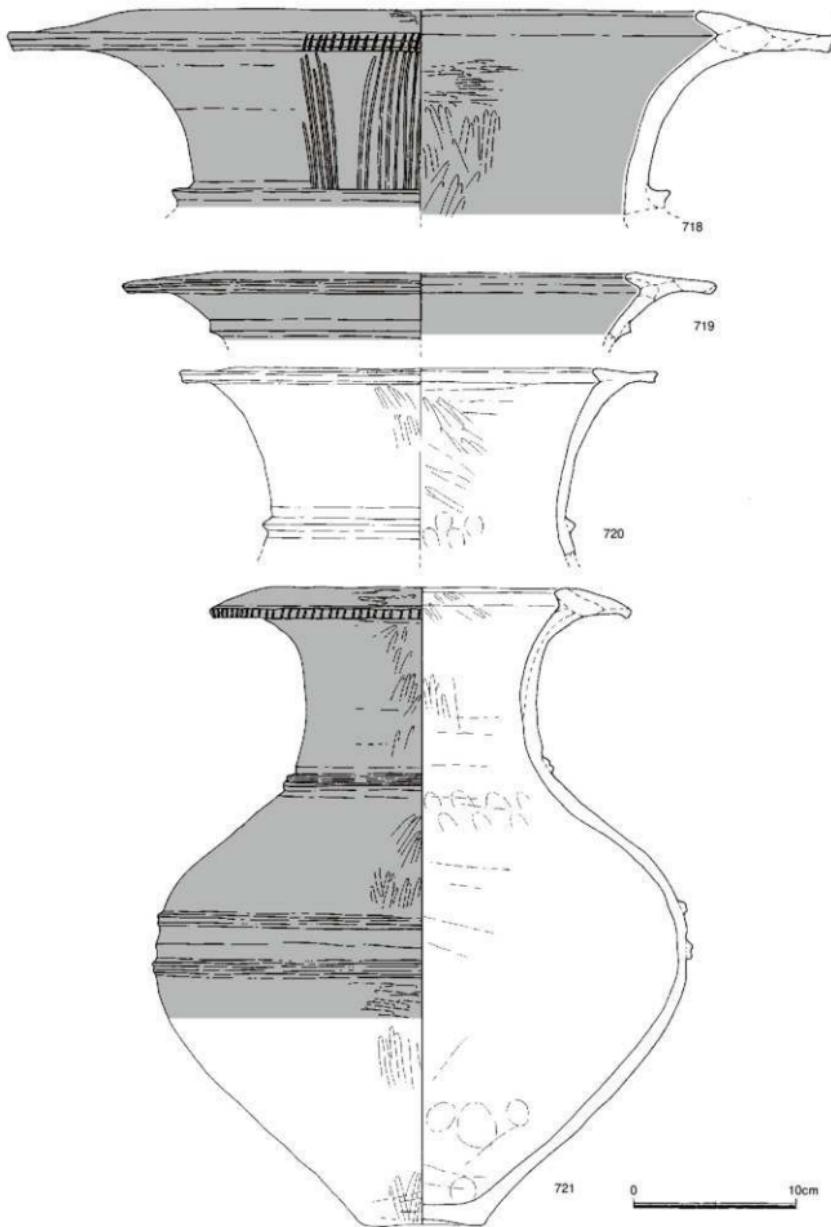


Fig.207 SX-1045 出土遺物実測図 I (1/3)

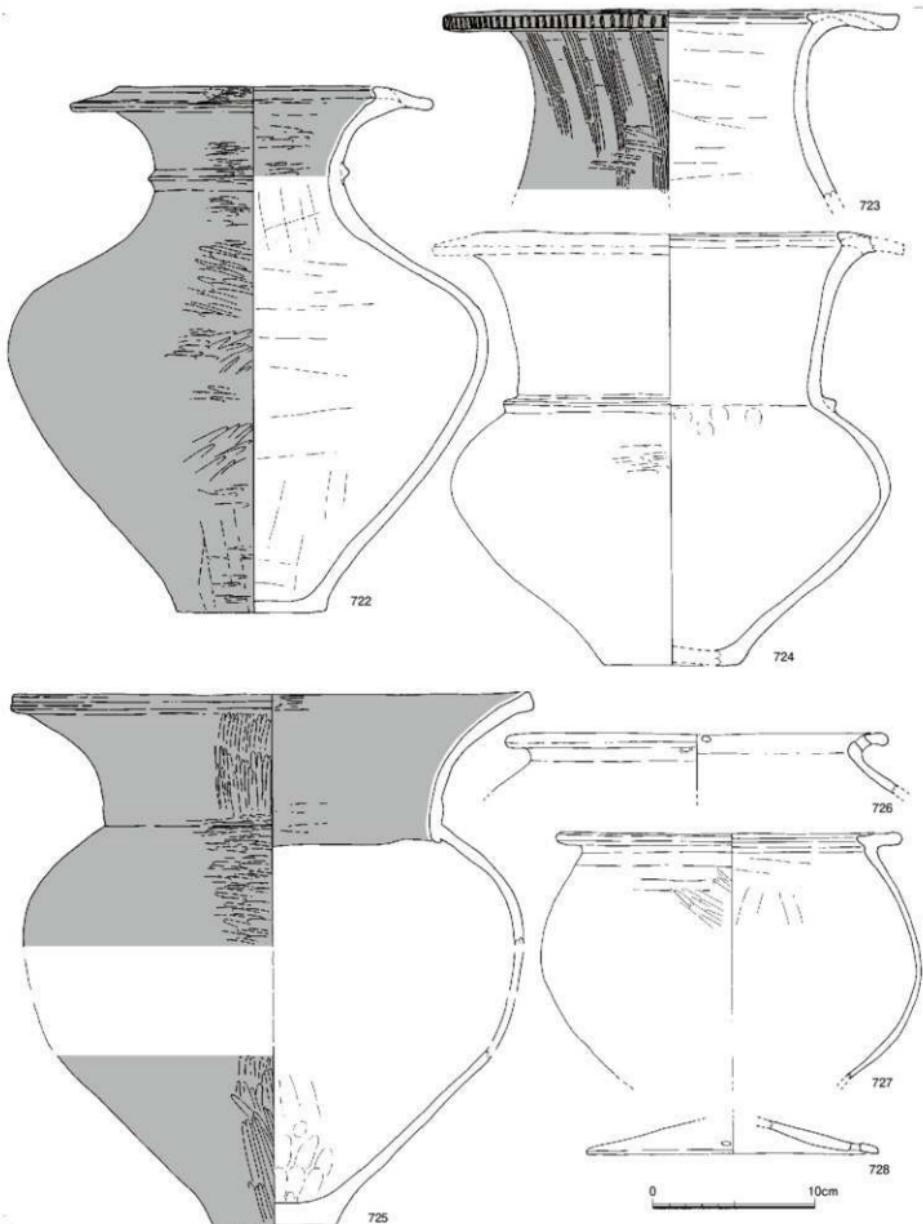


Fig.208 SX-1045 出土遺物実測図 II (1/3)

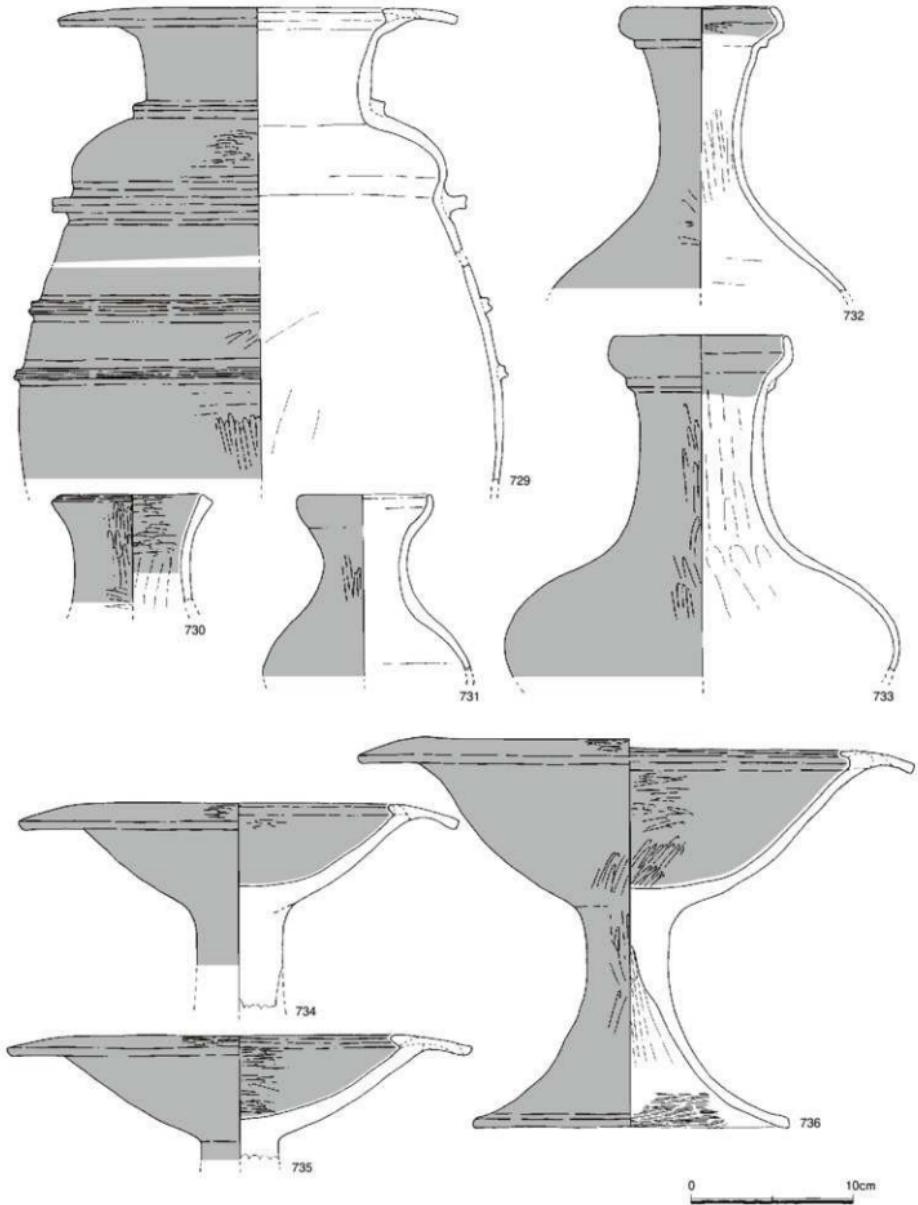


Fig.209 SX-1045 出土遺物実測図Ⅲ (1/3)

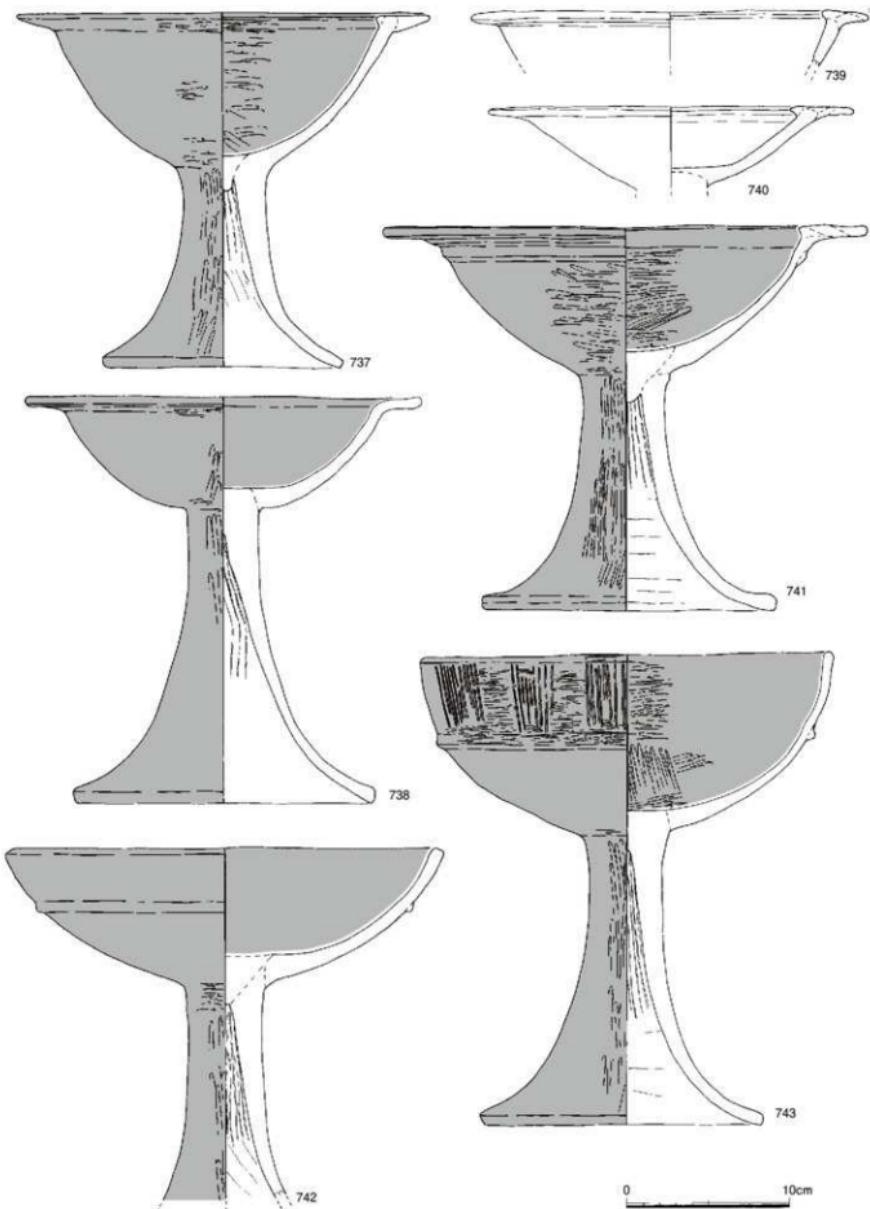


Fig.210 SX-1045 出土遺物実測図IV (1/3)

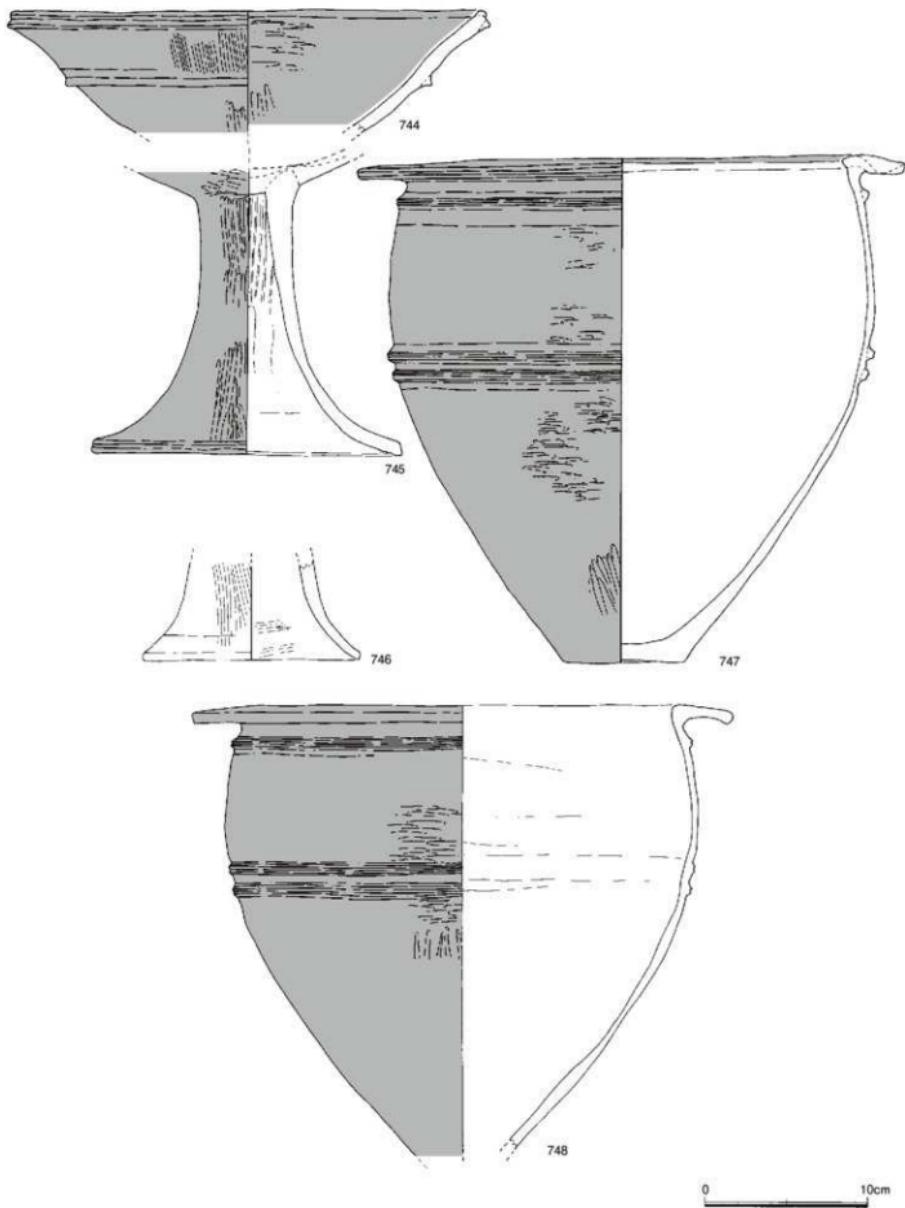


Fig.211 SX-1045 出土遺物実測図 V (1/3)

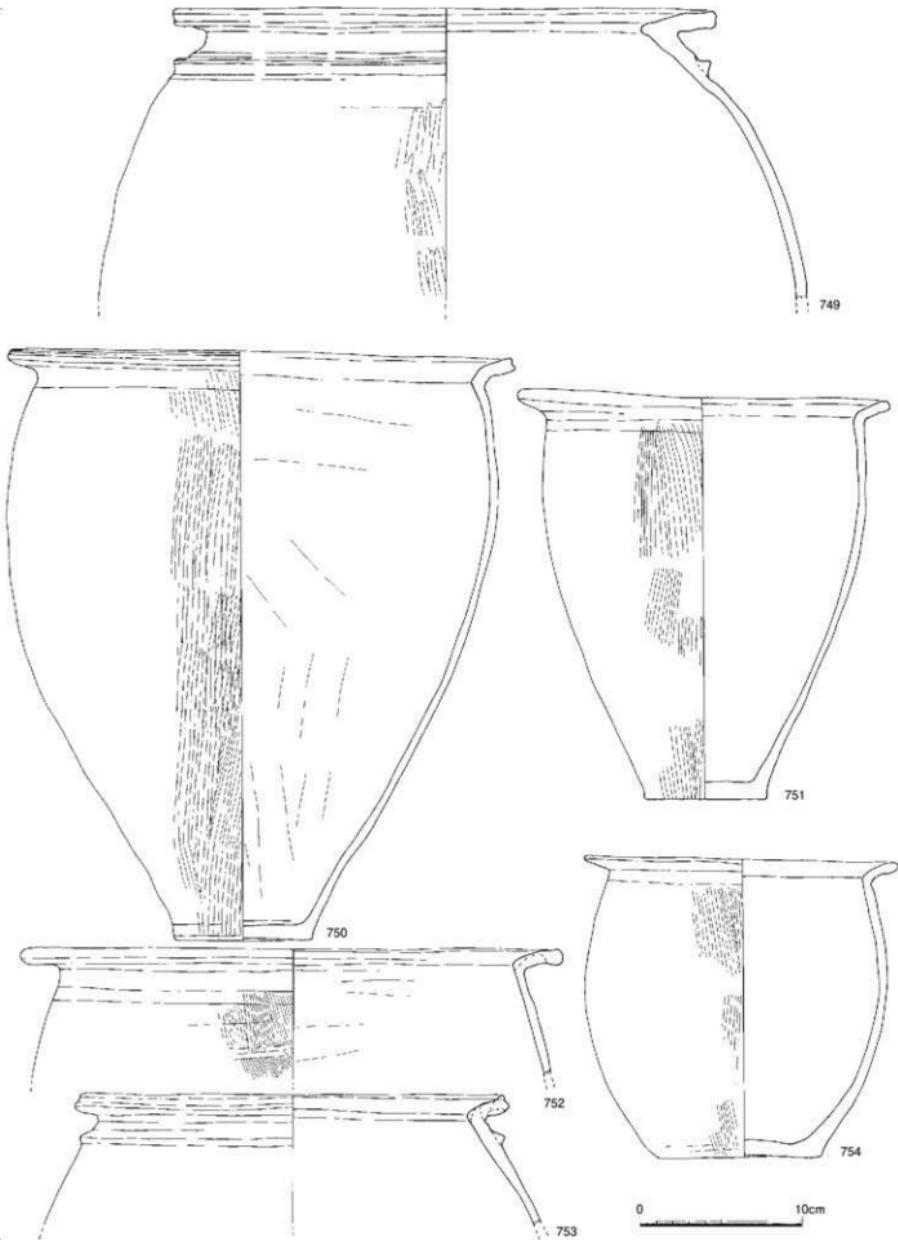


Fig.212 SX-1045 出土遺物実測図VI (1/3)

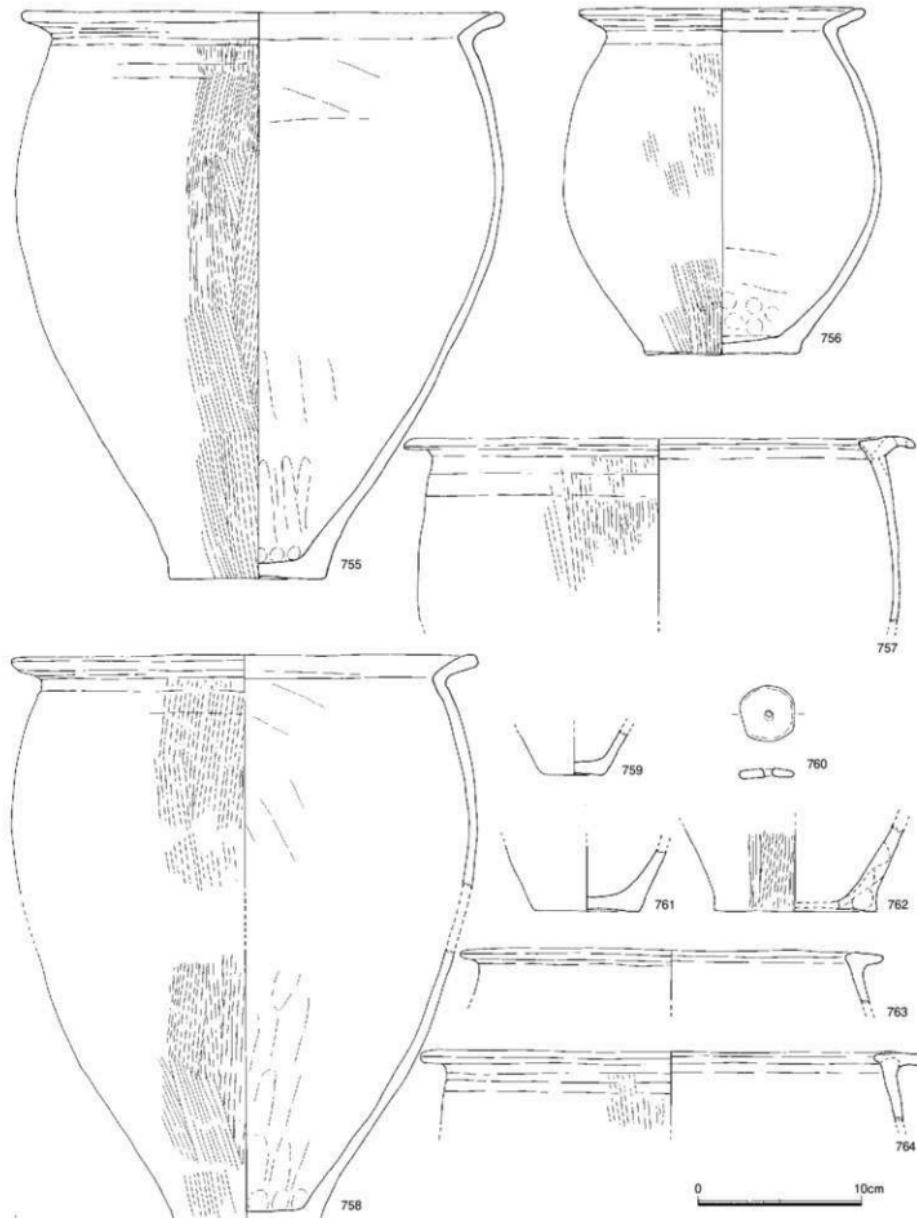


Fig.213 SX-1045 出土遺物実測図VII (1/3)

底面はほぼ平坦でやや厚い。胴部外面に煤の痕跡がある。752は屈折口縁甕は胴部の破片も定量出土しているが、遺存が悪く、接合・図化に至らなかった。

753の「く」字形口縁甕は頭部以上が短く、ハネ上げ口縁である。胴部の張りが強く、頭部下に三角突帯を貼付している。在地産であるが、口縁形態と胴部のプロポーションは瀬戸内側的である。

754は小型の屈折口縁甕である。外面に煤の付着がある。755は胴部最大径が口径を上回る「く」字形口縁甕である。外面の胴部を中心に煤の付着がある。756は小型の「く」字形口縁甕である。胴部の重心が中位以下にあり、底面が平坦な後期の型式である。758は口径と胴部最大径がほぼ等しい「く」字形口縁甕である。757は鋤先口縁甕である。

759は小型土器の底部である。731のような小型壺の底部とみられる。760は土器片転用の紡錘車である。墓の祭祀とは関係なく、隣接する集落域からの混入である可能性が高い。

遺構の下層から出土する土器は少なく、いずれも部分的な破片である(761～764)。763は遺構底面直上から出土したものである。761はおそらく壺で、他は甕である。763・764は鋤先口縁が短く、須玖I式に上がりうるものである。下層出土の土器は祭祀土器とは認めがたいが、遺構掘削の時期を知るうえで参考資料となるであろう。

765・766は甕棺の破片で、前述の749も小児用甕棺とみられる。765はK III c 甕棺である。766はM字突帯を多重に巡らす壺の胴上部とみられる。その他K III b～K III c段階の甕棺胴部や上蓋用の鋤先口縁鉢などが出土地してある。いずれも上層からの出土である。これらの甕棺の破片は祭祀土器とは考えにくく、また、この遺構が別の甕棺埋葬と重複しているわけでもないので、埋葬に際して棺の打ち割りなどの調整を行ったときの残片と考えられるが、検出した甕棺との接合関係を明らかにすることはできなかった。また、本調査区では後世の開発により消失した甕棺が少なくない。

以上のような土器群は須玖II式を中心とするものであるが、時期幅のあることが確認される。中・上層の祭祀土器群は、須玖II式古段階(721、722、725、738等)や須玖II式新段階に相当するがより古い特徴を見出すことができるものの(729、732、737等)から、後期初頭に下りうるもの(755・756)までがある。下層の土器は祭祀土器ではないが、須玖I式に上がりうるものであり、遺構の掘削時期を示すものと考える。

出土土器に丹塗りの精製品が多いのは当該期の特徴であるが、器種構成に偏りがあり、墓の祭祀に関連する土器群とみて間違いないであろう。那珂遺跡群第21・50次調査でも甕棺埋葬を主体とする区画墓がみつかっているが、その区画溝からは中期後半～後期前半の土器が多量に出土している。土器の組成は類似しているが、21次調査では筒形器台が定量出土しているほか、少數であるが胴部穿孔の祭祀土器が出土している。また、一般的な器台の出土も多く、本調査区の土器組成との相違も見出しができる。

このような土器群は一連の葬送祭祀に使用されてから、最終的にSX-1045に遺棄されたものとみられる。その行為は出土土器に時期幅があることから、一定の埋葬期間繰り返されていたと考え



Fig. 214 SX-1045 出土遺物実測図VII (1/3)

られる。祭祀土器群の出土は中層以上であり、遺構の埋没が進んでからの遺棄である。SX-1045とSK-1082は一連の遺構であり、墓域の東の区画を意図して掘削されたものであるが¹、一定の埋没後に祭祀土器の遺棄場となったものと考えられよう。

祭祀土坑 SX-1082 Fig.215、PL.22・23

I区東半の北西隅で検出した。搅乱坑がちょうど調査区北壁際で収束しており、僅かに残ったロームの断面に遺構を確認した。プランは不明で、断面U字形をなし、幅1.2mを測る。深さ60cmで、底面がやや北へ下っているようである。SX-1045を北に延長した位置にあること、覆土が黒色粘質土で類似していること、完形に近い土器が複数含まれていたことなどから、一連の遺構と考えることができよう。

SX-1082 出土遺物 Fig.216

図示した弥生土器以外に、少量の弥生土器が出土

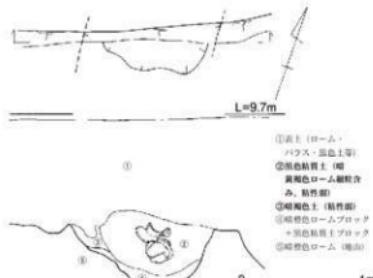


Fig. 215 祭祀土坑 SX-1082 実測図 (1/40)

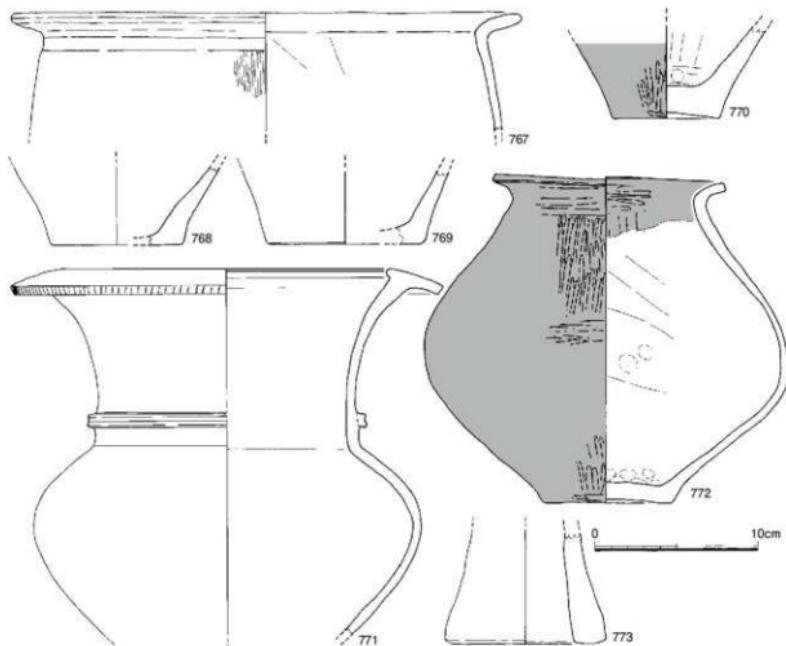


Fig. 216 SX-1082 出土遺物実測図 (1/3)

している。

767 は甌の口縁部小片で「く」字形をなし、頭部内面の棱はやや丸みを持つ。外面刷毛目、内面ナデを行った後、口縁内外面を横ナデ調整する。768 は甌の底部である。磨滅して調整痕は残らない。二次加熱を受け赤変する。769 も甌である。磨滅するが外面ナデ調整か。

770 は甌の底部であろう。厚みがある。外面ヘラミガキ後、丹塗りを加える。内面ナデ調整。771 は鋤先形口縁の甌で、口唇を面取りしてヘラ刻みを入れる。頭部に M 字突帯を貼付し横ナデするが、内外面とも磨滅し他の調整は不明である。772 は甌である。口縁が屈曲して短く開く。外面から口縁内までミガキ後丹塗り。内面は指押え後ナデ調整で、頭部にシボリ痕が残る。773 は器台で、小片のため天地不明。二次加熱により器面が剥落する。

弥生時代中期末～後期初頭の遺構であろう。

(10) 立柱遺構 (SX)

立柱遺構 SX-1049 Fig.217, PL.23

I 区南西部に検出した。一部ピットに切られる。略東西に長い土坑状の遺構で、西端に寄せて柱穴を深く掘り下げ、東壁を緩い傾斜面とした遺構である。東側が先細りの円錐形、西側が附丸方形のプランをなす。長 2.9 m、最大幅 0.8 m を測る。東側底面は浅く平坦で深さ 40cm、西側柱穴は最深部まで 120cm を測る。遺構覆土は黒色粘質土である。周辺に同規模・同覆土の柱穴はなく単体であることから、独立した柱を立てた遺構と考えられる。

SX-1049 出土土器 Fig.218

弥生土器のほか、須恵器小片が出土した。

図はいずれも弥生土器の底部片である。774 は甌であろう。磨滅して調整は不明である。二次加熱を受け赤変する。775 も甌か。小片で著しく剥落する。776 は甌であろうか。著しく磨滅しており調整痕は残らない。

遺構覆土からみて須恵器小片は混入と考えられる。弥生時代の遺構であろう。

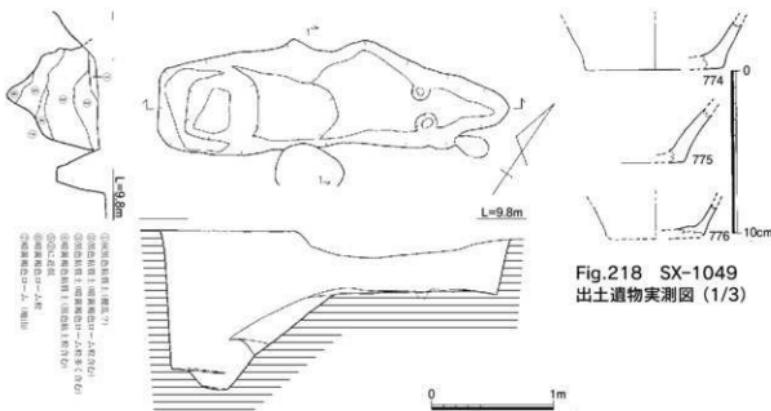


Fig.217 立柱遺構 SX-1049 実測図 (1/40)

(11) 周溝墓（古墳/SX）

古墳時代前期の周溝墓3基を確認した。前方後方形1基、円形2基である。これらは古墳時代前期の道路側溝と考えられるSD-4002・SD-1081と4~4.4mの距離を置いて西側に整然と並ぶ状況にあり、計画的に配置されたと考えられる。また、一部の調査に留まるため明らかではないが、SX-3059(3060・4005)も周溝墓の可能性がある遺構である。

前方後方形周溝墓 SX-1100 Fig.219・220, PL.24・25

I区東半部の東半分を占める前方後方形の周溝墓である。主軸方位は磁北から14°西偏し、南へ前方部を向ける。練炭工場による深さ2m以上の擾乱によって後方部の中央から北東にかけて大きく損なわれるほか、擾乱による小さな破壊が各所に及んでいる。後方部北辺の周溝は中世溝と重複する。東に古墳時代前期の道路西溝SD-1081が略南北方向に走り、これと4mの間を置いて並行する。前方部南辺には溝が回らないが、溝が切れた部分を填端とみて後方部後方の溝の内側下ばまでを計測すると全長は26.37mで、後方部長は17.8m、前方部長8.57mとなり、ほぼ2:1である。同様に、前方部前面幅10.0m、くびれ部幅7.0m、後方部幅16.3mと計測される。

後方部は周溝の内側下ばを填端として計測した場合、南北17.8m、東西最大16mで南北にやや長い隅丸方形を呈する。溝幅2.0m~3.7m、深さ10cm~110cmで、特に古墳時代道路に面する東辺は広く深いが、反対側の西辺の周溝は幅が狭く、かなり浅い。周溝の横断面形は概ね逆台形を呈し、古墳外周側の壁の立ち上がりがやや急である。周溝の底面標高は、深い東辺が8.3m~8.5m、浅い西辺が9.5mである。底面はほぼ平坦で、西辺の周溝が浅くなる際に深さ60cmほどの柱穴がある(M-M')。

前方部は横形に南へ大きく開き、前面には周溝が回らない。溝幅1.3m前後、深さ20cm~30cmが残り、底面標高は9.3m~9.5mで、後方部周溝底に比べると約1m浅い。遺構面がもう30cm削平されていたら前方部周溝は消失してしまい、大型の方形周溝墓と認識したことであろう。

周溝の土層断面を見ると、中層に黒味の強い粘質土がレンズ状に堆積する部分と、上層に黒味の濃い粘質土が堆積する部分とがあり、埋没の進行が一様ではなかったことが伺われる。南西隅では底~壁面に小動物(齧歿類か)又は木根による生痕がみられ、層が擾乱されている。周溝底では土壤墓とみられる遺構を3基確認した(SK-1064・1068・1071)。また、後方部の南東コーナーでは、周溝がほとんど埋没した段階で投げ入れられた須恵器壺の一括遺物が出土した(PL.24-6)。

周溝で囲まれた内部には遺構が少なく、覆土が黒色粘質土の弥生時代とみられる遺構のみが存在し、古墳時代後期の遺構SK-1050等も周溝内側には及ばず、周溝内に盛土が存在した可能性が極めて強い。前方部前端付近に造られた防空壕の入り口がトンネル状となって周溝を潜り西側に開口していることや、かつてこのあたりに小丘が存在したという話が伝わっていることなども、近年まで埴丘が存在したことを裏付けるものであろう。東側の古墳時代道に立ってこの古墳を観た場合、埴丘で死角になる後方部西辺の周溝が狭く浅いことも、埴丘の存在を示唆するものであろう。

遺物は土層観察ベルトを境に区分し、SD-1100として取り上げた。

SD-1100 出土土器 Fig.221・222

弥生土器、古式土師器、須恵器、中国産陶磁器、石製品、青銅器鋳型がコンテナ8箱出土した。出土した遺物は約10cmごとに4層に分離して取り上げた。777~795が上層、796~816が中層、817~820が下層出土である。

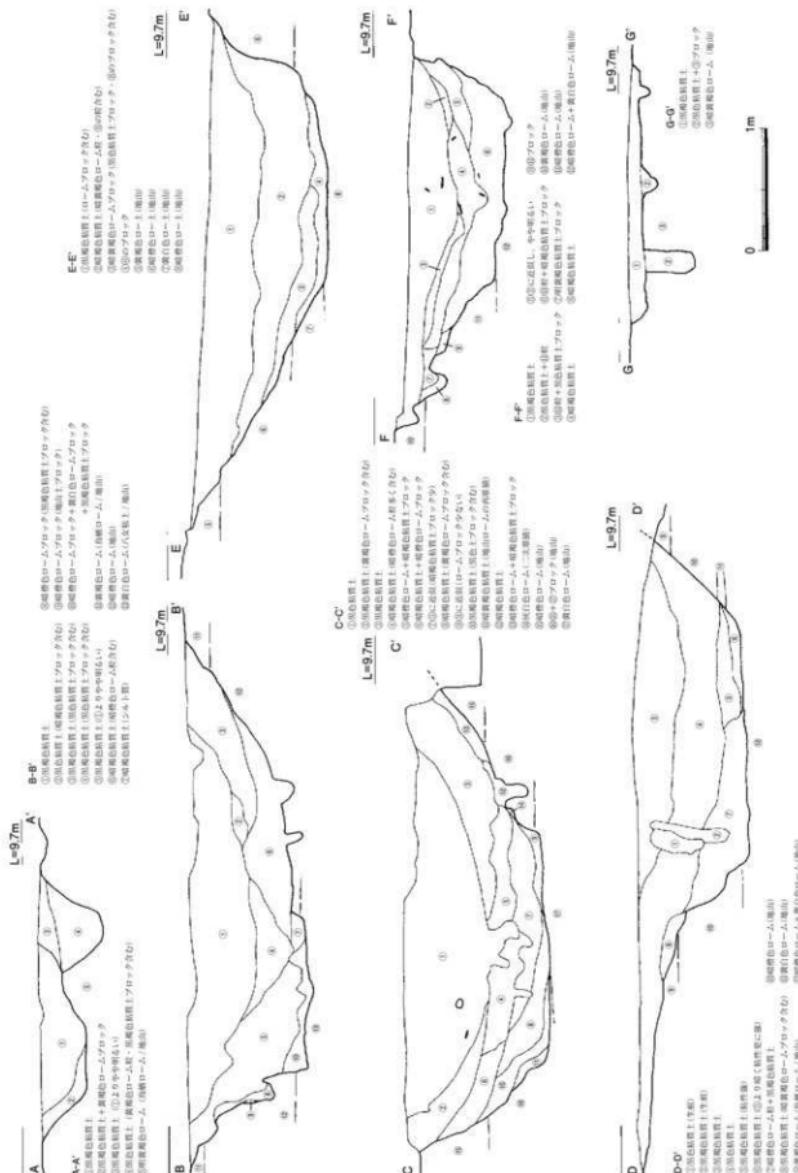


Fig.219 周満墓 SX-1100 土層断面図 (1/40)

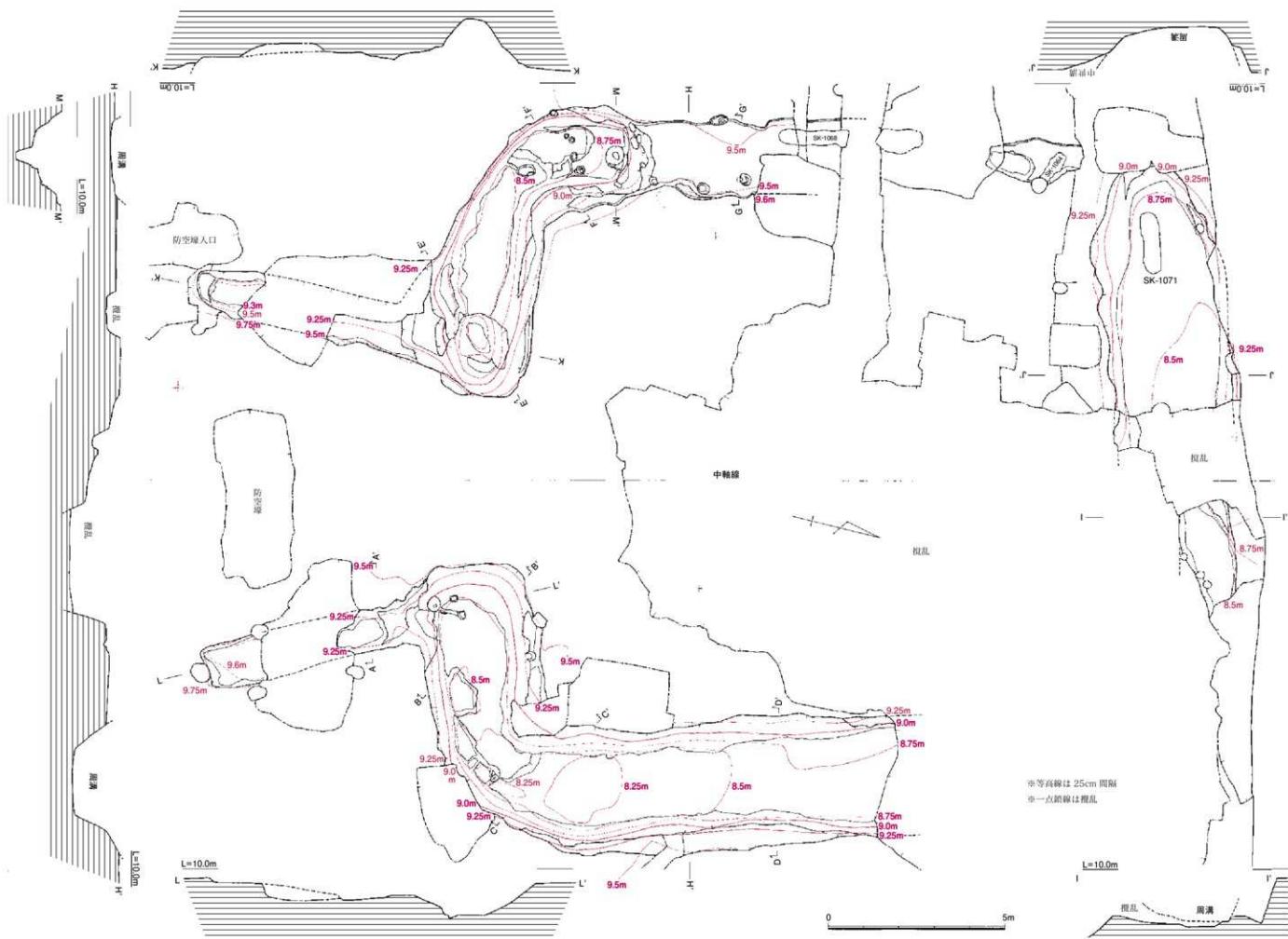


Fig.220 周溝墓 SX-1100 平面・断面実測図 (1/100)

777～780は須恵器蓋で天井部外面に回転ヘラ削りを加える。777は外面の段で口縁部と天井部を分け、口縁に段の痕跡があり古い特徴を持つ。781～783は須恵器坏身で、783のみ底部を回転ヘラ削りする。蓋坏のロクロ回転は全て時計回りである。784は須恵器瓶類の口縁部で、口縁端部に突帯を付ける。785は須恵器壺の口縁部で、外面にカキ目その後、櫛描波状文と沈線4条を巡らせる。786は須恵器小片で小壺か。カキ目を施す。787は大型の壺で、口縁外面に雜なカキ目の後、ヘラ沈線を雜に連続させ、上に3条、下に2条の沈線を回す。胴部外面を擬格子タタキ後、外底にカキ目を加え、内面は同心円文當て具痕が残る。788～792は古式土師器壺の口縁部小片で、789は布留系の壺であろう。790は内外横ナデ調整だが、他は磨滅が著しく調整不明。793は古式土師器壺の口縁部片で、外面に刷毛目ちへラミガキ、内面は器面剥落する。橙褐色で胎土精良。794

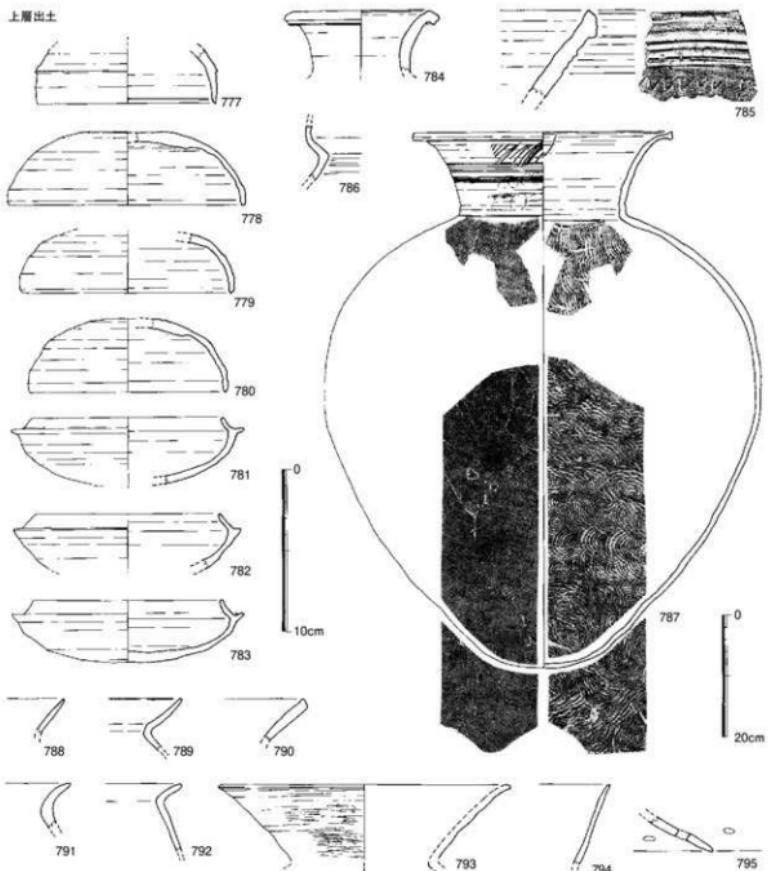


Fig.221 SD-1100 出土遺物実測図 I (787 は 1/8、他は 1/3)

は古式土師器の長頸壺で、他にも破片があるが接合しない。磨滅するが外面ヘラミガキ、内面ナデか。橙褐色で胎土精良。795は古式土師器高环の脚で、穿孔がある。磨滅して調整不明。暗橙褐色で胎土精良である。

796～816は中層出土土器である。796は弥生土器で小型の甕である。「く」字形口縁をなし、内底に指印え痕が残るが、磨滅してその他の調整は不明である。797～801は甕で「く」字形口縁

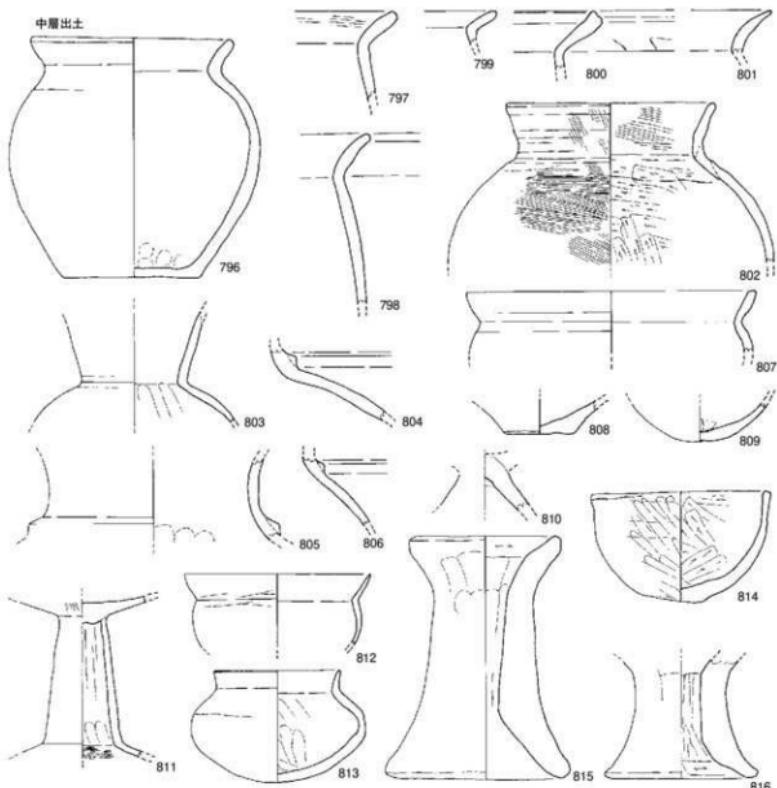


Fig.222 SD-1100 出土遺物実測図 II (1/3)

をなす。799は弥生土器で、他は弥生時代終末～古墳時代前期頃の土器であろう。いずれも磨滅が著しいが、800は外面にタタキ痕が残る。802は古式土師器の壺で外面刷毛目、内面ヘラ削りで粘土接合痕が残る。口縁は刷毛目のち横ナデ。803は古式土師器の長頸壺で、肩部内面に指押えが残るが器面剥落する。804～806は小片だが二重口縁壺であろう。いずれも頸部に三角形突帯を貼付するが調整痕は残らない。807は広口鉢か。口縁外面に横刷毛目のち横ナデ調整しており、他は調整不明。808は弥生土器の壺で平底。809も壺の底部か。丸底。810は古式土師器の小型器台で、調整痕は残らない。淡橙褐色で胎土精良。811は高坏で、外面磨滅するが刷毛目調整か。内面はシボリのちナデで、下端部に刷毛目が残る。812は小型丸底壺の小片で、磨滅が著しいが外面ヘラミガキ。813は小壺で外面剥落、内面は指押えのちナデ。814は鉢で、外面指頭によるナデ、内面工具によるナデ調整。815・816は器台で、磨滅剥落が著しい。

817～820は下層出土土器である。817は弥生土器の甕で、磨滅して調整不明。818は弥生土器の壺で頸部に三角形突帯がある。外面丹塗磨研、内面シボリ痕をナデ調整。819は古式土師器の長頸壺で、口唇は面取りされ凹む。磨滅剥落する。820は弥生土器複合口縁壺で、磨滅するが内外に粗い刷毛目が残る。

中世の須恵器・土師器・陶磁器は混入遺物であろう。古墳時代後期の土器は主に上層から出土し、須恵器の一部は中層からも出土することから、周溝が窪みの状態で残っていたと考えられる。中層の802～813、下層の819などが遺構の時期を示すと考えられる。

円形周溝墓 SX-4010 Fig.223・224、PL.26

2区東端と4区西端にまたがって調査した。古墳時代前期の道路側溝SD-4002と4.4mの間を置いている。円形に巡る周溝と考えられるが、中央部を近世溝が南北に縱断しており、大きく破壊されている。2区の溝をSD-2049、4区の溝をSD-4010とし、まとめてSX-4010とした。周溝内側の下ばで計測した径は13.0mで、溝の外周径は15m、内周径は12.6mを測る。

西側のSD-2049は近世溝による削平が著しいが、弧状に巡り、溝の最大幅1.5mである。溝の横断面は逆台形をなし、溝底は凹凸がある。中央部が深く、底面標高は8.5m強を測る。覆土は黒褐色粘質土、地山土は暗橙色ロームである。

東側のSD-4010は比較的残りがよい。基盤ロームが平坦に削平されているが、激しい破壊は免れているため、ただし近世墓地が周溝にはほぼ重複しており近世壺棺墓が多数溝に切り込んで營まれている。近世墓は大半が改葬を受けていた。溝の西端は近世溝に削り取られて消滅しており、周溝の南半で弥生時代大溝SD-2030を切っている。溝幅0.9m～1.6mを測る。横断面形は逆台形を呈し、深さ80cm～100cm。底面はほぼ平坦で、やや南へ下っている。覆土は黒褐色粘質土で、Fig.224の土層図では円の外周から埋没した状況を呈する。基盤土は黄褐色～暗橙色ロームである。

周溝はほぼ正円を描き、盛土は残っていないが円墳と考えられ、主体部は削平されたと考えられる。西側は7世紀代の区画溝SD-2040と接するものの、破壊が及んでいないことから、少なくとも7世紀頃までは周溝の形が明瞭に残っていたものと考えられよう。

SD-2049出土土器 Fig.225

弥生土器、古式土師器、須恵器がコンテナ1箱出土した。

821は弥生土器の底部で不安定な平底をなす。剥落が著しいが、内面に指押え痕が残りナデ調整を加える。822は古式土師器壺の口縁部片で直に開く。磨滅して調整不明である。胎土は精良である。823は器台である。磨滅するが、外面指押え後縦刷毛目で、内面ナデ調整である。

SD-4010 出土土器 Fig.225

弥生土器、古式土師器、石製品がコンテナ 5 箱出土した。

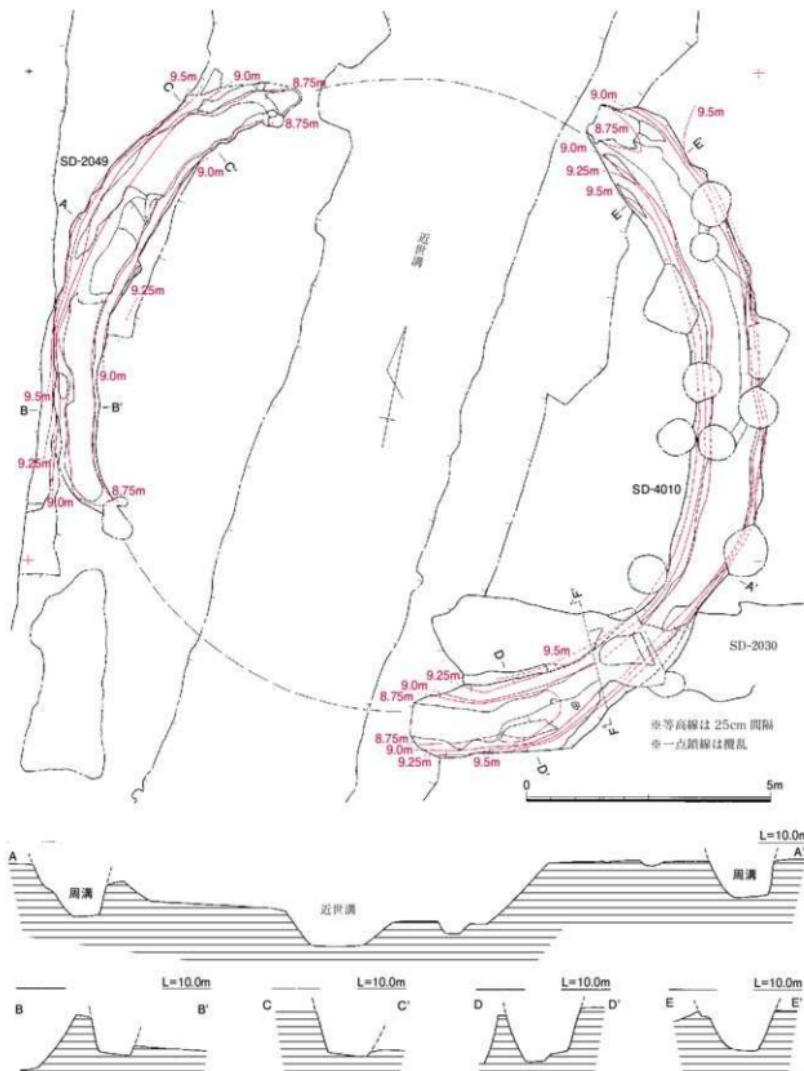


Fig.223 周溝墓 SX-4010 実測図 (1/100)

824 は弥生土器甌で「く」字形口縁をなす。825 は弥生土器の短頸甌であろう。小片である。826 は古式土師器甌の肩部小片で、外面は磨滅して調整不明、内面はヘラ削り後ヘラナデを加える。827 も甌の小片で「く」字形をなす。外面刷毛目、口縁横ナテ調整。828 は古式土師器で、口縁端部が剥落しており二重口縁甌となる可能性がある。調整痕は残らない。焼成不良で破面が黒色をなす。829 は弥生土器の高杯であろう。口縁部小片である。830 は弥生土器の小甌である。内面に指押え痕が残るが磨滅が著しい。831 は古式土師器の高杯で、破片が多数あるが接合しない。調整痕は残らない。橙褐色で胎土精良。832 は古式土師器で鼓形器台か。小片で磨滅剥落する。淡橙褐色で、胎土精良。

833・834 は高杯の脚で、長脚である。内面にシボリ痕が残るが磨滅のため調整不明。835・836 は鉢である。磨滅するが内外面とも刷毛目調整か。836 は口縁が内湾し、口唇の一部にヘラ刻みを入れる。837 は須恵器甌の胴部小片である。外面擬格子タタキ、内面同心円文当て具痕。

須恵器は小片で上層から出土しており混入遺物であろう。古墳時代前期築造だが詳細時期不明。

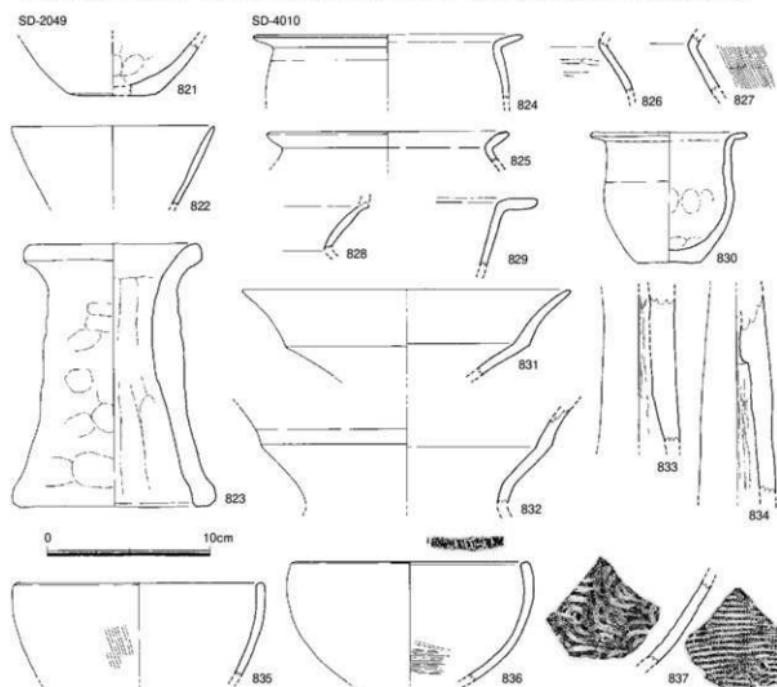


Fig.225 SD-2049・4010 出土遺物実測図 (1/3)

円形周溝墓 SX-4050 Fig.226・227、PL.26・27

2区から4区の南端で検出した。円の中央を近世溝が壊断する。南西側約1/4と南東の一部が調査区外にある。2区の溝をSD-2055、4区の溝をSD-4050とし、両者をまとめてSX-4050とした。

西側2区検出の周溝は削平により分断され、調査時には周溝と認識できなかった。よってSD-2055・SD-2040下層の遺構番号で出土遺物を取り上げた。溝幅は1.3m～1.4mで、横断面は逆台形をなす。底面には凹凸があり、調査区南壁際が最も深く、深さ40cm、標高7.9mを測る。SD-2055では古式土師器がまとまって出土した。

東側4区検出の溝SD-4050は西端が近世溝に切られるが、東半はローム台地上に良好に残っていた。ただし東辺中央は攤乱に大きく破壊されている。南端は立ち上がって丸く収束し、陸橋をなすと考えられる。この部分が最も遺構の残りが良く、周溝の最大幅2.1mを測る。横断面逆台形で、円の内側の傾斜が緩く、外側が急に立ちあがる。底面にはかなりの高低差があり、検出面標高9.6m前後、底面標高7.8～8.9mで、最深部(E-E')では遺構面から200cmを測り、柱穴の可能性がある。遺物は土層ベルトを境に分けて取り上げたが遺構平面図に示した位置からほぼ完形の二重口縁壺5個体が出土した。出土レベルに違いがあり、異なる時期に供獻されたものと考えられる。

SX-4050はほぼ正円を描くが、溝内側下ばを墳端として計測した径は東西17.5m、南北17.0mとなり、僅かにひずむ。周溝外周で径19.0m～19.5m、内周で径16.0m。円の中心は調査区壁際にあるが、主体部はおそらく盛土の中に造られたものと考えられる。また、南端で溝が切れており、南に墓道が付くと思われる。SX-4010との間隔は1m弱で、道路側溝SD-4002と4m強の間を置いて円墳が南北に連なっていた状況が想定される。西側は区画溝SD-2040が周溝の内側に一部食い込んでおり、7世紀代には墳丘の一部が削られたとみられる。

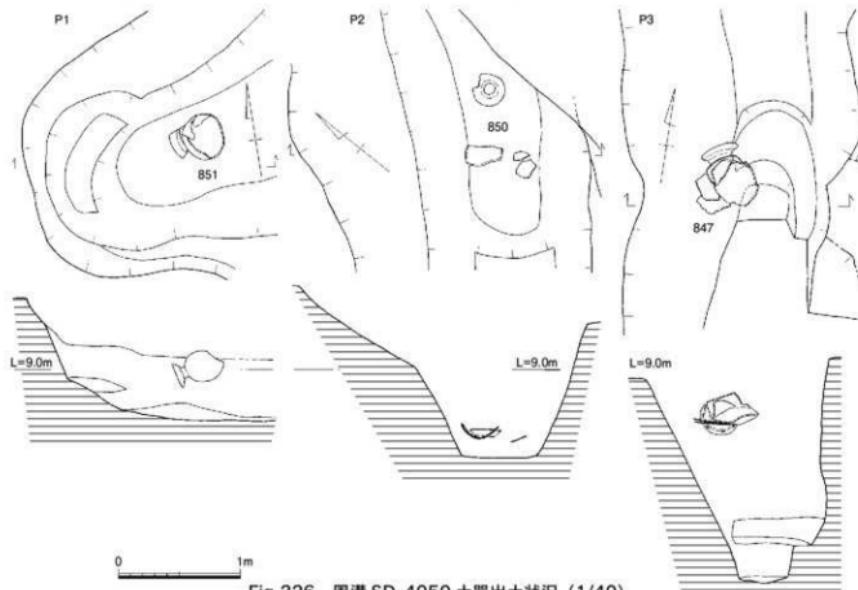


Fig.226 周溝 SD-4050 土器出土状況 (1/40)

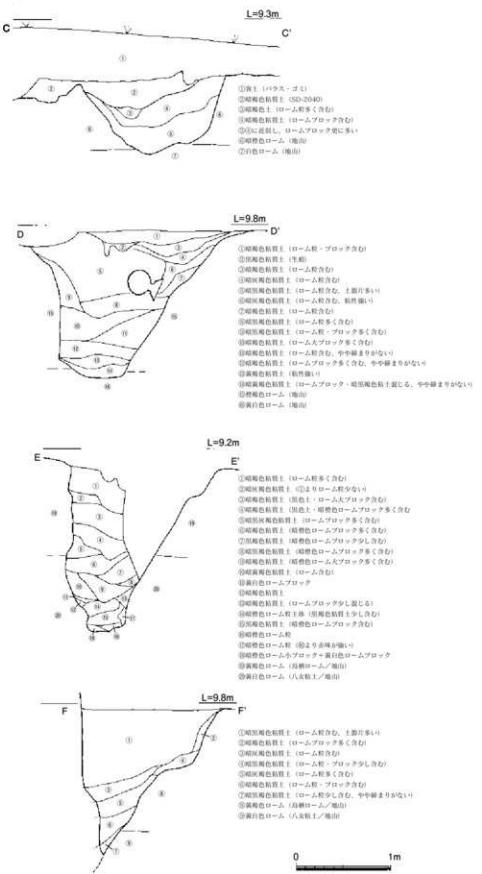


Fig.227 周溝基 SX-4050 実測図 (土層図は 1/40、他は 1/100)

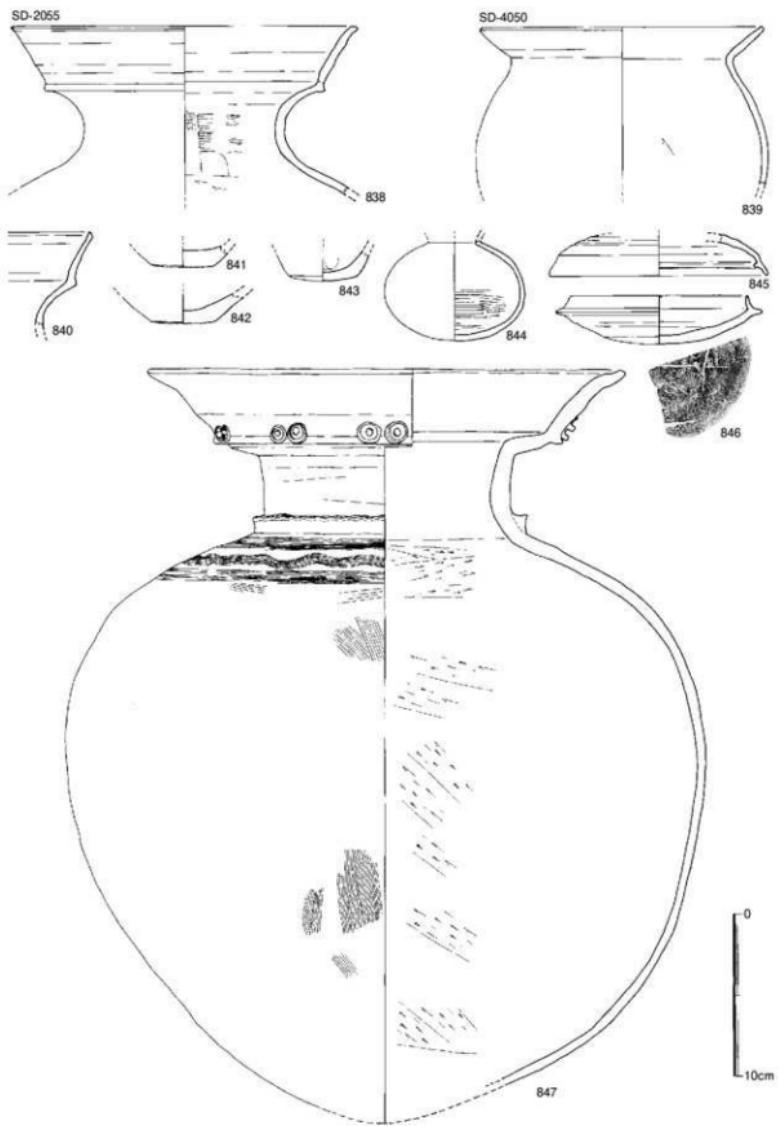


Fig.228 SD-2055・4050 出土遺物実測図 I (1/3)

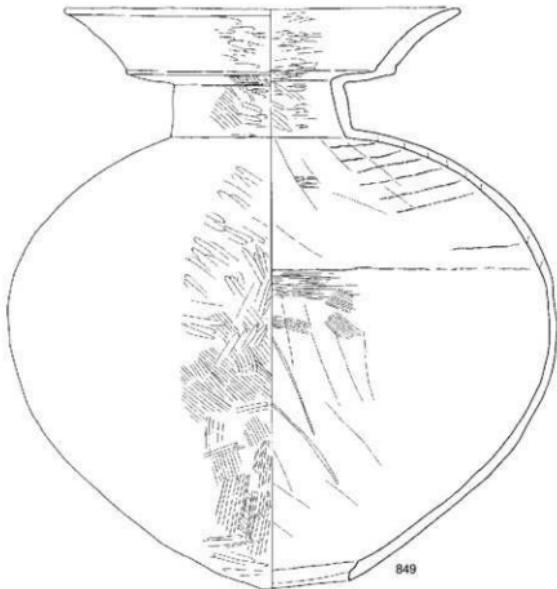
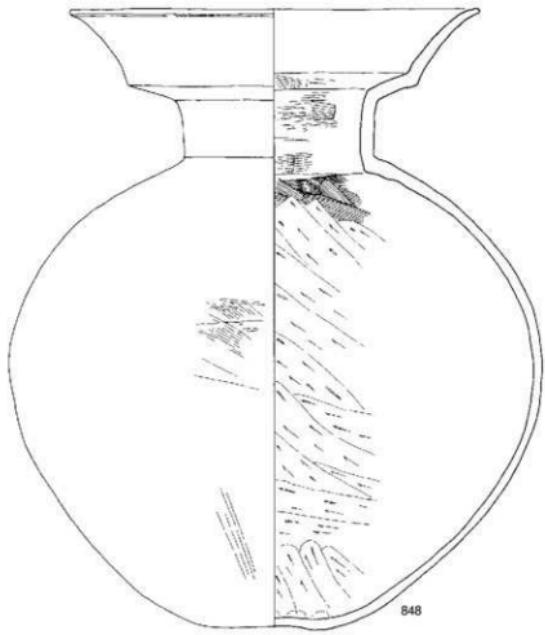


Fig.229 SD-4050 出土遺物実測図 II (1/3)

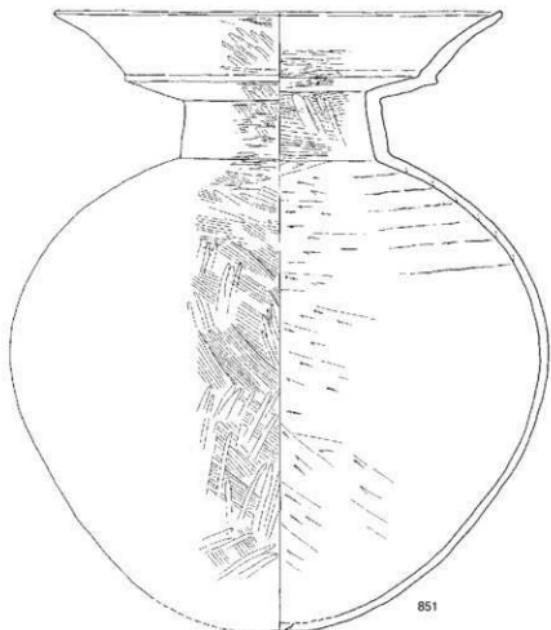
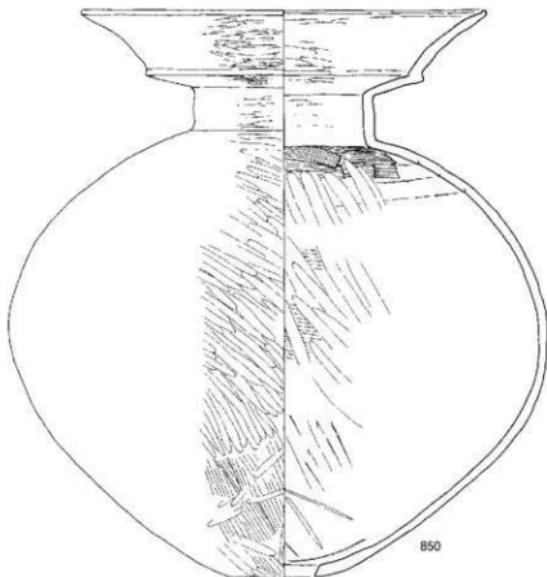


Fig.230 SD-4050 出土遺物実測図Ⅲ (1/3)

SD-2055 出土土器 Fig.228

弥生土器、古式土師器がコンテナ 1/3 箱出土。838 は古式土師器二重口縁壺で、試掘調査 T-22 出土土器と接合した。胴部外面刷毛目、胴部内面ヘラ削りで頸部に横刷毛目し、口縁内外横ナデ。

SD-4050 出土土器 Fig.228 ~ 230, PL.30

弥生土器、古式土師器、須恵器がコンテナ 5 箱出土した。

839 ~ 844 は古式土師器である。839 は布留系壺で、器面剥落が著しいが胴部内面ヘラ削りである。840 は山陰系二重口縁壺の口縁部小片で、調整痕は残らない。841・842 は壺又は壺の底部で、小さな平底で丸みがある。843 はミニチュア土器の底部。844 は小壺で口縁を欠く。底部に焼成前の不整形孔がある。外面ナデ、内面は下半刷毛目で上半ナデ調整。暗橙褐色で胎土精良。

845 は須恵器蓋。歪みが著しい。846 は須恵器坏身で、外面にヘラ記号があり降灰を被る。

847 ~ 851 は遺構図に示した位置から出土した古式土師器の二重口縁壺である。847 は底部を欠くが、焼成後穿孔があるものと思われる、他はほぼ残存する。口縁外面に浮文を貼付し、竹管を押圧する。浮文は 2 個一対で、計 11 対を配する。頸部には三角形突帯を巡らせ、刷毛目具押圧による刻みを連続して施す。肩部は刷毛目具による波状文とその上下に平行線文を入れる。胴部外面は細かい刷毛目、内面ヘラ削り、口縁内外横ナデ調整。848 は復元完形で、底部の破片が少ないと明確だが、底部に焼成後穿孔したと思われる。外面刷毛目のちへラミガキ、内面刷毛目のち胴部ヘラ削りで、頸部以上はヘラミガキ。口縁内外は磨滅が著しい。849 は焼成後に底部に外から穿孔する。内面に粘土接合痕を残す。外面刷毛目のちへラミガキ、内面刷毛目のち削り気味のナデ、口縁へラミガキ。850 も焼成後に底部穿孔しており、外から打撃を加えて内面が輪状に割れる。肩部内面に粘土接合痕を残す。胴外面刷毛目のちへラミガキ、内面刷毛目のちナデで下半は一部削り後ナデ。頭部から口縁は内外にへラミガキを加える。851 も焼成後に底部に外から穿孔する。肩部内面に粘土接合痕を留める。外面刷毛目のち疎らにへラミガキ、内面は胴部ヘラ削りで、頸部は刷毛目のちナデ、口縁内外へラミガキ調整。

古墳時代前期築造と考えられる。二重口縁壺は 849・850 → 851 → 848 の形式変化がたどれ、出土したレベルは 850 (8.4m) → 851 (8.9m) → 849 (9.0m) → 848 (9.1m) で概ね形式に合致する。

性格不明の周溝状遺構 SX-3059・3060・4005 Fig.231, PL.27

3 区南端から 4 区北端に検出した大型の遺構で、覆土からみて一連の遺構と考えられる。周溝墓ないし古墳の可能性があるが、極く一部の検出に留まるため判断できない。

東側の SX-3060 は平面形が L 字型に屈曲するが、北側～東側を搅乱に大きく破壊される。南東側は調査区外に伸びていく。断面形は概ね逆台形で深さ 120cm である。

SX-3059 と SX-4005 は一連の遺構である。南北方向に伸びて北端は収束し、南側は中世溝に切られてその延長は不明である。調査区壁により南北に分断され、北半を SX-3059、南半を SX-4005 とした。SX-3059 は北へすばまる平面台形様のプランをなし、北端は搅乱坑に切られる。古墳時代後期の溝 SD-3074 が東西に走るか調査時に見落としており、遺物が混入している。東西最大幅 6.8 m、断面逆台形で底面は平坦、深さ 110cm である。SX-4005 は掘り方西辺が弧を描き、東辺は調査区外にあって不明だが一部で壁が立ち上がり始める部分を確認した。東西幅 4 m 程度か。断面形は逆台形で、深さは SX-3059 とほぼ同じである。

北側へ短い張り出しを持つ前方後方形プランと見ることも可能である。

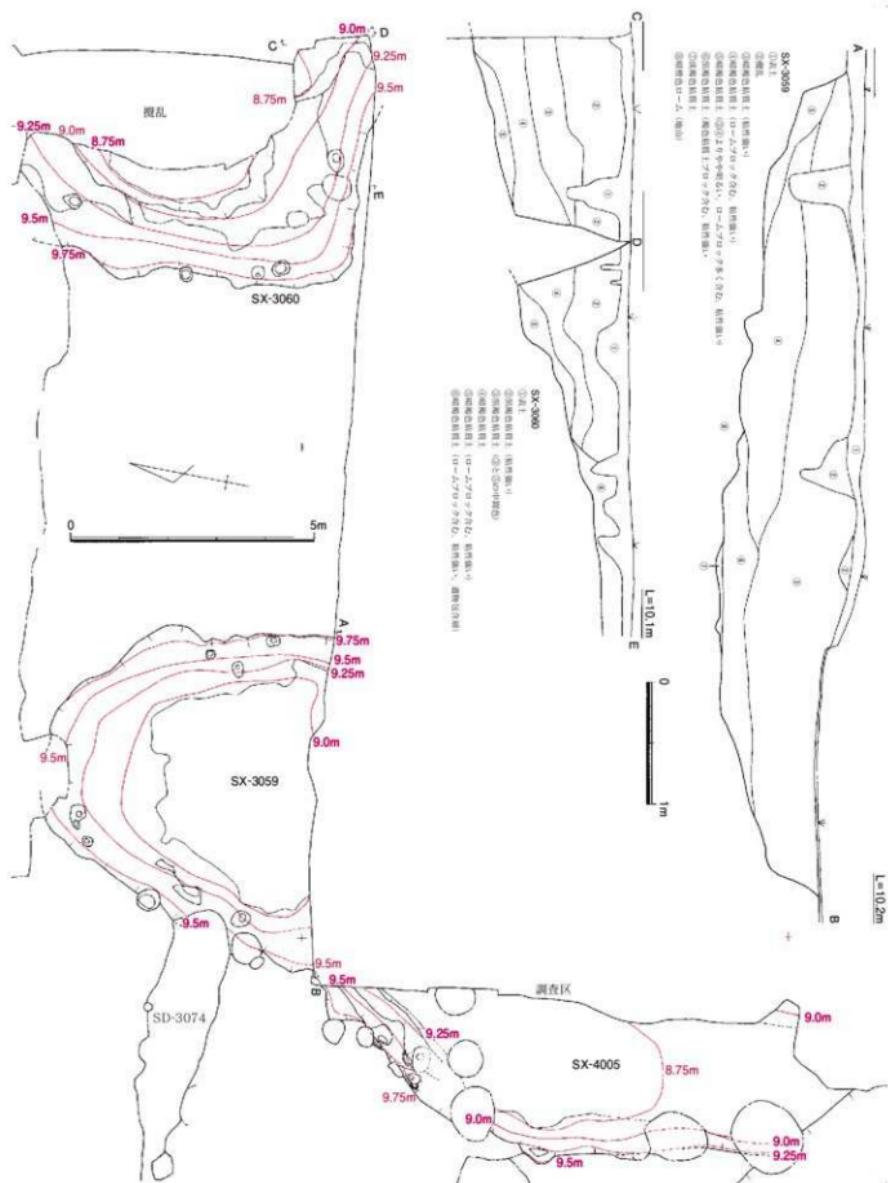


Fig.231 性格不明の周溝状遺構 SX-3059・3060・4005 実測図（土層図は 1/40、他は 1/100）

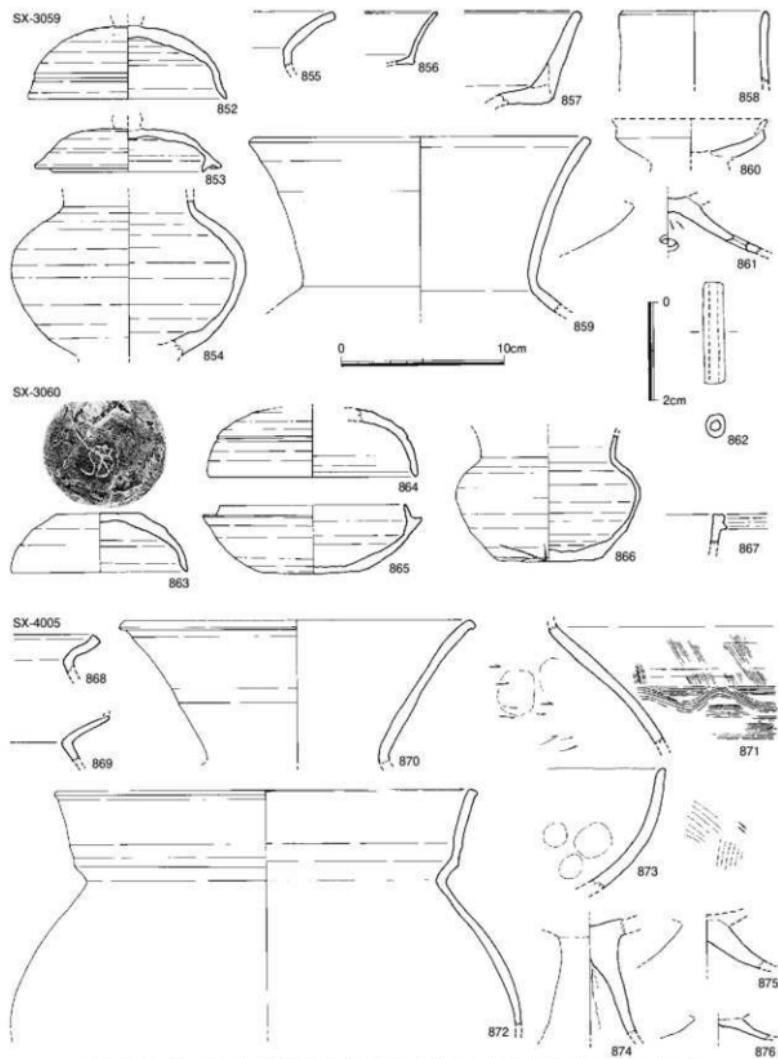


Fig.232 SX-3059・3060・4005 出土遺物実測図 (862は1/1、他は1/3)

SX-3059 出土遺物 Fig.232

弥生土器、古式土師器、須恵器、土製品、石製品がコンテナ4箱出土した。下層は須恵器壺蓋1点が出土したが、他は全て古式土師器である。ただし、上層には須恵器が多く含まれる。

852 は須恵器蓋で鋸が付く。内外に凹線を回して口縁を区別し、天井部は回転ヘラ削り。853 は返りの付く須恵器蓋で、鋸の痕跡がある。天井部は回転ヘラ削り。854 は須恵器壺で脚が付こう。

855 ~ 861 は古式土師器である。855 は壺の口縁部小片で、磨滅が著しい。856 は二重口縁壺の口縁部小片で器面は剥落する。857 は大型の二重口縁壺で、口縁部小片。858 は壺の口縁部小片で内外磨滅する。859 は長頸壺の口縁部で、端部の外面が浅く窪む。調整痕は残らない。860 は小型器台の口縁部小片で、口縁端部は剥落する。ナテ調整で胎土精良。焼成不良で破面が黒色をなす。861 も小型器台で脚部片。磨滅するか内面に工具圧痕が残る。外面から焼成前穿孔する。

862 は碧玉製管玉である。

SX-3060 出土土器 Fig.232

弥生土器、古式土師器、須恵器、石製品がコンテナ 1 箱出土。須恵器は上層・最上層から出土。

図は全て須恵器である。863 は蓋で、天井部はヘラ切りで板压痕があり、外周のみ回転ヘラ削りを加える。記号様のヘラ記号がある。864 も蓋で外面に沈線を回して口縁を区別し、口縁端に段の痕跡が残る。865 は环身で、底部ヘラ切りで外周のみ回転ヘラ削りを加える。866 は小壺で、外底にヘラ記号を入れる。867 は壺の口縁部小片で、端部に凹線、その直下に三角形突帯を回す。

SX-4005 出土土器 Fig.232

弥生土器、古式土師器、須恵器、瓦質土器、石製品がコンテナ 3 箱出土した。須恵器・瓦質土器は上層出土で、下層には古式土師器の破片が多い。

図は全て古式土師器である。868 は壺の口縁部小片で、端部は上につまみ上げる。横ナテ調整。869 は壺又は二重口縁壺で、器壁が一枚剥落する。870 は壺の口縁部で、端部が肥厚する。磨滅して調整不明。871 は肩部片で、外面刷毛目後波状文を巡らせ、内面ヘラ削り。872 は二重口縁壺で、調整痕は残らない。873 は鉢で、外面は磨滅するが右下がりのタキ又は粗い刷毛目か。内面は指押え後ナテ。874 は高環で、磨滅が著しい。875・876 は小型器台の脚で、外外面磨滅する。

SX-3059 では下層からも須恵器が 1 点出土しているが、下層出土土器の総量としては古式土師器が支配的である。当遺構は古墳時代前期築造、後期埋没と考えておきたい。

(12) 性格不明遺構 (SX)

性格不明遺構 SX-2080 Fig.233・234、PL.27

2 区のほぼ中央部に位置する。南北に細長い土坑状の遺構が東西に連なっている。主軸方位が区画溝 SD-2020・2040 と等しく、区画内に設けられた建物遺構の可能性がある。西側から SK-2052、SK-2028、SK-2031、SK-2047、SK-2062 の遺構番号をふた。

最も西側の SK-2052 は長さ 2.5 m を検出した。南側は水田造成の段落ちにより削平消滅し、北端は弥生時代溝 SD-2030 と重複し覆土が近似するためプランが検出できていない。最大幅 75cm で、断面逆台形、深さ 40cm。上面をピットに切られるが、底面は平坦で柱穴等は認められない。

SK-2028 は南北端が丸く収束する細長い梢円形プランで、北端は SD-2030 の掘り下げ途中でプランを確認した。土坑 SK-2033 を切る。長さ 6.1 m 強、最大幅 80cm。断面逆台形で、深さ 50cm。底面は平坦で緩く南へ下り、南半で若干落ちる。

SK-2031 も細長い梢円形プランで、北端は古代井戸 SE-2050 に切られるが、井戸北壁の突出部がこの遺構に含まれよう。長さ 6.15 m、最大幅 60cm で、断面逆台形、深さ 60cm 弱。底面平坦で、北端は井戸の際でやや下がる。中央底面はやや掘りすぎた。底面に柱穴は認められない。

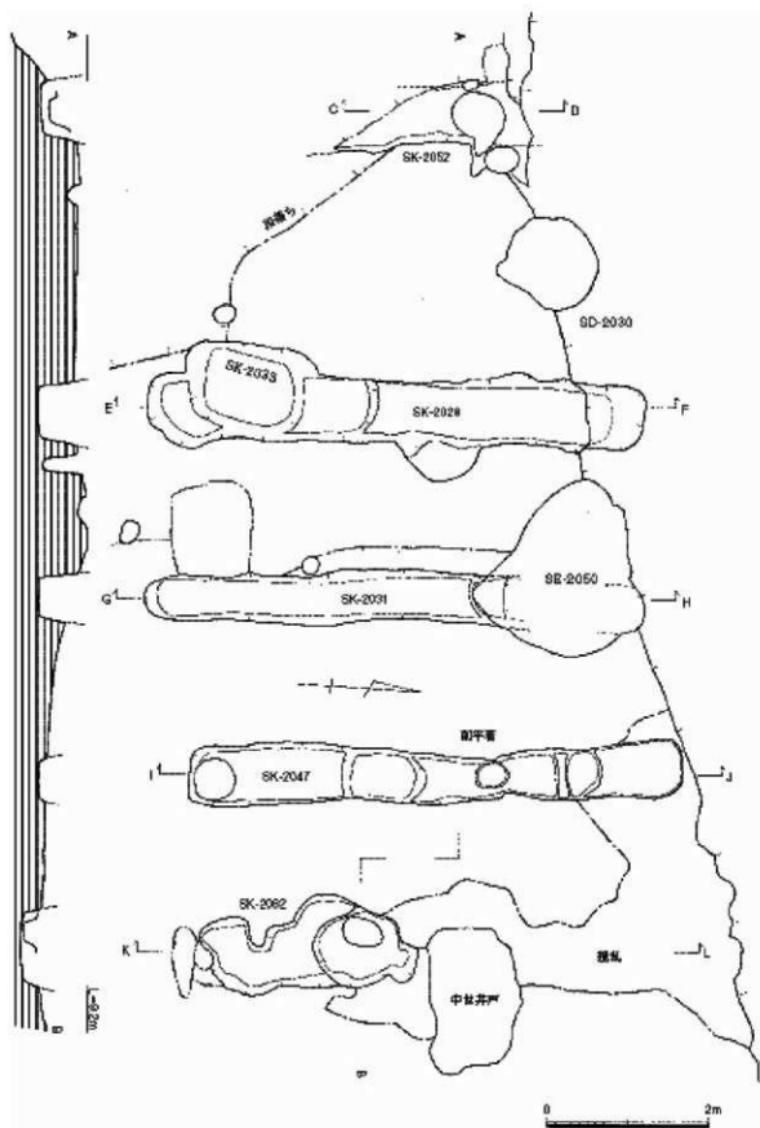


Fig.233 性格不明遺構 SX-2080 実測図 (1/60)

このSK-2031から東側では工場造成による遺構面の削平が著しい。

SK-2047は大きく削平を受けており、北半は擾乱が底面まで及んでおり、かろうじて平面プランが分かる。南端はピットに切られる。細長い楕円形土坑で、長さ6.1m、最大幅75cm。断面逆台形で、深さは最大30cmほどが残る。底面の中央南寄りが一段深く柱穴かもしれない。北半にも浅い窪みがあるが、擾乱による変異を受けており不確実である。

SK-2062は削平・擾乱・中世井戸による破壊が著しく、痕跡的に残るのみ。調査時には擾乱と考えていたが、遺構の検討を行いSX-2080に加えた。プラン・規模等は不明で、10cmほどの深さが残る。

上記の遺構群の心々距離は、西から3.65m、2.37m、2.16m、2.18mで、東西全長は9.86mとなる。SK-2052のみ

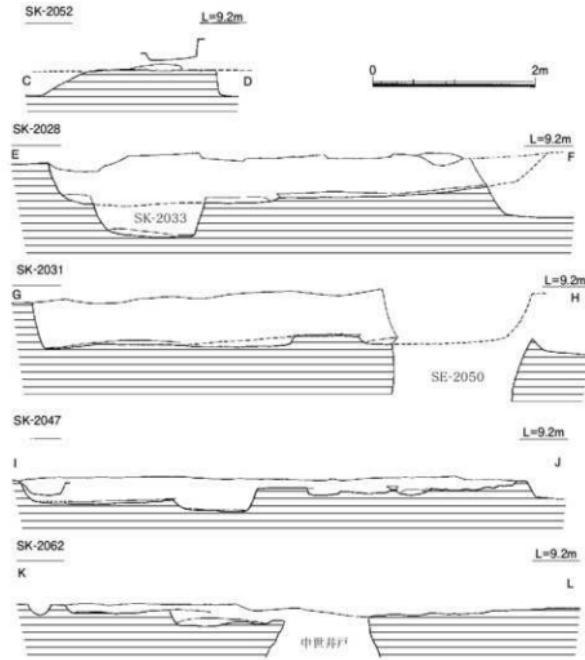


Fig.234 性格不明遺構 SX-2080 断面図 (1/60)

SX-2080 出土土器

Fig.235

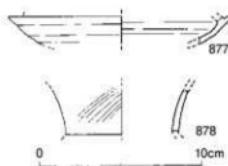
SK-2052からは土器小片・須恵器が少量、SK-2028からは弥生土器・土師器・須恵器・石製品が少量、SK-2031からは土師器・須恵器が少量、SK-2047からは土器小片が極く少量出土し、SK-2062からは遺物が出土していない。うち、図化し得たものはSK-2031出土の2点のみである。

877は須恵器蓋環で、小片のため天地と径は不確実である。

878は須恵器壺か。横ナデ後、外面にヘラで斜線を刻む。

古墳時代後期の遺構と考えられるが詳細時期は不明である。

Fig.235 SX-2080(SK-2031)
出土遺物実測図 (1/3)



(13) 地下式壙 (SX) Fig.236

地下式壙は6基を確認した。図化した5基は中世に属し、他にSX-1004があるが近世のため省いた。いずれも円～楕円形プランで、壁の一ヶ所に出入り口を設ける。SX-5028は入り口部分のみを確認した。

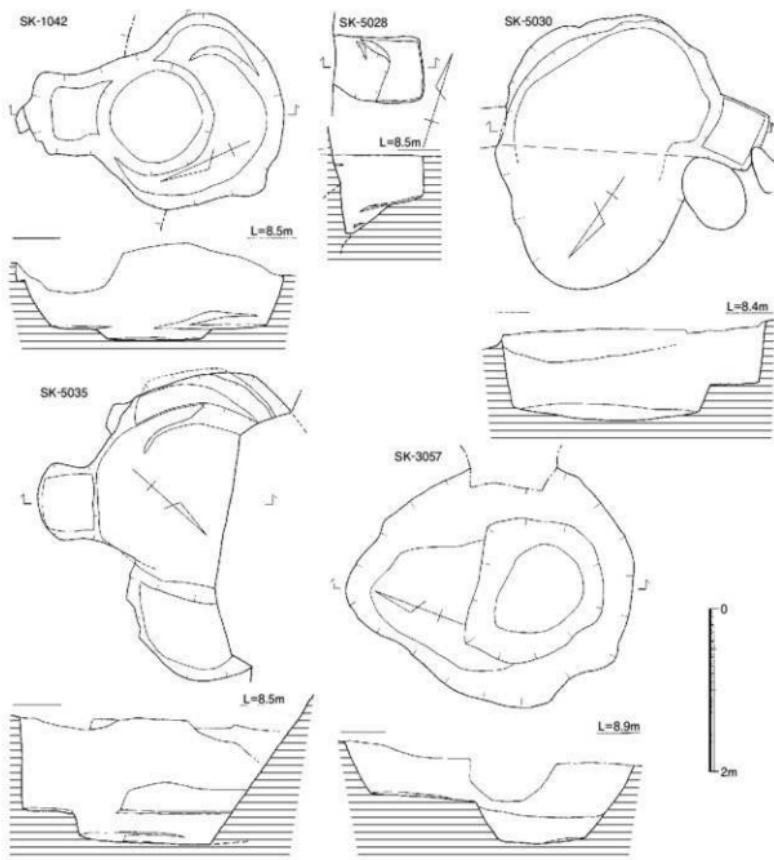


Fig.236 地下式壙 SX-1042・3057・5028・5030・5035 実測図 (1/60)

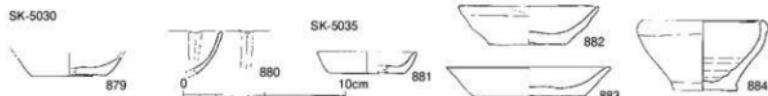


Fig.237 SX-5030・5035 出土遺物実測図 (1/3)

地下式壙出土遺物 Fig.237

SX-1042 は遺物が出土しなかった。SX-3057 は土師器、須恵器、瓦質土器、中国産白磁、朝鮮產陶器、石製品、瓦が少量出土した。SX-5028 は土器小片（糸切り底の土師器小皿等）、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、中国産陶磁器（同安窯系青磁等）、高麗陶器が少量出土した。SX-5030 は土師器、須恵器、瓦質土器、中国産陶磁器（白磁・龍泉窯系青磁・同安窯系青磁・青花・景德鎮窯青磁）、瓦、石製品がコンテナ 2 箱出土した。SX-5035 は弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、中国産陶磁器（白磁・龍泉窯系青磁・陶器）、石製品、鉄製品が少量出土した。

879・880 は SX-5030、881～884 は SX-5035 より出土した。879 は土師器小皿で底部糸切り。880 は景德鎮窯青磁菊皿。SX-5030 は 16 世紀後半の遺構であろう。881 は土師器小皿で底部糸切り。882 は土師器環で歪む。底部糸切りで、口縁に油煙が付着する。883 も土師器環で底部糸切り。884 は土師器の深い环で、磨滅するか底部糸切りか。SX-5035 は 15 世紀代。

(14) その他の出土遺物 Fig.238

各遺構から出土した土器以外の遺物を報告する。885 は九州形ナイフ形石器である。綫長剥片を用い、平坦剥離でハルプを除去し、側縁にプランティングを加え右側上辺を刃部とする。漆黒色黒曜石。886 は古銅輝石安山岩の横長剥片である。旧石器時代遺物は他にナイフ形石器の欠損品、石核調整剥片とみられる資料があり、3 区北端から 5 区の遺構面の削平が少ない調査区で点在して出土した。887 は打製石鎌、888 は剥片鎌で、他にも縄文時代早期と後晩期の石鎌等が 2 区を除く調査区でまばらに出土した。889・890 は磨製石剣片で 890 は再利用する。891 は打製石鎌、892 は石庖丁、893 は砥石である。他に数点の石庖丁、多数の砥石がある。894 は滑石製紡錘車。895 は鉄製品でタガネか。SX-4050 周溝下層出土。896 はガラス小玉で、SX-1100 周溝内の小ピット出土。

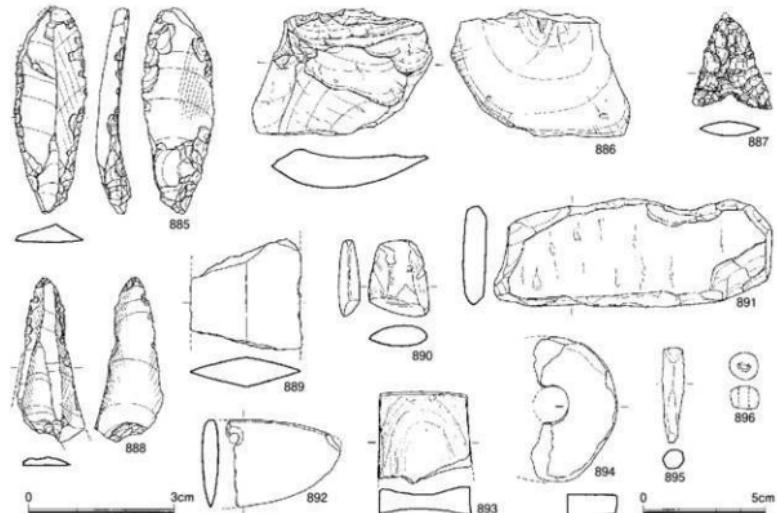


Fig.238 その他の出土遺物 (889～895 は 1/2、他は 1/1)

第五章 おわりに

第114次調査は那珂遺跡群では最大の調査面積となった。前工場の搅乱や近世水路が多く遺構の残りは悪いが、弥生時代中期後半から中世までの遺構を確認した。以下、時期ごとにまとめる。

1. 弥生時代中期後半～後期 (Fig.239・240)

調査区の中央から東半に集落遺構が、西端に墓域がある。大溝SD-2030の北に位置し、南には後期初頭前後の井戸SE-2056のみがある。時期的には主に中期後半から後期初頭で、住居SC-3005・3050、井戸SE-1074・3025・4019・4020などが後期前葉以降で、SE-4020は後期後半に下ろう。

掘立柱建物はSB-3030・3032・3034が弥生時代とみられるが詳細時期は不明である。竪穴住居は円形プラン2、方形プラン2の計4軒だが、遺構面の削平が顕著なことから多数の住居が失われたと推定される。埋葬遺構は成人甕棺墓19、小児甕棺墓1、木棺墓2のほか、土壙墓と考えてもよい土坑が祭祀遺構SX-1045周辺に数基ある。甕棺墓は後世の溝等により多数が破壊され本来の数は不明だが、墓域は図示した範囲におさまろう。甕棺墓ST-1012がKIIIa式で最も古く、他はKIIIb～KIIIc式の時期に集中する。那珂・比恵遺跡群でこれまでに確認した弥生時代中期～後期初頭の甕棺墓群は10グループほどに分けることができ、台地端部と台地中央部に立地する2タイプがあるが、今回の墓群は後者に属し、他の甕棺墓群とはやや離れている。この甕棺墓群の東を限る祭祀遺構SX-1045では、上層から須玖II式古相から後期初頭までの時期幅がある土器がまとまって出土している。当初は区画的な役割をもち、最終的に土器の投棄場所になったと考えられる。SX-1082もこれと一連の遺構で、那珂遺跡群第21次・50次検出の塚丘墓区画溝に類似することから、この西側の未調査区に区画墓が存在する可能性もある。SX-1045の南に約10m離れて位置するSX-1049はスロープを有する大柱遺構とみられ、時期不詳だが弥生時代の可能性があり、甕棺墓群や祭祀遺構と関連する遺構かもしれない。

大溝SD-2030は20次SD-01や23次SD-44と一緒に溝で、長さ250m以上にわたり那珂台地を東西に分断する。遺構の残りがよい20・23次では上層を中心に中期末～後期初頭を主とする土器が多量に出土し、20次では戈、23次では中細戈5、鋤先中子1の青銅器鋳型や銅鋤先などが伴う。114次でも中細戈5と中細矛1、矛中子5の鋳型や取瓶が出土しており、23次大型建物（中期末前後）の存在を合わせて考えると、大溝北側に青銅器生産に携わる有力集落が存在したと推定される。大溝以南では9・41次等で中期後半～後期末の竪穴住居などの集落を確認しているが、北側より新しい時期の遺構が多い傾向にある。

2. 古墳時代前期 (Fig.241・242)

古墳時代前期前半の南北方向に走る2条の並列溝と、周溝墓（古墳）と考えられる遺構4基を検出した。並列溝は4区と5区で検出したものを結ぶと長さ100mを超える。溝の間隔は7m前後で、溝間に同時期の遺構はない。那珂・比恵遺跡群を長さ1.5km以上に継続する弥生時代終末から古墳時代前期前半の道路の一部と考えられ、これに沿って周溝墓が並んでいる。SX-1100は全長26m強の前方後方形を呈し、那珂八幡古墳（全長85m前後）の1/3程度の規模で、周辺の前期古墳群の中ではこれに次ぐ大きさである。後方部東側が広く深い周溝となるのに対し西側は著しく浅く、東隣を走る道路からの景観と関連して、道路と反対側では省力化が図られたと考えられる。後方部南西コーナーには深さ30cm程度の柱穴があり、周溝内の立柱とみられる。SX-4010とSX-4050は円形で、前期前半段階の北部九州ではほとんどみられない墳形である。いずれも周溝が箱型となり、那珂遺跡群の他の周溝墓（古墳）と比べて異質である。直径約17m強のSX-4050は陸橋状をなす部

分があり、東側周溝底には立柱とみられる柱穴がある。周溝からは二重口縁壺の完形品が5個体出土したが、陸橋や立柱遺構など要所に供献された状況を示す。SX-3059・3060は溝の形状から、幅7m前後の前方部を有する周溝墓（古墳）の可能性が高いとみている。前方部と思われる陸橋部分はSX-1100よりも幅が広く、西側周溝の外周はくびれ様のカーブを描く。前方後円形となる可能性もあり、規模はSX-1100に近い。これらの周溝墓は時期を示す遺物の出土が少ないが、おおむね古墳時代前期前半におさまると考えられる。並列溝は久住猛雄氏編年のIIA期以降、SX-4050の二

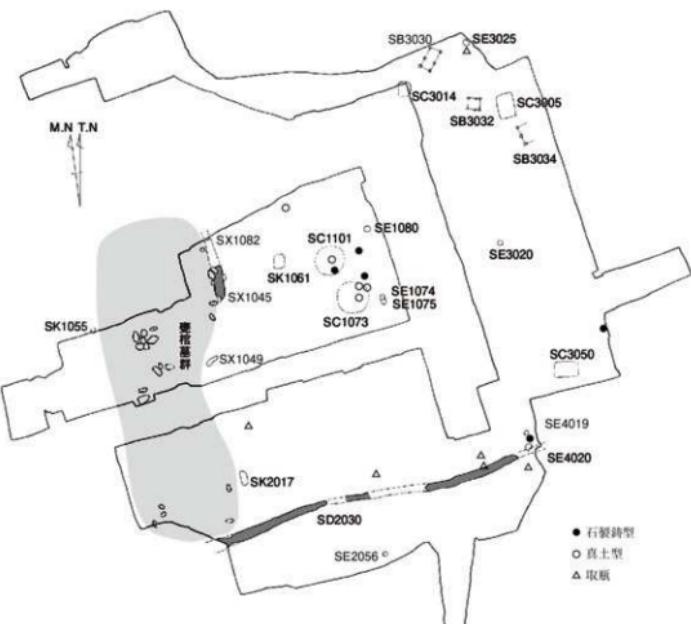


Fig.239 第114次調査 弥生時代の遺構（中期後半～後期 1/1,000）

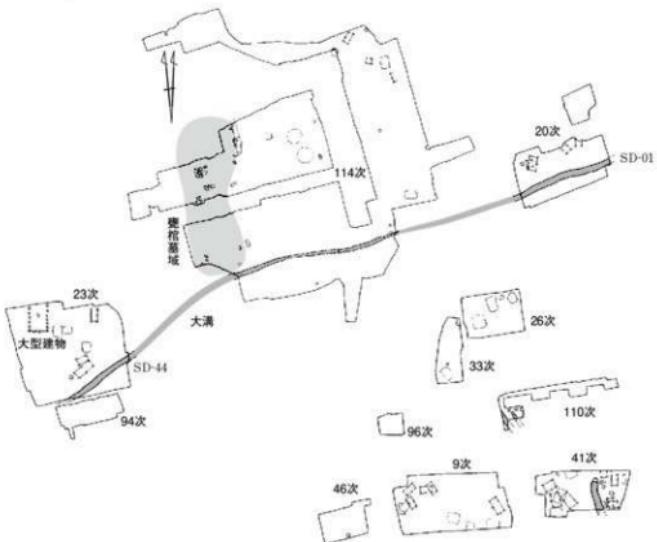


Fig.240 周辺の弥生時代の遺構（1/2,000）

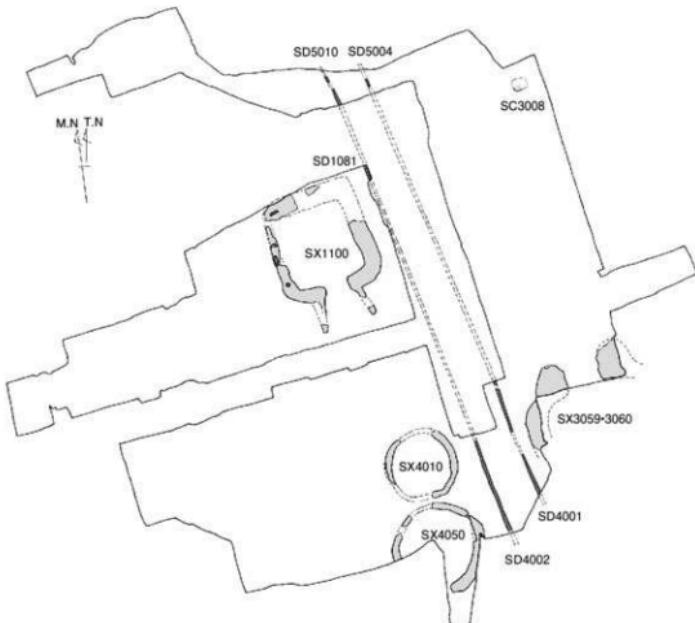


Fig.241 第114次調査 古墳時代の前期の遺構（主に前期前半 1/1,000）

重口縁壺はII B期とみられる。SX-1100は小型の精製器種が古墳に伴うものであればII A期前後である。前期後半に下る高杯や壺が出土しているが、同時期の布留系甕が出土するSK-1068（周溝内埋葬墓か）に伴う供獻土器であろう。

那珂八幡古墳の南側では、並列溝（道路）に沿うように前期古墳群が並ぶことが明らかになりつつあるが、今回は更に円形など墳形のバリエーションが明らかになった。古墳群の構成やその造墓背景を知るうえで重要な成果といえよう。比恵遺跡群も含め、並列溝は出土遺物等から那珂八幡古墳造営後が盛行期とみられるが、その上限の掘削時期や時空的変遷などを今後追求していく必要があろう。

3. 古墳時代後期後半～古代 (Fig.243・244)

古墳時代前中期～後期前半の遺構・遺物はなく断絶があるが、これは比恵・那珂遺跡群の全体的な傾向である。今回報告からもれたが、中世井戸から円筒埴輪が数点出土している。また、SX-1100など周溝墓の上層からは古墳時代後期の須恵器が一括出土し、祭祇的投棄があった可能性がある。6世紀の遺構として、3区北半部を中心とする時期の堅穴住居を6棟ほど確認した。掘立柱建物も数棟抽出できるが、細かい時期を特定できない。小溝SD-3074・4003とSD-3009は正方位に近く、時期は出土遺物からIV期段階で、集落の南北を区画した可能性があろう。

続く7世紀代の遺構として、SD-2020とSD-2040がなす区画溝があり、直角に曲がる北東コーナーを確認した。溝の出土遺物はおおむね九州須恵器編年IV期～VI期に位置づけられ、7世紀初頭の掘削、7世紀末の完全埋没を示すものとみられる。この区画溝は西側23次検出の南北溝SD-89と同時期とみられ、一連の溝と考えると東西約90mの方形区画が復元できる。主軸方位は磁北から8°

西偏し、柱列 SB-2070 と布掘り建物と考えられる SX-2080 の主軸がこれに近似する。これらの建物が方形区画内部に建てられ、23 次検出の総柱建物からなる倉庫群が区画の西外に並ぶ状況が想定されよう。

区画溝に切られる SD-4040・SD-2060 は、これに先行する区画と考えられ、両者の間は 10 m ほどの陸橋をなす。時期を特定する遺物に恵まれないか、東に入り口を持つ区画の可能性もあるう。

SD-1040 と SD-2010 は同時期と考えられる正方位に近い溝で、SD-2020 を切る。出土遺物には奈良時代のものが多いが、VI 期の須恵器も出土しており 7 世紀後葉の掘削もありうる。また、SD-5020 は SD-1040 の延長線上に位置するが、平安時代の遺物が出土しており、一連か否か検討を要する。

那珂遺跡群では 6 世紀末～7 世紀代の古瓦がまとまって出土する地点がいくつかある。今回の調査では瓦当が出土せず詳細時期が不明だが、SD-2020 では須恵器製作技法による當具痕のある 7 世紀前半以前とみられる初期瓦が、SD-1040 では竹状模骨痕のある瓦が少數出土している。また、本調査区の方形区画溝との連続が想定される 23 次の SD-89 からは神ノ前窯系や月ノ浦窯系の軒丸瓦が出土している。

かねてから 7 世紀代の那珂遺跡群では官衙的様相を示す遺構の多いことが指摘されており、比恵遺跡群で「那津官家」に比定される 6 世紀後半の横列を伴う大型倉庫群が出現して以後、那珂遺跡群でも台地西部を中心として官衙的性格を持つ建物が複数箇所で営まれていた状況が明らかになってきた。今回の調査で確認した一連の遺構もその一つとみられるが、23 次調査地点とつながる約 90 m の方形区画の存在から推して、その中心的施設である可能性が高まつた。那津官家設置以後から大宰府政府の成立前まで存在した北部九州の中性的な官衙遺跡の姿がみえつつあるといえよう。

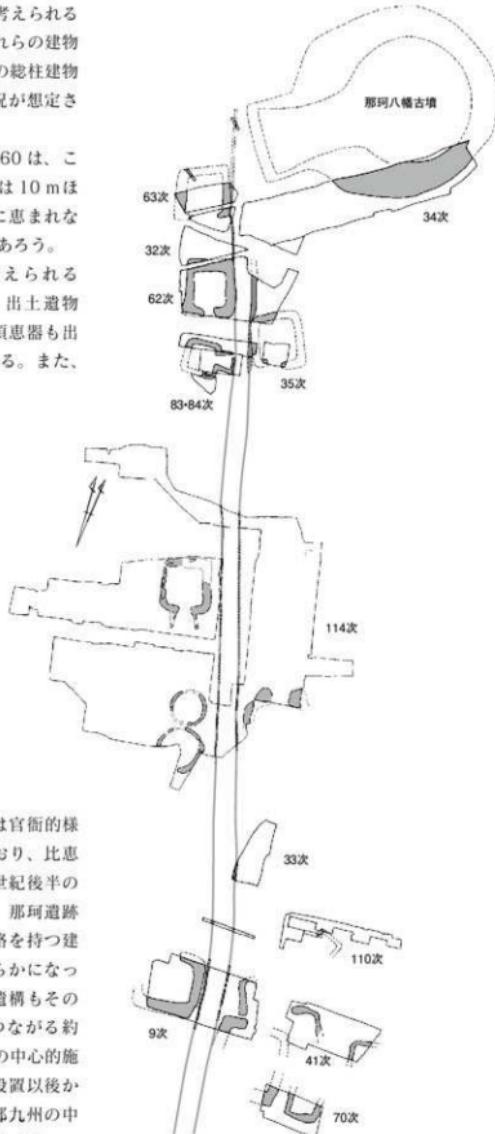


Fig.242 周辺の前期古墳と並列溝 (1/2,000)



Fig.243 第114次調査 古墳時代後期～古代の遺構 (1/1,000)

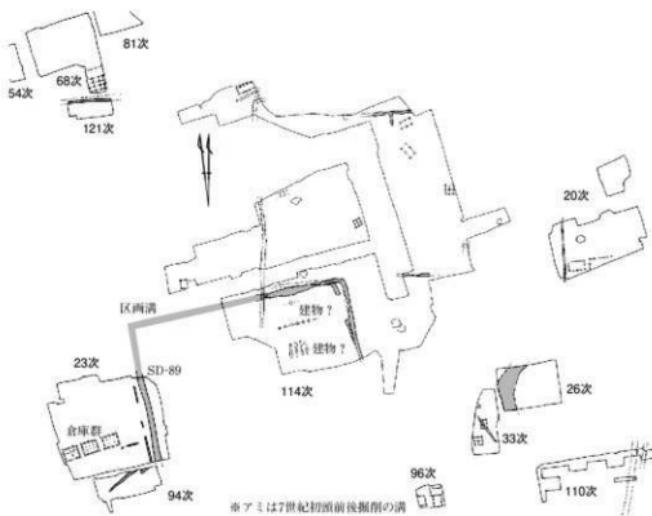


Fig.244 周辺の古墳時代後期～古代の遺構 (1/2,000)

付. 1 那珂遺跡群第114次調査出土の青銅器鋳造関連遺物

福岡市教育委員会文化財管理課 常松幹雄

今回の調査では、青銅器鋳造関連遺物が複数検出された。石製鋳型と類似する石材もみられるが、鋳型として彫り込みや鋳造の痕跡が認められないものについては実測から除外した。ここでは石製鋳型6点と真土型5点の計11点について報告する。石製鋳型6点中、製品が特定できる4点は銅戈の鋳型で、他の1点は銅矛と推定される鋳型である。真土型5点は、すべて銅矛の中子とみられる。

1. 石製鋳型について

1) 銅戈鋳型 (SC-1101・SD-1100 中層)：銅戈の両面範の鋳型で、鋒部と柵の先端が合わさる付近に相当する部分の破片である。鋒部の鋳型の全長は鋸部で8.7cm、幅は8.18～10.0cm、厚さ4.26cmを測る。鋸部の鋳型は厚さ3.91cmを測る。二つの破片の出土遺構は異なるが、色調や質感などから同一個体と考えられる。鋒部と柵の延長部の表面は黒変しており、鋳造時に熱を受けた形跡がみられる。石材は石英長石斑岩と推定される。鋳型面は鋒の左側が摩滅しており、砥石に転用されたとはいえないが、二次的な研磨が加えられている。次に鋳型からどのような製品が鋳造されたかについて考えてみたい。二つの破片は厳密には接合しないが、極めて近接しているように見える。しかし両者を密接させた場合、鋒と柵の合わさる箇所までの長さは9cm程度となることから、中細形銅戈a類でも全長に占める柵の割合が大きく、下山門敷町銅戈を更に短身にしたような形状となる。また本鋳型の鋒部断面は扁平であり、中細形銅戈a類とするには厚さが不足している。このため筆者は、二つの鋳型は本来3cmほど離れた関係という想定で製図を行った。全長30cm前後の中細形銅戈b類と推定される。

2) 銅戈鋳型 (SD-1100c 中層)：銅戈の両面範の鋳型で、鋒を上にして胡が右上がりになるように配したとき、A面は胡から内付近に相当する左下部分の破片である。現況で厚さは3.12cmを測る。B面は鋒部を下に向かって鋏戈と推定した。この推測が正しければ扁平な長方体の石材に面によって向きを逆えて戈が彫られていたことになる。両面ともに鋳造によって熱を受け黒変している。砥石に転用されたため、黒変部に鋳型の彫り込みの凹凸は観察されない。石材は黄白色で石英長石斑岩と推定される。

3) 銅戈鋳型 (SE-1074・1075 上層)：戈の鋒を上にして胡が右上がりになるように配したとき、援から胡付近に相当する右下部分の鋳型の破片である。援と平行する柵の立ち上り部分が見受けられる。最大幅は5.98cm、厚さ3.07cmを測る。援と胡の表面の黒変部は、鋳造の際に熱を受けた形跡である。石材はいわゆる石英長石斑岩で、砥石に転用されたかどうかは不明である。焼成面の黒変部に離型剤など付着物を保護するため、水洗いは行っていない。本鋳型で製作される銅戈は、胡の幅が12～13cmで、援の最小幅が5cm弱となることから、中細形銅戈c類と推定される。全長は35cm程度であろう。鋳型面を平面になるように作図すると、断面は台形状に膨らむ。八田4号鋳型は、断面が韻鉢形の両面範である（常松1998）。同型式の銅戈の面をもつ八田5号鋳型は短身銅矛との両面範で、戈の面を上にすると断面は台形状を呈している。鋳型としての石材の利用状況は八田5号鋳型に近い。

4) 銅戈鋳型 (SD-1100 d 上層)：銅戈の両面範の鋳型で、鋒を上にして胡が右上がりになるように配したとき、A面は胡から内付近に相当する左下部分の破片である。B面は内の右辺部である。両面ともに鋳造によって熱を受けた部分が黒変している。A面の幅は4.55cmで、内は2.8cmほどの長さと推定される。鋸に沿った方向に条痕が観察される。砥石に転用されたかどうかは不明である。石材は黄白色で石英長石斑岩と推定される。見通しから判断すると胡の幅は約12cm前後に復元される、中細形銅戈b類であろう。

5) 銅矛鋳型 (SD-3051)：矛の脊から柵に沿った刃部の右側付近の鋳型と推定されるが、型式は不明である。最大幅は4.47cm、厚さ3.50cmを測る。砥石に転用されたため鋳型としての彫りこみを留

めないが、鋳造の際の被熱による黒変は観察される。左辺の破断面以外は摩滅している。石材はいわゆる石英長石斑岩であろう。

6) 不明鑄型 (SE-4020 中層)：現長 4.0cm、最大幅は 3.6cm、厚さ 2.3cm を測る。画面に黒変が観察されるが製品は不明。石製と思われるが石英粒子などを混入しており、石材同定には慎重を要する。

2. 真土型について

7) 銅矛巾木部の中子 (SD-1100 e 上層)：銅矛巾木部の中子で最大幅 2.82 × 2.78cm、現存高 2.0 cm をはかる。杏仁形に配置した場合、長軸は約 3.5cm である。十字形の基部中央にわずかな凹みがある。暗黄褐色で精良な胎土に暗褐色の径 3mm 大の粒子を含む。先端に向かって折損部付近にくびれがみられる。中細形銅矛の中子と推定される。

8) 銅矛巾木部の中子 (SP-1343)：幅広かりの形状の銅矛巾木部の中子で、最大幅 3.11 × 3.26cm、現存高 3.12cm をはかる。杏仁形にセットした場合の長軸は約 4.0cm である。延長部は矛の中子としておさまるが、矛の袋部幅付近を境目に横断面は橢円形となる。十字形の基部中央に凹みがある。暗褐色で精良な胎土に白色の粒子を含む。中細形銅矛の中子と推定される。

9) 銅矛袋部の中子 (SC-1101 w)：銅矛袋部の中子で現長 3.45cm、最大幅 2.73cm をはかる。黄灰色で精良な真土を用いている。断面は円形に近く、袋部の裾に近い部位の中子と推定される。

10) 銅矛袋部の中子 (SP-1343)：銅矛袋部の中子で現長 2.56cm、最大幅 2.38cm をはかる。暗黄灰色で精良な真土を用いている。被熱により変形しており表面に鉛滓を付着している。断面は円形に近く袋部の中子と推定される。

11) 銅矛袋部の中子 (SD-1100 N 中層)：銅矛の中子で現長 3.73cm、最大幅 1.28cm をはかる。暗赤褐色で精良な真土を用いている。断面は円形に近く、中子の先端に近い部位と推定される。

3. 第 114 次調査出土の青銅器铸造関連遺物の意義

中細形銅戈 4 点中の型式の分かることは中細形銅戈 b 類 2 点と中細形銅戈 c 類 1 点である。本来、銅戈の製作時期については鑄型と共に伴う土器型式が指標となるべきである。しかし遺棄や廃棄さらに転用など出土状況から時期を判断できない場合が多い。今回の調査でもこれらに伴う土器の時期は、鑄型の使用時期を直接示すものではない。中細形段階の銅戈は副葬と埋納の両方の事例が確認されている。副葬時期をしめす資料としては鎌田原遺跡（福岡県嘉麻市）の 8 号甕棺墓や 6 号木棺墓の所見では、中細形銅戈 a 類が汲田式の新段階（須玖 I 式）の甕棺墓にともなう事例が確認された（福島 1997）。つづく中期中頃の金属器の組合せとしては、中細形銅戈 c 類が久里大牟田遺跡出土の須玖式段階の甕棺にともなっている。この資料は、鉛矛と碧玉製管玉 9 点と共に伴している。鉛矛は現存長 64.1 cm で、袋部の節帯に複合鋸歯文を線彫りで描き出している。鉛矛は、型式としては中細形に属するもので、中子は袋端部から 13.4 cm の位置まで抜き取られている（井上・松浦 1993）。三雲南小路 1 号甕棺墓の梢外で検出された銅戈は中細形銅戈 c 類に近く、須玖岡本 D 地点出土の銅戈が中細形銅戈 b 類に分類される（後藤 1981・岩永 1982）。また吹上 4 号甕棺墓（大分県日田市）出土の銅戈のように幅の広い内をもつ細形銅戈 II 式 b 類が中期後半の立岩式（古段階）の甕棺墓に伴うことが確認されている（註 1）。細形銅戈 II 式 b 類は、型式としては細形に分類されるが、幅広の内端部を繋ぎで断ち切るなど、中期前葉までの銅戈にみられない調整技法から中細形銅戈と時期的に重なる型式として捉えることができる。

銅戈の埋納時期については、中細形銅戈 a 類の埋納時期については、大板井遺跡（福岡県小郡市）の埋納容器の型式が明らかでないため現状では決め手を欠いていた（片岡 1984）。中細形銅戈 b・c 類については、三並ヒエデに伴う土器型式が参考になる。伊崎俊秋は三並ヒエデの銅戈群が円筒形土器に埋置されていたことを確認し、同系統の上器との比較から中期末段階における埋納行為を導いた（伊崎 1999）。

中期末段階とする編年觀は、甕棺の型式では立岩式（新段階）に相応する。さらに埋納行為の開始を若山遺跡（福岡県小郡市）の多鉢細文鏡の埋納容器の型式に求めるなら（速水 1994）、中細形銅爻a類の埋納時期は中期中頃段階と推定できる。

上記をふまえると、114 次調査出土の石製鋳型が使用された時期は、中細形銅爻a類もしくはb類とされる資料は、中期前葉の中頃に近い時期に比定できる。また中細形銅爻c類は、中期中頃から後葉にかけての時期を充てることができよう。

つぎに銅矛の中子について、銅矛は、細形、中細形、中広形、広形の4型式に大別されるが、それら時系列にそった型式変化に、長大化しない短身銅矛（柳田 2003）が系譜として絡んでいる。銅矛を铸造する際には袋部に柄を挿入する空間を確保するため砂と精良な粘土を混ぜ合わせた中型が置かれた。中型は、砂型や真土型、中子などとよばれるが、ここでは中子とよぶ。

銅矛の袋部端には、巾木とよばれる中子を保持する部分の形状が反映される。細形銅矛の場合、鋳型の巾木部分に湯道が彫られた場合、袋端部の見通しは、杏仁形の外側に微妙な膨らみとして認められることがある。一方、巾木の内側に湯道がある場合、杏仁形の袋端部の見通しの内側に微妙な膨らみが観察されることがある（武末 2001）。この場合は巾木部の長軸と短軸にそって各2ヶ所の湯道をもつ中子が置かれたことを示している。この巾木部の中子は杏仁形の見通しにたいしてX字状に置かれたことになる。今回の調査で出土した真土型で注目されるのは、巾木部の中子である。類例は春日市や筑前町で出土している。北部九州において鋳型、とくに外型の素材は、石製が一般的だったが、近年柳田康雄によって、東小田峯出土の土製鋳型（外型）の存在が明らかにされた（柳田 2009、柳田・平畠 2009）。東小田峯の巾木部の中子は、長短の辺が交差する十字を呈しており、杏仁形の袋部の見通しにたいして十字状に置かれたことを示している。こうして巾木部の中子は、設置のあり方によって十字型とX字型の2種に大別することができる。中子の多くは、着柄が前提であった中細形段階までは铸造後に取り出された。武器形祭器となる中広形以降になると、中子は取り出されず銅矛本体にのこされる。巾木部を除いて、袋部下端からわずか内側に凹む位置に中子がおさまっている例は多い。

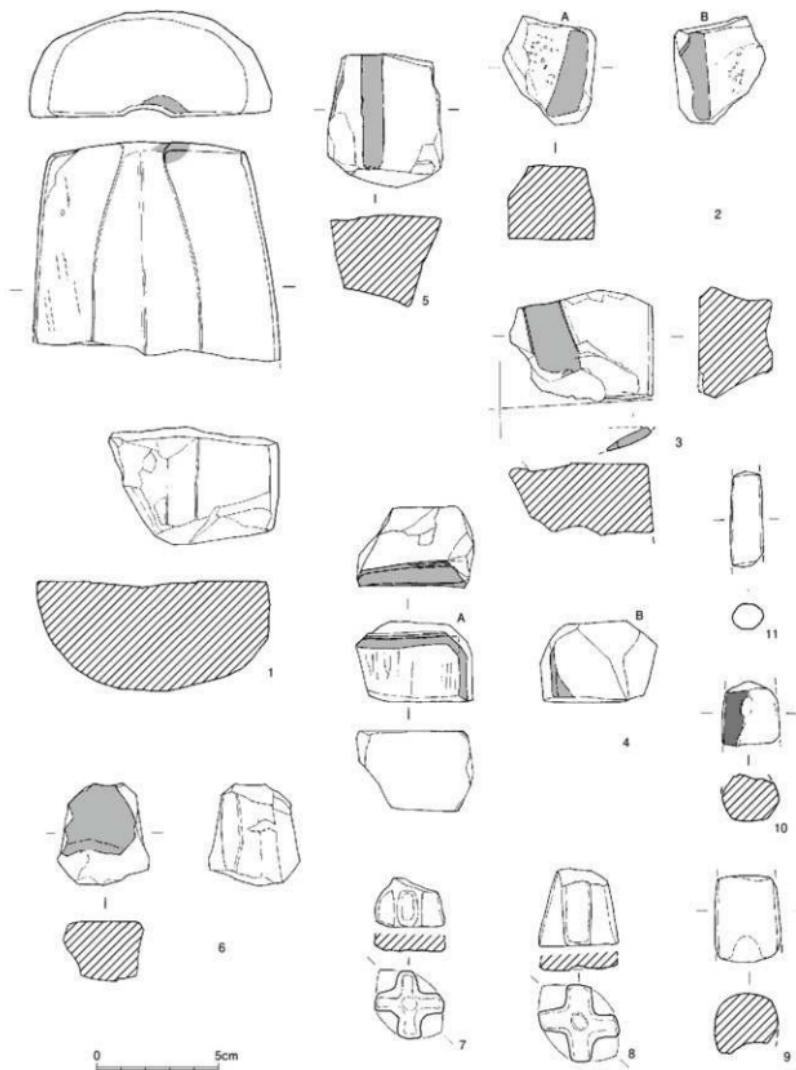
青銅器の工房が集中した春日市に隣接する笠抜遺跡の野水遺構では、铸造遺構が検出された上流に位置する御陵遺跡（坂田 2004）側から流れ込んだとみられる中子 10 点が採取された（常松 2003）。それらのなかには、大形の中子や銅矛そのものの破片が含まれていたことから、中広形銅矛に供された中子には、鉄直しなどの理由で矛が破碎されて、取り出されたものがあると考えられる。

中子の取出しが前提となっている中細形以前の銅矛では、袋端部の見通しは、杏仁形を呈している。中広形銅矛の中子は、原則的には取り出さないが、袋下端部には丁寧な研磨が加えられる。広形段階になると袋端部の縦横の幅は中広形銅矛の倍近い法量になる。広形銅矛の鋳型の合わせ目に流れ込んだ青銅は鉄放しの状態となるため、袋下端部にかけても隆起部を形成する。また袋端部見通しに巾木部の中子の形状を反映したものもある。銅矛袋部の中子 3 点については、断面形が円形に近く、時期が降るにつれて扁平に型式変化する傾向が指摘されている（註 2）。そのように理解すれば、中子は中細形以前の銅矛に供されたと推定される。これによって調査地において、中期中葉のやや前半に近い時期から中期後葉にかけて青銅器の铸造が行われたと推定される。

註 1 小文では甕棺の編年について前期末から中期段階を金海式（古段階）、金海式（新段階）、城ノ越式、汲田式、須玖式、立岩式（古段階）、立岩式（新段階）の 6 の様相として捉える（常松 1997）。

註 2 春日市教育委員会の平田定幸氏のご教示による。

参考文献は紙数の関係で割愛した。



青銅器铸造関連遺物実測図（1/2）

付. 2 那珂遺跡群第114次調査出土鋳型の保存科学的調査

比佐陽一郎（福岡市教育委員会文化財整備課）

1.はじめに

那珂遺跡群は隣接する比恵遺跡群とともに、いわゆる『魏志倭人伝』に記された奴国に比定される。その根拠としては弥生時代の資料が豊富に発見されることが挙げられるが、中でも当時の宝器である金属器やガラスの製作痕跡は、更に南に延びる南区の井戸B遺跡や春日市須玖の各遺跡も含め、他地域を圧倒する量と種類が見つかっている。

今回報告されている那珂114次は、隣接する23次調査地点も含めると、青銅器の鋳型や坩堝（取瓶）の類が集中する地域である。114次調査では計6点の鋳型が出土し、その考古学的属性については本文で詳しく触れているが、ここではその中の1点に注目し、保存科学的な調査を試みた。保存科学的調査とは、本来、遺物の保存処理に際して行われる自然科学（理化学）的手法を援用した調査を指し、非破壊を原則とする。X線や赤外線などの可視領域外の電磁波を用いた観察や分析、また顕微鏡による微細領域の観察などによって、不可視領域の情報が得られる。結果、腐蝕や劣化の状態など資料の保存に関する内容はもちろん、材質、製作技法、更には产地など、考古学的に有益な情報も少なからず取得されることから、考古科学的調査とも呼ばれる。

2. 調査に至る経緯

過去、筆者は、特に鋳型の器物が鍛込まれた範囲が黒く変色したものについて、その要因を探ることを目的として調査を行ってきた。考古学的に鋳型の観察が行われる場合、黒色化が使用の痕跡と見る説と、離型剤などの塗布によるものという説があるが、仮に後者があり得るならば、黒色化＝使用痕跡という判断が成り立たないことになり、その確認を試みるものであった。北部九州における弥生時代の鋳型は、基本的に石製である。まず、福岡市内出土の石製範を対象として、黒色化の状況によって、鋳造範囲内に変色の無いものをA類、少しでも変色が見られるものをB類とし、更にB類を、変色の度合いが少なかつたり部分的であったりする1類と、変色が鋳造範囲の全体と湯口を含む部分に及んでいる2類、観察対象資料には無かつたが、鋳造範囲以外、幅置部分まで変色が及んでいるものを3類として想定。B-3類を除く資料それぞれについて、黒色化部分の蛍光X線分析やX線回折分析を行った。その結果、無変色のA類から鉛や銅など鋳造作業に関連する元素が検出されるものは無かつたものの、変色が見られるB類では、元素の検出と黒色化の分類との間に明確な相関関係は見いだせず、X線回折分析でも黒色化そのものの原因は捉えることができなかった。つまり、黒色化した部分の蛍光X線分析では、微量な鉛や銅などの鋳造作業を経たことで残留したと見られる元素が検出される場合があるものの、これが黒色化が強いからといって必ずしも認められるものではなく、逆に黒くてもこれら元素が検出されない場合さえある。ただ、詳細に観察すると、黒色化は石材表面のみで作用しているものではなく、多いものでは数mm程度も、内部まで染みこんでいるようなものも見られる。これらは何かが塗布されたものではなく、鋳造実験の結果から見ても、鍛込みに伴う変色であろう事は推測される。それでも、科学分析によるメカニズムの解明には至っておらず、変色が使用痕跡であることの証明は得られていない。

ただ、観察の中で注目されたのは、一部の資料で見られた、黒色化した鋳造範囲の中に埋土とは質感の異なる土状の付着物である。これらを微小領域用の蛍光X線分析装置で分析したところ、観察された数例で例外なく鋳造関連元素が他より顕著に表れたほか、カルシウムが特徴的に検出されたのである。塗型剤など、鋳造に際して塗布された物質の存在が想定された¹¹⁾。

その後、市外の資料にも注目し、黒色化が顕著な福岡県久留米市寺德遺跡出土の鏡范を対象とした調査も行った。この資料は出土後、軽く水洗いされた程度であったため、鏡背范の文様線刻内に埋土である細かい泥が残っていたが、同時に、その下には、やはり鉛や銅が染みこんだ、カルシウムを主体とする付着物が残されていて、一昨年度に調査を行った一群の石製范と共通の要素が認められた。しかし類例は増えたものの、X線回折分析でも非破壊では付着物が微量で、この物質の同定には至らず、課題は多々残された。古代においてカルシウムが関与しそうな物質としては、胡粉に類するような貝殻を粉にした炭酸カルシウム (CaCO_3) や、骨を粉にしたリン酸カルシウム ($\text{Ca}_3(\text{PO}_4)_2$) が想定される²²⁾。実際、幾つかの例では付着物部分で、蛍光X線分析によってリンが強く現れるものもあり、後者の可能性もあるが、現時点では推測の域を出ない²³⁾。

3. 調査の内容とその結果

対象とした資料は戈の鋳型である。これまでの鋳型と違うのは、資料が出土後、未洗浄の状態で調査が行われた点である。過去の調査ではいずれも、出土後、水洗いなどの洗浄が行われ、実測など考古学的な調査が済んだ資料を対象としてきたため、鋳型表面に残された情報の一部は、埋土と共に洗い流されてしまっている恐れもある。しかし、今回、筆者が行ってきた過去の調査を知った発掘調査担当者から、出土後、何も手を付けていない状態の鋳型を調査する機会をいただいた。

資料は、縦 4.5 × 横 5.8 × 厚さ 2.9(cm) の破片で、一つの面に戈の刃部と見られる部分が残る。反対面は大きく不規則な凸凹があり、鋳造に使用された様子は見られず、側面 4 面の内 3 面は、破損により破断面となっている。表面には全体に埋土が 1 ~ 2mm の厚さで固着している。一部、発掘調査中に破損したと見られる、新鮮な破断面から覗く石材は、北部九州で出土する他の弥生時代石製范と同じ石英長石斑岩とよく似た質感である。

鋳出された器物の範囲は明瞭な黒色を呈しているが、それ以外の部分でも埋土のため観察が阻害されながらも、灰色や黒といった石材や埋土とは異なる色調を呈する部分が各面において見られた。これは鋳型として使用された面のハバキ部分はもちろん、本来の表面を残している側面部、更に破断面となった側面や裏面でも見ることができる。細部を確認するために、実体顕微鏡による観察を行ったところ、まず黒色化した部分では、これまで見てきたものと同様に石材自体が黒変しているのと、それ以外に、予想以上に多くの黒色物質の付着が認められた。また、この範囲に付着した埋土を一部剥がすと、剥がした土の裏側には粉状の黒色物質が貼り付いていた。

そこで次に、これまでの調査と同様、表面の蛍光X線分析を行った。この方法は試料表面にX線を当て、含まれる元素から生じる、その元素特有のエネルギーを持つ二次X線（蛍光X線）を検出器で捉え、ピークとして表すものである。どのエネルギー値（あるいは角度）においてピークが出現するかによって、対象試料に含まれる元素が分かると共に（定性分析）、ピークの高さによってその量を計ることもできる（定量分析）。装置は大型資料用波長分散型（以下 WDX とする）と、微小領域用エネルギー分散型（同 EDX）の二種類を使用した。これらは分析機構の違いの他に、測定領域が前者は 20mm φ、後者は 0.3mm φ という相違がある。前者は広範囲のデータを平均的に捉えることができる反面、局部的な元素偏析の確認などには不向きである。後者はその逆の特性を有しており、対象部分の状況に応じて使い分けこととなる²⁴⁾。

EDX では、装置の特性を活かし、特徴的な部分を選択した分析を行った。鋳込まれた器物の黒色化した範囲に付着する黒色物質からは、アルミニウム (Al)、珪素 (Si)、カリウム (K)、カルシウム (Ca)、チタン (Ti)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe) といった元素が検出される。特に鉄が非常に強く、次に、珪素、カル

シウム、アルミニウムといった順にピークが低くなる。これらの元素は、広く粘土鉱物などに一般的に含まれる元素であり、そのピーク高比も土壤などを分析したものとよく似た状況を示している。分析対象が黒色の塊であることから、炭素(C)を主成分とすることが推測されるものの、本装置では炭素は検出不可能のため、この分析ではそれを確認することはできない。その様な中、これまでの調査では、黒色部分ではカルシウムが他の部分に比べて多く含まれる傾向が示されているが、確かに当該箇所でも比較的明瞭に検出されている。ただし、今回はリン(P)は検出されていない。また、上記以外の元素として、銅(Cu)が低いながらも明瞭なピークとして現れ、鉛(Pb)も主線(L_α線)部分に僅かな突出が認められる。これらは何らかの鋳造痕跡を示すものとして注目される。別の黒色部分では、珪素やカリウムが強く現れていて、石材の元素が捉えられたものと考えられるが、カルシウムは石材そのものを分析した場合よりは、若干強めに現れている。ここでも、銅、鉛は同じように検出されている。また、黒色部分に付着した埋土を剥がし取った際に、その裏側に付着してきた黒色の粉を、埋土の塊とともに分析対象としたが、カルシウムや鋳造関連元素は思ったほど強く検出されなかつた。

合わせて、この剥離試料については、走査電子顕微鏡(SEM)による微細範囲の元素分布調査(マッピング)も試みた。SEMに付属する蛍光X線分析装置は、電子線で蛍光X線を励起するもので、炭素も辛うじて分析可能な元素に含まれる。結果、黒色の範囲と炭素、カルシウムの分布は、同じ挙動を示している。これらは土壤に起因すると見られる珪素やアルミニウムの分布を補完するように広がっており、やはり、黒色の付着物にカルシウムが強く関わっている様子が今回も確認された。

この他、器物の範囲外のハバキ部分を対象としたEDX分析では、ここでも微弱ながら明瞭な銅、鉛のピークが確認されており、鋳造の影響が鋳造範囲外にも及んでいることが覗える。

これを踏まえ、全体の傾向を捉えるため行ったWDXによる分析では、全面をくまなく調査したが、対象とした9カ所の分析対象箇所全てで、鋳造関連元素の検出が、ほぼ同じような傾向を示している。つまり、鋳型として用いられた面以外にも、本来の表面が残る側面、鋳型としての機能が想定できない裏面、更には明らかな破断面でさえも、銅、鉛が明瞭なピークとして検出されているのである。鋳造に関係する面や、それ以外でも本来の表層が残る面では、湯がはみ出すなどして、これら元素が検出されることはあるまいことではない。しかし、破断面からも検出されるのは、理解不能であった。

そこで、解釈の糸口をつかむため、表面埋土のクリーニングを行った。この作業も、顕微鏡を用い、表面の情報が不用意に失われないように配慮し、筆に純水を付けて埋土と見られる土のみを少しづつ除去している。その結果、事前の顕微鏡観察などでもある程度は見えていたものの、破断面を中心に鋳型の広い範囲が、黒色に変色していた。ハバキ部分や側面では、変色が小さな範囲で散在するが、特に上下の側面、裏面の一部は広範囲で変色が見られる。この変色は顕微鏡で見る限り、器物が鋳込まれた部分の変色と同じような状況を呈しており、とすれば、注湯時に鋳型が破損するなどして、破断面にも湯が接した事になるのであろうか。

試験的に、クリーニング後にも、側面についてWDXの分析を行ったが、クリーニング前と同程度、銅、鉛が検出されており、このことからも、これら元素が埋土に含まれるものではなく、鋳型表面から派生したものであることが裏付けられよう。

4.まとめ

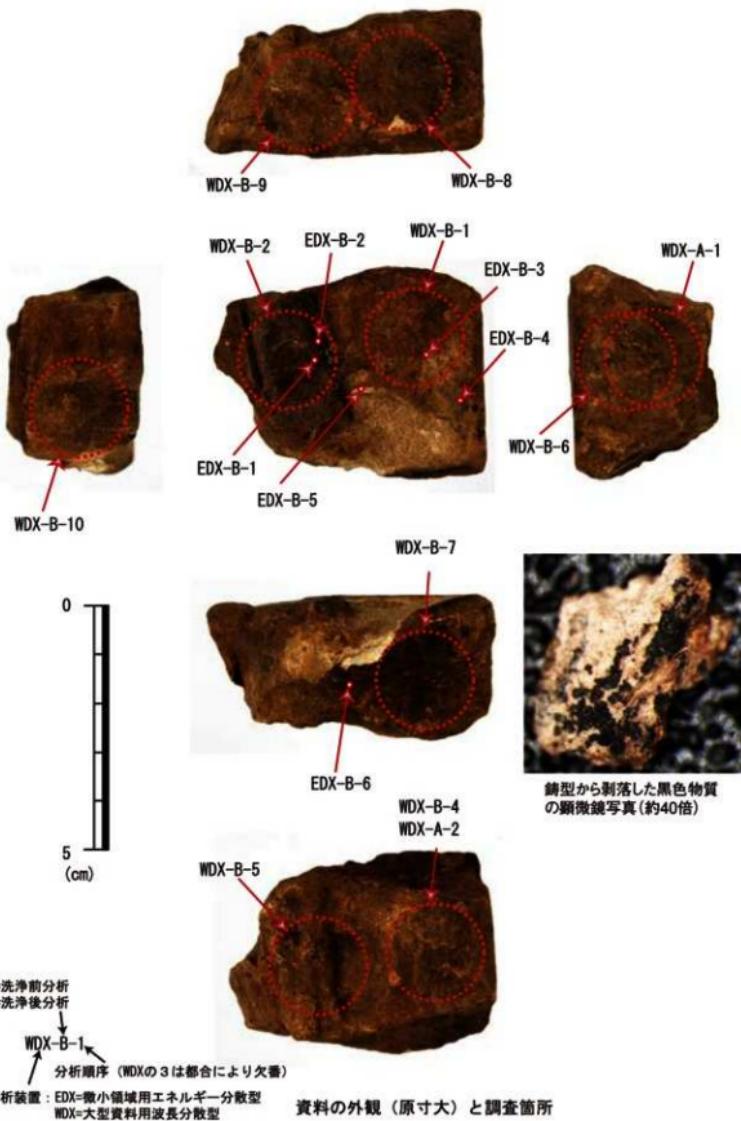
今回、那珂114次調査で出土した鋳型を、出土後そのままの状態で保存科学的調査を行った結果、鋳造器物の範囲において、洗浄後の資料よりも良好に黒色物質の付着が確認され、分析によって炭素とカルシウムの存在が認められた。ただ、リンは検出されておらず、やはり物質の同定は行えていない。

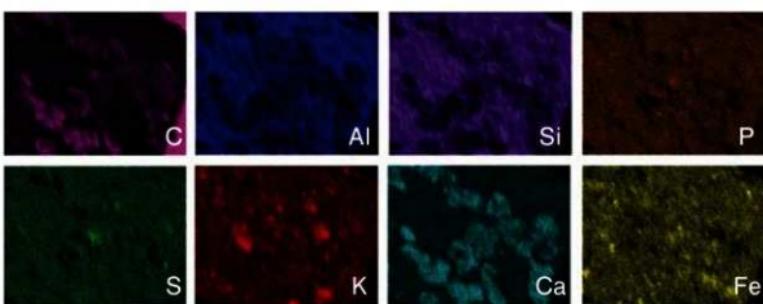
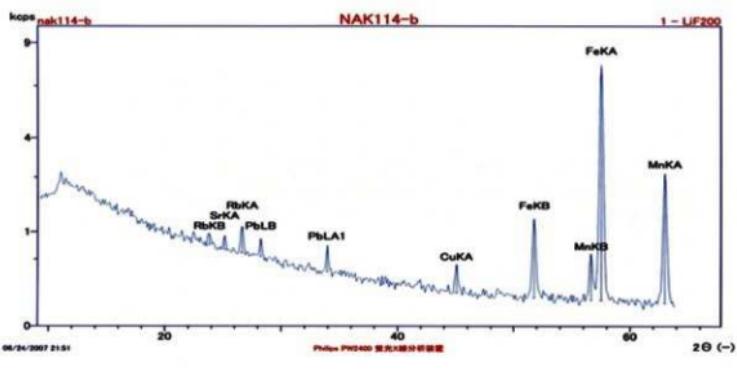
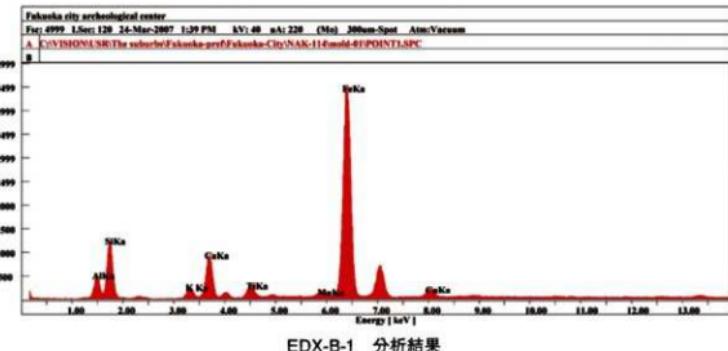
また、本資料では、鋳造に用いられた範囲以外でも黒色化が見られ、この部分で銅や鉛といった鋳造に関連する元素が明瞭に認められた。過去見てきた中にもこの様な例は無かつたと記憶している。特異な資料を見ることもできる一方、これまで、資料の洗浄前から顕微鏡観察などを行い、それに基づいたクリーニング作業が行われた事例は、おそらく無いと思われる。過去の事例において、元々痕跡として無いのか、洗浄で失われたのかを、現在残されている資料から検証することはできない現状では、その位置付けが困難である。今後、鋳造範囲外でも関連元素が残る事例が見つかるのか、その頻度がどの程度か見極めるためにも、情報の取得や保全を優先し、安易な洗浄は避けるべきであると考える。

考古資料は、そのままでは黙して語らない。歴史の復元には、彼らに語らせることが不可欠であり、拷問や誘導尋問ではない、適切且つ十分な事前調査を今後も行っていきたい。

註

- 1) 比佐陽一郎 2005 「鋳造関連資料における使用痕跡の保存科学的調査(予察)」『鏡範研究Ⅲ』奈良県立橿原考古学研究所・二上古代鋳金研究会
- 2) 古代中国では骨粉は漆器の下地に使用されており、その技術は秦～漢代まで遡ることが知られている。岡田文男 1995 『古代出土漆器の研究』顕微鏡で探る材質と技法 京都書院
- 3) 比佐陽一郎・江島伸彦 2007 「福岡県久留米市寺德遺址出土鏡範の文物保護調査」『肅國故城出土鏡範和東亞的古鏡－肅都臨淄：漢代銅鏡製造中心國際學術檢討會論文集－』日本奈良県立橿原考古學研究所
- 4) 蛍光X線分析装置の仕様と作業条件は次の通り。
エネルギー分散型微小領域蛍光X線分析装置(エダックス社製/Eagle μ probe)／対陰極：モリブデン(Mo)／検出器：半導体検出器／印加電圧：40kV・電流：任意／測定雰囲気：真空／測定範囲 0.3mm ϕ ／測定時間 120 秒
波長分散型蛍光X線分析装置(フィリップス社製/PW2400)／対陰極：スカンジウム(Sc)／印加電圧・電流：30～60kV・50～100mA／測定雰囲気：真空／測定範囲 20mm ϕ ／分光結晶：フッ化リチウム・ゲルマニウム・PET・金属多層累積膜／検出器：シンチレーション計数管・ガスフロー検出器





剥離した黒色物質の電子顕微鏡による元素分布分析結果

付 .3 那珂遺跡群第 114 次調査井戸出土の動物遺存体について

福岡市教育委員会埋蔵文化財第 1 課 屋山洋

那珂遺跡群第 114 次調査は公園建設に伴う調査で、7,752 m²というまとまった面積の調査である。調査の結果、弥生時代中期後半～後期の集落・古墳時代前期（古墳・道路）、古墳時代後期（方形区画溝・井戸・竪穴式住居）、古代（区画溝・井戸・竪穴）、中世（溝等）の遺構が出土した。特筆すべき遺構としては、直角に曲がる区画溝と、溝と同じ方位の柱穴列があり、溝からは瓦が出土し、7世紀代の官衙遺構と考えられる。周辺の調査では、北側の比恵遺跡群で 6 世紀後半以降に大型倉庫群が作られるようになり、那珂遺跡群においても溝や掘立柱建物群と共に瓦が出土しており、これらは『那ノ津官家』や那珂郡（評）衙などの官衙遺構に推定され、この周辺が 6 世紀末～7 世紀中頃において那珂郡の中心であったことが判る。

今回報告する動物遺存体は古代（奈良時代）の井戸からまとまって出土した。掘り下げた土の水洗選別等は行っていない。動物遺存体は出土時には大きな破片であったが、長期間地下水につかっていいたため、取り上げ後にビピアナイトが析出して細片化が進んだ結果、同定できたものは少ない。また骨表面の遺存状況も悪いため、切痕や火熱の影響の有無など表面的な観察はできなかった。

同定できた骨はいずれもウマの骨である。出土した部位は肩胛骨から先の四肢骨に限られる。ビピアナイトにより細片化した骨についても、四肢骨から剥がれ落ちた破片がほとんどで、ウマの椎骨や寛骨、肋骨、頭蓋骨、歯などの破片は出土していない。また、成長度が観察できた 001、003、007、011 はいずれも骨端部の化骨化が完了した成獣である。出土状況としては四肢骨のみが出土していることから、埋まりかけた井戸を墓として利用したのではなく、ウマを解体して皮や肉を取った後に井戸へ廃棄したもの、もしくは井戸を埋める際の祭祀と思われる。祭祀ではウシやウマの頭蓋骨を使用することが多いとされ、四肢骨を祭祀に使用したと考えられる例は少ないので、解体後の廃棄とすると肋骨や椎骨等を別の場所に廃棄する必要はないと思われる。それとも肉の多い胴体は他所に運んだものであろうか。

那珂遺跡から出土したウマの骨は、99 次調査で 6 世紀中頃の前方後円墳の周溝からウマの歯が出土している。また 22 次調査ではウマの全身骨を埋めた長径 155cm の土坑が出土している。22 次調査出土のウマは確実な時期は不明であるが、調査区内では 6 世紀後半と中世前半の遺構が多く確認されており、ウマ出土土坑は他の土坑と違って青磁片などが出土しておらず古代まで遡る可能性がある。死後に解体される個体と埋葬される個体があり遺体の取り扱い方が異なるが、今後時期が明確な調査事例が増えることにより、時期差なのか、他の理由であるのか判明することを期待したい。

那珂遺跡群第 114 次調査出土動物遺存体一覧

番号	遺構番号	大分類	小分類	部位名	茲	部分 1	部分 2	成長度	切痕	火熱	備考	時代
001	3053 下層	哺乳類	ウマ	肩胛骨	左	近位部	関節窩欠損	骨化済み	不明	不明	ビピアナイト析出 遺存不良	古代
002	3053 下層	哺乳類	ウマ	肩胛骨	-	近位部	近端欠損	不明	不明	不明	ビピアナイト析出 遺存不良	古代
003	3053 下層	哺乳類	ウマ	脛骨	右	遠位端	後背面欠損	骨化済み	不明	不明	ビピアナイト析出 遺存不良	古代
004	3053 下層	哺乳類	ウマ	桡骨	-	幹部のみ		不明	不明	不明	ビピアナイト析出 遺存不良	古代
005	3053 下層	哺乳類	ウマ	大腿骨	-	幹部遠位側	外側窩周辺のみ	不明	不明	不明	ビピアナイト析出 遺存不良	古代
006	3053 下層	哺乳類	ウマ	大腿骨	-	外側窩周辺のみ		不明	不明	不明	ビピアナイト析出 遺存不良	古代
007	3053 下層	哺乳類	ウマ	上腕骨	右	遠位部	遠位端関節面欠損	骨化済み	不明	不明	ビピアナイト析出 遺存不良	古代
008	3053 下層	哺乳類	ウマ	桡骨	-	幹部背面前小片	尺骨遠端付着	不明	不明	不明	ビピアナイト析出 遺存不良	古代
009	3053 下層	哺乳類	ウマ	上腕骨？	-	幹部のみ			不明	不明	ビピアナイト析出 遺存不良	古代
010	3053 下層	哺乳類	ウマ	桡骨？	-	幹部のみ			不明	不明	ビピアナイト析出 遺存不良	古代
011	3053 下層	哺乳類	ウマ	桡骨	左?	近位端のみ		骨化済み	不明	不明	ビピアナイト析出 遺存不良	古代
012	3053 下層	哺乳類	ウマ	上腕骨	-	幹部のみ		不明	不明	不明	ビピアナイト析出 遺存不良	古代

付 .4 福岡市那珂遺跡群第 114 次調査出土の近世人骨調査報告

高椋浩史・米元史織・中橋孝博（九州大学大学院比較社会文化学府）

1. はじめに

日本人の骨格形質の研究において、近世以降の資料を対象とした研究が近年盛んに行われている。発掘調査による資料の増加によって、近世から現代に至る形質変化が詳細に検討され、都市と地方、階層性等の違いによって人々の骨格形質にも差異が見られることが明らかになっている。例えば、筑前地域においても、博多の都市部から出土した天福寺近世人と当時の街道宿場町であった原田近世人との間に形態的な差異があることが指摘されている（中橋・土肥 2006）。このような違いの背景には、食生活や住環境などの多岐にわたる要因が考えられる。このような問題の解決のためには、やはり分析対象資料の充実が不可欠であろう。

那珂中央公園建設に伴う那珂遺跡群第 114 次調査において、近世後期に該当する甕棺墓から人骨が出土した。那珂遺跡群周辺の地域は福岡市博多区に所在し、現在は都市部に位置しているものの、近世は福岡城下の近郊に位置する一村落であった。このような都市近郊の住人の骨格形質を把握することは、近世における都市と地方の形態的差異を考える上で重要であろう。今回、那珂遺跡群出土の近世人骨資料を調査する機会を得たので、以下に報告する。

2. 資料と方法

【資料】

調査対象資料は那珂遺跡群第 114 次調査によって、SK-3075、SK-4016、SK-4017 から出土した人骨三体である。図 1 に各個体の残存状態を示している。甕棺の内部に土が混入していたために、全体的に保存状態はやや不良である。

表 1 分析資料一覧

性別	年齢	特記事項
SK-3075 男性	老年	左桡骨と手根骨癒合、仙腸関節癒合
SK-4016 女性	老年～	前耳状溝
SK-4017 男性	老年	

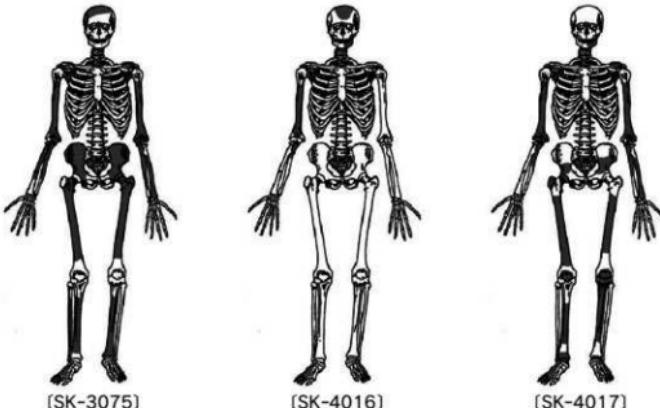


図 1 人骨の保存状態

【方法】

年齢判定に際して、歯牙の咬耗については柄原（1957）の方法を、寛骨の耳状面についてはLovejoy（1985）の方法をそれぞれ用いた。また、性判定には一部、中橋（1988）の方法を援用した。

人骨の計測は主にMartin-Saller（1957）と馬場（1991）に従った。脛骨については一部、Vallois（1938）の方法を用いた。

3. 分析結果

【SK-3075 号人骨】

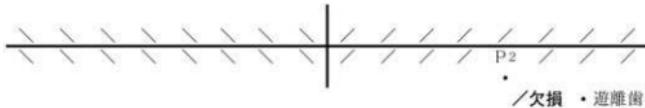
大坐骨切痕が狭く、乳様突起・外後頭隆起とともに発達していることから、男性と推定される。また、仙腸関節が癒合していることから老年と考えられる。

保存状態が悪いため頭蓋形態の詳細は不明であるが、上面観を見ると長頭あるいは短頭に大きく偏る傾向は認められない。次に、四肢骨について述べると、上肢・下肢ともに発達した傾向は認められなかった。上肢の各計測項目を見ると、どの比較集団の平均値よりも低いことがわかる。骨体の各筋付着部を見てても発達していなかつたが、左鎖骨の大胸筋付着部域に肥厚が認められ、また相対的に上腕よりも前腕の方が発達している。下肢については大腿骨のみ計測可能であったが、その断面径の値を見ると、どの項目も低いことがわかる。中央断面示数に注目すると、相対的に骨体横径が長く、柱状性は見られない。また、脛骨のヒラメ筋線も発達していなかつた。

尚、左側橈骨と舟状骨および月状骨が癒合している。X線で確認したところ、骨折線等の異常は見られなかつた。癒合した原因については今後検討すべき課題であるが、少なくとも手首の運動に何らかの障害があったことがうかがえる。

【SK-4016 号人骨】

乳様突起と外後頭隆起が発達しておらず、また発達した前耳状溝が確認できることから女性と推定できる。以下に残存歯牙を示している。



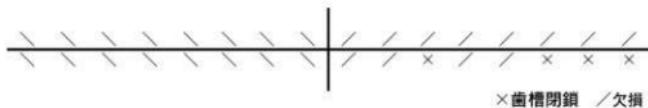
下顎左側小白歯のみが残存しており、その咬耗度は柄原分類のⅠ^ocである。また、右寛骨耳状面下部にリッピングが見られることから、熟年以上と推定できる。

保存状態が悪く、頭蓋形態の詳細は不明である。ただし、残存していた後頭骨が非常に小さく、また下頸骨も比較的小さいため、頭蓋全体のサイズは小さいことが推定できる。四肢骨のうち詳細な観察が可能であったのは右上腕骨のみであった。その断面径と各筋付着部を見ると、発達は弱かつた。尚、上述したように右寛骨に前耳状溝が確認できることから経産婦と推定できる。

【SK-4017 号人骨】

乳様突起と外後頭隆起がやや発達しており、大坐骨切痕が狭いことから男性と推定できる。歯が脱落し、歯槽が閉鎖している部分が確認できる。また、耳状面にmacroporosity (Lovejoy et al 1985) が見られることから老年と推定できる。

計測可能であったのは上肢のみであった。当個体もSK-3075号人骨と同様に、発達した傾向は認められないものの、筋付着部は相対的に上腕よりも前腕の方が発達していた。下肢については保存状態が不良で観察が困難であったが、少なくとも脛骨のヒラメ筋線も発達していなかつた。



4. おわりに

以上、那珂遺跡群第114次調査出土の近世人骨についての調査結果を記した。残念ながら、保存状態が悪く、詳細な形態的特徴を把握することができなかった。調査結果を総括すると以下の通りである。

- ・出土した人骨三体ともに非常に高年齢であった。
- ・SK-3075号人骨は左側腕骨と手根骨が癒合していたことから、左手首の運動にある程度の障害があったことがうかがえる。
- ・三個体ともに四肢はあまり発達していなかつたが、相対的に上腕よりも前腕の方が発達していた。
- ・SK-4016号人骨は経産婦である可能性が高い。

三個体とも非常に高年齢であることは、当時の寿命あるいは栄養状態を把握する上で有益な情報を提供してくれる。過去帳などの文献記録の研究から、近世の人々の中には70歳あるいは80歳以上の長寿の人が確認されている。調査を行った三個のうち、少くともSK-3075号人骨は70歳以上の年齢に達していると推定できる。当時の人々がどれくらいの寿命であったのか、他の遺跡の資料も含めて考える必要がある。また四肢の発達の弱さについては、おそらく当時の栄養状態や生業形態が関与している。しかしながら、保存状態や資料数の問題から、人骨資料のみではそれらを復元することには限界がある。考古資料や文献史料による見知を総合して当時の集団の実態を検討していく必要がある。

謝辞

調査報告を行うにあたり、福岡市教育委員会の諸先生方に多くの便宜をはかっていただきました。記して感謝を申し上げます。

引用文献

- 阿部英世（1955）：「現代九州人大腿骨の人類学的研究」、人類学研究2
- 馬場悠男（1991）：「人体計測法 II 人骨計測法」、人類学講座別巻1、雄山閣出版
- Lovejoy,C.Owen,R.S.Meindl,R.Mensforth, and T.J.Barton(1985 : Multifactorial Determination of Skeletal age at Death. American journal of Physical Anthropology 68 : 1-14
- Martin-Saller (1957) : Lehrbuch der Anthropologie. Bd. I. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart
- 中橋孝博（1987）：「福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨」、人類学雑誌、95 : 89-106
- 中橋孝博（1988）：「古人骨の性判定法」、日本民族・文化の生成 永井昌文教授退官記念論文集、六興出版
- 中橋孝博（1991）：「福岡市上月隈遺跡出土人骨（弥生・近世）」、上月隈遺跡、福岡市教育委員会
- 中橋孝博（1993）：「福岡市席田青木遺跡出土の弥生・近世人骨」、席田青木遺跡、福岡市教育委員会
- 中橋孝博・土肥直美（2008）：「原田第1・2・40・41号墓地出土の近世人骨」、原田第1・2・40・41号墓地 下巻、筑紫野市教育委員会
- 岡崎健治・重松辰治・舟橋京子・石川健・田中良之（2004）：「稻荷谷近世墓地群から出土した近世人骨」、国道502号改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、竹田市教育委員会
- 柄原 博（1957）：「日本人歯牙の咬耗に関する研究」、熊本医学会雑誌、31 : 607-656
- 専頭時義（1957）：「現代九州日本人上腕骨の人類学的研究」、人類学研究4 九州人下腿骨の研究、人類学研究2
- Vallois H.V. (1938) : Les methodes de mensuration de la platycnemie: etude critique. Bulletin of Society of Anthropology

表2 上肢骨計測値(男性)

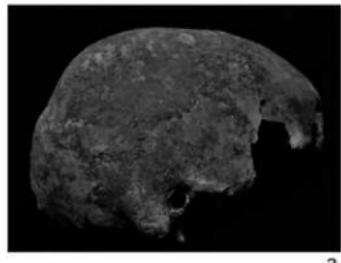
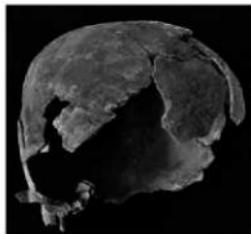
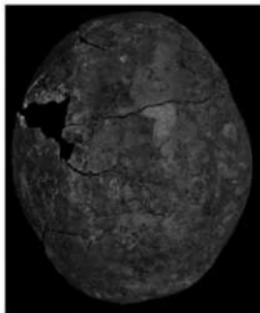
上腕骨	那珂(114次) SK-3075		天福寺 ^① SK-4017		上月隈 ^② 近世		麻田青木 ^③ 近世		原田 ^④ 近世		船荷谷 ^⑤ 近世		九州 ^⑥ 現代	
	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
	1 全長	-	-	19	296.9	6	296.8	18	296.6	17	295.2	6	293.2	106
2 中央最大径	-	-	15	293.3	3	288.0	16	292.6	14	290.1	8	287	106	290.6
3 中央最小径	21	-	20	22.9	8	24.3	30	24.1	26	22.8	6	22.7	106	21.9
4 骨体最小周	17	-	20	17.7	8	18.1	30	18.6	26	17.6	6	18.5	106	16.9
5 中央周	58	-	21	63.8	8	66.9	28	67.1	42	17.6	16	62.3	106	61.8
6 骨体断面示数	61	-	20	66.5	8	69.6	30	70	26	67.8	6	64.5	106	63.7
7/1 骨体断面示数	81.0	-	20	77.6	8	74.9	3	77.3	17	77.1	6	81.8	106	79.1
7/1 長厚示数	-	-	17	21.3	6	22.5	17	22.6	26	21.4	6	21.1	106	20.9
橈骨														
1 最大長	-	-	12	228.5	4	226.8	19	231.4	16	223.7	5	219.6	64	219.9
2 橈橈長	-	-	11	212.2	2	201.0	14	215.9	18	211.3	7	207.7	64	208.2
3 最小周	38	36	16	42.2	6	45.3	26	44.9	32	43.9	12	39.8	63	40.1
4 骨体横径	16	-	16	17.5	7	18.3	27	18.3	35	17.1	14	7.5	63	16.0
4a 骨体中央横径	13	-	14	17.5	4	17.5	22	16.9	-	-	5	15.2	63	15.2
5 骨体矢状径	13	-	16	12.6	7	13.4	27	13.2	35	12.3	14	12.2	63	11.7
5a 骨体中央矢状径	11	-	14	12.6	4	13.3	22	13.3	-	-	5	12.2	63	11.9
5/2 長厚示数	-	-	11	19.8	2	23.9	14	20.4	17	20.4	6	18.9	61	20.4
5/4 骨体断面示数	81.3	-	15	72.0	7	73.5	27	72.6	35	72.1	14	70.0	60	71.4
5a/4a 中央断面示数	84.6	-	14	80.3	4	76.3	22	78.8	-	-	5	80.3	40	77.9
尺骨														
1 最大長	-	-	11	244.6	4	237.8	15	249.8	15	240.7	6	236.2	62	236.2
2 橈橈長	-	-	11	214.6	3	204.7	13	222.6	19	212.5	11	206.8	64	209.2
3 最小周	-	-	12	37.5	3	39.7	18	40.4	28	34.7	12	34.8	65	35.8
11 矢状径	13	12	17	13.1	7	13.9	30	13.6	38	12.9	17	13.1	63	12.8
12 横径	15	15	17	17.0	7	17.9	30	17.6	38	17.4	17	16.4	64	16.5
3/2 長厚示数	-	-	11	17.5	2	20.0	12	18.3	19	19.4	11	16.8	63	17.0
11/12 骨体断面示数	-	-	17	77.9	7	77.8	30	77.7	38	73.8	17	80.2	63	74.9

1) 中横(1987) 2) 中横(1991) 3) 中横(1993) 4) 中横・土肥(2006) 5) 阿崎ほか(2004) 6) 専著(1975)

表3 下肢骨計測値(男性)

大腿骨	那珂 SK-3075		天福寺 近世		上月隈 近世		麻田青木 近世		原田 近世		船荷谷 近世		九州 ^⑥ 現代	
	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
	1 全長	-	20	415.2	7	415.4	31	419.6	24	420.2	9	407.4	59	406.5
2 自角位長	-	18	410.0	3	416.0	13	418.0	17	415.5	8	406.5	59	403.2	
6 中央矢状径	24	17	27.7	9	28.2	40	28.1	43	28.2	20	28.4	59	26.5	
7 中央横径	30	17	26.9	9	28.7	40	29.0	43	26.6	21	26.7	59	25.6	
8 中央周	84	17	85.4	9	89.1	39	89.4	43	96.4	20	84.1	59	82.4	
9 骨体上横径	34	14	30.4	9	33.4	38	33.8	42	31.6	20	30.6	59	29.4	
10 骨体下矢状径	25	14	26.3	9	25.2	38	25.7	42	25.6	20	25.7	59	24.3	
8/2 長厚示数	-	13	20.5	3	22.2	12	21.5	17	20.9	8	21.2	59	20.4	
6/7 中央断面示数	80.0	17	104.1	9	98.7	40	97.0	43	106.3	20	106.7	59	103.8	
10/9 上半骨体断面示数	73.5	14	86.7	9	75.4	38	76.2	42	81.5	20	84.2	58	82.8	
胫骨														
1 全長	-	13	339.5	5	327.0	21	330.3	20	334.2	10	330.4	61	320.3	
1a 最大長	-	16	340.1	6	333.0	24	337.0	21	339.0	10	335.5	60	326.9	
8 中央最大径	-	14	29.4	7	30.3	26	30.2	25	28.7	10	28.7	61	27.8	
8a 榮養孔最大径	-	15	33.7	8	35.3	34	34.4	39	33.2	16	34.0	60	30.6	
9 中央横径	-	14	21.9	7	22.4	26	22.7	25	22.5	10	21.6	61	21.1	
9a 榮養孔位横径	-	15	24.1	8	25.3	34	24.9	39	24.7	16	24.6	61	23.7	
10 骨体周	-	14	80.4	6	83.7	25	83.0	25	80.9	10	77.2	62	78.4	
10a 榮養孔位周	-	15	91.3	9	93.3	32	93.0	39	91.5	14	88.6	61	88.9	
10b 最小周	-	15	73.7	9	75.7	29	76.0	41	72.3	17	70.6	60	71.3	
9/8 中央斷面示数	-	14	74.8	7	74.8	26	75.4	25	78.7	10	75.6	61	76.1	
9a/8a 榮養孔位断面示数	-	15	71.9	8	72.1	34	72.3	39	74.6	16	72.4	60	77.5	
10b/1 長厚示数	-	8	21.3	5	23.2	19	23.0	20	21.7	10	21.1	60	22.4	
髌骨														
1 最大長	-	12	335.3	5	327.8	6	333.0	8	331.8	7	332.0	58	322.9	
2 中央最大径	-	13	14.3	7	14.3	24	15.2	17	15.1	6	15.3	59	14.5	
3 中央最小径	-	13	10.8	7	11.3	24	11.2	17	11.2	6	11.0	59	10.0	
4 中央周	-	13	40.5	7	42.3	24	43.7	17	43.6	6	41.2	59	41.5	
4a 最小周	-	10	35.9	5	36.4	14	38.0	26	37.3	7	34.9	59	35.6	
3/2 中央断面示数	-	13	75.5	7	79.1	24	74.2	17	75.0	6	72.3	59	69.5	
4a/1 長厚示数	-	7	11.1	4	11.4	6	11.1	8	11.2	7	10.5	58	11.1	

1) 阿部(1955), 踏躋(1955)



1

2

3



4

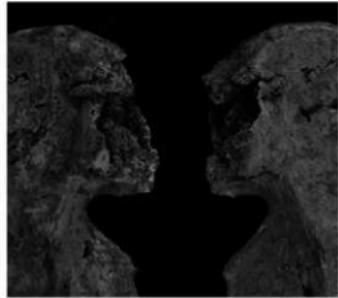


5



6 左橈骨・手根骨の癒合 (SK-3075 号人骨)

1 ~ 5 SK-3075 号人骨・頭蓋および四肢骨



7 仙腸関節癒合 (SK-3075 号人骨)



8 SK-4017 号人骨・上肢

付. 5 福岡市那珂遺跡群第114次調査における自然科学分析

株式会社古環境研究所

I. 花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 試料

分析試料は、SE-1074 下層より採取された試料（茶～褐色土（礫混）：弥生時代後期前葉頃）、SE-2046 採取試料（灰褐色砂礫混土：中世前半）、SE-2050 採取試料（灰褐色砂礫混土：奈良時代）、SE-2053 採取試料（灰褐色砂礫混土：中世後半）、SE-3025 最下層採取試料（灰褐色砂礫混土：弥生時代後期初頭）の計 5 点である。

3. 方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 0.5%リン酸三ナトリウム（12 水）溶液を加え 15 分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25% フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置
- 4) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトトリス処理（無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 のエルドマン氏液を加え 1 分間湯煎）を施す
- 5) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300 ~ 1000 倍で行う。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示す。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

4. 結果

(1) 分類群

産出した分類群は、樹木花粉 18、樹木花粉と草本花粉を含むもの 2、草本花粉 21、シダ植物胞子 2 形態の計 43 である。これらの学名と和名および粒数を表 1 に示し、花粉数が 200 個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図 1 に示す。なお、200 個未満であっても 100 個以上の試料については傾向をみると参考に図示し、主要な分類群は顕微鏡写真に示す。また、寄生虫卵についても同定した結果、2 分類群が検出された。以下に産出した分類群を記載する。

[樹木花粉]：ツガ属、マツ属複維管束亞属、スギ、イチイ科一イスガヤ科ヒノキ科、ノグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシテ属アサダ、クリ、シイ属マテバシイ

属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、エノキ属ームクノキ、アカメガシワ、ウルシ属、トチノキ、グミ属、イスノキ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕；クワ科ーイラクサ科、マメ科

〔草本花粉〕；イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科ーヒユ科、ナデシコ科、キンポウケ属、アブラナ科、ノアズキ属、ツリフネソウ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、シソ科、キツネノマゴ、オオバコ属、タンボボ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕；单条溝胞子、三条溝胞子

〔寄生虫卵〕；鞭虫卵、カビラリア

(2) 花粉群集の特徴

1) SE-1074 下層 (弥生時代後期前葉頃)

花粉密度が低く、樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）が優占し、次いでヨモギ属が多い。アブラナ科、アカザ科ーヒユ科、キク亜科、セリ亜科、カヤツリグサ科などが伴われる。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属、スギ、シイ属ーマテバシイ属、エノキ属ームクノキなどが低率に産出する。

2) SE-2046 (中世前半)

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。樹木花粉と草本花粉を含むクワ科ーイラクサ科が約13%を占める。草本花粉では、ヨモギ属、イネ科を主に、アブラナ科、セリ亜科、アカザ科ーヒユ科、キツネノマゴなどが産出する。樹木花粉では、シイ属ーマテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属、マツ属複維管束亜属、スギなどが低率に産出する。

3) SE-2050 (奈良時代)

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。樹木花粉と草本花粉を含むクワ科ーイラクサ科が約10%を占める。草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）、ヨモギ属を主に、アブラナ科、アカザ科ーヒユ科、タンボボ亜科、カヤツリグサ科、ソバ属、シソ科、キツネノマゴなどが産出する。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属、シイ属ーマテバシイ属、スギなどが低率に産出する。

4) SE-2053 (中世後半)

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）が高率に産出し、ヨモギ属、カヤツリグサ科、ソバ属、キツネノマゴなどが伴われる。樹木花粉では、シイ属ーマテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属などが低率に産出する。鞭虫卵がわずかに検出される。

5) SE-3025 最下層 (弥生時代後期前葉頃)

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。樹木花粉と草本花粉を含むクワ科ーイラクサ科が約17%を占める。草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）を主に、チドメグサ亜科、アブラナ科（集塊あり）、ヨモギ属、オオバコ属、セリ亜科、キク亜科などが産出する。樹木花粉では、エノキ属ームクノキ、コナラ属アカガシ亜属、シイ属ーマテバシイ属などが低率に産出する。寄生虫卵のカビラリアがわずかに検出される。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

(1) SE-1074 下層 (弥生時代後期前葉頃)

周囲には草本が分布し、イネ科を主にヨモギ属、アブラナ科、アカザ科ーヒユ科、キク亜科、セリ亜科、カヤツリグサ科などが生育していた。いずれも耕地雑草ないし人里植物の性格をもつ草本ばかりである。イネ属型が検出されることから、周辺に水田の分布が示唆される。樹木は、コナラ属アカガシ亜属、スギ、

シイ属一マテバシイ属、エノキ属一ムクノキなどが孤立木か遠方で森林として分布していたと推定される。

(2) SE-2046 (中世前半)

周囲には草本が分布し、ヨモギ属、イネ科を主にアブラナ科などが主に生育していた。いずれも耕地雜草ないし人里植物であるが、産出量の多いヨモギ属やアブラナ科は畠地雜草の性格を持つことから、畠地などの乾燥地の分布が推定される。クワ科一イラクサ科もカナムグラやイラクサなどの人為環境に生育する草本と考えられる。

(3) SE-2050 (奈良時代)

イネ属型を含むイネ科、ヨモギ属を主にアブラナ科、クワ科一イラクサ科などの人里植物ないし耕地雜草が多く、栽培植物のソバ属も検出されることから、周囲にはこれらの草本が生育し、集落や水田・畠の分布が推定される。樹木は周囲にはほとんど生育しておらず、遠方の山地などに、コナラ属アカガシ亜属、シイ属一マテバシイ属、スギの森林が分布していたと推定される。

(4) SE-2053 (中世後半)

イネ科（イネ属型を含む）を主にヨモギ属、カヤツリグサ科、ソバ属、キツネノマゴなどが伴って生育し、集落や畠などの人為環境の分布が推定される。樹木は周囲にはほとんど生育せず、シイ属一マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属などが遠方の山地などに分布していたと推定される。

(5) SE-3025 最下層（弥生時代後期初頭）

樹木花粉と草本花粉を含むクワ科一イラクサ科が多いが、カナムグラやイラクサなど人里周辺に多い草本と考えられる。周囲には、イネ科、クワ科一イラクサ科、チドメグサ亜科、ヨモギ属、アブラナ科、オオバコ属、セリ亜科、キク亜科の乾燥した人里植物を多く含む草本が生育し、集落域の環境が推定される。樹木は少なく、エノキ属一ムクノキ、コナラ属アカガシ亜属、シイ属一マテバシイ属などが孤立木か遠方で森林として分布していたと推定される。

6. まとめ

那珂遺跡群第114次調査において花粉分析を行い、弥生時代後期から中世後期までの植生、環境、農耕を推定した。その結果、本遺跡周辺は弥生時代後期の段階で、すでに森林は減少しており、イネ科やヨモギ属を主とする人里植物や耕地雜草の草本が分布し、草本の卓越する人為環境が広がっていた。樹木は、地域の山地などにコナラ属アカガシ亜属を主とする照葉樹林とスギ林が分布していた。弥生時代後期（SE-1074 下層、SE-3025 最下層）は、ヨモギ属、アブラナ科やチドメグサ亜科が生育し、やや乾燥した集落環境の周辺に水田が分布していたと推定された。奈良時代（SE-2050）ないし中世後半（SE-2053）には、栽培植物のソバ属が検出され、畠作が盛んになったと推定された。

参考文献

- 金原 正明（1993）花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法。角川書店, p.248-262.
- 島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態。大阪市立自然科學博物館収蔵目録第5集, 60p.
- 中村 純（1973）花粉分析。古今書院, p.82-110.
- 中村 純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*)を中心として。第四紀研究, 13, p.187-193.
- 中村 純（1977）稻作とイネ花粉。考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.
- 中村 純（1980）日本産花粉の標識。大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.

表 1 那珂遺跡群第 114 次調査における花粉分析結果

分類群		相名					
学名		SE-1074 下層	SE-2046	SE-2050	SE-2053	SE-3025	最下層
ArboREAL pollen	樹木花粉						
<i>Tsuga</i>	ツガ属						1
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複維管束亞属	1	5	2	3		1
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	4	4	5	1		2
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科・イスガヤ科・ヒノキ科		1				
<i>Platycarya strobilacea</i>	ノグルミ						1
<i>Alnus</i>	ハンノキ属						1
<i>Betula</i>	カバノキ属						2
<i>Corylus</i>	ハシバミ属						1
<i>Castanea crenata</i>	クリ	1	1		3		1
<i>Castanopsis-Pasania</i>	シノ属・マテバシイ属	3	13	10	8		10
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コラ属コナラ属	1	1	3	1		1
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アガシ属	6	8	12	4		12
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エスキ属・ムクノキ	3		1			20
<i>Mallotus japonicus</i>	アカメガシワ				1		
<i>Rhus</i>	ウルシ属						1
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ				1		
<i>Elaeagnus</i>	タマ属		3				
<i>Distylium</i>	イスノキ属					1	
ArboREAL Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉						
Moraceae-Urticaceae	タク科・イラクサ科	3	50	35	18		61
Leguminosae	マメ科		1		8		
Nonarboreal pollen	草本花粉						
Gramineae	イネ科	49	91	89	172		85
Oryza type	イネ属型	2	1	12	4		7
Cyperaceae	カヤツリグサ科	2		7	26		2
Polygonum sect. Persicaria	タマゴサ属サナエタデ属				1		1
<i>Rumex</i>	ギヨギシ属		1		2		
<i>Fagopyrum</i>	ゾバ属			1	1		
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカサ科・ヒユ科	4	8	13	5		2
Caryophyllaceae	ナナシ科			1	2		1
<i>Ranunculus</i>	キンポウゲ属				2		
Cruciferae	アブラナ科	6	38	30	6		37 *
Dumbaria	ノアキ属		1				
Impatiens	シリヌスオウ属			1			1
Hydrocotyloideae	チドリグサ属	1		5	7		51
Apioideae	セリ亞科	3	10	11	5		7
Labiatae	シソ科			1			
<i>Justicia procumbens</i>	キヅネノマゴ		1	1	5		
<i>Plantago</i>	オオバコ属			5	5		13
Lactucoideae	タンボボ属	1		8	6		3
Asteroideae	キク亞科	4	1	6			4
Xanthium	オナモミ属			1			
<i>Artemesia</i>	ヨモギ属	21	141	84	62		36
Fern spore	シダ植物胞子						
Monolate type spore	單条溝胞子			6	6		5
Trilate type spore	三条溝胞子	13	5	12	5		17
ArboREAL pollen	樹木花粉	19	36	34	21		55
ArboREAL - Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	3	51	35	26		61
Nonarboreal pollen	草本花粉	93	294	276	311		250
Total pollen	花粉總數	115	381	345	358		366
Pollen frequencies of 1cm ³	試料 1cm ³ 中の花粉密度	5.5	4.3	7.3	3.4	1.6	
		× 10.2	× 10.3	× 10.3	× 10.3	× 10.4	
Unknown pollen	未同定花粉	3	7	18	9		11
Fern spore	シダ植物胞子	13	5	18	11		22
Helminth eggs	寄生虫卵						
<i>Trichuris(trichiura)</i>	鞭虫卵				1		
<i>Capillaria sp.</i>	カビラリア					1	
Total	計	0	0	0	1	1	
Helminth eggs frequencies of 1cm ³	試料 1cm ³ 中の寄生虫卵密度	0.0	0.0	0.0	0.7	0.7	
					× 10	× 10	
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	
Charcoal fragments	微細炭化物	(+)	(-)	(+)	(-)	(++)	

*: 集塊

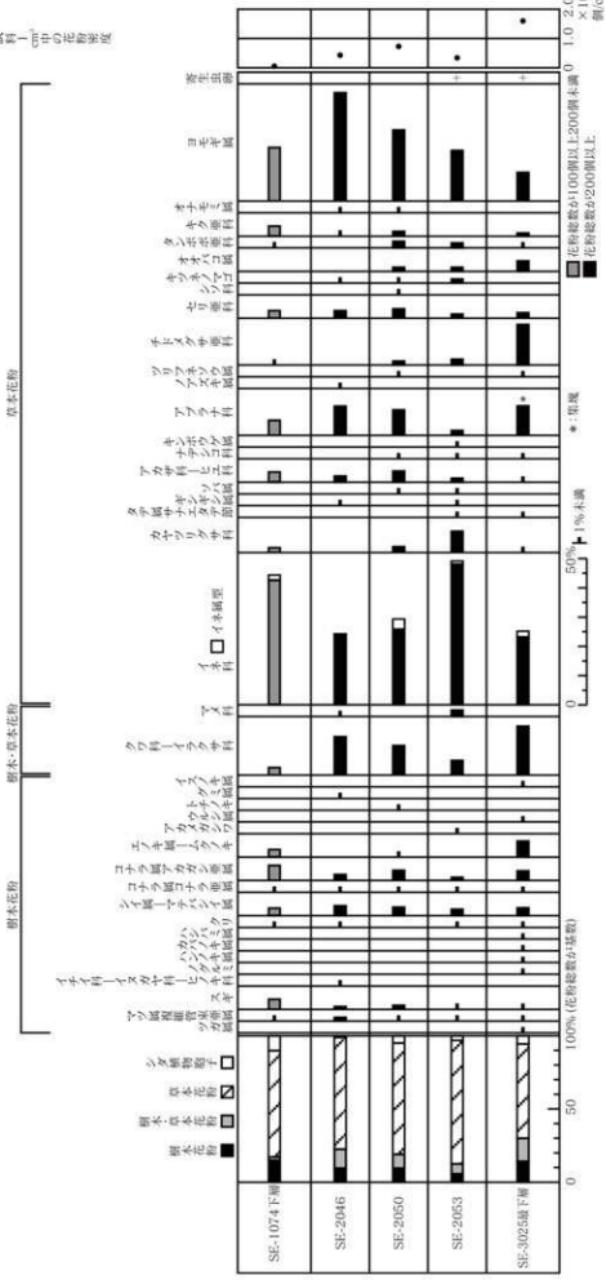


図1 那珂遺跡群第114次調査における花粉ダイアグラム。

II. 珪藻分析

1. はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する单細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壤、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復元の指標として利用されている。

2. 試料

分析試料は、SE-1074 下層より採取された試料（茶～褐色土（礫混）：弥生時代後期前葉頃）、SE-2046 採取試料（灰褐色砂礫混土：中世前半）、SE-2050 採取試料（灰褐色砂礫混土：奈良時代）、SE-2053 採取試料（灰褐色砂礫混土：中世後半）、SE-3025 最下層採取試料（灰褐色砂礫混土：弥生時代後期初頭）の計 5 点である。

3. 方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

- 1) 試料から 1cm³ を秤量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら 1 晚放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドと薬品を水洗（5 ~ 6 回）
- 4) 残渣をマイクロビペットでカバーグラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作成
- 6) 検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 600 ~ 1500 倍で行う。計数は珪藻被殻が 100 個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行う。

4. 結果

(1) 分類群

試料から産出した珪藻は、中一真塩性種（汽一海水生種）1 分類群、貧一中塩性種（淡一汽水生種）1 分類群、貧塩性種（淡水生種）45 分類群である。表 2 に分析結果を示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを図 2 に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性は、Lowe(1974) や渡辺 (2005) 等の記載を基本に、陸生珪藻は小杉 (1986)、環境指標種群の淡水生種は安藤 (1990) による。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記載する。

〔貧塩性種〕

Caloneis hyalina、*Cocconeis placentula*、*Cymbella silesiaca*、*Eunotia minor*、*Gomphonema parvulum*、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula cohnii*、*Navicula confervacea*、*Navicula contenta*、*Navicula kotschy*、*Navicula mutica*、*Nitzschia brevissima*、*Nitzschia palea*、*Pinnularia acrosphaeria*、*Pinnularia appendiculata*、*Pinnularia borealis*、*Pinnularia microstauron*、*Pinnularia spp.*、*Pinnularia subcapitata*、*Pinnularia viridis*、*Rhopalodia gibberula*

(2) 珪藻群集の特徴

1) SE-1074 下層（弥生時代後期前葉頃）

珪藻密度が極めて低く、陸生珪藻の *Pinnularia borealis* がわずかに検出される。

2) SE-2046（中世前半）

陸生珪藻が優占し、流水不定性種も比較的多い。陸生珪藻では、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*、*Pinnularia borealis* が、流水不定性種では、*Rhopalodia gibberula* が優占する。真・好止水性種では、*Pinnularia microstauron* や、沼沢湿地付着生環境指標種群の *Eunotia minor* が、真・好流水性種では *Gomphonema parvulum* が低率に産出する。

3) SE-2050 (奈良時代)

珪藻密度が極めて低く、陸生珪藻では、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*、*Navicula contenta*、*Pinnularia borealis* などが優占し、*Navicula confervacea*、*Pinnularia subcapitata*、*Nitzschia brevissima*、*Pinnularia appendiculata*、*Pinnularia borealis* などが伴われる。

4) SE-2053 (中世後半)

陸生珪藻が優占する。陸生珪藻では、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*、*Navicula contenta*、*Pinnularia borealis* などが優占し、*Navicula confervacea*、*Pinnularia subcapitata*、*Nitzschia brevissima*、*Pinnularia appendiculata*、*Pinnularia borealis* などが伴われる。

5) SE-3025 最下層（弥生時代後期初頭）

珪藻密度が極めて低く、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys* がわずかに検出される。

5. 珪藻分析から推定される堆積環境

(1) SE-1074 下層（弥生時代後期前葉頃）

珪藻が極めて少ない。井戸内で光が届かず、光合成の必要な珪藻が生育しにくかったと考えられる。

(2) SE-2046（中世前半）

陸生珪藻が優占し、流水不定性種もやや多い。井戸上部の湿った壁面に陸生珪藻が生育し、光の差し込む水域上部に流水不定性種などが生育したと推定される。

(3) SE-2050（奈良時代）

珪藻が極めて少ない。井戸内で光が届かず、光合成の必要な珪藻が生育しにくかったと考えられる。

(4) SE-2053（中世後半）

陸生珪藻が優占し、水生珪藻がわずかに検出される。井戸上部の湿った壁面に陸生珪藻が生育し、光の差し込む井戸水域上部に流水不定性種などが生育し、滞水していたとみなされる。

(5) SE-3025 最下層（弥生時代後期初頭）

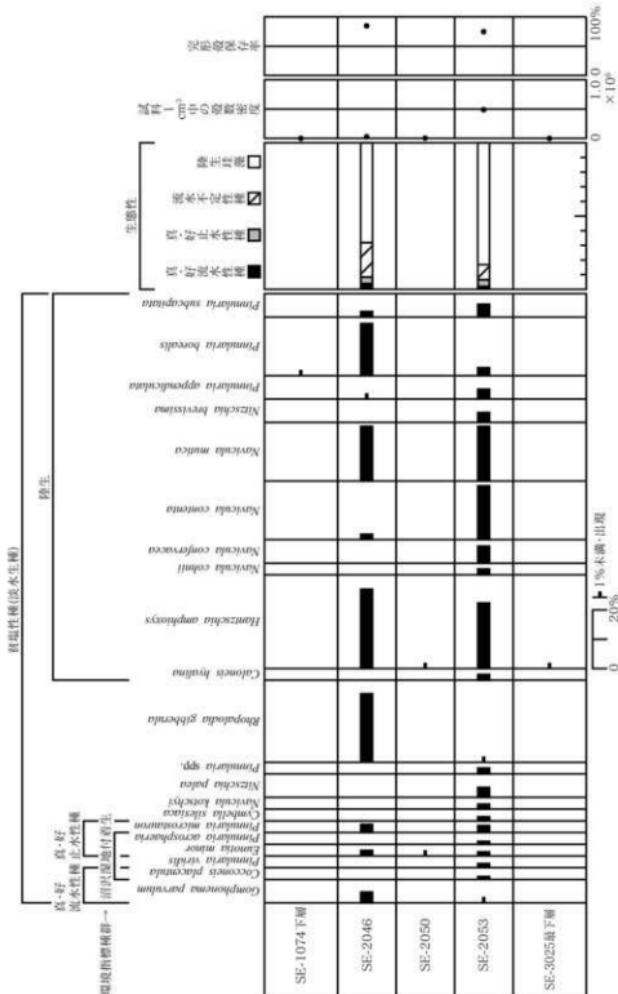
珪藻が極めて少ない。井戸内で光が届かず、光合成の必要な珪藻が生育しにくかったと考えられる。

参考文献

- Asai,K.& Watanabe,T.(1995)Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,p.35-47.
- K. Krammer & H.Lange-Bertalot(1986-1991) Bacillariophyceae · 1 - 4.
- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 東北地理, 42, p.73-88.
- 伊藤良永・駒内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, p.23-45.
- 小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展望—. 植生史研究, 第1号, 植生史研究会, p.29-44.
- 小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, p.1-20.
- 渡辺仁治 (2005) 淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指数 DALpo, pH 耐性能. 内田老鶴園, pp.666.

表2 那珂遺跡群第114次調査における珪藻分析結果

分類群	SE-1074 下層	SE-2046	SE-2050	SE-2053	SE-3025 最下層
貧塩性種 (淡水生種)					
<i>Achnanthes hungarica</i>				2	
<i>Achnanthes lanceolata</i>				2	
<i>Amphora montana</i>				2	
<i>Caloneis hyalina</i>				6	
<i>Cocconeis placenta</i>				3	
<i>Cymbella silesiaca</i>				4	
<i>Cymbella sinuata</i>				1	
<i>Cymbella tumida</i>				1	
<i>Cymbella turgidula</i>				1	
<i>Diatoma mesodon</i>				1	
<i>Diploneis spp.</i>				1	
<i>Eunotia formica</i>			1		
<i>Eunotia minor</i>	2	1	4		
<i>Eunotia pectinalis</i>			1		
<i>Eunotia praerupta</i>		2			
<i>Fragilaria construens</i>				1	
<i>Fragilaria exigua</i>				1	
<i>Gomphonema gracile</i>				1	
<i>Gomphonema minutum</i>				1	
<i>Gomphonema parvulum</i>	4		2		
<i>Hantzschia amphioxys</i>	29	12	66		1
<i>Navicula cohnii</i>				6	
<i>Navicula confervacea</i>				17	
<i>Navicula contenta</i>	2			54	
<i>Navicula gallica</i>				1	
<i>Navicula kotschy</i>				5	
<i>Navicula mutica</i>	20			55	
<i>Navicula spp.</i>				1	
<i>Neidium ampliatum</i>				1	
<i>Neidium spp.</i>				2	
<i>Nitzschia brevissima</i>				10	
<i>Nitzschia debilis</i>				2	
<i>Nitzschia palea</i>				10	
<i>Nitzschia spp.</i>				2	
<i>Pinnularia acrosphaeria</i>				3	
<i>Pinnularia appendiculata</i>	1			10	
<i>Pinnularia borealis</i>	1	19		8	
<i>Pinnularia microstauron</i>		3		7	
<i>Pinnularia schroederii</i>				1	
<i>Pinnularia spp.</i>				6	
<i>Pinnularia subcapitata</i>	2			13	
<i>Pinnularia viridis</i>				4	
<i>Rhopalodia gibberula</i>	25			1	
<i>Stauroneis spp.</i>				2	
<i>Surirella angusta</i>				1	
貧-中塩性種 (淡-汽水生種)					
<i>Achnanthes brevipes</i>				1	
中-真塩性種 (汽-海水生種)					
<i>Cocconeis scutellum</i>	1				
合計	2	107	16	324	1
未同定	0	3	0	22	0
破片	2	22	8	114	0
試料 1cm ³ 中の殻数密度	2.0 × 10 ²	2.9 × 10 ⁴	4.8 × 10 ³	4.9 × 10 ⁵	4.0 × 10 ²
完形殻保存率 (%)	-	83.3	-	75.2	-



III. 種実同定

1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行なうことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

2. 試料

分析試料は、SE-1074 下層から採取された試料（茶から褐色土（礫混）：弥生時代後期前葉頃）、SE-2046 採取試料（灰褐色砂礫混土：中世前半）、SE-2050 採取試料（灰褐色砂礫混土：奈良時代）、SE-2053 採取試料（灰褐色砂礫混土：中世後半）、SE-3025 最下層採取試料（灰褐色砂礫混土：弥生時代後期初頭）の計 5 点である。

3. 方法

試料（堆積物）に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行なった。

- 1) 試料 500cm³ に水を加え放置し、泥化を行う。
- 2) 搅拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mm の篩で水洗選別を行う。
- 3) 残渣を双眼立体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数を行う。

試料を肉眼及び双眼立体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

4. 結果

(1) 分類群

樹木 2、草本 14 の計 16 分類群が同定される。学名、和名および粒数を表 3 に、主要な分類群を写真に示す。200cm³ 中の種実数を図 3 ダイアグラムに示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記す。

[樹木]

コウゾ *Broussonetia kaiznoki* × *B. papyrifera* 種子 クワ科

明黄赤色で広楕円状円形を呈す。光沢はなく、左右の両側面のうち、一側面は稜になり、次第に厚さをます。この面には幅広い浅い凹みがある。果皮にはいぼ状の低い突起が散在し、ざらつく。

キイチゴ属 *Rubus* 核 バラ科

淡褐色でいびつな半円形を呈す。表面には大きな網目模様がある。

[草本]

イネ *Oryza sativa* L. 炭化果実（完形・破片）イネ科

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくばむ。表面には数本の筋が走る。

エノコログサ属 *Setaria Beauv.* 穂（破片）イネ科

穂は茶褐色で楕円形を呈す。表面には横方向の微細な隆起がある。

イネ科 *Gramineae* 穂

穂は灰褐色～茶褐色で楕円形を呈す。腹面はやや平ら。背面は丸い。表面は滑らかである。

カヤツリグサ科 *Cyperaceae* 果実

茶褐色で倒卵形を呈す。断面は扁平である。

黒褐色で倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。

イグサ科 *Juncaceae* 種子

半透明の黄褐色ないし茶褐色、ゆがんだ卵形を呈す。両端は尖り、黒褐色。表面に網目模様がある。

カナムグラ *Humulus japonicus* Sieb. et Zucc. 種子 クワ科

黒色で円形を呈し、断面は両凸レンズ状である。側面には心形を呈するへそがある。

タデ属 *Polygonum* 果実 タデ科

黒褐色で先端が尖る卵形を呈す。表面にはやや光沢があり、断面は三角形である。

ヒユ属 *Amaranthus* 種子 ヒユ科

黒色で光沢がある。円形を呈し、一ヶ所が切れ込みへソがある。断面は両凸レンズ形である。

ザクロソウ *Mollugo pentaphylla* L. 種子 ザクロソウ科

黒色でやや光沢がある。円形を呈し、一ヶ所が切れ込み、白い種柄がある。表面には微細な網状斑紋がある。

ナデシコ科 *Caryophyllaceae* 種子

黒色で円形を呈し、側面にへそがある。表面全体に突起がある。

カタバミ属 *Oxalis* 種子 カタバミ科

茶褐色で梢円形を呈し、上端が尖る。両面には横方向に6~8本の隆起が走る。

アリノトウグサ *Haloragis micrantha* R. Br. 果実 アリノトウグサ科

淡褐色で卵形を呈す。表面には6~7本の縱方向の稜がはしる。

チドメグサ属 *Hydrocotyle* 果実 セリ科

淡褐色で半円形を呈す。断面は梢円形である。両面に明瞭な一本の円弧状の隆起が走る。

ツボクサ *Centella asiatica* L. 果実 セリ科

浅黄褐色で半円形または梢円形を呈す。表面には大きな網目模様がある。側面にはへそがある。

(2) 種実群集の特徴

1) SE-1074 下層 (弥生時代後期前葉頃)

コウゾ 1、カナムグラ 1、ザクロソウ 86 が検出された。

2) SE-2046 (中世前半)

カヤツリグサ科 1、ナデシコ科 2 が検出された。

3) SE-2050 (奈良時代)

イネ 25 が検出された。

4) SE-2053 (中世後半)

キイチゴ属 1、エノコログサ属 1、イネ科 13、カヤツリグサ科 83、イグサ科 10、タデ属 2、ヒユ属 1、ザクロソウ 13、ナデシコ科 71、カタバミ属 3、アリノトウグサ 1、ツボクサ 6 が検出された。

5) SE-3025 最下層 (弥生時代後期初頭)

イネ科 5、カヤツリグサ科 27、イグサ科 2、タデ属 1、ザクロソウ 85、カタバミ属 17、チドメグサ属 28 が検出された。

5. 種実同定から推定される植生と農耕

(1) SE-1074 下層 (弥生時代後期前葉頃)

人里や畑地に生育するザクロソウが極めて多く、井戸周辺に生育していたと考えられる。コウゾは食用となり、カナムグラは人里周辺に生育する。

(2) SE-2046 (中世前半)

人里植物の性格をもつカヤツリグサ科とナデシコ科がわずかに検出されるが、井戸内にはあまい種実類が落ち込まなかつたとみなされる。

(3) SE-2050 (奈良時代)

イネ炭化果実が検出され、周囲でイネ果実（コメ）の何らかの加工や焼棄をしたと考えられる。

(4) SE-2053 (中世後半)

カヤツリグサ科とナデシコ科が多く、イネ科やザクロソウをはじめイグサ科等が生育する。これらは水湿地に生育するカヤツリグサ科やイグサ科等と、乾燥した集落域や畠地に生育するナデシコ科やザクロソウ等に別けられ、前者は井戸周囲の湿地に、後者は乾燥した周辺の人为環境に生育していた。

(5) SE-3025 最下層（弥生時代後期初頭）

ザクロソウが極めて多く、カヤツリグサ科、カタバミ属、チドメグサ属などが生育し、カヤツリグサ科などは井戸周囲の湿地に、ザクロソウ、カタバミ属、チドメグサ属は乾燥した周辺の人为環境に生育していたと推定される。

6.まとめ

弥生時代後期のSE-1074下層とSE-3025最下層には、周囲にザクロソウが生育し、やや乾燥した人为地の分布が示唆される。SE-2050（奈良時代）ではイネ炭化果実が検出され、周囲でイネ果実（コメ）の何らかの加工などが行われたと推定される。

参考文献

- 笠原安夫（1985）日本雑草図説、養賢堂、494p.
笠原安夫（1988）作物および田畠雜草種類、弥生文化の研究第2巻生業、雄山閣出版、p.131-139.
金原正明（1996）古代モモの形態と品種、月刊考古学ジャーナルNo.409、ニューサイエンス社、p.15-19.
南木睦彦（1991）栽培植物、古墳時代の研究第4巻生産と流通1、雄山閣出版株式会社、p.165-174.
南木睦彦（1992）低湿地道路の種実、月刊考古学ジャーナルNo.355、ニューサイエンス社、p.18-22.
南木睦彦（1993）葉・果実・種子、日本第四紀学会編、第四紀試料分析法、東京大学出版社、p.276-283.
吉崎昌一（1992）古代雑穀の検出、月刊考古学ジャーナルNo.355、ニューサイエンス社、p.2-14.
渡辺誠（1975）縄文時代の植物貢、雄山閣、187p.

表3 那珂遺跡群第114次調査における種実同定結果

分類群		和名	部位	SE-1074下層 SE-2046 SE-2050 SE-2053 SE-3025最下層				
学名	樹木			SE-1074下層	SE-2046	SE-2050	SE-2053	SE-3025最下層
Arbor								
<i>Broussonetia kazinoki</i> × <i>Broussonetia Papyrifera</i>	コウゾ	種子	I					
Rubus	キイチゴ属	核						I
Herb	草本							
<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	炭化果実(完形) (破片)		8				
				17				
<i>Setaria</i> Beauv.	エノコログサ属	穎					I	
Gramineae	イネ科	穎					13	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実					83	27
Juncaceae	イグサ科	種子					10	2
<i>Humulus scandens</i> Merr.	カナムグラ	種子	I					
<i>Polygonum</i>	タデ属	果実					2	
<i>Amaranthus</i>	ヒユ属	種子					1	
<i>Mollugo pentaphylla</i> L.	ザクロソウ	種子	86				13	85
<i>Caryophyllaceae</i>	ナデシコ科	種子		2			71	
<i>Oxalis</i>	カタバミ属	種子					3	17
<i>Haloragis micrantha</i> R. Br.	アリノトウグサ	果実					1	
<i>Hydrocotyle</i>	チドメグサ属	果実						28
<i>Centella asiatica</i> L.	ツボクサ	果実					6	
Total	合計		88	3	25	205	165	
Unknown	不明種実			1			3	
	備考				刺2,虫瘤(+)			

(500cm³中0.25mm 篩)

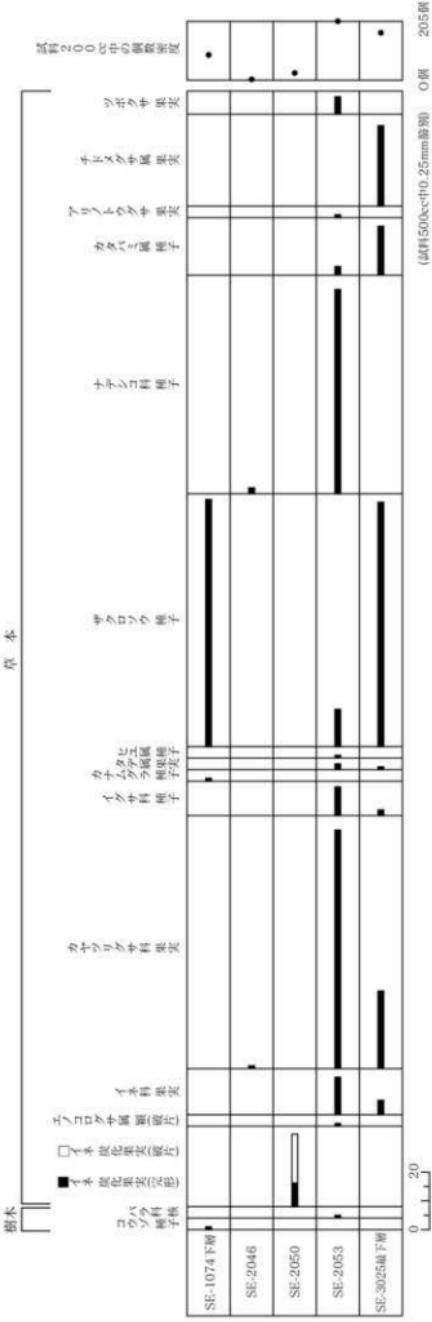
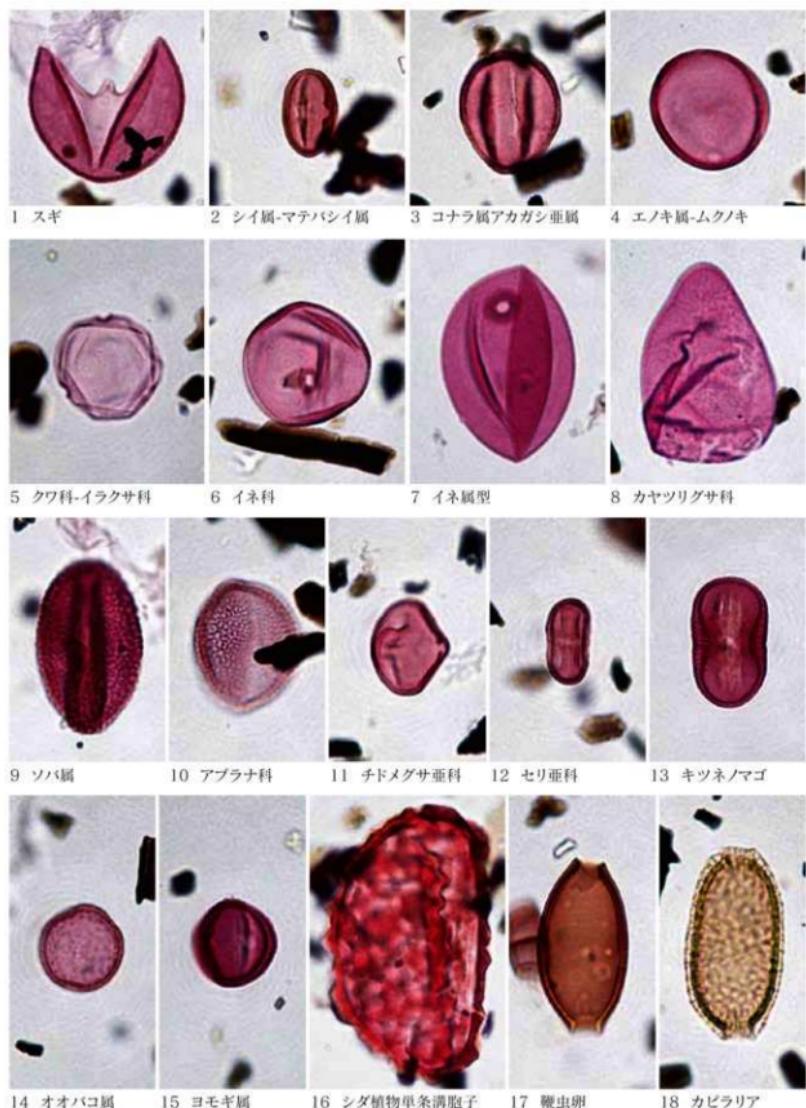
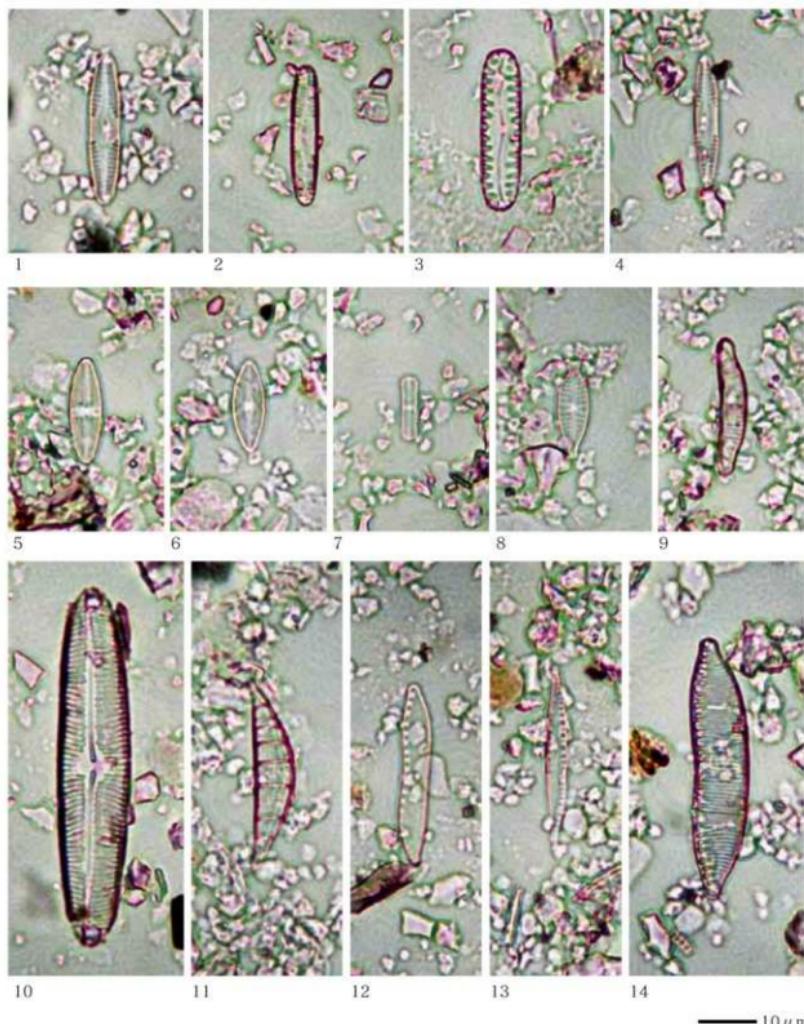


図3 那珂道路群第114次調査における種実ダイアグラム。



— 10 μ m

那珂遺跡群第114次調査の珪藻



1. *Pinnularia microstauron* 2. *Pinnularia subcapitata* 3. *Pinnularia borealis* 4. *Pinnularia appendiculata*
5. *Navicula mutica* 6. *Navicula confervacea* 7. *Navicula contenta* 8. *Gomphonema parvulum* 9. *Eunotia minor*
10. *Pinnularia viridis* 11. *Rhopalodia gibberula* 12. *Nitzschia brevissima* 13. *Nitzschia palea* 14. *Hantzschia amphioxys*



図 版

(PLATS)



1. 調査区遠景（南から）



2. 調査区全景（上が北）



1. 1区西全景（上が西、左手は2区）



2. 1区東全景（上が西）



1. 2区全景（上が南、手前は1区）



2. 3区全景（上が東、右手は4区）

PL.4



1. 4区全景（上が南、右手排土山は2区）



2. 5区全景（上が北）



1. 掘立柱建物 SB-1032 (北から)



2. 掘立柱建物 SB-1090 (東から)



3. 掘立柱建物 SB-3034 (南から)



4. 掘立柱建物 SB-5050 (西から)



5. 穹穴住居 SC-1073 (西から)



6. 穹穴住居 SC-1101 (西から)



1. 3区竪穴住居群（上が東）



2. 竪穴住居 SC-3001（南から）



3. SC-3001 カマド棲出状況（東から）



4. SC-3001 カマド（東から）



5. SC-3001 カマド対面粘土（西から）



6. SC-3001 貼床除去後（南から）



1. 穹穴住居 SC-3002 (南から)



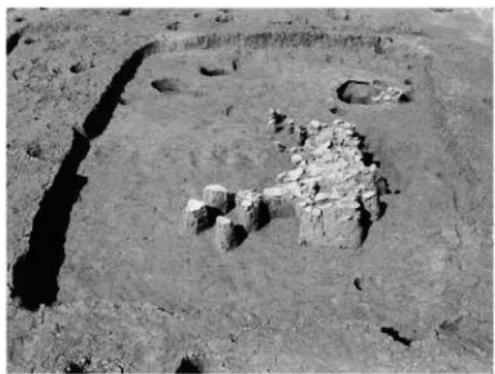
2. SC-3002 貼床除去後 (南から)



3. 穹穴住居 SC-3003 (南東から)



4. 穹穴住居 SC-3004 ~ 3007 (南から)



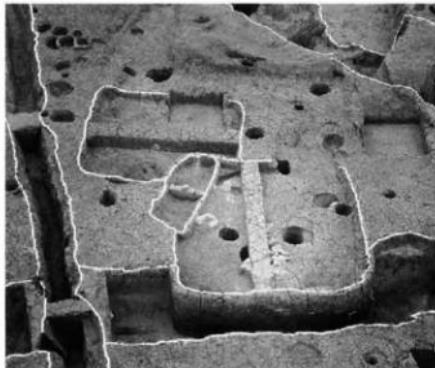
5. 穹穴住居 SC-3005 (南から)



6. SC-3005 遺物出土状況 (西から)



1. 壁穴住居 SC-3050 (北から)



2. 壁穴住居 SC-4011・4012 (北から)



3. 溝 SD-1040 (南から)



4. SD-1040 A-B 土層断面 (南から)



5. SD-1040 E-F 土層断面 (北から)



6. SD-1040 G-H 土層断面 (北から)



1. 区画溝 SD-2020・2040・4040 全景（北から）



2. SD-2020・2040 コーナー部（北から）



3. SD-2020 全景（東から）



4. SD-2020 全景（西から）



5. SD-2040 全景（南から）



6. SD-2040 上層甕棺片出土状況（北から）



1. SD-2020 土層断面 A-B (西から)



2. SD-2020 土層断面 C-D (西から)



3. SD-2040 土層断面 E-F (南から)



4. SD-2040 土層断面 G-H (南から)



5. SD-2040 南端土層断面 (北から)



6. SD-4040 土層断面 (南から)



1. 2 区弥生大溝 SD-2030 (東から)



2. SD-2030 西端 (西から)



3. 4 区弥生大溝 SD-2030 (西から)



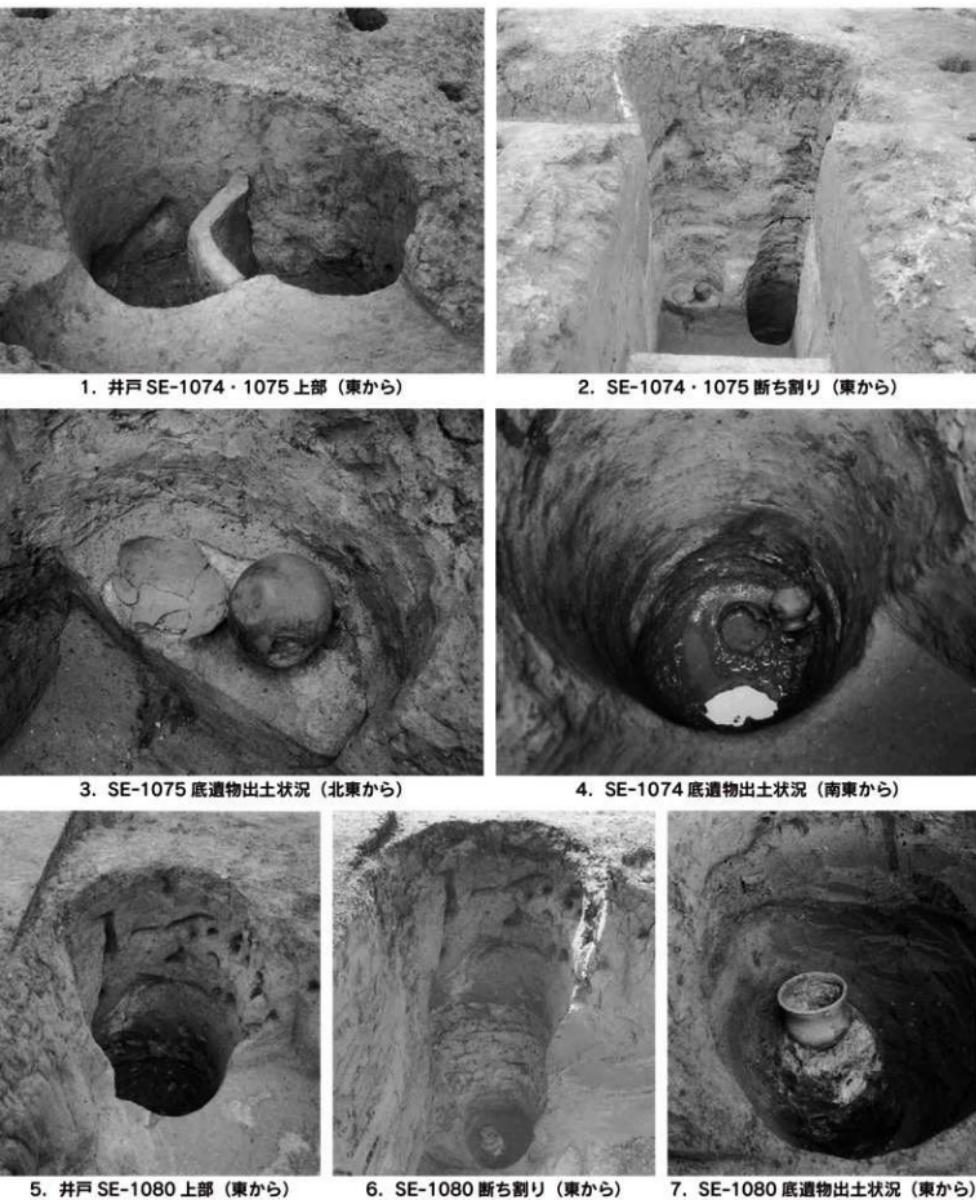
4. 2 区 SD-2030 土層断面 A-B (東から)



5. 4 区 SD-2030 - 4010 土層断面 (西から)



6. 4 区 SD-2030 土層断面 I-J (西から)

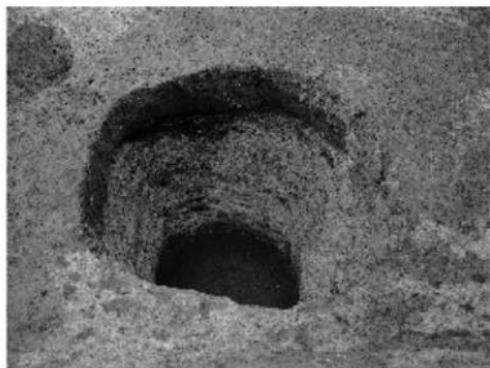




1. 井戸 SE-2011 (南から)



2. 井戸 SE-2043 (東から)



3. 井戸 SE-2044 (東から)



4. 井戸 SE-2046 上部 (東から)



5. SE-2046 立ち割り (北から)



6. 井戸 SE-2050 上部 (北から)



1. SE-2050 断ち割り（北から）



2. SE-2050 底遺物出土状況（南から）



3. 井戸 SE-2053 上部（西から）



4. SE-2053 断ち割り（北から）



5. 井戸 SE-2056 上層（東から）



6. SE-2056 上層出土遺物（東から）



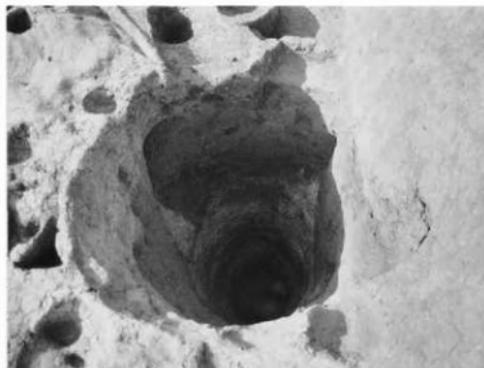
1. SE-2056 断ち割り（西から）



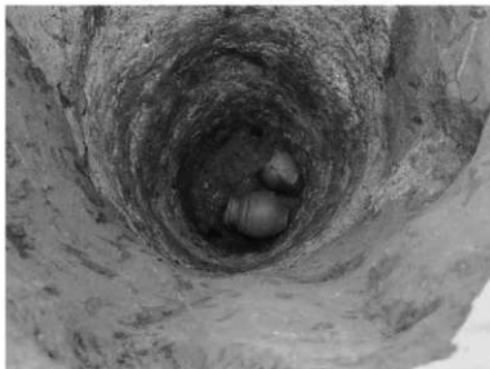
2. SE-2056 下層出土遺物（西から）



3. 井戸 SE-3020 完掘状況（東から）



4. 井戸 SE-3025 完掘状況（南から）



5. SE-3025 底遺物出土状況（南から）



6. 井戸 SE-3052（手前）・3053（東から）



1. 井戸 SE-3054 完掘状況（東から）



2. 井戸 SE-3070 完掘状況（北東から）



3. 井戸 SE-3071 半截状況（東から）



4. 井戸 SE-4019 完掘状況（北西から）



5. 井戸 SE-4020 完掘状況（東から）



6. SE-4020 底遺物出土状況（東から）



1. 井戸 SE-5005 完掘状況（西から）



2. 井戸 SE-5039 完掘状況（北東から）



3. 道路西溝 SD-1081（南東から）



4. 道路側溝 SD-4001・4002（南から）



5. 道路側溝 SD-4001・4002（北から）



6. SD-4001 遺物出土状況（南から）



1. SD-4001 土層断面 E-E' (南から)



2. SD-4001 土層断面 H-H' (南から)



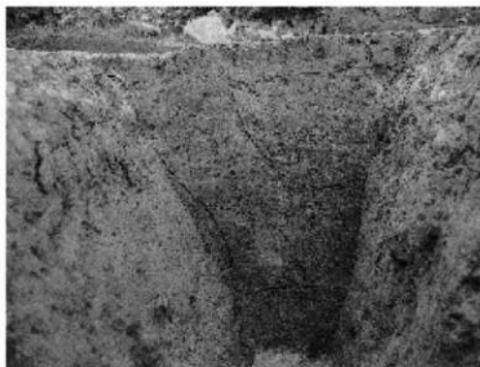
3. SD-4002 土層断面 A-A' (南から)



4. SD-4002 土層断面 B-B' (南から)



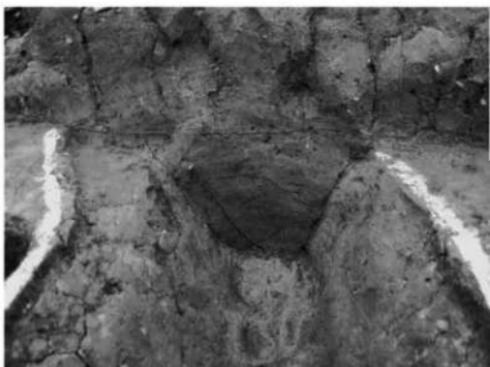
5. SD-4002 土層断面 C-C' (南から)



6. SD-4002 土層断面 D-D' (北から)



1. 道路西溝 SD-5010 (南から)



2. SD-5010 土層断面 (北から)



3. 土坑 SK-1050 (北から)



4. 土坑 SK-1061 (南から)



5. 土壙墓 SK-1068 (北から)



6. 1 区西の石棺墓群 (上が西)



1. 1区西の壺棺墓群（南西から）



2. 壺棺墓 ST-1011（南から）



3. 壺棺墓 ST-1012（右）・1013（北から）



4. 壺棺墓 ST-1014（西から）



5. ST-1014 断ち割り（北から）



6. 壺棺墓 ST-1015（北西から）



1. 壺棺墓 ST-1016（南から）



2. 壺棺墓 ST-1017（南から）



3. 壺棺墓 ST-1018（南東から）



4. 壺棺墓 ST-1018（北東から）



5. 壺棺墓 ST-1019（左）・1020（南から）



6. 壺棺墓 ST-1022（北から）



1. 壱棺墓 ST-1024（右）・1025（東から）



2. 壱棺墓 ST-1046・祭祀土坑 SX-1082（南東から）



3. 壱棺墓 ST-1047（北東から）



4. 壱棺墓 ST-1048（南西から）



5. 2区の壹棺墓群 ST-2004～2006（南西から）



6. 壱棺墓 ST-2041（南から）



1. 祭祀土坑 SX-1045 遺物出土状況（西から）



2. 祭祀土坑 SX-1045 遺物出土状況（東から）



3. 祭祀土坑 SX-1045 遺物出土状況（北から）



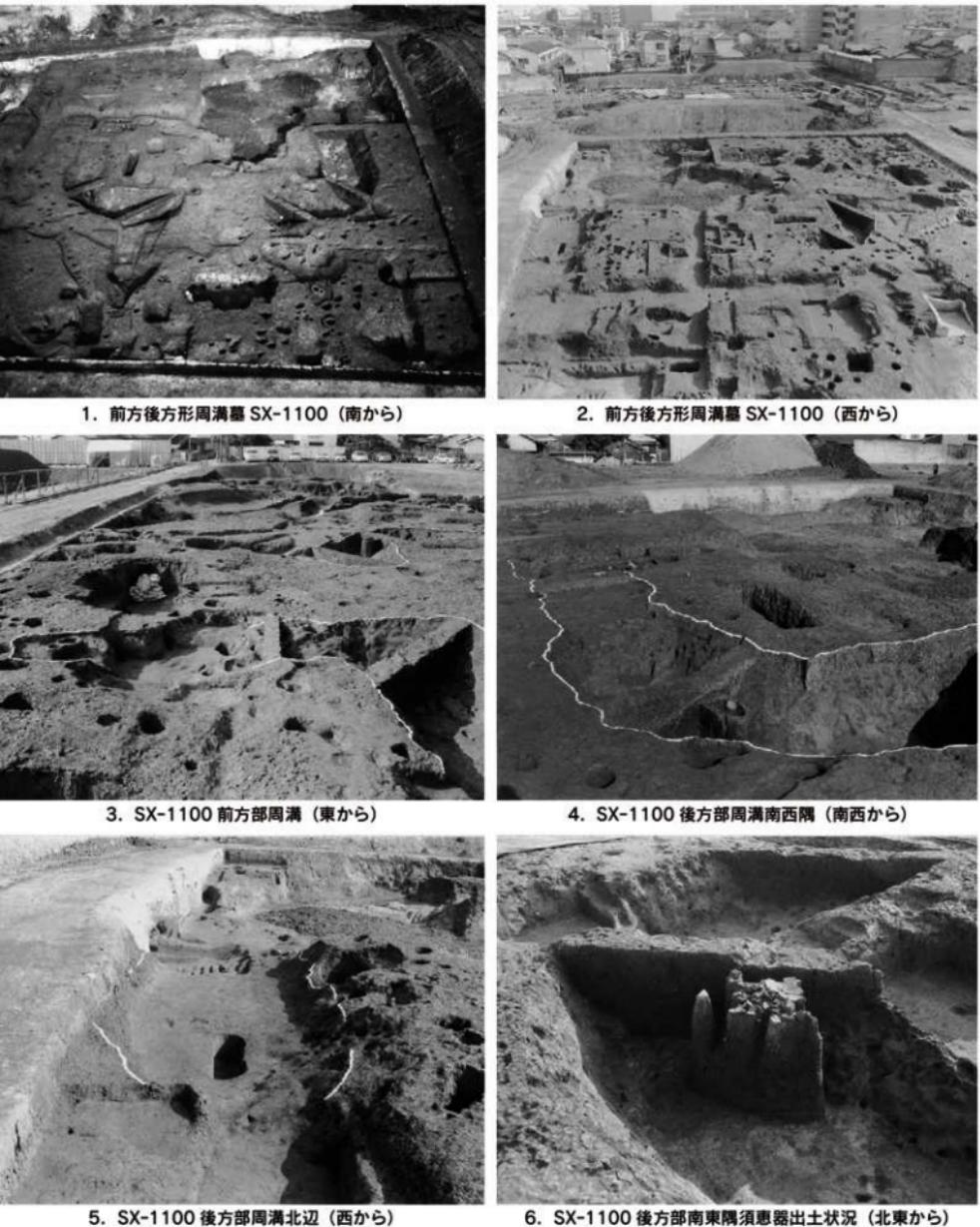
4. 祭祀土坑 SX-1045 土層断面（北から）



5. 祭祀土坑 SX-1082 土層断面（南から）



6. 立柱遺構 SX-1049（南東から）





1. SX-1100 周満土層断面 B-B' (北東から)



4. SX-1100 周満土層断面 E-E' (北西から)



2. SX-1100 周満土層断面 C-C' (北東から)



5. SX-1100 周満土層断面 F-F' (北西から)



3. SX-1100 周満土層断面 D-D' (北から)



6. SX-1100 周満土層断面 G-G' (北から)



1. 道路遺構と円形周溝墓群（西から）



2. 円形周溝墓 SX-4010（北東から）



3. 円形周溝墓 SX-4050（東から）



4. SX-4050 遺物 P1 出土状況（南西から）



5. SX-4050 遺物 P2 出土状況（北西から）



6. SX-4050 土層断面 E-E'（北から）



1. SX-4050 遺物 P3 出土状況（西から）



2. SX-4050 土層断面 D-D'（北西から）



3. 性格不明の周溝状遺構 SX-3059 他（西から）



4. SX-3059 土層断面（北から）



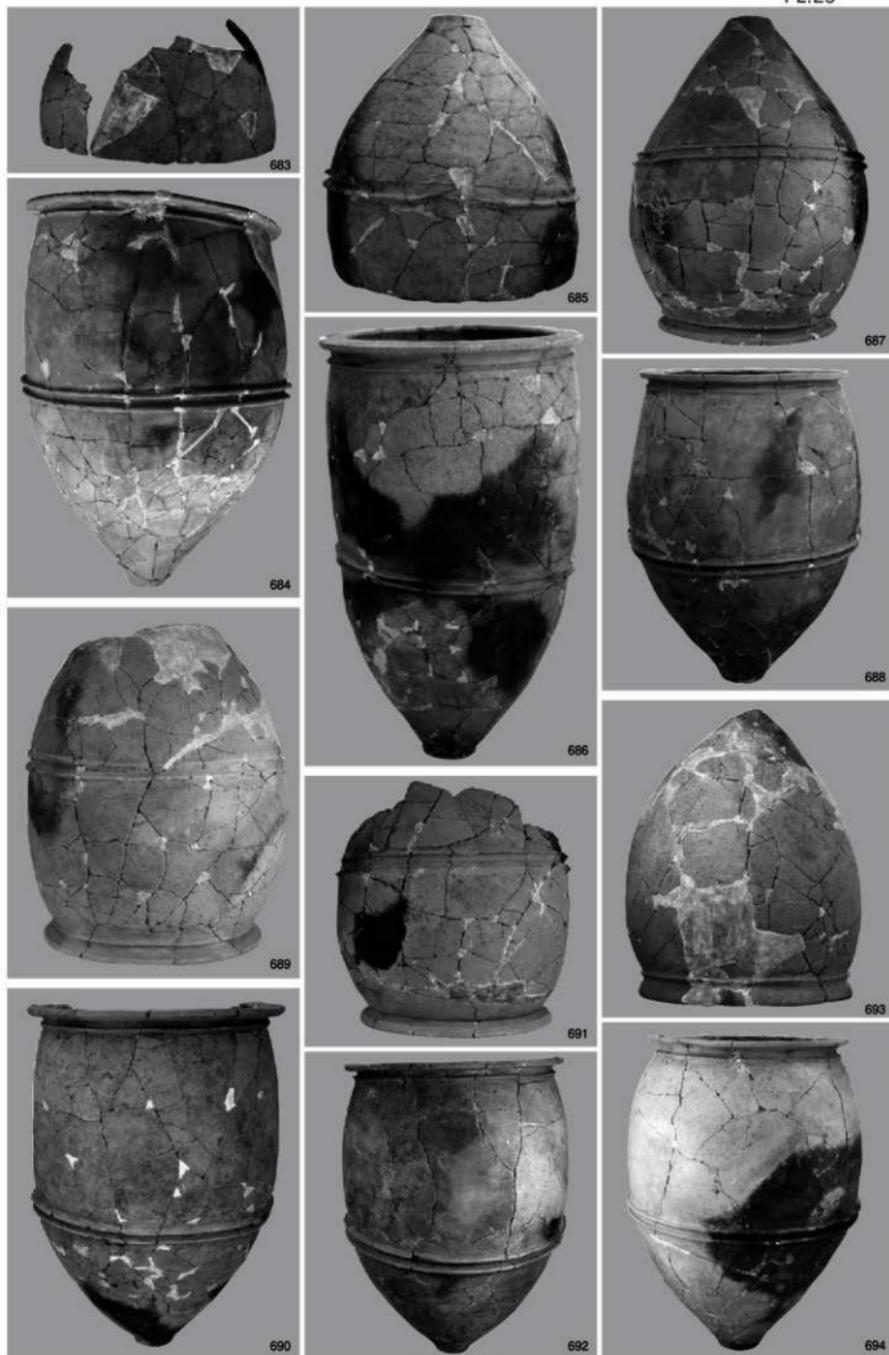
5. 布堀り状遺構 SX-2080（北から）



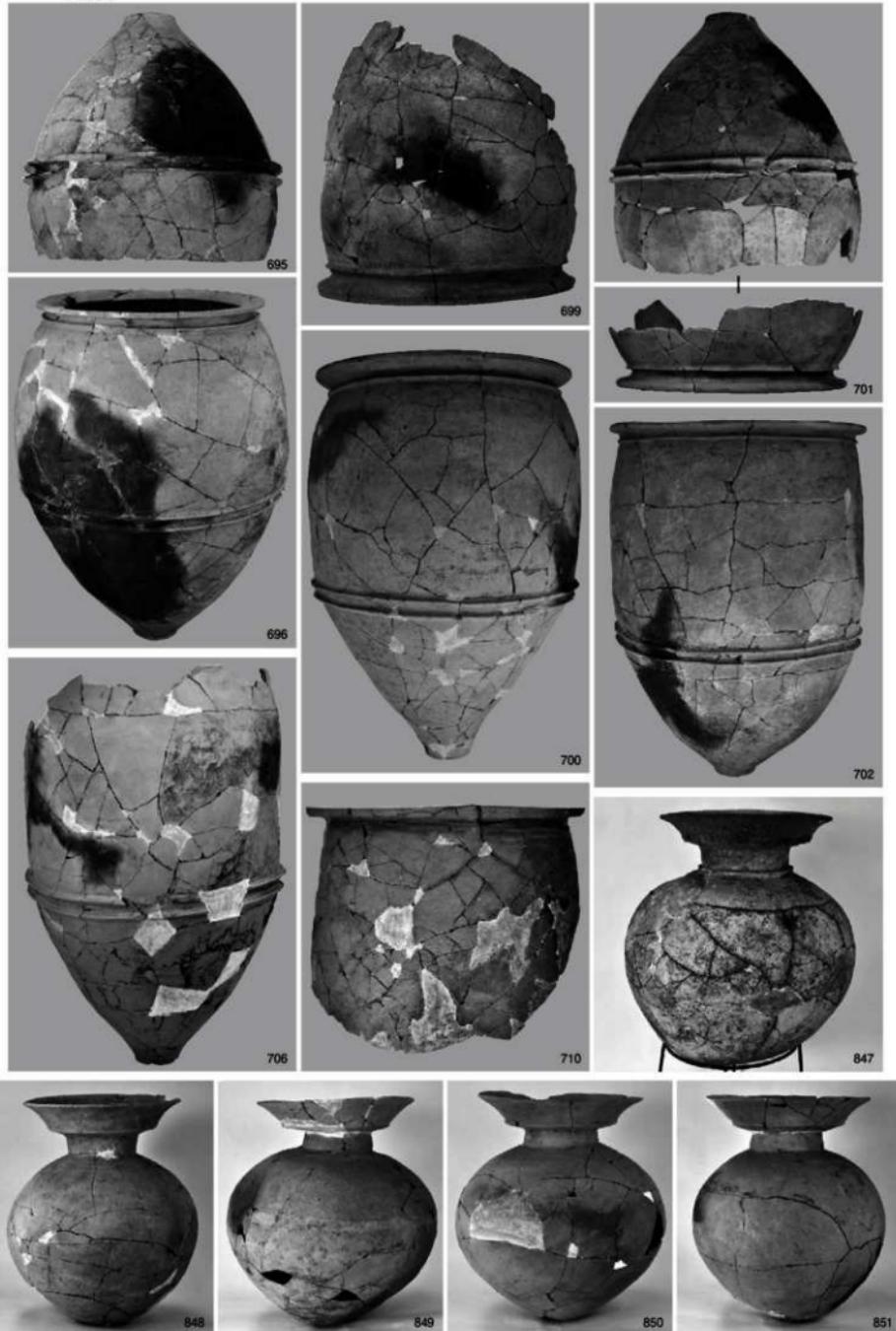
6. 2 区調査作業風景（南東から）



出土遺物（1）



出土遺物 (2)



出土遺物 (3)

報告書抄録

ふりがな	なか 56—なかいせきぐんだい 97・114 じちょうさほうこく一	
書名	那珂 56 — 那珂遺跡群第 97・114 次調査報告 —	
副書名		
卷次		
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書	
シリーズ番号	1082集	
編著者名	吉武学（編著）・長家伸（第三章）・森本幹彦	
編集機関	福岡市教育委員会	
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1 電話番号 092-711-4667	
発行年月日	西暦 2010年3月23日	

遺跡名ふりがな	なかいせきぐんだい 97	なかいせきぐんだい 114
遺跡名	那珂遺跡群第97次	那珂遺跡群第114次
所在地ふりがな	ふくおかはしかたぐたけした5ちょうめおよびなか2ちょうめちない	
遺跡所在地	福岡市博多区竹下5丁目及び那珂2丁目地内	
市町村コード	40130	
遺跡番号	0088	
北緯	33° 34' 08"	
東経	130° 26' 07"	
調査期間	2004.04.20 ~ 2004.05.31	2006.06.29 ~ 2007.03.31
調査面積（m ² ）	965.6m ²	7,752m ²
調査原因	重要遺跡確認調査	公園建設

遺跡概要

調査地点	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
97次	集落・墓地	弥生時代 ～ 古墳時代	堅穴住居跡・溝・土坑など	弥生土器・土師器・須恵器ほか	確認調査のため、詳細は不明であるが、濃密な遺跡群を確認している
114次	集落・墓地	旧石器時代 弥生時代中期～後期 古墳時代前期 古墳時代後期 古代 中世	散布地 掘立柱建物3+住居4+大溝1+井戸8+甕棺墓20+木棺墓2+土壙墓2+祭祀土坑2+立柱造構1+土坑 堅穴住居1+並列溝2(道路)+古墳4+土壙墓3 掘立柱建物5+柱列1+堅穴住居8+溝2+方形区画溝2+井戸2+土坑+布掘り状造構1 掘立柱建物1+堅穴状造構2+溝2+井戸3+土坑2 溝1+井戸10	九州形ナイフ形石器ほか 弥生土器・瀬戸内系土器+青銅器鑄型+石器 古式土師器+管玉+ガラス小玉 土師器+須恵器+新羅系土器+埴輪+瓦 土師器+須恵器+中国陶磁器+瓦+円面鏡 土師器+須恵器+陶磁器	弥生時代の瀬戸内系土器と青銅器鑄型が確認される。 古墳時代前期の道路と古墳群、7世紀代の方形区画溝と建物(官邸)

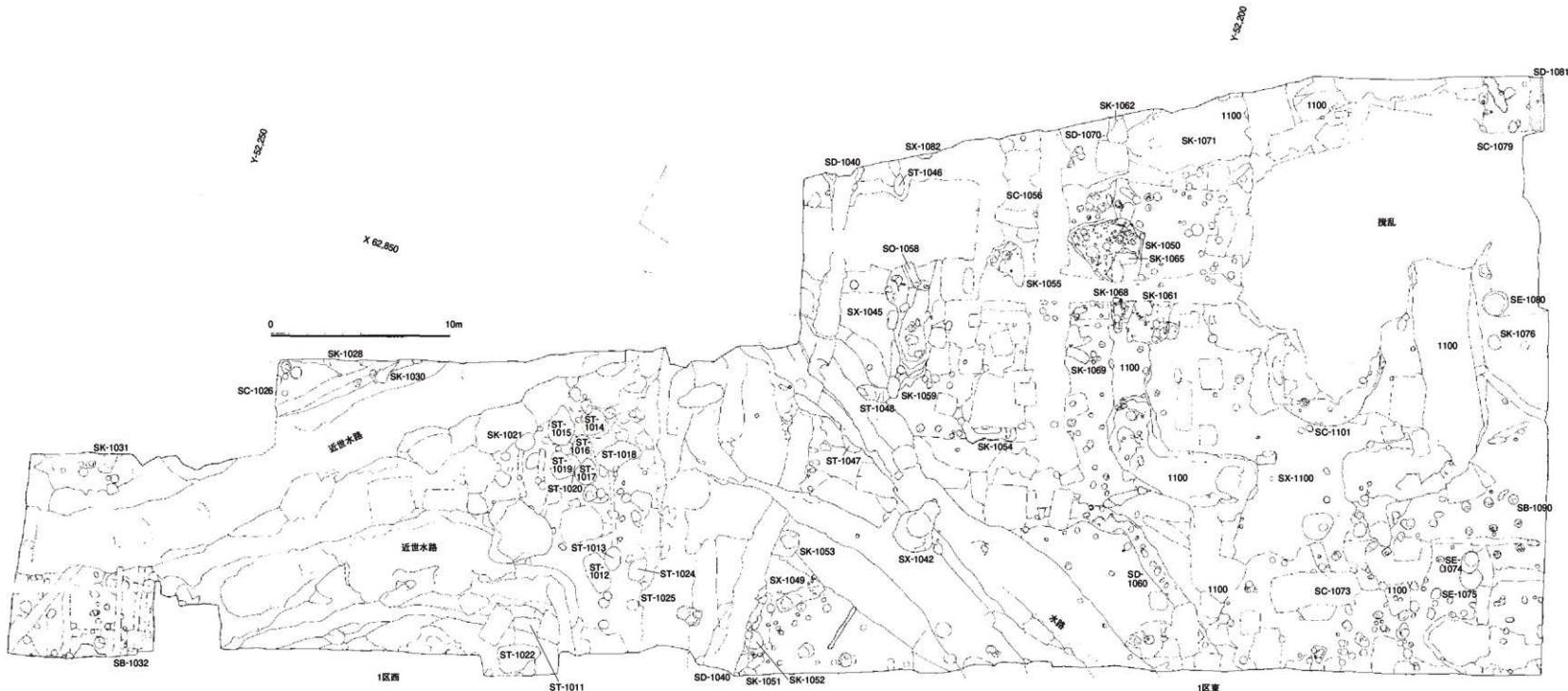
那珂 56

—那珂遺跡群第114次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1082集

2010年(平成22年)3月23日

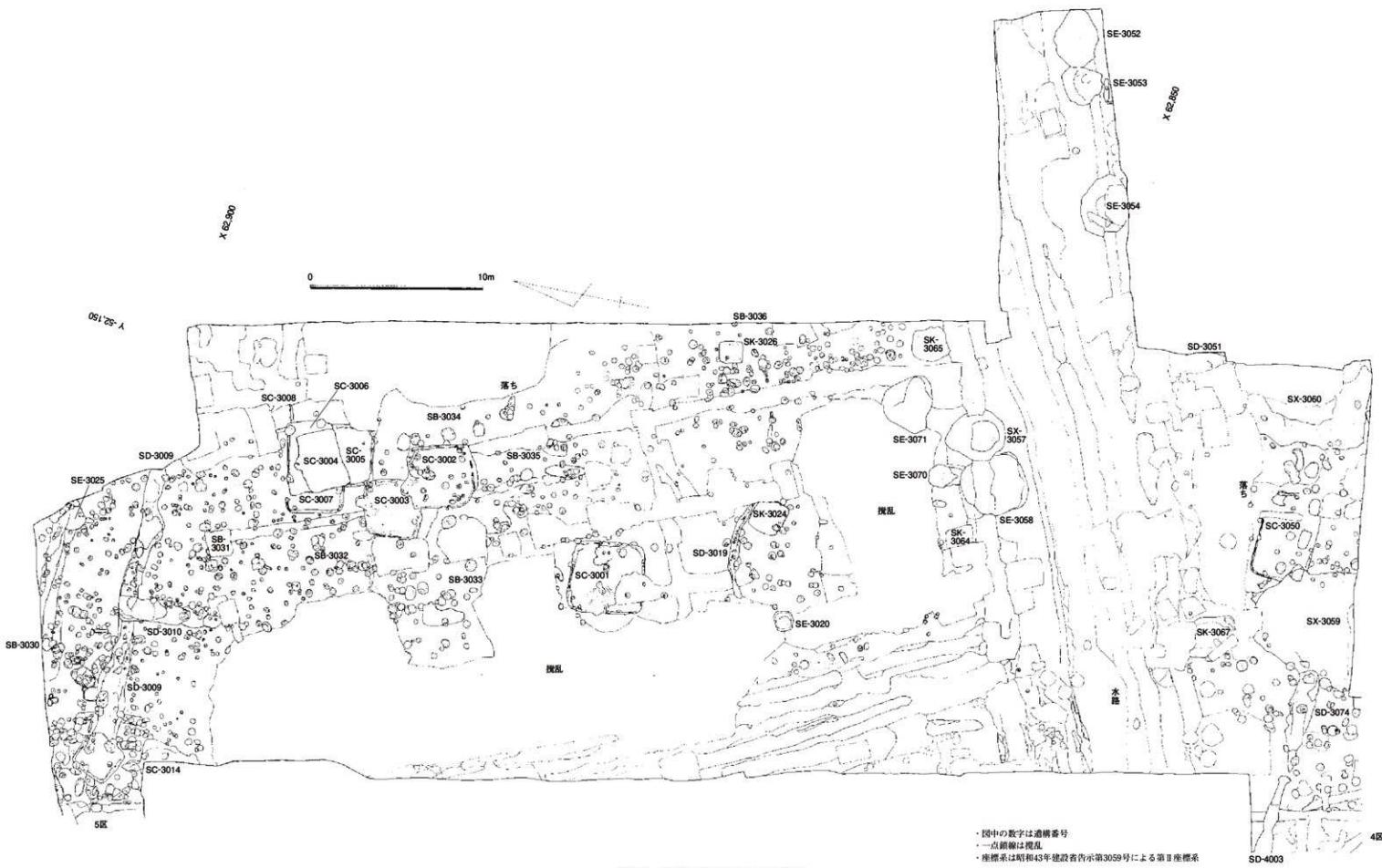
発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号印刷 久野印刷株式会社
福岡市博多区奈良屋町3番1号



・図中の数字は道構番号
 ・一点鎖線は堤防
 ・座標系は昭和43年建設省告示第3059号による第II座標系

付図1 1区西・1区東道構配置図 (1/200)







付図4 5区遺構配置図 (1/200)